

鹿兒島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (12)

九州縦貫自動車道
埋蔵文化財調査報告

— IV —

石峰遺跡 (鹿兒島県始良郡溝辺町)

1980.3

鹿兒島県教育委員会

序 文

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、昭和46年度始良町小瀬戸遺跡の調査開始以来、昭和54年度栗野町木場遺跡の調査を最後に、8年間を要しました。

この間発掘調査した遺跡は38か所にのぼりました。

これらの遺跡については、年次的に整理を進め調査報告書も発刊して参りましたが、今回は溝辺町石峰遺跡の調査記録を第4集として発刊いたしました。

県教育委員会としては、この報告書が文化財愛護のため広く活用されることを願っています。

発刊に当たり、日本道路公団をはじめ、調査主任の河口貞徳氏、地元町教育委員会及び調査に参加された方々に対し深く感謝の意を表します。

昭和55年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 井之口 恒 雄

調査の状況

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査の経緯は、それぞれ「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」で述べた。昭和46年、始良郡始良町小瀬戸遺跡で調査を開始して以来すでに9年間にも及んでいる。

この間、調査については、年度毎に日本道路公団福岡建設局との間に「発掘調査の委託契約」を行い、これに基づいて実施してきた。この間発掘調査の対象とした遺跡は38箇所であったが、昭和55年2月21日、木場A遺跡を最後にすべてを終了した。

一方、調査の整理・報告については、第Ⅰ・Ⅱ集で16遺跡を、第Ⅲ集で2遺跡、第Ⅳ集で本遺跡と19遺跡を発表したことになる。残された遺跡についても、今後、ひきつづき報告してゆく計画である。

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

(昭和46年～昭和55年2月)

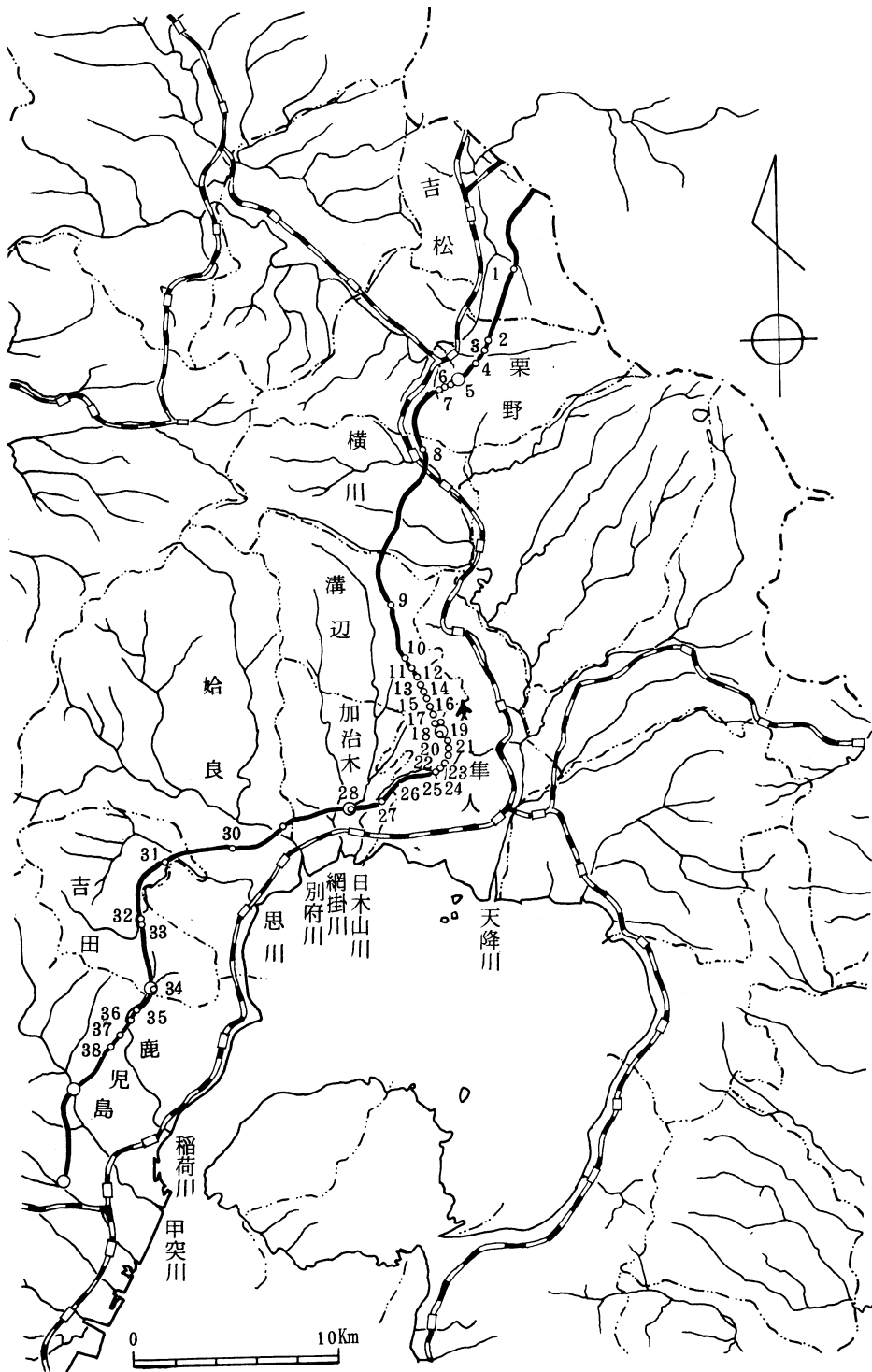
番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積 (㎡)	調査員	概要
1	堀之内B	吉松町川添	54. 9. 10 } 54. 9. 27	500	立 神 青 崎	○土師式土器の散布
2	木場A	栗野町木場	一次 53. 12. 11 } 54. 3. 31 二次 54. 8. 28 } 55. 2. 21	14,000	牛ノ濱 新 東 宮 田 池 畑 長 野	○旧石器, ナイフ他剥片, 集石遺構, 細石核・細石刃 ○縄文早前期土器片・集石遺構 ○土師式土器散布
3	木場B	〃	54. 8. 28 54. 11. 24	4,500	新 東 出 口 弥 栄 中 島	○土師式土器の散布 ○中世溝状遺構
4	木場C	〃	53. 11. 27 54. 1. 13	2,700	長 野 出 口	北部に湯ノ谷川, 北に傾斜する台地中腹に土師器, 弥生式土器の散布が見られる。
5	山崎A	栗野町山崎	52. 12. 13 53. 3. 26	6,000	{ 吉 永 牛ノ濱	①弥生, 土師, 須恵器片の散布。 ②中世(建物)
6	山崎B	〃	53. 4. 10 54. 10. 12	21,800	牛ノ濱 西 田 中 島 出 口	○旧石器時代(細石核・細石刃) ○古墳時代・中世(青磁・陶磁器・建物跡) ○縄文時代早～後期・集石遺構土壌

7	山崎 C	栗野町山崎	52. 12. 13 53. 3. 26	3,000	中西 村田	土師器, 須恵器, 青磁片の散布
8	中尾田 (山城)	横川町中野	53. 5. 15 54. 10. 6	9,800	新東 中島 井ノ上	○縄文時代・早・前・中期土器 (前平・手向山・阿高) 石器 集石遺構 ○中世山城・建物遺構・青磁・ 陶磁器
9	木佐貫原	溝辺町木佐貫	51. 2. 6 52. 11. 31	17,000	吉永 牛ノ濱	●①縄文時代(前期・後期)土器 片, 炉穴 ②土師器片
10	石 峰	溝 辺 町 麓	一次 (50.10.2 50.12.19 二次 51. 11. 24 53. 5. 15	20,000	河出 口 西 口 戸 田 青 崎 池 畑	●①縄文土器, 住居跡1基, 集 石遺構 ②土師器片
11	柳ヶ迫	〃	51. 3. 22 51. 5. 17	700	長野 西 田	●①細石器剥片(黒曜石) ②縄文時代(後期)土器片
12	長ヶ原	〃	50. 10. 1 50. 11. 28	1,140	新東 中 村	●①細石器剥片(黒曜石) ②縄文時代(前期)土器片 ③弥生時代(後期)土器片
13	松木原	〃	50. 9. 18 50. 9. 26	420	新東 池 畑 中 村	●弥生時代(後期)土器片, 黒 曜石
14	葛根塚	〃	50. 9. 8 50. 9. 26	790	新東 池 畑 中 村	●①弥生時代(後期)土器片, 石鏃(黒曜石)
15	七ッ次	〃	50. 8. 5 50. 9. 18	2,700	弥栄 池 畑 中 村	●①縄文時代(後期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片
16	松ヶ迫	〃	50. 7. 14 50. 8. 11	600	弥栄 中 村	●①弥生時代(後期)土器片
17	木屋原	〃	50. 4. 7 51. 3. 31	4,500	弥栄 立 神	●①縄文時代(前期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片
18	山 神	〃	49. 6. 13 50. 4. 28	6,900	平田 牛ノ濱 吉 永	●①縄文時代(前・後期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片 ③平安時代・建物遺構, 溝状 遺構, 須恵器, 墨書土器(甕, 廣~坏2, 破片15)

19	曲 迫	溝 辺 町 麓	50. 1. 27 50. 3. 31	4,300	諏 訪 弥 栄	●①縄文時代(後期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片 ③土師器片
20	栢 場	〃	49. 6. 5 50. 3. 27	2,550	平田, 牛 ノ濱, 吉永	●①縄文時代(前・後期)土器片
21	西 免	隼人町西光寺	49. 5. 25 50. 2. 8	1,500	平 出 吉 永	●①弥生時代(後期)土器片 ②玉髓, 黒曜石 ③弥生時代(後期)土器片 ④土師器片
22	中 尾	〃	49. 9. 25 50. 2. 10	2,500	出 口 吉 永	●①縄文時代(後期)土器片 ②弥生後代(終末期)土器片, 磨製石鏃 ③土師器片
23	入 道	〃	49. 8. 5 50. 3. 31	1,720	〃	●弥生時代(終末期)土器片, 石鏃, 土師器, 溝状遺構
24	南十三塚	溝 辺 町 崎 森	49. 7. 16 49. 9. 20	600	出 口 中 村	●弥生時代(終末期)土器片
25	東 原	〃	49. 9. 17 50. 1. 24	8,700	諏 訪 弥 栄 中 村	●①縄文時代(早期)土器片, ②弥生時代(後期)土器片, 住居跡1基 ③土師器片
26	桑ノ丸	〃	49. 8. 1 50. 4. 25	8,750	新 東 牛 ノ 濱 中 村	●①縄文時代(早・前・後期)土器 片, 石斧, 石鏃
27	三代寺	加 治 木 町 日 木 山	49. 3. 15 49. 7. 31	2,300	河 口 新 東 弥 栄 牛 ノ 濱	●①縄文時代(早・前期)土器 片, 石斧, 石鏃, 集石遺構 ②弥生時代(終末期)土器片 ③土師器, 土坑, ビット群
28	建馬場	加治木町反土	46. 12. 8 46. 12. 12	540	盛 園 立 神	①弥生時代(後期)土器片
29	松木田	始良町鍋倉	46. 12. 12 46. 12. 15	20	〃	①柱穴~22個
30	小瀬戸	始 良 町 西 餅 田	46. 8. 20 46. 11. 2	2,780	河 口 戸 崎 立 神 尾 ノ 上 中 間 有 元	①縄文時代(前期)土器片(塞 ノ神) ②弥生時代(中期)土器片 ③墨書土師器(伴, 大伴, 原仲 家), 青磁, 白磁, 緑釉陶器, 須恵器, 紡錘車, 土錘, 井戸 杵, 木製器, 柱穴(多数)

31	小山	吉田町 東佐多浦	46. 11. 6 47. 2. 10	1,420	河 戸 立 尾 中 有	口 崎 神 上 間 元	①縄文時代（早・前期）土器片 （吉田，塞ノ神） ②弥生時代土器片 ③墨書土師器，須恵器片，青磁， 白磁，緑釉陶器，滑石製石鍋
32	谷口	吉田町本城	46. 11. 10 46. 11. 18	124	盛 立	園 神	①縄文時代（後期）土器片，黒 曜石剝片 ②弥生時代土器片 ③土師器，白磁，滑石製石鍋
33	上城城址	〃	47. 1. 14 47. 1. 18	20,000 現地踏査	盛 田	園 野 辺	①中世～山城，青磁，白磁，瓦 器
34	宮後	吉田町宮ノ浦	46. 11. 10 46. 11. 18	44	〃	〃	①縄文時代（晩期）土器片，石 鏃（黒曜石） ②土師器
35	木の迫	鹿児島市 川上町	50. 12. 9 50. 12. 11	300	立 牛 吉	神 濱 永	①弥生時代（後期）土器片
36	加治屋園	〃	50. 11. 26 51. 7. 31	1,200	弥 新 長 中	栄 東 野 村	①細石器～細石刃，細石核，同 時期土器片（有文） ②縄文時代前期土器片（塞ノ神 式），集石遺構 ③弥生時代後期土器片
37	加栗山	〃	50. 2. 15 51. 10. 16	30,600	戸 青 立 吉 牛	崎 崎 神 永 濱	①細石器～細石刃，細石核，石 鏃14，局部磨製石斧1，大型 台形石器1 ②縄文時代（前期）土器片（吉 田式，前平式），住居跡17， 土壇72，集石遺構14，石鏃， 陰陽石（軽石製） ③中世～山城，柵列跡，空堀， 柱穴，青磁，瓦器
38	神の木山	〃	50. 5. 12 50. 5. 15	20	戸 青	崎 崎	①耕作土の下部はシラス層で遺 物なし

（●は，調査報告書発行終了）



遺跡名

1. 堀之内B
2. 木場 A
3. 木場 B
4. 木場 C
5. 山崎 A
6. 山崎 B
7. 山崎 C
8. 中尾田
9. 木佐貫原
10. 石峰
11. 柳ヶ迫
12. 長ヶ原
13. 松木原塚
14. 葛根塚
15. 七ツ次
16. 松ヶ迫
17. 木屋原
18. 山神
19. 曲迫
20. 栢場
21. 西免
22. 中尾
23. 入道
24. 南十三塚
25. 東原
26. 桑ノ丸
27. 三代寺
28. 建馬場
29. 松木田
30. 小瀬戸
31. 小山口
32. 谷ノ口
33. 上城址
34. 宮後
35. 木の迫
36. 加治屋園
37. 加栗山
38. 神の木

縦貫道全遺跡地図

例 言

1. この報告書は、九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設によって消滅する遺跡について行なった事前調査のうち、昭和50年～昭和53年度に発掘した石峰遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は、つぎのとおりである。
第1章・2章・4章第1節・5章第1節～第4節・6章(第1～第3地点の遺構) …出口
第3章・4章第2節・7章第1節1・第8章 ……河口
第5章第5～6節・6章(第4～5地点の遺構) ……戸崎
第7章第1節2～10・第2節2(1)・(3)・(4) ……池畑
第7章第2節1 ……長野
第7章第2節2(2)・第3節 ……青崎
なお、現場写真・実測図等は調査担当者が行ない、掲載図の実測図・製図・写真図版は各担当者が分担した。土器の実測・製図図版等については、池畑・青崎が行ない、文化課職員
の援助を受けた。
4. 出土品は、文化課収蔵庫に保管している。整理・復元作業は、収蔵庫の整理作業員が行ない、完形土器復元については、河口氏に担当していただいた。
5. 細石器の調査および整理・実測・執筆は西田茂氏が担当していたが、昭和54年3月北海道転勤により、長野真一が整理・実測の引き継ぎを行ない、以後執筆まで担当した。
6. 放射性炭素年代測定については、Gak-6859を学習院大学、他の4つを日本アイソトープ協会に依頼した。
7. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
8. 本書で用いた挿図中の縄文および弥生以降の土器・石器の通し番号は図版中の番号と同一である。
9. 図版20～図版25の土器写真の縮尺は同一である。

目 次

序 文	
調査の現況	
例 言	
第1章 序 説	20
第1節 調査に至る経過	20
第2節 調査の組織	20
第3節 調査の経過	21
第2章 遺跡の位置及び環境	26
第3章 調査の概要	30
第4章 層位及び局部断層	40
第1節 層 位	40
第2節 局部断層	42
第5章 各地点の調査	49
第1節 確認調査	49
第2節 第1地点の調査	53
第3節 第2地点の調査	55
第4節 第3地点の調査	63
第5節 第4地点の調査	71
第6節 第5地点の調査	79
第6章 遺 構	84
第1節 縄文時代	84
1 縄文土器の全体分布	84
2 土器の出土状況	88
3 竪穴住居址	90
4 集石遺構	91
5 土 壇	98
第2節 弥生時代以降	102
1 土師器の出土状況	102
2 溝状遺構とピット群	103
3 集石遺構	107
4 土 壇	108
5 近世墓	110

第7章 遺物	111
第1節 土器	111
1 縄文式土器	111
(1) 分布	111
(2) 層序	111
(3) 系統	113
(4) 土器	117
2 弥生式土器	169
3 弥生系土器	170
4 土師器	173
5 須恵器	180
6 黒色土器	181
7 磁器	182
8 陶器	182
9 瓦器	182
10 土師質土器	182
第2節 石器	184
1 先土器時代の石器	184
(1) 石器・剥片類の分布	184
(2) ユニット出土の遺物とその他の遺物	187
(3) 細石刃の接合例	216
(4) 細石刃に観察される刃こぼれ状剥離	217
(5) 細石刃の部位別分類	217
(6) 細石刃核の形態分類	218
(7) 石材分類	222
(8) 周辺遺跡出土の採集石器	223
(9) まとめ	224
2 縄文時代の石器	230
(1) 4 b層出土の石器	230
(2) 4 a層出土の石器	233
(3) 3 a層出土の石器	244
(4) 1・2層出土の石器	249
第3節 鉄鏃	253
第8章 総括	254

挿 図 目 次

第1図	石峰遺跡周辺地形図	28
第2図	石峰遺跡地形図	33
第3図	第1・2・3・4・5地点遺構分布図	35
第4図	石峰遺跡土層模式図	40
第5図	第1地点6号局部断層（E-5区）	45
第6図	第1地点7号局部断層（E-6区）	45
第7図	第1地点11号局部断層（F-8区）	45
第8図	第1地点10号局部断層（E-8区）	47
第9図	(1)第1・2・3地点確認調査トレンチ配置図	50
	(2)第3・4地点確認調査トレンチ配置図	51
	(3)第4・5地点確認調査トレンチ配置図	52
第10図	第1地点地形図	54
第11図	第1地点5層面の地形図	55
第12図	第1地点F線-4・5・6区土層断面図	56
第13図	第1地点F線-7・8・9区土層断面図	57
第14図	第1地点8線-B・C区土層断面図	58
第15図	第1地点8線-D・E・F区土層断面図	59
第16図	第2地点E線-10・11・12・13区土層断面図	60
第17図	第2地点12線-C・D・E区土層断面図	61
第18図	第2地点12線-F・G区土層断面図	62
第19図	第3地点F線-13・14・15区土層断面図	64
第20図	第3地点F線-16・17区土層断面図	65
第21図	第3地点側道トレンチ北壁土層断面図（14・15・16区）	66
第22図	第3地点側道トレンチ北壁土層断面図（17・18・19区）	67
第23図	第3地点側道トレンチ北壁土層断面図（20・21区）	68
第24図	第3地点16線-B・C・D・E・F区土層断面図	69
第25図	第3地点20線-B・C・D・E区土層断面図	70
第26図	第4地点D線-22・23区土層断面図	73
第27図	第4地点D線-24・25区土層断面図	74
第28図	第4地点C線-26・27区土層断面図	75
第29図	第4地点C線-28・29区土層断面図	76
第30図	第4地点26線-A・B区土層断面図	77
第31図	第4地点26線-C・D区土層断面図	78

第32図	第5地点A線—32・33・34区土層断面図……………	80
第33図	第5地点A線—35・36・37区土層断面図……………	81
第34図	第5地点34線—B'・A'区土層断面図……………	82
第35図	第5地点34線—A・B・C区土層断面図……………	83
第36図	第1・2地点縄文土器出土分布図(4b層)……………	85
第37図	第1・2地点縄文土器出土分布図(4a層)……………	86
第38図	第1・2地点縄文土器出土分布図(3a層)……………	87
第39図	第1地点楕円押型土器出土状況(E—8Ⅱ—4a下)No10……………	88
第40図	第2地点山形押型土器出土状況(F—10Ⅳ—4a～4b上)No16……………	88
第41図	第1地点平椀式土器出土状況(D—6Ⅳ—4a中～下)No5……………	89
第42図	第1地点平椀式土器出土状況(B—9Ⅳ—4a)No12……………	90
第43図	第2地点春日式土器出土状況(G—10Ⅰ・Ⅲ区—3a層)No15……………	90
第44図	第1地点住居址実測図(E・F—6区)No3……………	91
第45図	第1地点20号集石実測図(E—9Ⅰ—4b上)……………	92
第46図	第2地点25号集石実測図(G—11—4b上)……………	93
第47図	第3地点28号集石実測図(E—14—4b上)……………	93
第48図	第1地点13号集石実測図(C—5—4a下)……………	94
第49図	第1地点6号集石実測図(E—4—4a)……………	95
第50図	第1地点2号集石実測図(C—4—3a下)……………	95
第51図	第4地点30号(D—22—4a最下)・31号(C—24—4a下～4b上)集石実測図…	97
第52図	第1地点1号土坑実測図(E—5Ⅳ区)No1……………	99
第53図	第1地点2号土坑実測図(F—6Ⅱ区)No2……………	100
第54図	第1地点3号土坑実測図(D—9区)No6……………	100
第55図	第4地点7号土坑実測図(B—23区)No11……………	101
第56図	第4地点8号土坑実測図(B—23区)No12……………	101
第57図	第1地点土師・甕形土器出土状況(C—8Ⅱ)No8……………	103
第58図	第1地点土師・甕形土器出土状況(D—8Ⅲ・Ⅳ)No9……………	103
第59図	第1地点土師・甕形土器出土状況(E—9Ⅰ—2下)No13……………	104
第60図	第1地点土師・甕形土器出土状況(E—7Ⅲ—2下)No7……………	104
第61図	第1地点ピット群実測図(D・E—7～9区)No5……………	105
第62図	第2地点溝およびピット群実測図(E—10・11区)No7……………	106
第63図	第2地点21号集石実測図(E—10Ⅳ—3a最上面)……………	107
第64図	第3地点4号土坑実測図(F—16Ⅰ区)No8……………	107
第65図	第3地点5号土坑実測図(B—16Ⅳ区)No9……………	108
第66図	第3地点6号土坑実測図(D—18Ⅰ区)No10……………	108

第67図	第5地点10号土坑実測図 (B'-34区) No15	109
第68図	第4地点近世墓実測図 (C-26・27区) No13	110
第69図	連点鋸齒文・手向山式土器	141
第70図	撚糸文土器・凸帯撚糸文土器	142
第71図	石坂式土器・円筒形条痕文土器	143
第72図	楕円形押型文土器・菱形押型文土器	144
第73図	楕円形押型文土器	145
第74図	平楯式土器	146
第75図	平楯式土器	147
第76図	塞ノ神 Aa 式土器	148
第77図	深浦式土器・春日式土器	149
第78図	石峰式土器	150
第79図	条痕文・貝縁刺突文・吉田式土器	151
第80図	石坂式土器	152
第81図	撚糸文土器	153
第82図	撚糸文土器・変形撚糸文土器	154
第83図	変形撚糸文土器・縄文土器・網目文土器	155
第84図	網目文土器・楕円押型文土器	156
第85図	楕円山形押型文土器	157
第86図	山形押型文・細線格子状押型文土器	158
第87図	手向山式土器・平楯式土器	159
第88図	平楯式土器	160
第89図	平楯式土器	161
第90図	平楯式土器	162
第91図	平楯式(無文)土器・斜行凹線文土器他	163
第92図	表裏弧文土器他	164
第93図	押型文土器・底部	165
第94図	轟式土器・曾畑・深浦式土器	166
第95図	阿高式・岩崎上層式・草野式土器	167
第96図	条痕文土器・底部	168
第97図	塞ノ神 B 式土器	126
第98図	志布志町大丸迫遺跡出土土器	115
第99図	弥生式土器	169
第100図	弥生系土器(1)	171
第101図	弥生系土器(2)	172

第102図	土師器(1) (皿)	173
第103図	土師器(2) (坏)	174
第104図	土師器(3) (蓋)	175
第105図	土師器(4) (甕-1)	176
第106図	土師器(5) (甕-2)	177
第107図	土師器(6) (鉢・こしき・壺)	178
第108図	土師器(7) (土製品)	178
第109図	須恵器	180
第110図	黒色土器	181
第111図	磁器・陶器・土師質土器	183
第112図	先土器時代ユニット略図	184
第113図	先土器時代遺物分布図	185
第114図	ユニットA (1~38) ・ユニットB (39~49)	188
第115図	ユニットC (50~84)	189
第116図	ユニットD (85~96)	190
第117図	ユニットE (97~117)	191
第118図	ユニットF (118~148)	193
第119図	ユニットF (149~154) No 2	194
第120図	ユニットG (155~189) No 1	195
第121図	ユニットG (190~198) No 2	196
第122図	ユニット外 (200~229) No 1	198
第123図	ユニット外 (230~258) No 2	199
第124図	ユニット外 (259~266) No 3	200
第125図	石斧	201
第126図	A・B-5区, A・B-6区出土の石器分布	202
第127図	C・D-6区, C・D-7区出土の石器分布	203
第128図	E・F-5区, E・F-6区出土の石器分布	204
第129図	E・F-6区, E・F-7区出土の石器分布	205
第130図	E・F-8区, E・F-9区出土の石器分布	206
第131図	D・E-9区, D・E-10区出土の石器分布	207
第132図	C・D-4区, C・D-5区出土の石器分布	208
第133図	C-4・5区出土の石器分布	209
第134図	D-4区出土の石器分布	210
第135図	D-5区出土の石器分布	211
第136図	頁岩を素材とした石器の出土分布と接合関係	212

第137図	接合資料	213
第138図	接合資料	214
第139図	接合資料	215
第140図	細石刃の接合例	216
第141図	細石刃に観察される刃こぼれ状剥離	217
第142図	石材分類図	222
第143図	周辺出土の採集石器	223
第144図	火山灰と遺跡の形成	229
第145図	4 b層出土の石器 (石鏃・石匙・削器)	231
第146図	4 b層出土の石器 (石斧・削器・叩石・礫器)	232
第147図	4 a層出土の石器 (石鏃)	236
第148図	4 a層出土の石器 (石鏃・石匙)	237
第149図	4 a層出土の石器 (石匙・スクレーパー)	238
第150図	4 a層出土の石器 (剥片石器)	239
第151図	4 a層出土の石器 (剥片石器)	240
第152図	4 a層出土の石器 (磨製石斧・打製石斧)	241
第153図	4 a層出土の石器 (叩き石・すり石・剥片石器)	242
第154図	4 a層出土の石器 (剥片石器)	243
第155図	3 a層出土の石器 (石鏃・削器)	246
第156図	3 a層出土の石器 (石匙・削器・尖頭器様石器・剥片石器)	247
第157図	3 a層出土の石器 (剥片石器・石斧・礫器)	248
第158図	1・2層出土の石器 (石鏃)	249
第159図	1・2層出土の石器 (削器・石斧・叩石・磨石)	251
第160図	1・2層出土の石器 (石匙・削器・剥片石器)	252
第161図	鉄鏃実測図	253

表 目 次

第1表	石峰遺跡の周辺遺跡一覧表……………	29
第2表	局部断層形状一覧表……………	37
第3表	土器出土状況一覧表……………	37
第4表	集石遺構一覧表……………	38
第5表	遺構一覧表……………	39
第6表	縄文土器一覧表……………	132
第7表	南九州縄文土器編年表……………	136
第8表	土器層位別頻度表（4層）……………	137
第9表	土器移動表（4層）……………	139
第10表	弥生式土器の出土地一覧表……………	170
第11表	弥生系土器の出土地一覧表……………	170
第12表	土師器の出土地一覧表……………	179
第13表	須恵器の出土地一覧表……………	180
第14表	黒色土器の出土地一覧表……………	181
第15表	磁器・陶器・瓦器・土師質土器の出土地一覧表……………	182
第16表	細石刃の部位別分類……………	217
第17表	細石刃核の打面角……………	218
第18表	ブランクの打面角……………	218
第19表	打面角比較……………	218
第20表	石鏃の変遷……………	226
第21表	4 b 層出土の石器一覧表……………	230
第22表	4 a 層出土の石器一覧表……………	235
第23表	3 a 層出土の石器一覧表……………	245
第24表	1・2層出土の石器一覧表……………	250

図 版 目 次

図版 1	上. 第 1 地点遠景 (東南から)	257
	下. 第 5 地点遠景 (北から)	257
図版 2	左上. 第 4 地点 E 線-22・23 区土層断面 (南から)	258
	右上. 第 3 地点 20 線-E 区東北端土層柱状断面 (東南より)	258
	下. 第 3 地点 G 線-14・15 区土層断面 (南から)	258
図版 3	上. 10 号局部断層平面第 1 地点 E-8 II 区	259
	下. 10 号局部断層断面 (東南より) 第 1 地点 E-8 II 区	259
図版 4	上. 楕円押型文土器出土状況 No 19 第 4 地点 (B-24-4 b)	260
	下. 楕円押型文土器出土状況 No 1 第 1 地点 (D-4-3 a~4 a)	260
図版 5	上. 平椀式土器出土状況 No 5 第 1 地点 (D-6 IV-4 a 下)	261
	下. 山形押型文土器出土状況 No 17 第 2 地点 (F-11 I-4 a~4 b 最上)	261
図版 6	上. 平椀式土器出土状況第 1 地点 (B-9-4 a) No 12	262
	下. 平椀式土器出土状況第 1 地点 (B-9-4 a) 近接して	262
図版 7	上. 楕円押型文土器出土状況 No 10 第 1 地点 (E-8 II-4 a~4 b)	263
	下. 1 号土壇 No 1 第 1 地点 (E-5 IV 区)	263
図版 8	上. 2 号土壇第 1 地点 (F-6 II 区)	264
	下. 3 号土壇第 1 地点 (D-9 III 区)	264
図版 9	上. 7 号土壇 No 12 第 4 地点 (B-23 II 区)	265
	下. 竪穴住居址 No 3 第 1 地点 (E・F-6 区)	265
図版 10	石器・鉄鏃出土状況	266
	上左. 石核 D-5-5 b 下	266
	上右. 鉄鏃 B'-34-2	266
	中左. 磨製石斧 D-6 I-3 a 上	266
	中右. 石匙 E-8 III-2 下	266
	下. 石斧 G-12-4 b	266
図版 11	上. 21 号集石第 2 地点 (E-10 IV-3 a 最上面)	267
	下. 12 号集石第 1 地点 (B-5-3 a 層)	267
図版 12	上. 6 号集石第 1 地点 (E-4-4 a)	268
	下. 14 号集石第 1 地点 (E-5 III-4 a 下)	268
図版 13	上. 25 号集石第 2 地点 (G-11 II-4 b 上~4 a)	269
	下. 31 号集石第 4 地点 (C-24-4 a 下~4 b 上)	269
図版 14	上. 28 号集石第 3 地点 (E-14-4 b 上)	270
	下. 13 号集石第 1 地点 (C-5-4 a 下)	270

図版15	上. 土師・甕形土器出土状況No13第1地点 (E-9 I-2 F)	271
	下. 土製円盤 (土師) 出土状況第1地点 (E-8 II-2)	271
図版16	上. 土師・甕形土器出土状況No 8 第1地点 (C-8 II-2)	272
	下. 土師・壺形土器出土状況第3地点 (C-17区-3 a 上)	272
図版17	上. 4号土壇第3地点 (F-16 I 区)	273
	下. 5号土壇第3地点 (B-16 IV 区)	273
図版18	上. ピット出土状況No 5 第1地点 (D・E-8・9 区) 東南から	274
	下. 溝状遺構No 7 第2地点 (E-11区) 東南から	274
図版19	上. 近世墓No13第4地点 (C-27杭附近)	275
	下. 調査風景第1地点 (C・D・E-7・8 区附近) 北から	275
図版20	手向山式土器 1・捺糸文土器 2	276
図版21	凸帯捺糸文土器 4・石坂式土器 5・円筒形条痕文土器 6	277
図版22	楕円形押型文土器	278
図版23	菱形押形文土器 8・平椀式土器 11・12	279
図版24	平椀式土器 13・塞ノ神 A a 式土器 14・15	280
図版25	深浦式土器・春日式土器	281
図版26	石峰式土器	282
図版27	条痕文・貝殻刺突文・吉田式土器	283
図版28	石坂式土器	284
図版29	捺糸文土器	285
図版30	捺糸文土器・変形捺糸文土器	286
図版31	変形捺糸文・縄文・網目文土器	287
図版32	網目文土器・楕円形押型文土器	288
図版33	楕円・山形押型文土器	289
図版34	山形押型文・細線格子状押型文土器	290
図版35	手向山式土器・平椀式土器	291
図版36	平椀式土器	292
図版37	平椀式土器	293
図版38	平椀式土器	294
図版39	平椀式土器	295
図版40	平椀式土器 (無文) 斜行凹線文土器・表裏孤文土器他	296
図版41	凸帯刻目文・沈線文・押型文土器他	297
図版42	轟式・曾畑式・深浦式土器	298
図版43	阿高式・岩崎上層式土器	299
図版44	草野式土器他	300

図版45	条痕文土器底部他	301
図版46	弥生式土器・弥生系土器	302
図版47	弥生系土器・土師器	303
図版48	土師器	304
図版49	須恵器・磁器・土師質土器	305
図版50	磁器（表）・磁器（裏）	306
図版51	瓦器・紡維車・土鍋・把手	307
図版52	上. 細石器出土状況	308
	下. 細石刃核出土状況	308
図版53	上. Aユニットの石器	309
	下. Bユニットの石器	309
図版54	上. Cユニットの石器	310
	下. Dユニットの石器	310
図版55	上. Eユニットの石器	311
	下. Fユニットの石器	311
図版56	上. Fユニット石器	312
	下. Gユニットの石器	312
図版57	上. Gユニットの石器	313
	下. ユニット外の石器	313
図版58	上. ユニット外の石器	314
	下. 細石刃核	314
図版59	上. 石鏃	315
	下. 石斧（表・裏）	315
図版60	上. ブランク類	316
	下. 周辺遺跡採集の石器	316
図版61	上. 接合資料	317
	下. 土器片	317
図版62	上. 4 b層出土の石鏃	318
	下. 4 b層出土の石匙・削器	318
図版63	上. 4 b層出土の削器	319
	下. 4 b層出土の削器・礫器	319
図版64	4 a層出土の石鏃	320
図版65	上. 4 a層出土の石匙	321
	下. 4 a層出土の石匙・スクレーパー	321
図版66	4 a層出土の剥片石器	322

図版67	上. 4 a 層出土の石斧	323
	下. 4 a 層出土のすり石・叩き石	323
図版68	4 a 層出土の剥片石器	324
図版69	上. 4 b 層出土の石斧・叩き石	325
	下. 3 a 層出土の石鏃	325
図版70	上. 3 a 層出土の削器	326
	下. 3 a 層出土の石匙・削器・剥片石器	326
図版71	上. 3 a 層出土の尖頭器様石器・剥片石器	327
	下. 3 a 層出土の石斧	327
図版72	上. 3 a 層出土の剥片石器・礫器	328
	下. 1・2層出土の石鏃	328
図版73	上. 1・2層出土の石匙	329
	下. 1・2層出土の削器・剥片石器	329
図版74	上. 1層出土の石斧・削器	330
	下. 1層出土のすり石・叩き石	330

第1章 序 説

第1節 調査に至るまでの経過

日本道路公団は、昭和47年2月23日「日本道路公団の建設事業等、工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書」に基づき、鹿児島線（吉松～加治木線）の埋蔵文化財についての協議を求めた。これに対し、鹿児島県教育委員会文化室（当時）は、昭和47年8月2日～10日、同月18日～26日までの2回にわたり、延長38km、幅2kmにわたって分布調査を行なった。この結果に基づいて、文化室は路線の決定については、埋蔵文化財の保護の上から十分配慮されることを要望した。

さらに49年1月～2月、河口貞徳氏の協力を得て、再確認のための分布調査を実施し、これらの結果に基づいて遺跡の保存区分を決め、道路公団と協議した。そして保存する遺跡1ヶ所（吉松町堂迫地下式横穴）、記録保存する遺跡10ヶ所（当遺跡等）が決定した。当遺跡は、すでに昭和41年8月、河口貞徳氏によって、その一部を調査されている。

発掘調査は、第1次調査を昭和50年10月2日から12月19日まで、第2次調査を昭和51年11月24日から昭和53年5月15日まで行なった。調査にあたっては河口貞徳氏を調査主任に依頼した。

第2節 調査の組織

調査責任者	文化課長	宇都哲（昭和50年度）
	文化課長	鳴元牧雄（昭和51・52年度）
	文化課長	谷崎哲夫（昭和53年度）
	文化課長	山下典夫（昭和54年度）
	専門員	河野治雄（昭和50・51年度）
	課長補佐	有村八郎（昭和50・51年度）
	課長補佐	荒田孝助（昭和52・53年度）
	課長補佐	新時弘（昭和54年度）
調査企画	主任文化財研究員	本蔵久三（昭和50・51年度）
	専門員	（昭和52～54年度）
調査担当・調査主任	県文化財保護審議会委員	河口貞徳（昭和50～54年度）
調査担当者	文化財研究員	出口浩（昭和50～54年度）
	文化財研究員	戸崎勝洋（昭和51～54年度）
	主事	池畑耕一（昭和50・52～54年度）
	主事	青崎和憲（昭和51～54年度）
	文化財調査員	西田茂（昭和50～53年度）
事務担当	係長	中島敏光（昭和50・51年度）

事務担当係	長	中条 亨 (昭和52～54年度)
	主	事 野村 和憲 (昭和50・51年度)
	主	事 伊地知 千晴 (昭和52・53年度)
	主	事 長山 恭子 (昭和50・51年度)
	主	査 安藤 幸次 (昭和54年度)
	主	事 天辰 京子 (昭和52～54年度)

第3節 調査の経過

発掘調査は、昭和50年10月2日から昭和53年5月15日まで行なった。調査面積21,000㎡である。調査の経過を月ごとにまとめて略述することにした。

昭和50年度 第1次調査・確認調査ならびに第1地点全面調査

昭和50年10月2日～昭和50年12月19日まで

月	調査の経過
10	<p>調査開始。第1地点から第2地点へかけて10mグリッドを設定する。第1地点の樹木や雑草・壁石等の雑物を除去する。2m巾のトレンチを設定し、遺跡範囲の確認につとめる。</p> <p>第1地点は屋敷の跡で、各所に掘り込みが認められたが、縄文式土器や土師器の散布がみられた。トレンチには土師器の出土があり、さらに東南方向へ広がりを確認することとなった。</p>
11	<p>範囲確認のため東南へ順次トレンチを伸ばし、字横大道との境の町道に達した。2層下位に土師器および須恵器の出土がみられた。</p> <p>第1地点より全面発掘に入り、放置されていた日用雑器類を除去し、その後1層の掘り下げに入った。1層にもさまざまな雑物が混入しており、それに混って縄文式土器(押型文・曾畑式)成川式土器・土師器・石鏃・スクレーパー・石弾等が出土した。C-8Ⅱ区に、ほぼ完形の甕形土器が倒立して発見された。排土は道路を横断して、第2地点に積みあげた。なお、以前杉林であったため杉根が張り、その排除作業に困難をきわめた。</p>
12	<p>全面発掘。1層褐色土の剥ぎとり終了。現代の陶磁器片や諸雑物に混って土師器が出土した。全面に攪乱状態が激しいが、部分的に2層黒土層が残存し、その下位に土師器を包含していた。3層黄褐色土層面も、攪乱されている部分は掘り下げた。蜜柑の苗木の植え込みや、屋敷の構造物建設、旧道工事のため、所々に掘り込みがみられ4a層土がブロック状に浮き上っている面が多くみられた。</p> <p>長期にわたる発掘調査中断のため、トレンチ壁面や遺構の保存、および事故防止を留意して、要所にビニールを敷き埋め戻し、第1地点はビニールシートで被覆した。</p>

昭和51年度 第2次調査 第1地点・第5地点全面調査

昭和51年11月24日～昭和52年3月31日まで

月	調査の経過
S.51 11	発掘調査を再開する。第1地点の調査。3層の掘り下げ。新しい掘り込みがみられ、3層上部まで陶磁器片や諸雑物が出土した。全体に南東方向へ低く傾斜をなしている。3 a層内には遺物の出土は少ない。撚糸文土器・貝殻文土器・曾畑式土器・黒色研磨土器・深浦式土器など散布状態で出土した。
12	第1地点の調査。3層の掘り下げをほぼ終了した。D・E-8・9区に土師器の濃密な散布がみられ（2層下位）ほぼ完形の甕形土器や埴形土器、坏など出土した。土製円盤など特殊な遺物もみられた。この区には多くのピット群（2層や3 a層土の落ち込むもの）が発見された。D・E-5区3層は焼石の集中と石鏃や黒色研磨土器がみられる。4 a層の上部の掘り下げを進行中であるが、各種の土器片が全面にわたって出土する。山形押型文・楕円形押型文・菱形押型文・撚糸文・平椀式土器などである。石鏃・石匙等の石器も多い。
S.52 1	第1地点の調査。4 a層の掘り下げを中心に行なう。縄文前期土器や石器類が出土した。4 a層には平椀式土器を主に、塞ノ神・貝殻文・押型文・凸帯文・撚糸文等の土器を包含している。D・E-5区で細石核2，細石刃1の発見があり，下位に細石器時代の遺跡が予想された。E・F-6区に4 a層が4 b層に落ち込み，円形の遺構の上面が現われた。
2	第1地点の調査，4 a層，4 b層の掘り下げを行なう。a層下部に平椀式土器の大形の破片や，まとまった一括土器が検出された。礫片が多く散布し，数ヶ所に集石群もみられた。4 b層には石坂式土器・撚糸文土器が出土した。E・F-6区の遺構は住居址と判明した。
3	第1地点の調査。4 b層剥ぎをほぼ終了した。b層では上部に撚糸文土器，やや下位に石坂式土器・連点鋸歯文土器が出土した。帯状に残した畦の壁面実測と掘り下げを行なう。なお北西崖端部にかけて，樹木の伐採と除去を行ない，グリッドを設定した。住居址の実測終了。3月15日から第5地点の調査を開始した。

昭和52年度 第1地点～第5地点 全面調査

昭和52年4月1日～昭和53年3月31日まで

月	調査の経過
S.52 4	第1地点の調査。北西崖端部（4区）の掘り下げを行なう。3 a層以下，堆積状況は良好である。塞ノ神A式土器・変形撚糸文土器・網目文土器など出土した。良好な集石遺構1基を検出する。 第5地点の調査。A'・C-30・31区の表層剥ぎを行なう。およそ30cmで2層に達した。

月	調 査 の 経 過
5	<p>第1地点の調査。北西崖端部の5 a 上面まで掘り下げを終了した。集石遺構1基を検出する。(C-5区)手向山式土器出土。E-4~9区にトレンチを設定し、7層まで掘り下げ、細石刃ほか剥片等を確認した。</p> <p>第5地点の調査。34線から38線にかけて2層の掘り下げを行なう。土師器・近世陶磁器などが出土した。</p>
6	<p>第1地点の調査。E・F-4・5区、6層面まで掘り下げる。E-4区を中心として、細石核・細石刃・剥片等の散布がみられた。B・C・D-4・5区は4層まで掘り下げ、塞ノ神式土器・押型文土器を検出し、集石遺構1基(3層)を発見した。</p> <p>第5地点の調査。34区~38区までの1 a・b層・2層の掘り下げを行なう。A-34~A'-36区にかけて、巾40~60cm、長さ35mの溝状遺構と、これにほぼ直交する形で、巾70~80cm、長さ17mの溝状遺構を検出した。遺物は成川式土器を主に約350点出土している。層は2層を主に、若干3層にも包含されている。</p>
7	<p>第1地点の調査。5層までの掘り下げを終了する。6層細石器出土面を調査する。C・D-4・5区には、約300点出土した。</p> <p>第4地点の調査。1 a・b層、2層の掘り下げを行なう。北西方向は1 bと2層が消滅しており、3層は表層下に見られた。</p> <p>第5地点の調査。3層までの掘り下げを行なう。1 b層の落ち込む溝を検出したがこれは現在の畑地界とほぼ一致するものであった。A'・A-36・37区、B'-36区を中心に、2 a層及び2 b層に成川式土器および土師器が出土した。</p>
8	<p>第1地点の調査。B~D-5~7区の細石器出土層(5 b~6層)の調査を終了した。黒曜石を素材とする細石核・細石刃が多く、頁岩・硅岩の石核類・剥片もみられた。</p> <p>第4地点の調査。北東側に巾約10mの排土置場および搬出道路を設定し、それ以外の部分について調査を行なう。2層まで掘り下げる。1 b層の帯状の落ち込みが発見されたが、これは現在の畑地界と一致した。</p> <p>第5地点の調査。3層(縄文期)以下の確認のため、2m巾のトレンチを設定し、3 b層まで掘り下げる。土器は3 a層上面に1点出土した。</p>
9	<p>第1地点の調査。D・E-8~10区、6層まで掘り下げる。D-9区、E-9区周辺に細石核5点をはじめ剥片等100点の出土がみられた。</p> <p>第4地点の調査。排土置場以外の区に2m巾のトレンチを2m間隔に設定し、3層まで掘り下げた。3層中に遺物の出土はみられなかった。C-23区に土坑および集石が検出された。</p> <p>第5地点の調査。A'-30区3層中に貝殻条痕を有する縄文後期の土器が出土した。34~37区については、6層までの遺物確認のためのトレンチを2m巾で設定し、掘り下げる。A-34区・B-34区に集石遺構を各1基ずつ確認した。</p>

月	調 査 の 経 過
10	<p>第1地点の調査。G-4・H-3区(北東崖端部)を1層から6層まで掘り下げる。4a層を主に変形捺糸文・網目文土器出土。H-3区3a層に集石遺構1基検出する。B・C-10区, 細石器出土層の調査終了。6a層で埴円礫4点出土。細石器の遺物は総数1,360点を数えた。A・B-10・11区を除いて, 第1地点の調査を終了した。</p> <p>第5地点の調査。4a・b層ともに, 遺物・遺構の出土はみられなかった。このためB-34~37, A'-34~37, B'~C-32, C'~B'-36の土層断面実測ののち, STA352以南については調査を終了した。</p>
11	<p>第2地点の調査。表土をブルドーザーで剥ぐ。3a層面において柱穴・溝状遺構が検出され, 土師器も多量に出土した。縄文遺物は少量で土器・石鏃・石匙など3層から4層にかけて出土した。</p> <p>第4地点の調査。トレンチで縄文の確認を行なう。D-22区とB・C-23区にそれぞれ集石遺構1基ずつを検出する。B-24区に押型文の集中をみた。いずれも4b層が主体である。B~C-25区に近世の土塚墓4基, 25~26区にかけても6基検出, うち3基に寛永通宝, 計41枚を出土した。</p>
12	<p>第2地点の調査。E・F-10~13区, 4a~4b層を掘り下げる。F-10IV区, F-11I区に山形押型文土器の一括出土をみた。H-9・10区(川崎温子宅玄関前)を7層まで掘り下げ終了。4a上層に手向山式土器片を出土した。C・D-11~13区4a層以下の掘り下げを行なう。</p> <p>第4地点の調査。トレンチを6層まで完掘する。側道部に2.5m巾のトレンチを道路に平行に設定し, 6層まで掘り下げる。縄文の遺物・遺構は検出されず, 第4地点の調査を終了した。</p>
S.53 1	<p>第2地点の調査。E・F-10~13区, 4b~6層の掘り下げを行なう。遺物の検出はみられない。壁面を実測し, 調査を終了する。</p> <p>第3地点の調査。20・21区に2m巾のトレンチを2m間隔で設定し, 6層まで掘り下げる。C-21区に4点の縄文土器片が出土したため拡張する。磨製石斧1点を出土したのみで他に遺物はみられなかった。</p>
2	<p>第3地点の調査。15区から19区にかけて, 2層下~3a最上面に土師器が散布状態でみられた。東方へかけて減少している。縄文の確認は, トレンチで行なったが, E-14IV-4b上に集石遺構1基を発見しただけで, 他に遺物の出土はみられない。</p>
3	<p>第2地点の調査。県道下部の調査を行なう。アスファルトの道路面をユンボで除去する。3a層まで道路面によって切断されていた。C-11区-4b上に, 小礫が数個みられたが, 集石の残部と思われる。</p> <p>側道部の調査。G-11・12区の2層から3a層面にかけて, 土師器の濃密な分布がみられた。12・13区の溝状遺構が, 北東へ続いて検出された。G-10-3aに春日式</p>

月	調 査 の 経 過
3	土器1個体分, 4b上面に集石遺構1基, 11区に1基が検出された。6層まで掘り下げたが, ほかに遺物・遺構の発見はなかった。第2地点の調査を終了する。

昭和53年度 第3地点 全面調査

昭和53年4月10日～昭和53年5月15日まで

月	調 査 の 経 過
4	第3地点の調査。D・E-15区, C・D・E-16・17区に土師器の出土がみられた。2層を中心とし, 一部3a層に含まれるものもある。C・D区に特に多くみられ, 北方へ粗となる。F-16区・D-18区に土壇が検出され, 内部に焼土を含んでいた。側道部に2本のトレンチを設けて, 縄文層の確認を行なった。F-14-4a層に集石遺構1基がみられた。7層まで掘り下げたが, 遺物の出土はなかった。
5	第3地点の調査。16・17-C～F区にかけて, 縄文の確認を第6層まで行なうも, 出土遺物はみられない。B-16Ⅳ区に土師期の土壇を検出する。木炭を含んでいる。B-14～21区にかけて, 壁面実測用のトレンチを入れ, 掘り下げる。実測も終了する。発掘用具・テント・プレハブ等尾田遺跡へ移転し, 出土遺物は収蔵庫へ運ぶ。全ての調査を終了した。

第2章 遺跡の位置及び環境

石峰遺跡は、鹿児島県姶良郡溝辺町石峰にあり、鹿児島空港の北西約2kmの地点にある。標高約280mの台地縁辺部にあり、北東方向に霧島連山を望む景勝の地である。

遺跡地の所在する溝辺町は、鹿児島県のほぼ中央部にあり、鹿児島湾奥から北へ約10kmに位置する。地形は中央の上床山と高屋山上陵によって二分され、西北部は長尾山系の山麓地帯が起伏に富んでいる。長尾山系に源を発する河川は、その流域に狭い水田地帯を形成する。中央東端の網掛川の上流は、竹子・有川の水田地帯を形成し、久留味川は東へ流れ、天降川の本流に合流して、竹子の東北部宮原と三縄部落の水田地帯の灌漑用水となる。また、西南の宇曾木川は、西部山間地帯を縫って、木場・円生附を経て網掛川に合流する。これらはいずれも水量は少なく広大な平野部を形成するまでに至らず、必ずしも水田地帯として恵まれた立地条件とはいえない。

一方、東南部は標高200m～280mの通称十三塚原台地と云われ、字北原から東南方向へ隼人町境まで、さらに西南へ糸走・崎森と加治木町境に至り、西方は孤状となって崎森川の溪谷を望む、約20kmにおよぶ広大なシラス台地である。

この台地は昔から灌漑水利の便に恵まれず、ほとんど畑地となっている。かつては夏は甘藷を主に大豆・陸稲、冬は菜種を主に麦などの栽培を行っていた。昭和45年頃から集団茶園化が促進され、現在では台地全域ほとんど茶畑となっている。

台地の北端東側の一部は、昭和18年から海軍航空隊の基地として使用され、さらに昭和46年には、台地北方の三角形部分にあたるうちの東半分が鹿児島空港として生れ変わり、以後毎年拡張工事を行なっている。

台地は、現在ではほぼ平坦になっているが、かつては波浪状を呈し、かなりの起伏をもっていたらしい。終戦後と昭和38年頃の二度にわたる農業構造改善事業、さらに昭和40年代の集団茶園化のため、ブルドーザーによってかなり土地の改良が行なわれて、逐次地形が平坦となったものと考えられる。

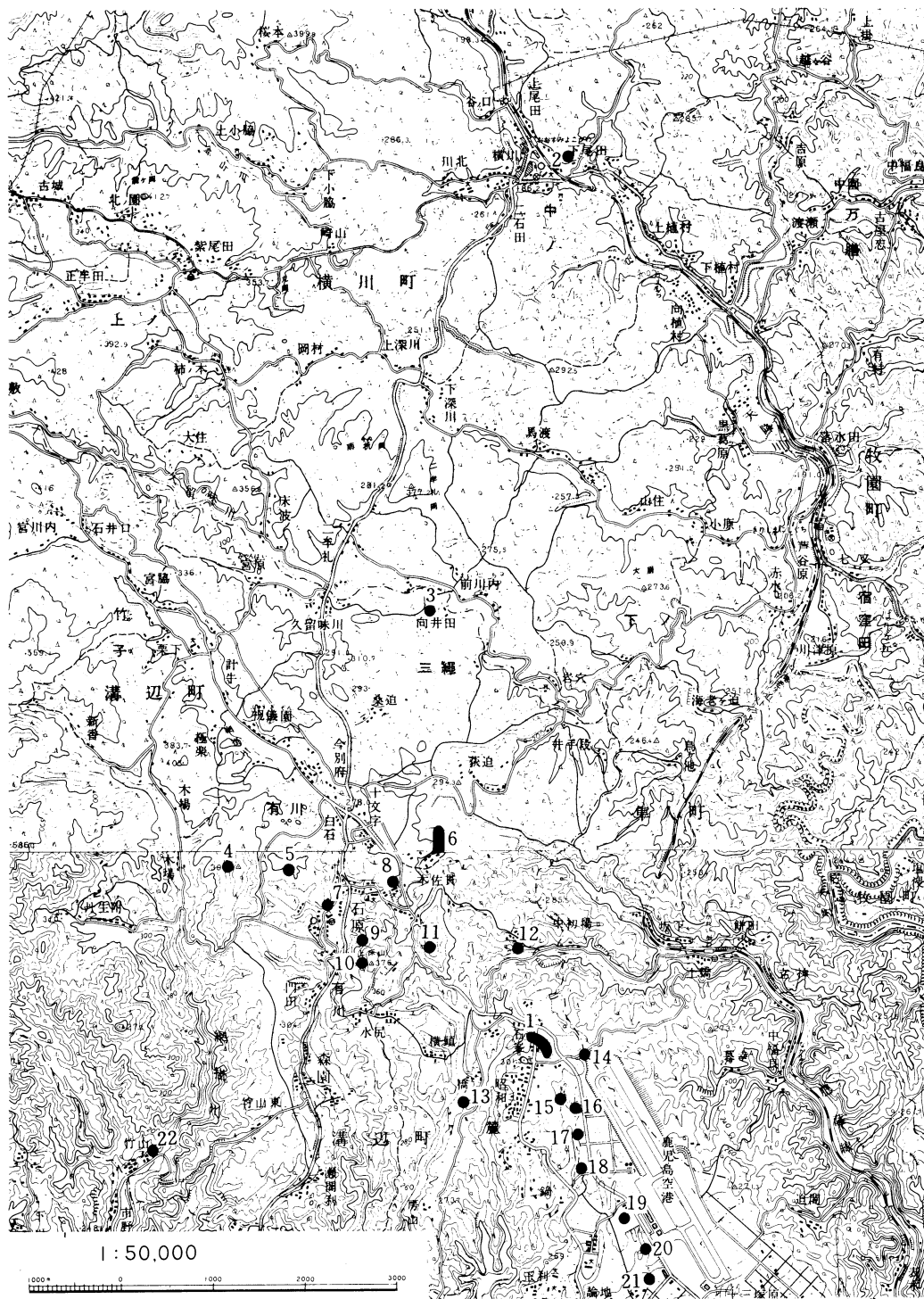
石峰遺跡は台地のほぼ北端、三角形の台地の西側縁辺部にあり、崎森川の源となる狭少な谷水田を望む崖端部から東南へ約350mに及ぶ範囲にある。現在この西側の縁辺部および傾斜面に石峰、昭和の集落が形成されている。

溝辺町の遺跡については、ほとんど知られていなかったが、昭和41年に河口貞徳氏によって初めて石峰遺跡の発掘調査が行なわれ、学問的研究のメスが加えられた。調査地点は、今回調査の崖端部地区の北隣に近接する鳥丸親男氏宅地内で、今回報告の遺跡と同地域である。この調査で第4層に出土した、器面に楕円押型文と変形撚糸文の二つの文様を施文した土器を「石峰式」とし早期に設定している。また上層の第3層には、貝殻条痕文土器、山形押型文土器、平椀Ⅱ式土器、第2層には塞ノ神B式土器などが出土している。(註1)

昭和45年には、鹿児島空港建設に伴う調査が行なわれ、手向山式土器、阿高式土器、重弧文土器、成川式土器などを発見している。(註2)。そして近年、九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の調査によって遺跡の発見があいつぎ、内容は細石器時代までさかのぼることが明らかとなっている。(註6)。

石峰遺跡から北西へ約2.5kmの木佐貫原遺跡では、山形押型文土器や変形撚糸文土器、異形押型文土器など、縄文前期の好資料をはじめ、後期の絵画様線刻土器等の特殊な土器を出土している。(註7)。また高屋山上陵の南西、県道を隔てた畑地には、黒曜石の剥片や石器、縄文前期の土器片が、ブルドーザーで整地中発見され、さらに石峰遺跡北東500mにある小高い独立小丘陵の大川内丘(麓公民館所在地)では、阿高式土器片ほか縄文土器を発見している。

高屋山上陵については、神代第二代天津日高彦火火出見尊の御陵といわれている。その御治定については、政府によって明治元年後醍醐院眞柱、三雲藤一郎及び三島通庸等に命じて調査せしめ、明治3年重ねて田中頼庸及び山之内時習に、さらに明治6年樺山資雄に命じて慎重にその調査にあたらしめ、明治7年7月、高屋山上陵の位置を現在地に御治定され、明確にされたものである。(註8)。しかしながら本格的な考古学的調査はなされておらず、その実態は不明となっている。



第1図 石峰遺跡周辺地形図

第1表 石峰遺跡の周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	地形	遺物	備考
1	石峰	溝辺町麓石峰	台地		本報告書(3)
2	中尾田	横川町中野	〃	縄文(前・中期) 中世山城	
3	向井田	溝辺町三縄向井田	山麓	土師器片	
4	据石ヶ岡	〃 据石ヶ岡	山地	押型文土器	
5	倉ノ山	〃 有川倉ノ山	台地	弥生	
6	木佐貫原	〃 麓木佐貫	〃	縄文(前・後期)	(7)
7	石原	〃 有川石原	〃	縄文・弥生	
8	管ノ口B	〃 管ノ口	〃	弥生	
9	〃 A	〃 〃	〃	弥生	
10	管ノ口(上床山)	〃 〃	山林	石斧・土器片	
11	高屋山陵	〃 麓	〃		
12	中野	〃 中野	台地	縄文・弥生・土師器・須恵器	
13	横頭	〃 麓横頭	〃	縄文・弥生・土師器	
14	十三塚原第二地点	〃 空港内敷地	〃	縄文(手向山・塞ノ神・阿高式)	(2)
15	柳ヶ迫	〃 麓松ヶ迫	〃	細石器・縄文(後期)	(6)
16	長ヶ原	〃 麓長ヶ原	〃	細石器・縄文(前期)・弥生・古墳期	(6)
17	松木原	〃 麓松木原	〃	弥生(後期)・古墳期	(6)
18	葛根塚	〃 麓葛根塚	〃	〃 〃	(6)
19	七ッ次	〃 麓七ッ次	〃	縄文(後期)・弥生・古墳期	(6)
20	松ヶ迫	〃 麓松ヶ迫	〃	弥生(後期)・古墳期	(6)
21	木屋原	〃 麓木屋原	〃	縄文(早・前)・弥生・古墳期	(6)
22	竹山	〃 有川竹山	山麓	縄文(前)	

註(1) 河口貞徳「日本考古学年報」1966年

- (2) 鹿児島県史跡調査会「始良郡溝辺町大型空港建設地内における埋蔵文化財発掘調査報告書」1971年3月
- (3) 鹿児島県教育委員会「埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書」九州高速道路鹿児島線(加治木～吉松間)1973年
- (4) 鹿児島県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」I 1977年
- (5) 鹿児島県教育委員会「鹿児島県市町村別遺跡地名表」1977年
- (6) 鹿児島県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」II 1978年
- (7) 鹿児島県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」III 1979年
- (8) 溝辺町郷土誌編集委員会「溝辺町郷土誌」1973年

第3章 調査の概要

石峰遺跡調査の発端は、高屋山陵墓官岩元勇彦氏が、溝辺町麓上石峰、鳥丸広志氏宅地出土の特殊な縄文土器に、強い関心をもったことにはじまる。岩元氏から、当の縄文土器片を分与された河口貞徳は、昭和41年8月、鳥丸広志氏宅地の発掘調査を行ない、前述の土器の残存部分を発見した。同遺跡が十年余を経て、九州縦貫自動車道路線予定地となって、発掘調査が行なわれ、今回、調査報告書が刊行されることになった。この調査で、前記の土器の様相も明らかにされるものと期待していたが、遂にこの土器は発見されなかった。そこで、報告書の刊行を機に、前記の土器の復元を行ない掲載することにした。第78図18の石峰式がそれである。

縦貫道路線予定地は、石峰では、網掛川の支流、崎森川が開析した谷頭分岐部を横断し、前記の鳥丸広志氏宅地（現在鳥丸美登氏所有）南側を、隣接しながら、南東方向へ湾曲し、共同組合茶コントロールセンターの東側をかすめて南進している。このうち、遺跡地として、調査対象となったのは、崎森川谷頭の東壁にはじまり、石峰—嘉例川を結ぶ町道まで、距離350m、幅50～60m、面積21,000㎡である。調査地域は、北西限界の谷にのぞむ集落に属する部分と、集落より東へ展開する畑地に属する部分からなり、集落を略南北に走る県道白石—論地線が、遺跡地を分断する形となっている。

当初の調査予定地は、鳥丸広志氏宅地に隣接の崎森川の谷より、県道までの距離60m、面積3,000㎡の区域であったが、排土置場としての使用を考慮した、縦貫道予定地を調査した結果、遺跡が、前記のひろがりをもつことが判明し、改めて調査区域の設定が行なわれた。

石峰は麓集落で、現在の県道と、ほぼ一致する旧道があり、この旧道に沿って発達した、街道町の形態をとっている。集落の中心には、301.3mの最高点をなす小山を背後にもつ照明寺があり、寺よりやや南に吉兵衛茶屋があった。現在は、空港設置の影響を受けて、商店も数軒以上に増えたが、昭和41年に行なった調査の時は、商店といえば、吉兵衛茶屋の後身である松田商店がただ一軒であった。この集落は、永い間、西側の崎森川の谷につくられた細長い水田地帯と、東にひろがる畑地帯を対象として、農耕を続けてきた集落であった。現在でも、集落内には、深さ30mを越える井戸が残っているが、深井戸を掘る技術がなかった時代には、崎森川の谷が水源であったと考えられ、各家から谷へ通ずる道が家毎に存在し、水田へ通う手段となっているが、かつては水汲みに使用された路でもあったろう。先史時代の立地条件が、そのまま引き継がれたものである。

石峰の地形は、照明寺裏山を最高地点として、崎森川の谷壁に高く、東に僅かに傾斜している。宅地は、谷に近い高地点を選んで設け、入口は、階段又は坂となり、玄関へは、入口の道から直角に、屈折してはいるように造作されている。いずれの宅地も必ず、池・築山・庭木の植込みをもつ庭園を、例外なく備えている。宅地が道路と同じ標高の場合は、家の周囲を土塁で囲んだものもある。遺跡地附近は、標高が割合に低く、道路面との差が少ない。しかし、発

掘の結果、県道に沿って旧道が発見されたが、深く掘り込まれていて、宅地への入口は、傾斜を保つように工夫されていた。

麓集落のうち、昭和は、川辺地方よりの移住者によって形成された集落であって、時代が若く、東側の畑地内に設けられた墓地に、それを示すものが見られる。

遺跡地は、県道を挟む住宅跡地と、東へ続く畑地とから成っている。調査の都合上、住宅跡地は、県道を境として、県道より谷までの北西端を第1地点とし、県道より、畑地との境界までを第2地点とした。畑地跡は、略三等分して、北西方向より南東方向へ、第2地点に続いて、第3地点、第4地点、第5地点とし、この区分に従って調査を行なった。

更に調査実施のために、10m単位の区画を施けることとし、縦貫道工事のために設けられたセンターラインのうち、STA 349+20.0杭と、STA 349+40.0杭との間の線を、縦線の基準とし、これをE線と名付けた。E線と平行に、10m間隔の縦線を設け、西南方向より東北方向へ、D'・C'・B'・A'・A・B・C・D・E・F・G・H・Iと名付けた。

縦線と直角に交わる線のうち、STA 349+20.0杭を通る線を、横線の規準とし、これを7線と名付けた。7線と平行に、10m間隔の横線を設け、北西端より南東端へ、3線～39線と名付けた。

縦線と横線とによって囲まれた10m四方の区域を調査単位とし、南西の線と北西の線との線名を連記して、区域名を表わすこととした。例えば、A-5区のようなものである。

尚、第2地点と第3地点の境界は、13線と14線の一部見られた石垣と、その延長とし、第3地点と第4地点の境界は22線、第4地点と第5地点の境界は30線である。

調査は、2次にわたって行なった。第1次は、昭和50年10月2日から昭和50年12月19日まで、第2次は、昭和51年11月24日から昭和53年5月15日まで、足かけ4ケ年にわたる調査であった。

調査の方法としては、第1地点・第2地点は、第1次調査によって、深層まで遺物を包含していることが予察されたので、全面発掘を行ない、第3・第4・第5地点は、第2層の土師等の包含は、全区域に認められたが、第3層以下は、局地的な埋存の可能性も考えられたので、第2層までは全面発掘を行ない、第3層以下は、2m間隔のトレンチ掘りを行ない、遺物・遺構の出現にしたがって、これに応じて範囲を広げて掘るという方法をとった。

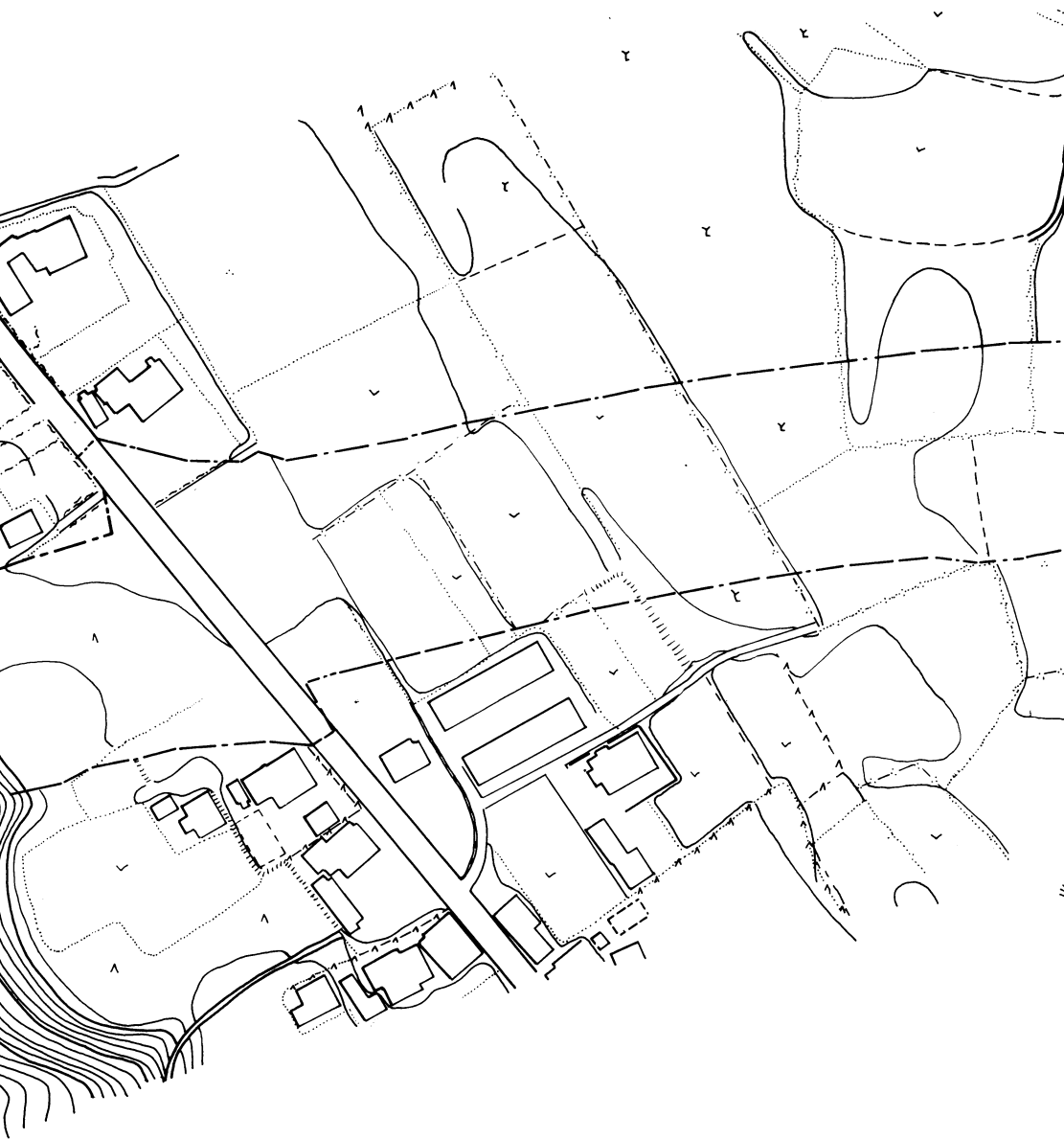
縦貫道の建設工事のために設けられた工事区域の区分は、一見、遺跡調査とは何のかかわりもないように考えられるが、実は遺跡の調査に関係をもつことが、調査実施の段階で明らかになった。

調査区域内に、二つの工事区が含まれており、南東部は、石峰工事区で、小松建設福知建設共同企業体の担当であり、北西部は、十文字工事区で、竹中土木若築建設共同企業体の担当であった。この二つの工事区のうち、石峰工事区は、完成期限が早く、調査の進行との調整に問題のあることが判明した。幸に、石峰工事区には割合に遺物の出土量が少なく、遺構が存在しなかったために、調査員の増員によって、調査の手順を変えることなく続行して、道路工事にも支障がなかった。

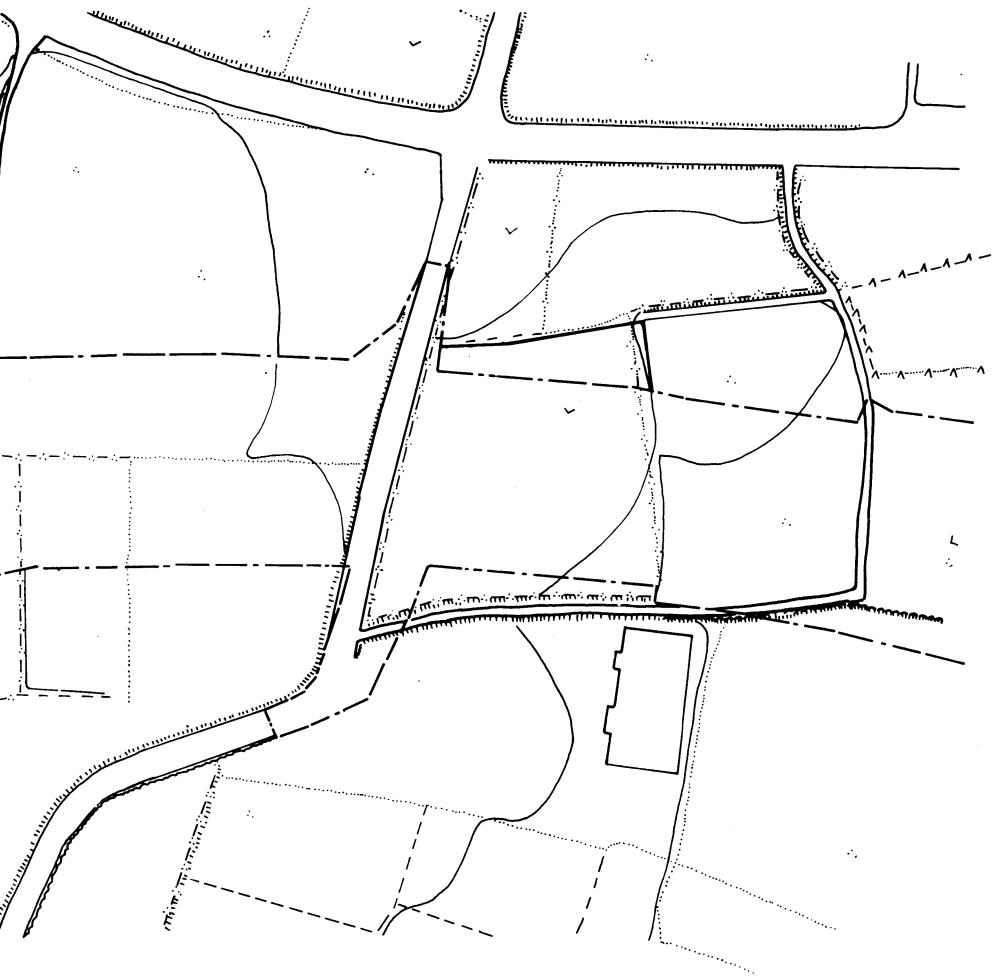
十文字工事区で問題になったのは、切工事の傾斜部分を発掘から除外する件であった。これは、石峰工事区では全然問題にならなかった事であった。遺跡・遺物が存在するときは、発掘するということで話し合いがついた。

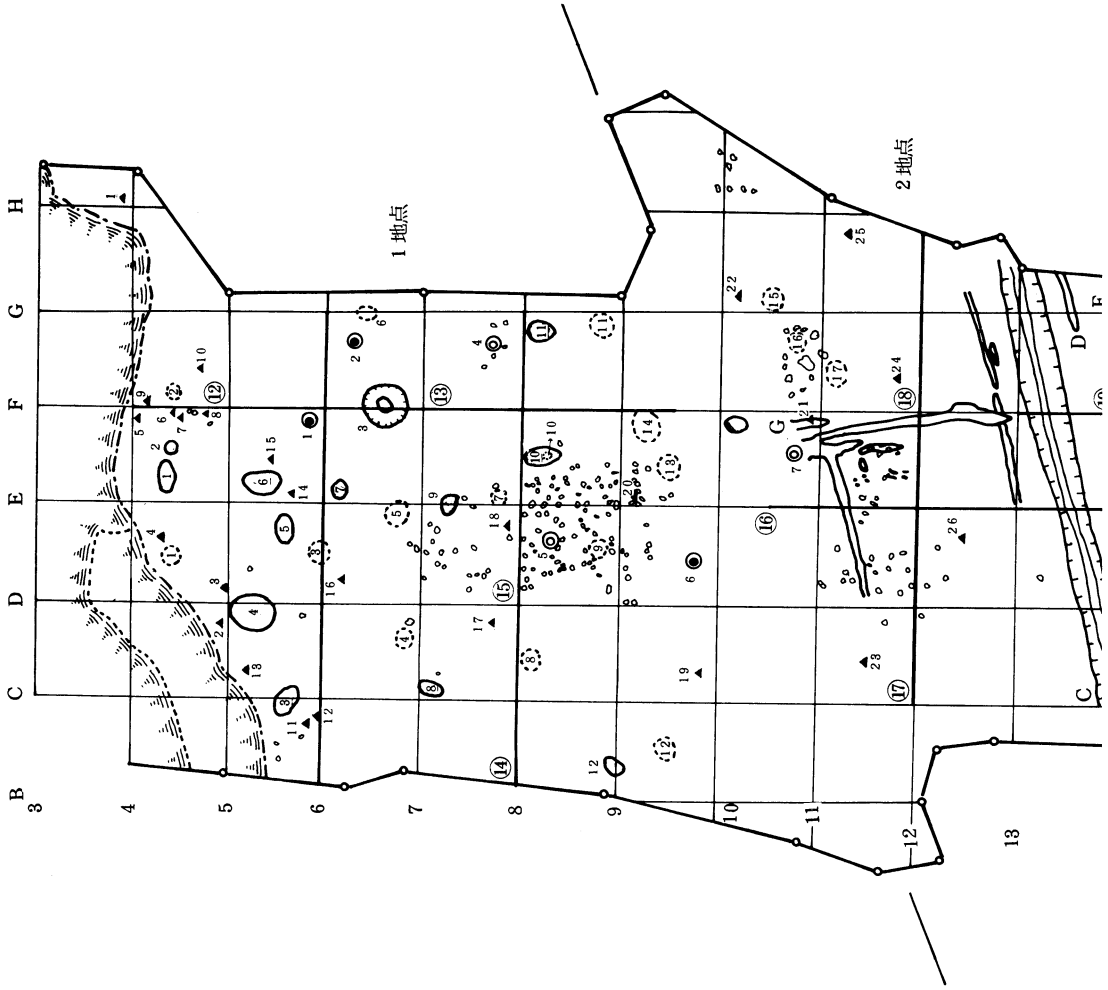
この外、県道部分の発掘、民家の現在使用している出入口の発掘など、種々の問題が起ったが、これらの地区も完全に調査することができた。

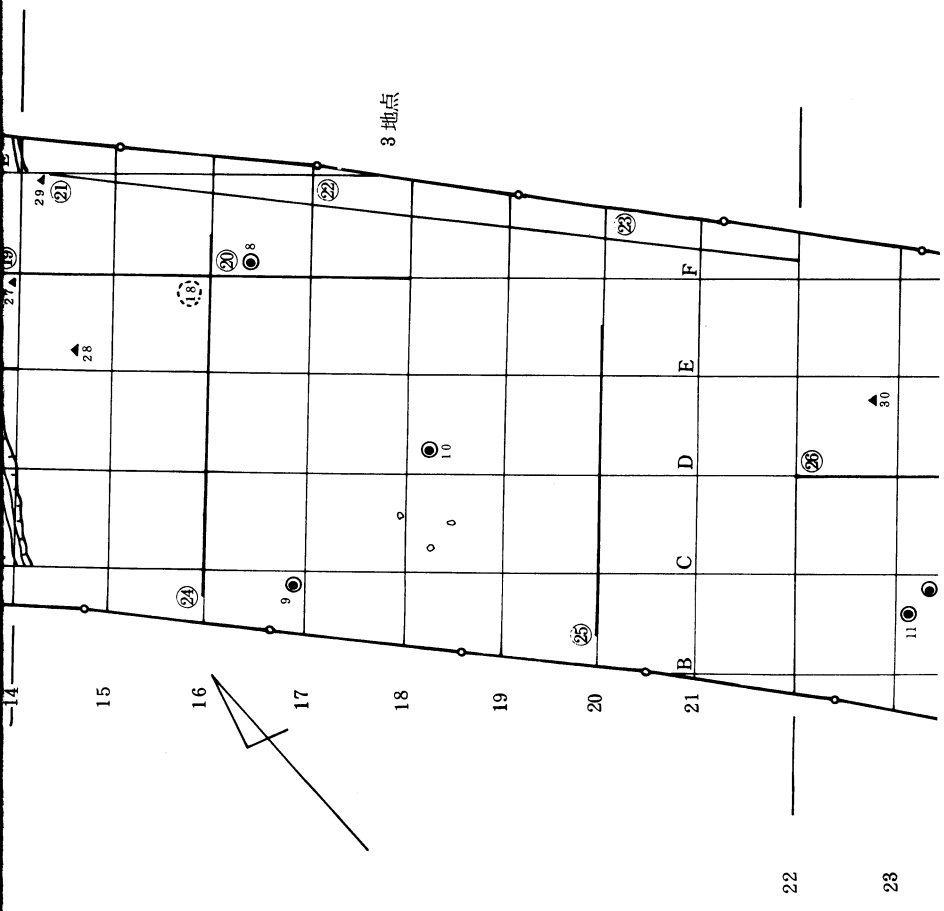


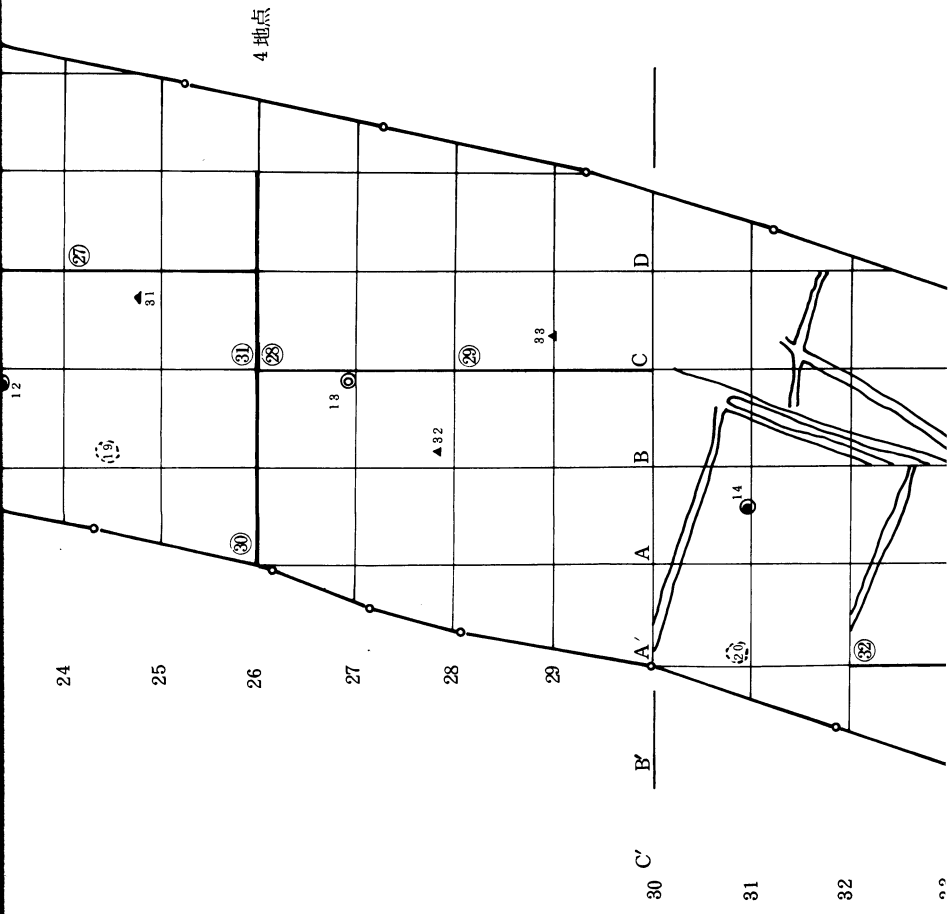


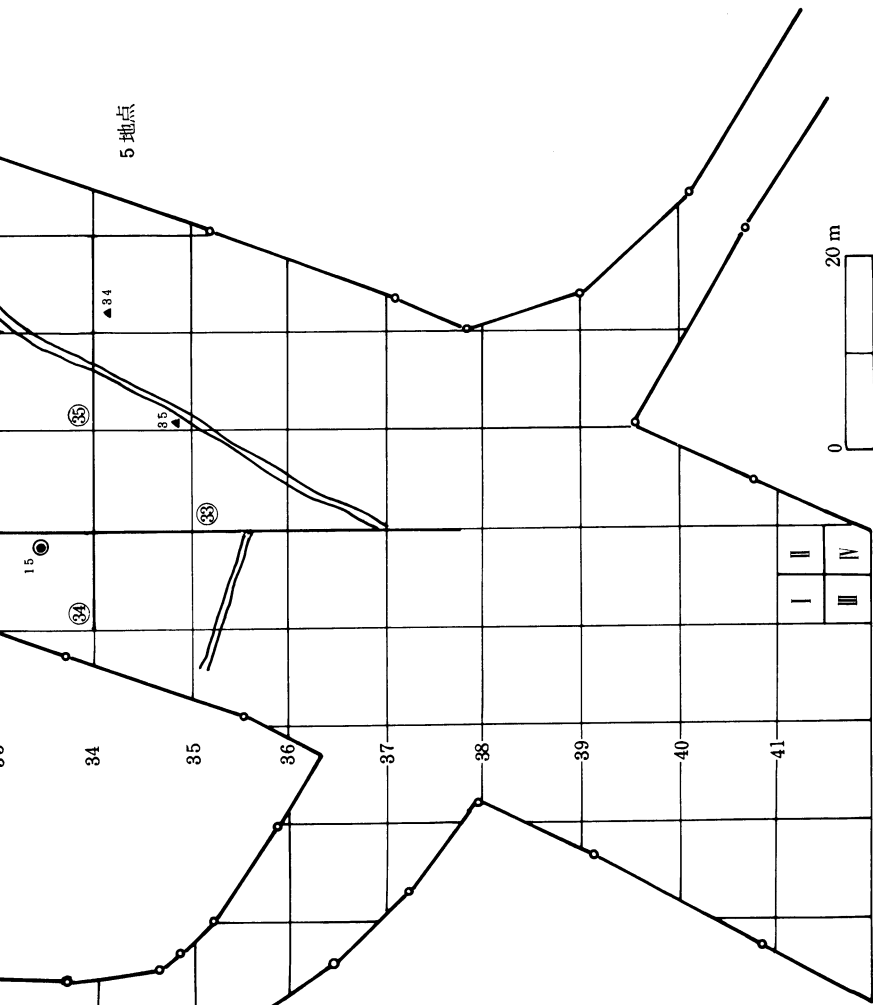
第2図 石峰遺跡地形図











- ◎ 遺構 } Ⅱ1 ~ Ⅱ15
- 土 坑 } Ⅱ1 ~ Ⅱ35
- ▲ 集 石 } Ⅱ1 ~ Ⅱ13
- 局部断面 } Ⅱ1 ~ Ⅱ20
- 土器の集中出土 } Ⅱ1 ~ Ⅱ20
- ⊙ ピット
- ⑫ 土層断面挿図番号12を表す。

第3図 第1・2・3・4・5地点遺構分布図

第2表 局部断層形状一覧表

No	地点	挿図番号	区	平面の形	大きさ	深さ	長軸方向	力の方向	変動を受けた層	変動を受けた時期	備考
1	1		E-4	楕円形	3.8×1.5		N37°E	北西	4~7	4層	
2	1		E-4	略方形	1.8×1.8		N75°W	北北東	4~6	4層	
3	1		B-5Ⅳ~C	不定形	3.3×2.0	0.7	N32.5°W	東南	4a~5a	4a層	
4	1		C-5Ⅱ~D	楕円形	5.6×3.4	2.0	N8.5°W	東	3a~6a	3a層	
5	1		D-5Ⅳ	楕円形	2.4×1.5	1.0?	S75°W	南	3a~5a	3a層	
6	1	5	E-5Ⅰ	楕円形	2.5×1.5	0.9	N39°E	南東	3a~6	3a層	
7	1	6	E-6Ⅰ	略方形	1.3×0.75	0.3	N8.5°W	東東北	3a~4b	3a層	
8	1		C-7Ⅰ	略三角形	3.6×2.5		N13.5°W	南南東	4b~6a	4b層	
9	1		D-7~E-7	楕円形	2.7×1.4	0.8	S67°W	北西	4a~5a	4a層	
10	1	8	E-8Ⅱ	長円形	3.8×1.7	1.6	N62°W	北東	3b~8	4a最終	4層にひび割れ多し
11	1	7	F-8Ⅱ	楕円形	2.3×1.7	0.5	N27°W	南東	3a~5b	3a層	
12	1		B-8Ⅲ~9	楕円形?	4.0?×2.8?		N175°E?	西西北?	3a~5	3a層	半欠
13	1		E-10Ⅱ	長円形	1.4?×0.5	0.15	N46°W	北東	4a~5a	4a層	板石1含む

第3表 土器出土状況一覧表

No	地点	挿図番号	土器・型式	区	層	出土の状況	大きさ・広がり (m)	時期	備考
1	1		楕円形押型文	D-4Ⅰ~Ⅱ	3a下~4a	散布	1.5×0.8	前期	
2	1		網目文	F-4Ⅰ	4a	少量散布	0.7×0.3	前期	周辺に集石あり
3	1		平楕式	D-5Ⅳ	4a下	散布		前期	広く散布
4	1		平楕式	C-6Ⅳ	4a下	散布一部集中		前期	復元
5	1	41	平楕式	D-6Ⅳ	4a中~下	散布		前期	広く散布・復元
6	1		円筒形条痕文	G-6Ⅰ	4a下	散布	1.2×1.0	前期	復元
7	1	60	土師甕	E-7Ⅲ	2下	単独	直径45cm	平安	深さ12cmのピット内単独
8	1	57	土師甕	C-8	2	完形単独	直径23cm	平安	底部欠損
9	1	58	土師甕	D-8Ⅲ	2下	集中	0.2×0.2	平安	復元
10	1	39	楕円形押型文	E-8Ⅱ	4a下	完形単独	直径20cm	前期	局部断層内出土
11	1		深浦式	F-8Ⅳ	3a	散布	3.0×2.0	後期	復元
12	1	42	平楕式	B-9Ⅳ	4a下	集中	1.5×1.0	前期	復元
13	1	59	土師甕	E-9Ⅰ	2下	散布一部集中	1.0×1.0	平安	復元
14	1		燃糸文	E-9Ⅱ	4b上	散布		早期	広く散布・復元

No	地点	挿図 番号	土器・型式	区	層	出土の状況	大きさ・広 がり (m)	時期	備 考
15	2	43	春日式	G-10Ⅰ~Ⅲ	3 a 上	散 布	1.5×1.5	後期	復 元
16	2	40	山形押型文	F-10Ⅳ	4a~4b最上	散 布	1.0×0.8	前期	口縁部接合
17	2		山形押型文	F-11Ⅰ	⁴ a下~ ⁴ b最上	散 布	1.2×0.5	前期	口縁部復元
18	3		不 明	E-15Ⅳ	3 a	散 布	1.0×1.0	後期?	試堀調査
19	4		楕円形押型文	B-24	4a(中~下)	散 布		前期	復 元
20	5		轟 式	A'-30	3 中	散 布	3.0×2.5	前期	

第4表 集石遺構一覧表

No	地点	挿図 番号	区	層	平 面	礫の広がり (m)	礫の特徴	焼痕の 有無	伴出遺物	備 考
1	1		H-3	3 a 下		0.6×0.6		有	撚糸文	集 中
2	1	50	C-4	3 a 下	方形?	1.0×0.4				周辺散乱
3	1		D-4	3a中~下	長円形	1.5×0.6				散 乱
4	1		D-4	3 a 上		1.5×0.8				散 乱
5	1		E-4	3 a 下		0.7×0.5		有	変形撚糸文	集 中
6	1	49	E-4	4 a 中	楕円形	0.6×0.5		有	周辺に手向 山式	密 集
7	1		E-4	4 a 下					撚糸文 変形撚糸文	まばらに散乱
8	1		E-4	4 a 最下		1.5×0.8			手向山式 変形撚糸文	散 乱
9	1		F-4	4 a		0.8×0.4				周辺に礫の散布多し 散 乱
10	1		F-4	4 a		0.8×0.4			手向山式 楕円形押型文	東方破壊
11	1		B-5	4 a 下		1.0×0.6				散 乱
12	1		B-5	3 a		0.6×0.6				散 乱
13	1	48	C-5	4 a 下	略円形	1.0×0.8				礫多量に集中
14	1		E-5	4 a 下		1.5×1.3			土器片	中心部集中
15	1		E-5	4a下~4b		0.4×0.4		有		中心部集中, 他は 散乱
16	1		D-6	4 b 上		1.2×0.7				散 乱
17	1		C-7	4 a 下		1.0×0.4				集中, 南側カット
18	1		D-7	4 a 上		3.0×1.0				散 乱
19	1		C-9	4 a 下		1.0×1.0				集 中
20	1	45	E-9	4 b 上		1.5×2.0				集中・周辺散乱
21	2	63	E-10	3 a 最上	長方形	2.0×0.7	小兒頭大 の礫	有	青磁・陶器	軽石含む, 溝中集 中
22	2		G-10	4 a		0.7×0.5				やや集中
23	2		C-11	4 b		1.3×1.0				散 乱

No	地点	挿図 番号	区	層	平 面	礫の広がり (m)	礫の特徴	焼痕の 有無	伴出遺物	備 考
24	2		F-11	3 a 最上		0.5×0.2	小児頭大 3個並列		土器片 2	
25	2	46	G-11	4 b 最上	長円形	1.0×0.6	小児頭大 の礫多し	有	土器片 3	
26	2		D-12	4 b		1.0×0.6				少量散乱
27	2		E-13	4 a		0.5×0.4				少量散乱
28	3	47	E-14	4 b 上	円 形	1.0×1.0				周辺散乱
29	3		F-14	4 a		1.0×0.5				散 乱
30	4		D-22	4 a 最下	略円形	0.4×0.45				
31	4	51	C-24	4b上~4a下	楕円形	0.9×0.9			楕円形押型文	
32	4		B-27	4 a	長円形	0.8×0.5		有		やや集中
33	4		C-28・29	4 下		4×4				散 乱
34	5		B-34	4		1.6×0.7		有		少量散乱
35	5		A-34			4.0×2.0				散 乱

第5表 遺 構 一 覧 表

No	地点	挿図 番号	図・名称	区	層	面の形	大きさ	伴出遺物	時 期	備 考
1	1	52	1号土坑	E-5	6層面	楕 円 形	1.1×0.35		5 b ?	埋土 5 a・b, 6層
2	1	53	2号土坑	F-6	6層面	楕 円 形	1.6×0.88		5 b ?	埋土 5a・b, 6・7層
3	1	44	住居址	E・F-6	4 b 最上	円 形	3.84×3.59	Ob 剥片	前 期	
4	1		ピット群	F-7	6層面		3.5×2.0	Ob 剥片	5 b ?	埋土 5 b ?
5	1	61	ピット群	D・E-7~9	2		30×15	土師と 陶器	平安以降	
6	1	54	3号土坑	D-9	6層面	楕 円 形	1.35×0.85		5 b ?	埋土 5b 軽石含む
7	2	62	溝・ピット	E-10・11	2		20×10	土 師	平 安	ピット多し建物不明
8	3	64	4号土坑	F-16	2	隅丸方形	1.17×0.85	周辺に土 師	平 安	焼土含む
9	3	65	5号土坑	B-16	3 a 上	楕 円 形	1.07×0.73	土師片 2	平 安	角礫1・炭化物含む
10	3	66	6号土坑	D-18	3	楕 円 形	2.2×1.5 ?×0.6	土 師	平 安	焼土含む
11	4	55	7号土坑	B-23	4	楕 円 形	1×0.8	押型文	前 期	
12	4	56	8号土坑	B-23	4	楕 円 形	2.2×1.3	押型文	前 期	礫含む
13	4	68	近世墓	C-26・27		円 形	約1.6 m	寛永通宝	近 世	頭骨他
14	5		落ち込み	A-30・31		楕 円 形	1.5×1.5			焼土含む
15	5	67	10号土坑	B-34	2	楕 円 形	4.2×4		平 安	

第4章 層位及び局部断層

第1節 層位 (第4図・図版2)

第1地点から第5地点にわたって、層位はほぼ同一である。表層から基盤のシラス層まで7つに区分した。後世の耕作や、基盤整理、ほか攪乱等によって、1～3層は若干変化が認められる部分もある。第4図は、F線-20区の土層断面をもとに作製したものだが、本遺跡の基本的な層位と考えてよい。

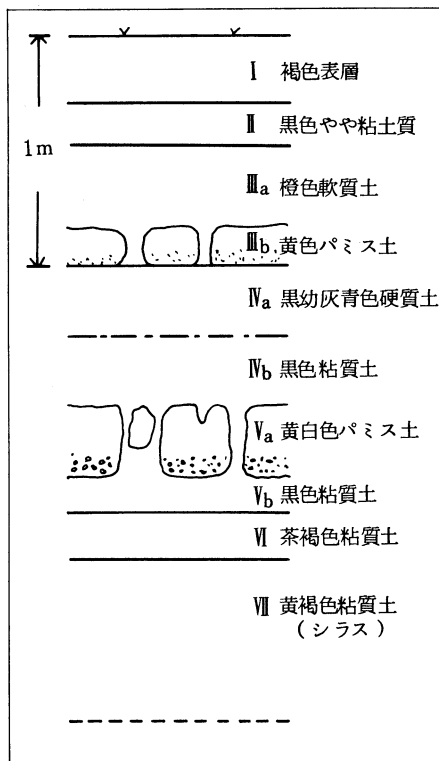
I層 褐色ならびに黒褐色を呈する表層である。約30cmの厚さを持ち、場所によってはa・b 2つに細分できるところもある。下部は白いパミスの粒子を含んでいる。

II層 黒色ならびに暗黒色を呈し、粘質を帯びた火山灰層である。約10～20cmの厚さで堆積している。この層は、耕作等によって消滅している部分が多いが、残存しているところでは、その下位に土師器を包含している。I層との境は明確であるが、III層へは、染みこみが多く観察され、波状を呈する部分が多い。場所によってa・b 2つに細分できる。通称黒ニガと呼ばれる。A・D 788年霧島山の噴火による火山灰と云われている。(註1)

III a層 橙色および黄褐色を呈した火山灰層で、ふかふかとした手ざわりの単純軟質土である。当地方では、赤ボッコと呼ばれる。約30～40cmの厚さで堆積している。上部は2層の染み込みがみられ、土師器を含むことも多い。縄文前期から中期・後期・晩期の土器を出土する。鬼界カルデラを給源とするアカホヤ火山灰層に想定され、絶対年代はB.D6050～6400年に推定されている。(註2) C-6区-3 a 中位出土の木炭によるC-14の測定結果はN-3100, No 6, 3050±95 YBP (2960±90 YBP) と報告があった。

III b層 黄色および赤褐色のパミス層である。約10～15cmの厚さで、3 a層下位と4 a層上位に含まれ、ブロック状に固く堆積しており、一枚の層としては完成していない。III a層が火山灰(Ah)で、b層が降下軽石である。無遺物層である。

IV a層 青灰色および黝灰青色を呈し、約30cmの厚さで堆積している。縄文前期、平椀式土器を主に出土した。硬質でかたい。上位は、III a・b層と明確な色調の差異があって区別しやすいが、下位は自然に4 b層へ移り変り、線引が困難であった。E-5 IV-4 a層のC-14測定結果はNo3102, No10,



第4図 石峰遺跡土層模式図

7910±115YBP (7680±110YBP) と報告されている。また、第1地点の円形住居址は4 a 層の時期に4 b 層に切り込んで形成されたものであるが、住居址内の本炭によるC-14年代測定の結果は、Code No Gak-6859 BP年代 5720±130 (3320BC) と報告された。

IV b層 黒色および暗黒色粘質土で、約30~40cmの厚さで堆積している。おもに上部に縄文土器が包含されているが、下位にも少量出土した。E-5 III-4 b層のC-14測定結果は、No 3101, No 9, 2780±85YBP (2700±80YBP) と出ているが、前後の関係より予想とあまりにもかけ離れた数値であった。資料採取時の不手際か、あるいはその他の原因によるものであろうと解している。

V a層 黄褐色および紅褐色の厚質のパミス層である。約20~30cmの厚さで全面にみられるが、断面で観察すれば、間に黒色土層(IV b)がはまりこみ、ブロック状になっている。下位においてはパミス粒が大きく、ザラザラした手ざわりを生じる。桜島降下軽石に比定される。B-5区のV a層内のピット中(埋土はIV b層)の木炭によるC-14測定結果は、No3099, No 5, 9410±140YBP (9150±135YBP) と報告されている。(註3)

V b層 黒色粘質土で、約20cmの厚さで広がっている。色調・かたさ・手ざわり等、IV b層に類似している点も多い。下位からIV層にかけて、細石器を出土した。

VI層 茶褐色粘質土で、約20cmの厚さで広がっている。細石器の包含層である。

VII層 黄褐色粘質土で、小指先大の小礫を含むシラス土である。上部ではVI層に類似し、粘質を帯びるが、下位になるにつれて軽石を含み、色調も橙褐色から紅褐色、また明褐色と変化する。シラスは40~100mにも達するといわれ、ここでは基盤層とした。

註1. 鹿児島県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告I」 1977年2月

註2. 宇井忠英・福山博之「幸屋火砕流堆積物のC¹⁴年代と南九州諸火山の活動期間」

地質学雑誌 第78巻 第11号 1972年11月

註3. 放射性炭素年代測定は下記に依頼した。

Code No Gak-6859 学習院大学

Code No3099~No3102 日本アイソトープ協会

第2節 局部断層 (第5～第8図・図版3)

桑ノ丸遺跡の調査において、はじめて局部断層が発見され、その後の調査によって、同様の局部断層が、相当広い範囲に分布することがわかって来た。こころみに、局部断層の判明した遺跡地をあげると、桑ノ丸遺跡、山神遺跡、石峰遺跡、木佐貫原遺跡、中尾田遺跡、山崎遺跡、花ノ木遺跡、木場A遺跡、木場B遺跡、加栗山遺跡などである。この分布状態を見ると、加栗山遺跡を除くと、溝辺町、横川町、栗野町に集中し、霧島山地西方の地域にかぎられていることがわかる。調査は、特定の地域にかぎられているために、かたよった結果が出る可能性もあるが、大隅半島、薩摩半島、北薩地域などの調査においては、現在まで発見されたことがない事を考えると、霧島山地西方に限られた現象と見ることも、速断とばかりはいいきれない。

桑ノ丸遺跡の局部断層

報告書に、2ヶ所の局部断層について、記載されている。

その一は、4C区にあって、長径2.4m、短径1.8m、深さ約80cmの規模であった。茶褐色粘質土のV層と、黒色火山灰のIV層の面まで掘り進んだ段階で、前記の規模の局部断層の嵌入があり、この中では、地層が立ちあがって、南西より北東へ、II層、III層、IV層、V層、VI層の順に、縦に並列した状態であった。長軸の方向は北北東-南南西の方向であった。II層のアカホヤ層の嵌入によって、III層以下が突き上げられたような形となっている。アカホヤ層の時代におこった現象と見られ、IV層はシラス層であるところから、影響はシラス層に及んだことがわかる。

その二は、4B区にあり、規模はやや小さく、嵌入部分の地層の並列状態も同様であるが、II層・III層に該当する層に混交が見られた。長軸方向は一と同様で、シラス層まで影響が及んでいる点も同じである。

栗野町木場A遺跡の局部断層は、約2千㎡の範囲に、7～8ヶ所が見られた。一瞥しただけであるから、計測的な事はわからないが、規模・様相から見て、同一の現象と思われた。ただ桑ノ丸遺跡の局部断層と異なる点は、嵌入部分の地層が、例外なく混交している点である。発生の時期は、これもアカホヤ層の時代である。

石峰遺跡の局部断層

石峰遺跡における局部断層は、調査区域の全域に存在しただけでなく、遺跡以外の地域にも、遺跡内と同様に分布することが、自動車道工事の掘削によって判明した。これによって見ると、分布はかなり広く、且つ密であるものと考えられた。

石峰遺跡では、局部断層の調査を第1地点について行なった。分布状況は、第3図遺構分布図に示すとおりで、約3千㎡内に13ヶ所を数えた。平面形は、楕円形が最も多く、規模は、長径5.6m、短径3.4mのNo4が最大で、長径1.4m、短径0.5mのNo13が最小で、長径3m、短径2mが標準的な大きさである。深さについて見るとNo4の2mが最大で、No13の0.15mが最も浅く、0.9mが標準的な深さである。

局部断層作用が発生した時期は、断層に見られる地層の嵌入状況によって、およそ2つの時期が考えられる。その一つは、4層が堆積し終って、3b層の堆積がはじまった時期である。3b層は、鬼界カルデラ起源の火山堆積物（新井房夫・町田洋）で、黄褐色のパミス層であり、年代は6500年B.P.が与えられている。

いま一つは、3a層（アカホヤ）が堆積を終って、2層が堆積する以前の時期である。3a層には、縄文時代前期末から縄文時代晩期の遺物まで出土しているが、縄文時代晩期は、二千年数百年前の時期といわれている。

4層の堆積後、3b層が堆積し始めた頃におこった局部断層に属するものは、No1～3、No8～10、No13であり、3a層が堆積を終って、2層が堆積する以前に起った局部断層に属するものは、No4～7、No11、No12である。

局部断層の規模について見ると、平面面積の大きいものが、深く作用しているとはかぎらないが、大体は面積の大きいものが、深く作用するという傾向は見られる。しかし、作用が深くまで達していても、地層の厚さの変化があるために必ずしも深層まで影響を与えているとはかぎらない。層の面から見ると、影響の及ぶのが最も浅いもので、4層まで影響のあるもの1例、5層までが6例、6層までが4例、7層までが1例、8層までが1例となって、5層まで影響の及んでいるものが最も多く、4層、7層、8層が各1例づつとなっている。8層は、シラス層である。

局部断層の平面形には、種々の形があって一定しないが、数では楕円形が多く、半数をこえている。平面形の長軸方向は、まちまちで法測性を発見することができない。断層の断面を見ると、水平層がこの部分では垂直に転位し、縦列に並ぶ形となっており、この場合、一方向から力を加えたように見える。地層の並列が乱れて混交している場合でも同様である。また、局部断層の断面形は下方が半円形、または弧形を呈するのが常で、この二点が局部断層の特徴である。しかし、力の方向にも法則性は見られない。(第2表 局部断層形状一覧表参照)。

石峰 10号局部断層

E-8区に所在した最も顕著なもので、その形態は第8図に示す。平面形は楕円形、断面形は、下方に向かって半円形となっている。規模は長径 3.8m、短径1.6 m、深さ1.6 mで、面積は平均的な広さであるが、深さの点では、著しく平均的数値を上回わり、局部断層の中で、2番目となっている点の特徴で、本遺跡で、シラス層まで達した唯一の例である。

調査が、4a層の黝灰青色硬質土層の表面に達した時、発見された。長軸の方向はN-W62°である。

断層作用が発生した時期については、第2表では、4a最終としたが、平面図で見ると、3b層の堆積がすでに始まっており、断面図では、図面右側の4a層の嵌入部分の中に挟まれて、3b層が1.2 mの深さまで、4a層と共に嵌入しているのがわかる。したがって、正確には発生した時期は、3b層の黄褐色パミス土が堆積し始めた時期である。

第8図の平面図は、4a層表面に、他の地層が嵌入した状態を示すものである。図の中央右側

に細長く分布する2層の黒色層は掘り込みで、局部断層とは関係がない。4 a層中に見られる2層以外の地層は、局部断層作用によって嵌入したものである。図面中央に並列する地層は、本来上より下へ、横位に重なっていたものが断層作用によって転位し、図面右より左方向へ、4 b層より順に、7層まで並列したものである。

左図は、断面図である。図の左右には、本来の上下に重なった水平層が見られ、中央には、断層作用によって突きおこされた地層が嵌入して、やや斜めに並列している。縦位並列層のうち、右端の4 a層は、中央に3 b層を挟んで、幅1.6 m、深さ1.2 mの楔形に嵌入して、水平に重なっていた層を、切断移動せしめた原動力である。嵌入した時に、嵌入部分の上面右端を中心として多数の亀裂を生じ、水平層の切断部分は、下方にねじ曲げられている。

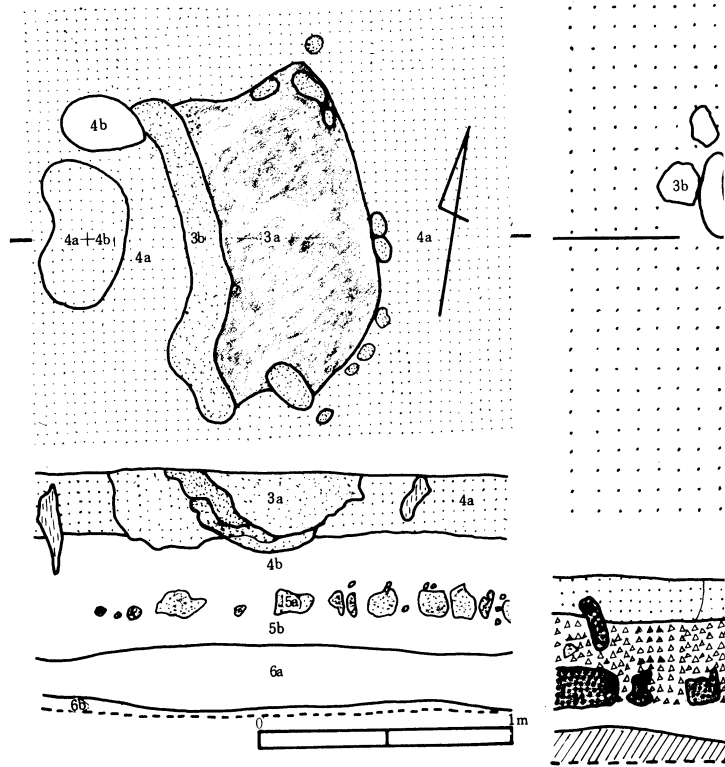
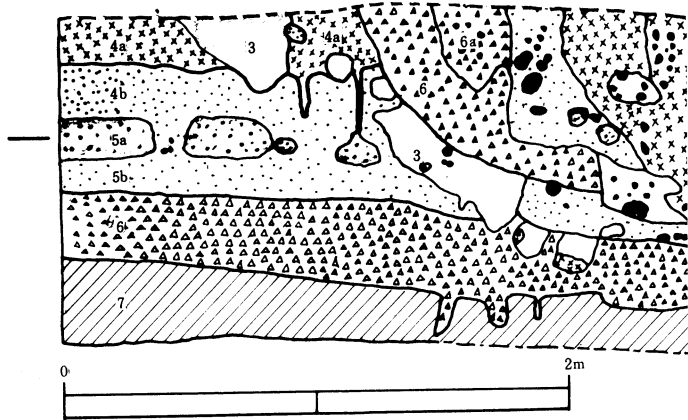
一方、切断されて移動した4 b層以下7 a層までの地層は、上下の配列順位をそのまま右より左へ並列しているが、下端では、各層の切断部分が切れぎれになって混合しており、圧力を受けた8層も、左端に並列した7 a層のなかへ突入している。

左端では、7 a層が突きあげられて上方へ移動した際に、左側水平層の端を伴って上昇し、7層の外側に、6層5層を混交して出現させている。(平面図参照)。

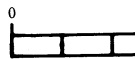
なお、嵌入部分の南側、水平層との境界にも断層作用による多数の亀裂が認められた。4 a層は本来硬質の地層であるが、この附近(E-8区)では、ひびが多く脆弱な状態であった。この現象は、遺跡形成時の乾燥によるものと考えられた。10号局部断層が、面積の割に影響が深層まで及んでいたのは、乾燥によって、4 a層の凝結力が弱くなっていたからであろう。

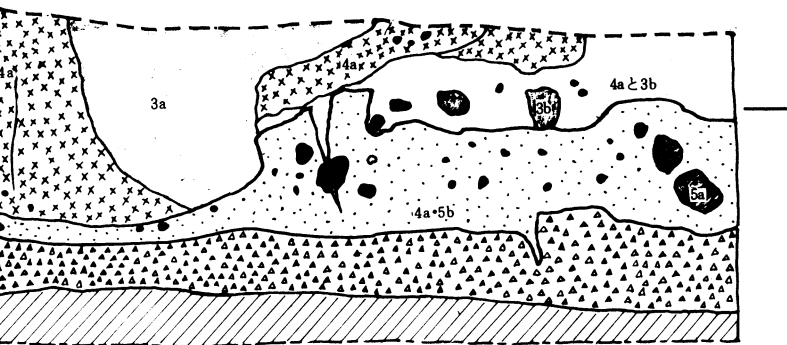
以上の10号局部断層の検討によって、発生の原因として考えられることは、地層に局所的な力が加わった結果であるということである。しかも、それは風倒木とか、水による浸蝕というようなものではなく、他の自然的営力によるものと考えられる。局部断層の分布より考えると、霧島火山に関連するものではないかと考える。

局部断層では、3 a層の堆積後、2層の堆積前に発生したものが多い。その例として、4号、9号、14号の実測図をあげる。(第5図・第6図・第7図)。

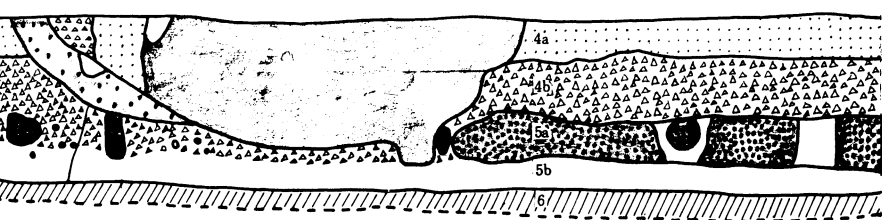
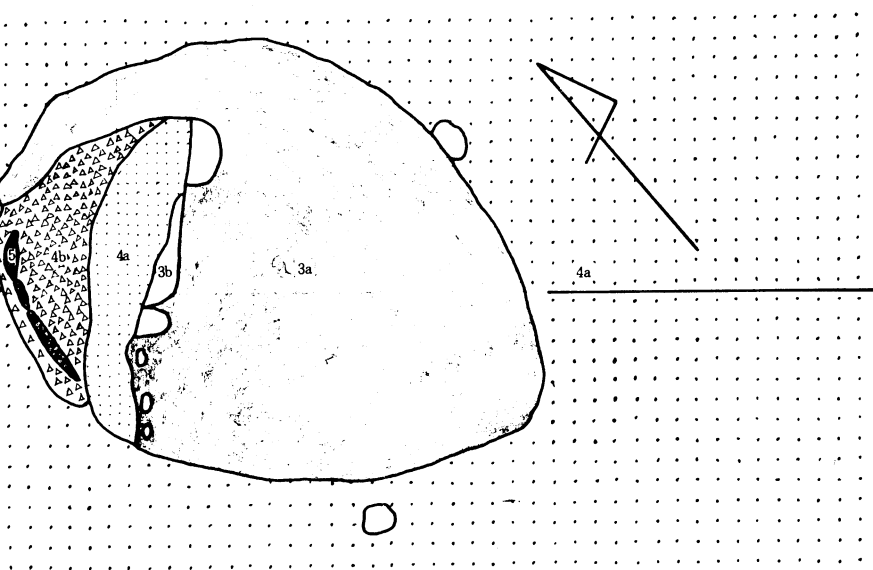


第6图 第1地点7号局部断層

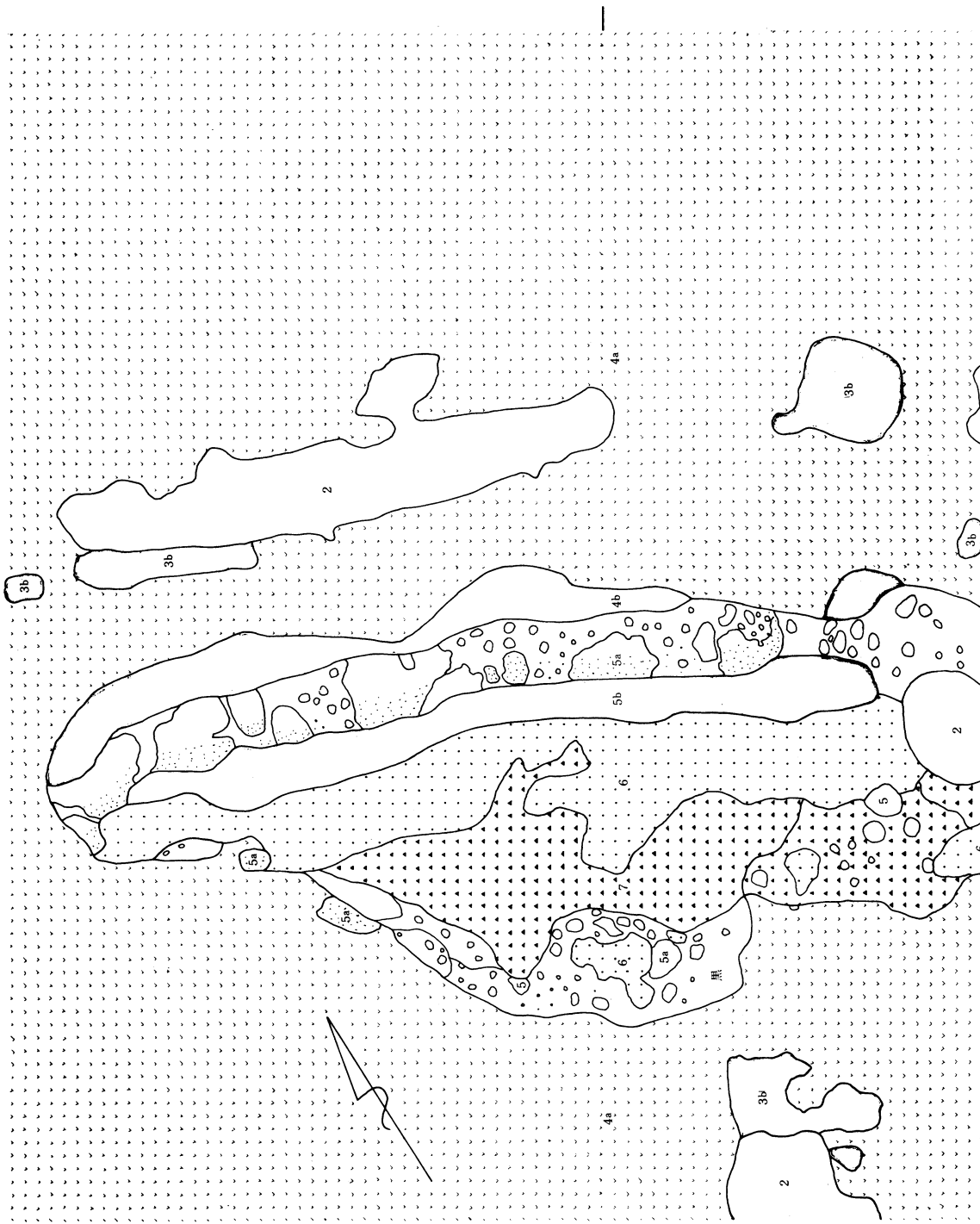


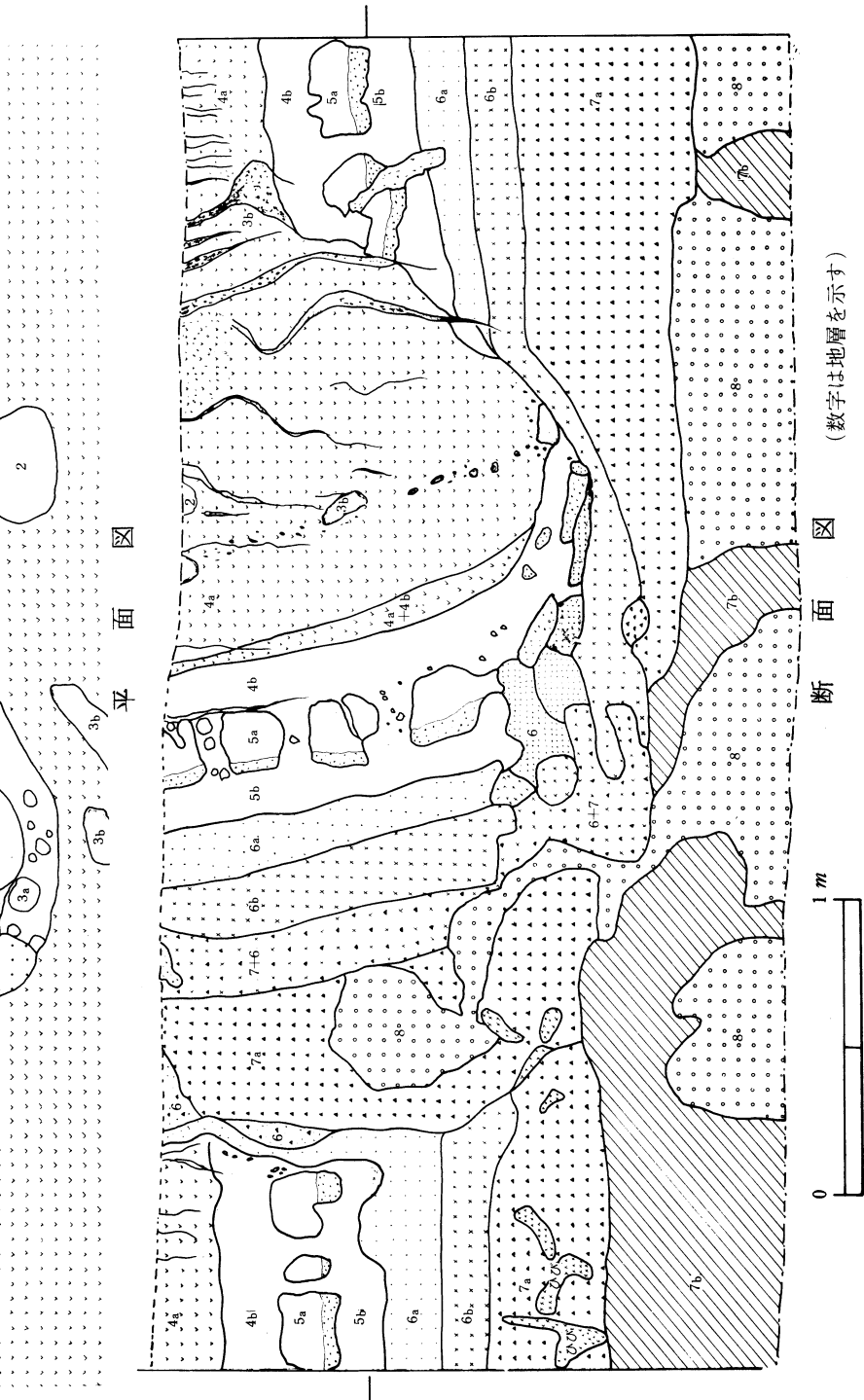


第5図 第1地点6号局部断層



第7図 第1地点11号局部断層





第8図 第1地点10号局部断面 (E-8区)

第5章 各地点の調査

調査地は、16,000㎡という広い面積に及んでいるため、便宜的に第1地点から第5地点まで5つに区分して調査した。第1・2地点と第3～5地点では、土地利用の状況がやや異なっているため、少し説明を加えておきたい。

第1・2地点は、台地縁辺にあたり石峰集落内にある。第1地点北半分390㎡は、東郷昭氏の屋敷があり、最近まで居住していた。また、南半分1,440㎡は、春田幾郎氏の屋敷があり、昭和10年頃まで居住していたが転居し、その後杉林となった。これらの屋敷の東方は、一段下って旧道部に接していた。この旧道は、現在の集落の西方を通り、ほぼ北北東方向へ伸び、隼人町中初場へ通じている。旧道の成立年代は明らかでない。昭和7年集落の東側に、県道・白石一論地線が開通したため廃道となった。第2地点南側は、川崎二矢氏の屋敷あとで、北半分は畑地となっていた。

第3～5地点は、元来畑地として使用されており、調査中発見された近世墓についても、古老の記憶にとどめていない。

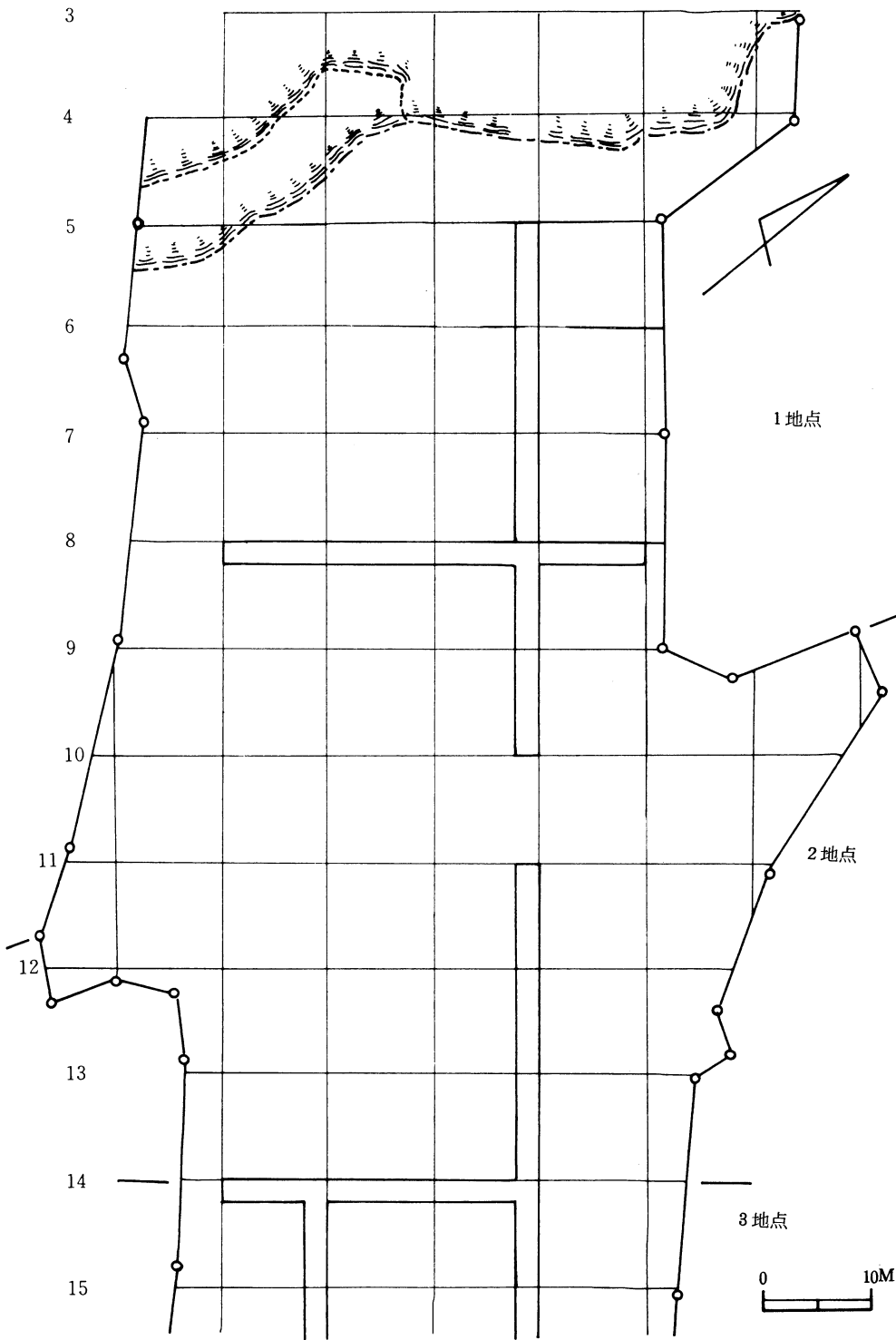
第1節 確認調査（第9図）

当初、県道（白石一論地間）から西方（字提田）崖端部までの約3,000㎡を分布調査の際、遺跡地として有力とした。したがって、この全域に10mのグリッドを設定することとし、南西から北東方向へ、A・B・C……Hとし、北西から南東へ、5・6・7……11とした。さらに1グリッドを5m四方4区画に細分し、北西側を左方よりⅠ・Ⅱ区、南東側を左方よりⅢ・Ⅳ区と呼ぶことにした。なお、グリッド主軸はSTA349+20とSTA349+40を結ぶ線を持ち、E軸となった。5区から崖端部にかけては未買収のため、後日3・4区を延長して設定した。

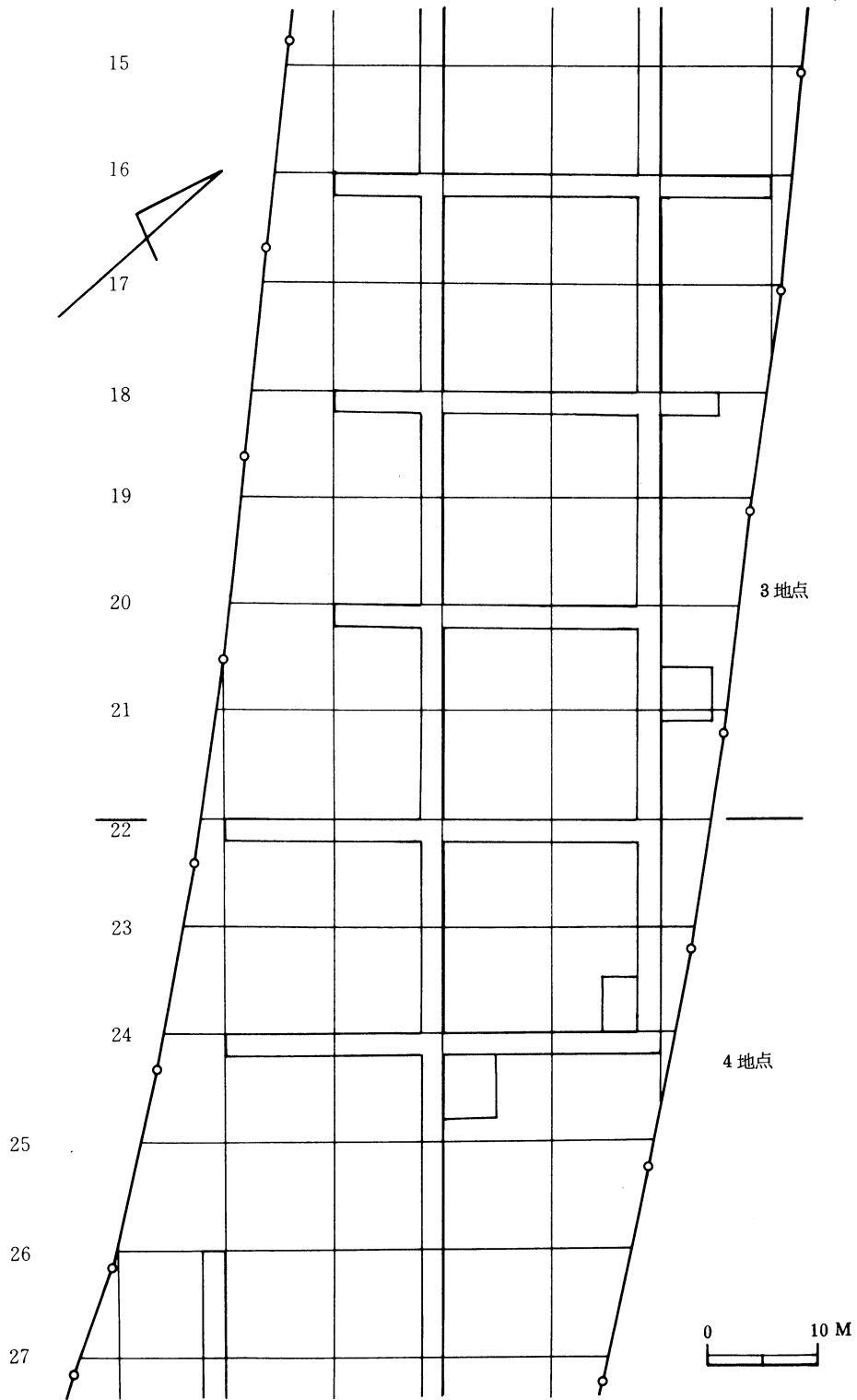
遺跡の性格と範囲確認のため、E区東北端F線にそって2m巾のトレンチを5～9区までと、それに直交した8線にそってC～F区までを設けた。その結果、さまざまな後世の掘り込みによって攪乱状態がみられたが、土師器や縄文土器片・石鏃を検出し、縄文を主とする良好な遺跡であることが判明した。また、E-6区には円形の落ち込み状の遺構も確認した。

遺跡の広がりを知るために、県道から東南方向（字片馬場）へ順次グリッドを拡張してゆきトレンチを設定した。トレンチは、20m間隔に縦・横に入れることを原則とし、遺物の確認された面で止め、また、遺構は部分的に拡張して調査した。

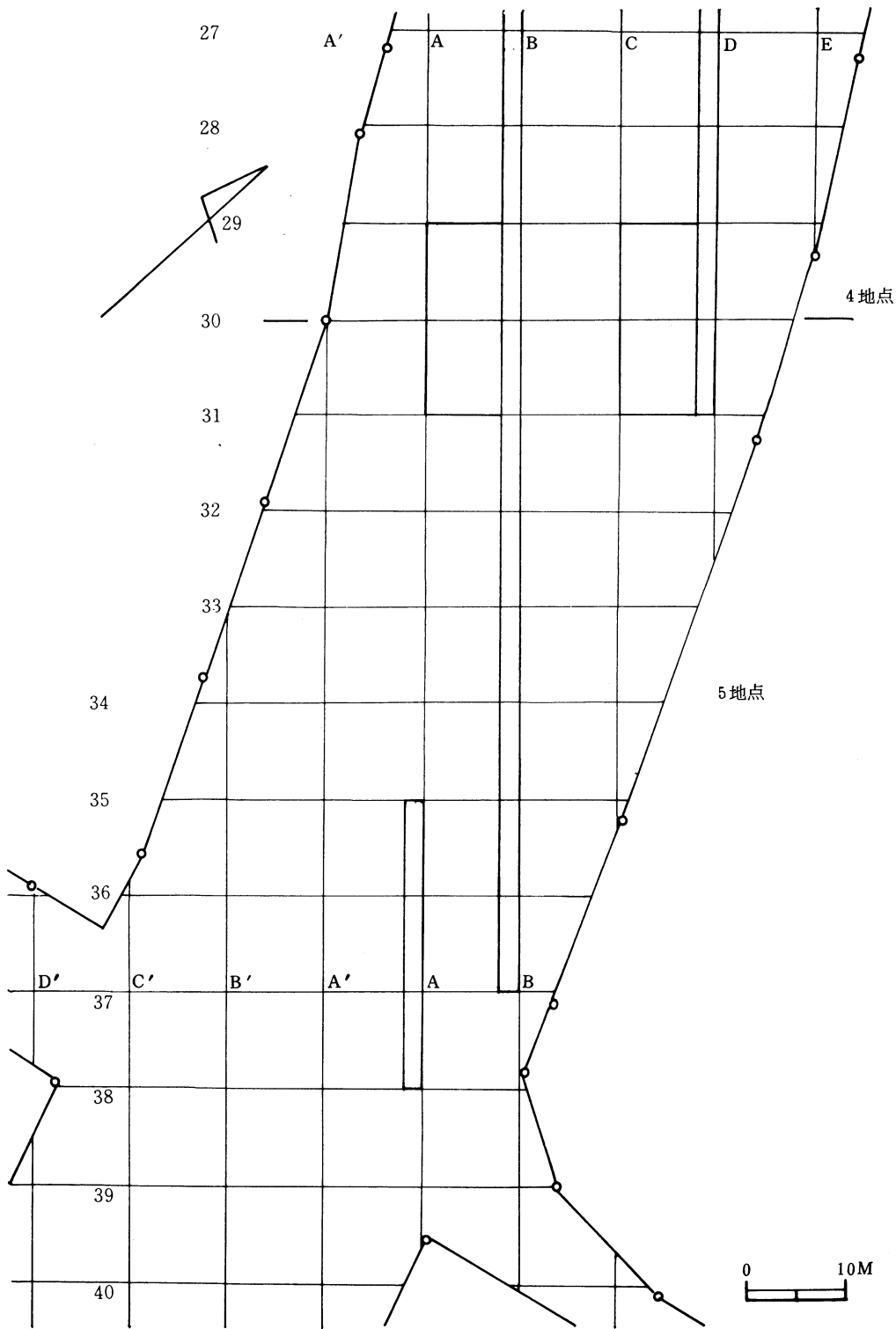
まず、E区東北端F線よりのトレンチを23区まで伸ばし、C区東北端D線よりのトレンチを14区から31区まで、さらに20m離れB線にそってA区に26区から36区まで、さらに10m離れA線にそってA'区に35～37区まで縦線を延長していった。横位はC・D・E-14, C・D・E・F-16, C・D・E・F-18, C・D・E-20, B・C・D・E-22, B・C・D・E-24のトレンチである。その結果、E-11・12区トレンチにおいて、3a層に掘り込まれた溝状の遺



第9図(1) 第1・2・3地点確認調査トレンチ配置図



第9図(2) 第3・4地点確認調査トレンチ配置図



第9図(3) 第4・5地点確認調査トレンチ配置図

構が検出され、14～18区のトレンチには土師器の散布がみられた。C-24区では、楕円押型文土器が出土し、A-32区では、須恵器の円板状の加工品を検出した。そのほか内黒土師器や青磁、また3 a層面に広がる焼土面、縄文後期土器(E-15-3 a)、集石(E-13区)等を発見した。こうして遺物の散布の状況を追究していった結果、字横大道を画する道路まで達したのである。

ここで土師器を主として包含する2層黒土層のとらえ方が問題となる。2層は、残在部分については、上部が耕作によるホイル痕や芋穴等によって攪乱状態がみられるが、中～下位にかけては安定している。そこで黒土層中にみられる木炭片の散らばりが、当時(土師器)の生活面を示すのではないかという仮説にたって、A-29・30区、C-29・30区を全面にひろげ、移植ごてによる精査を行ない、木炭の散布状況をおさえてみることにした。その結果、木炭出土頻度数は、2層下位が最も多く、この面が土師器の生活面ではないかと推測された。

なお、前述したように第1地点から第5地点まで5つに分けたが、第1地点は県道から北西崖端部に至るまで(字提田)、第2地点は県道から14線まで、第3地点は22線まで、第4地点は30線まで、第5地点は東南の道路までである。

第2節 第1地点の調査(第10～15図・図版1上)

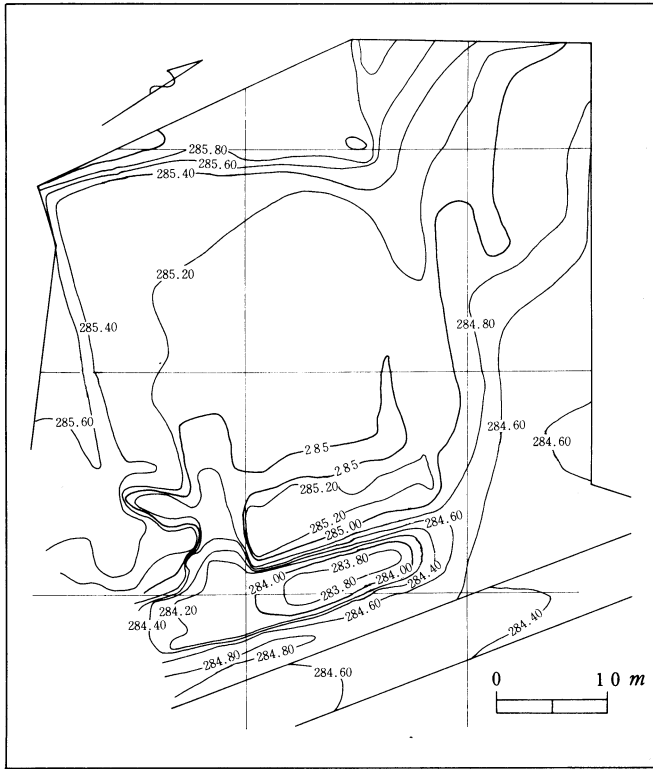
第1地点は、県道より北西方向の崖端部まで約60mの長さにある。中心線でいえば、STA 348+90から349+50に当る地域である。北西の谷底との比高は20m以上を測り、かなり急峻な傾斜をなして眼下を見下すことができる。ほぼ標高285.1 mを測り、全体には西から東へ緩かな傾斜をなしている。

現地は、最近まで屋敷として人が居住し、また畑として蜜柑等の柑橘類の栽培、あるいは杉林としてかなりの土地利用が行なわれており、複雑に入りこんでいた。特に県道ぞいには、旧道建設時の大きな濠状の掘り込みがみられ、ここでは4 b層までが消滅し、わずかに5 a層面を残すのみであった。またE・F-5区附近は重機による掘削のあとがあり、C-8・9区附近は防空濠の大きな穴が残っていた。しかしながら中央部(D・E-7・8区)附近から崖端部にかけては杉根ばかりで、わりに保存状態は良好であった。

調査は、5区から9・10区にかけて全面を進行し、3・4区は、買収終了後に行なうた。またA・B-9・10・11区の三角形にあたる部分は、水流添宅の通用口にあたっており、ふり替え道路のできた第2地点調査の際に行なうた。

表層は屋敷の跡としての諸雑物や雑草を除去することから始めた。明治以降の日常雑器類やコンクリート片、瓦、レンガ、古材、壁石等多量の廃棄物を集めて除去した。

2層の残存状況は、E-5区の一部とD・E-7・8・9区に残るのみで、他はほとんど消滅していた。この2ヶ所には、いずれも土師器の出土がみられた。特にD・E-7・8・9区は、土師器の皿、坏、甕の破片が多量に散布しており、なかには円盤状の加工品も数点みられた。3 a層面において多くのピットを検出したが、建物の復元までには至らなかった。E-7区(No 7)、C-8 I区(No 8)、D-8 III区(No 9)に完形の甕形土器が単独で出土したのは、後



第10図 第1地点地形図

世の攪乱をまぬがれたためのもので、幸運ともいえるべきであろう。

3 a 層は、F-5~9区と旧道部分は、ほとんど残存していない。F-5~7区は屋敷跡にあたり、8~9区は玄関入口に相当するため、土地の削平が行われた結果である。切石が東西方向に並列して積んであった。他は部分的な掘り込みを除けば、わりに保護されていた。遺物の出土は散発的でひじょうに少ない。D・E-4区とF-8区に深浦式土器、G-4区に阿高式、C・D-5区に草野式土器、D・E-5区に黒色研磨土器が、わりにまと

まって出土しただけで、他は少量であった。

4 a 層は、平椀式土器の主な包含層である。F-5区から6区にかけての上部が攪乱されているのと旧道部分を徐いて、他は全面に保護されていた。この層では、多くの土器や石器が出土し、また集石や住居址も検出された。土器は、1個体分の破片がわりに集中し、また散布して方々にみられた。D-6区の菱形押型文土器、F・G-6区円筒形条痕文土器、F-4区手向山式土器、C-5区塞ノ神式土器、F-8区燃糸文土器、E-7区凸帯燃糸文土器等である。特に平椀式土器は、濃密な集中度を示し、B-9区、C-6区、D-6区にそれぞれ1個体分の出土をみた。

住居址は、円形の竪穴住居址で6区のE~F区にかけてみられた。断面の観察では、4 a 層が4 b 層に落ち込んでいる。柱穴は検出できなかった。

4 b 層は、旧道部を除いて全面にわたって残存していた。遺物の出土量は、4 a 層にくらべ極端に減少する。b 層中位に多く出土し、なかには5 a 上面に位置する土器もみられた。E-9区に燃糸文土器、D-8~9区連点鋸齒文土器、D-8区石坂式土器等である。

5 b 層から6 a 層にかけて、細石器の出土がみられたが、詳細は旧石器の項で説明する。

6 層面および6 層面を少し掘り下げたところで、E-5区(No 1)、F-6区(No 2)、D-9

区 (No 6) の土壇と F-7 区 (No 4) のピットを確認した。いずれも 4 b・5 a・5 b 層土がブロック状に落ち込んでいた。遺物の出土はみられなかった。

第 1 地点は、各所に土層の横転する局部断層がみられた。その影響で下層の遺物が持ち上げられ、上位に出土する例がしばしばみられた。また E-8 区 (No 10) の局部断層では、4 a 中に含まれた楕円形押型文土器の完形品が、直立した土層に合わせて、立位の形で出土している。

5 a 面にてコンタ測量を行ない、生活面の復元を試みた。その結果、崖端部から 60m の県道まで 1.2m~1.5m の比高差がみられた。地形は西から東方へ緩傾斜しており、現在の傾斜とほとんど変わらないことが判明した。

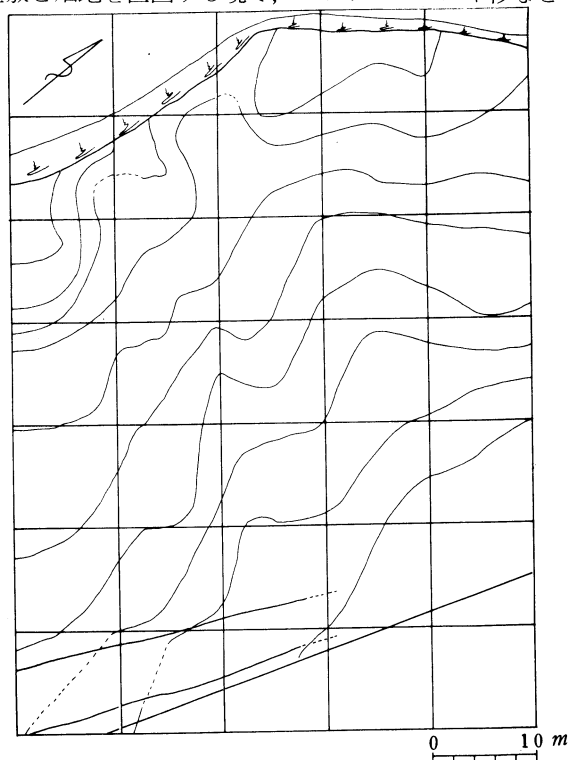
第 3 節 第 2 地点の調査 (第 16 図~第 18 図)

第 2 地点は、県道から 14 線に至り、B~H 区に広がる不定形の面積約 2,000 m² の区域である。南北を住宅によって阻まれ、東南方向に茶畑がひろがっている。標高 284.5 m で、第 1 地点より 60cm 低い。ほぼ平面に整えられているのは、屋敷の跡と畑地だったことによる。特に中心線より西側は、水道施設や土台石などがまだ放置されていた。北側は G・H-9・10 区附近を除いて畑地であったが、数年前工事現場の事務所等が設置されていたとのことであった。

C-14 杭から G-13 杭にかけてが屋敷と畑地を区画する境で、ヘンプ・パームや杉などの樹木が並べて植えられており、北側の川崎温子宅、南側の川崎二矢宅の畑地境の列につながっている。この線から以東は、約 30 cm ほどの段落ちになって、茶畑となっている。同じ方向に出現した溝状遺構は、この境に相関している。

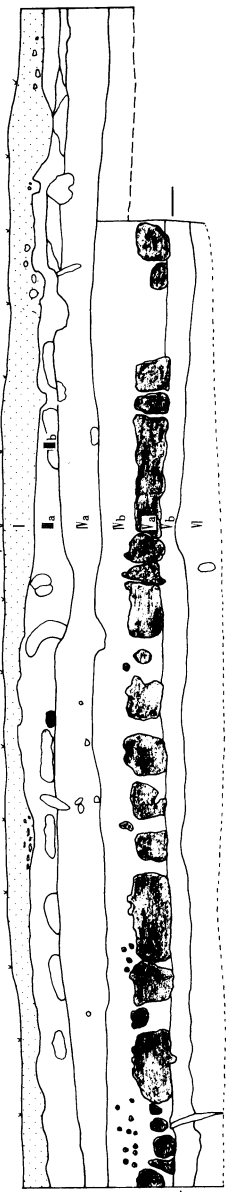
本地点は、確認調査で E-11 12 区トレンチに土師器や溝状の遺構を確認しており、また第 1 地点からの遺跡の広がりや、どこまで伸びるかなど興味をもたれていた。

調査は、初め県道面を除いて全面行い、のち迂回路ができた段階で、県道下の調査を行なった。なお表層が 50~60cm に達す



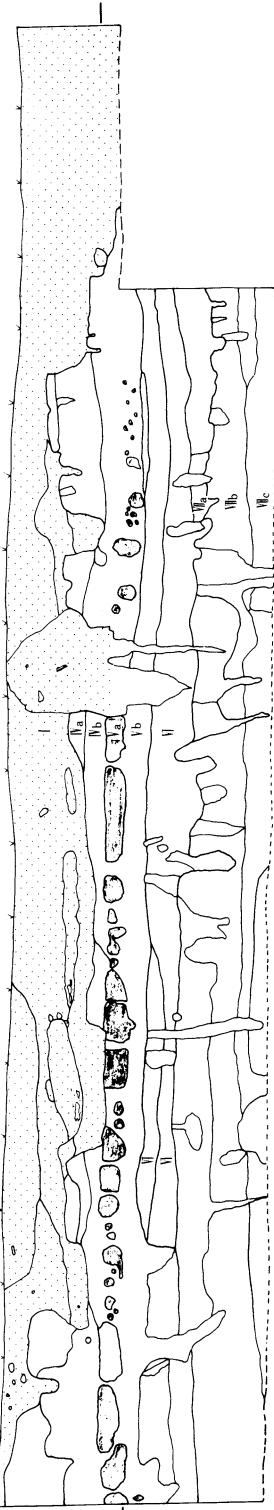
第 11 図 第 1 地点 5 層面の地形図

F線-4区

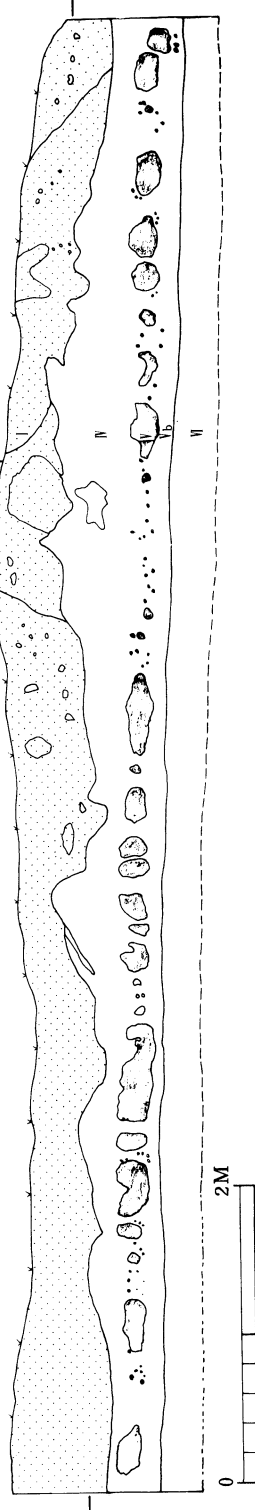


282.79 m

F線-5区

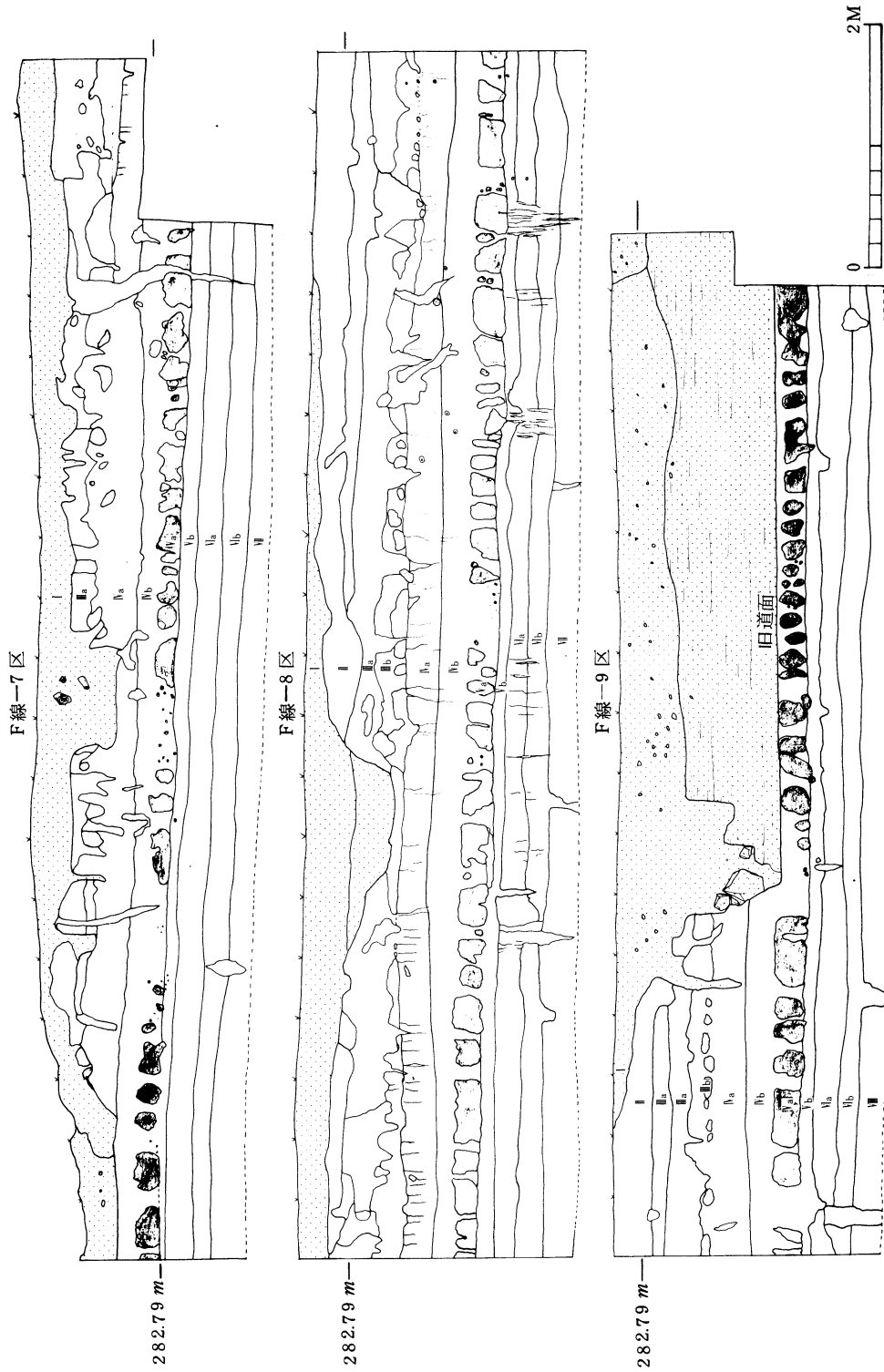


F線-6区

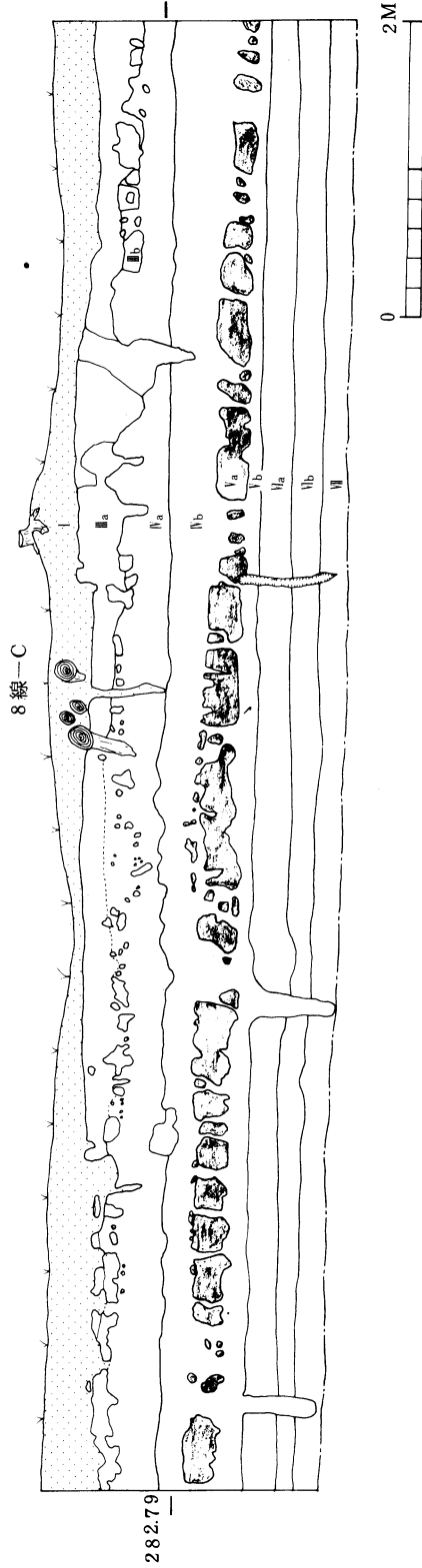
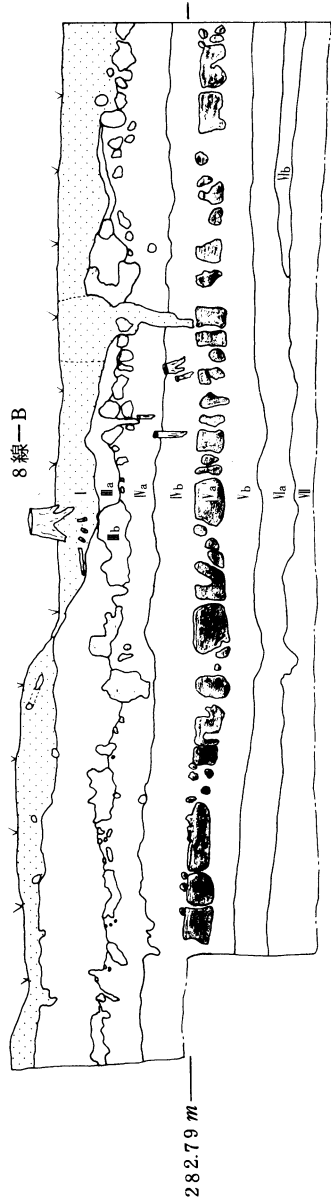


2M

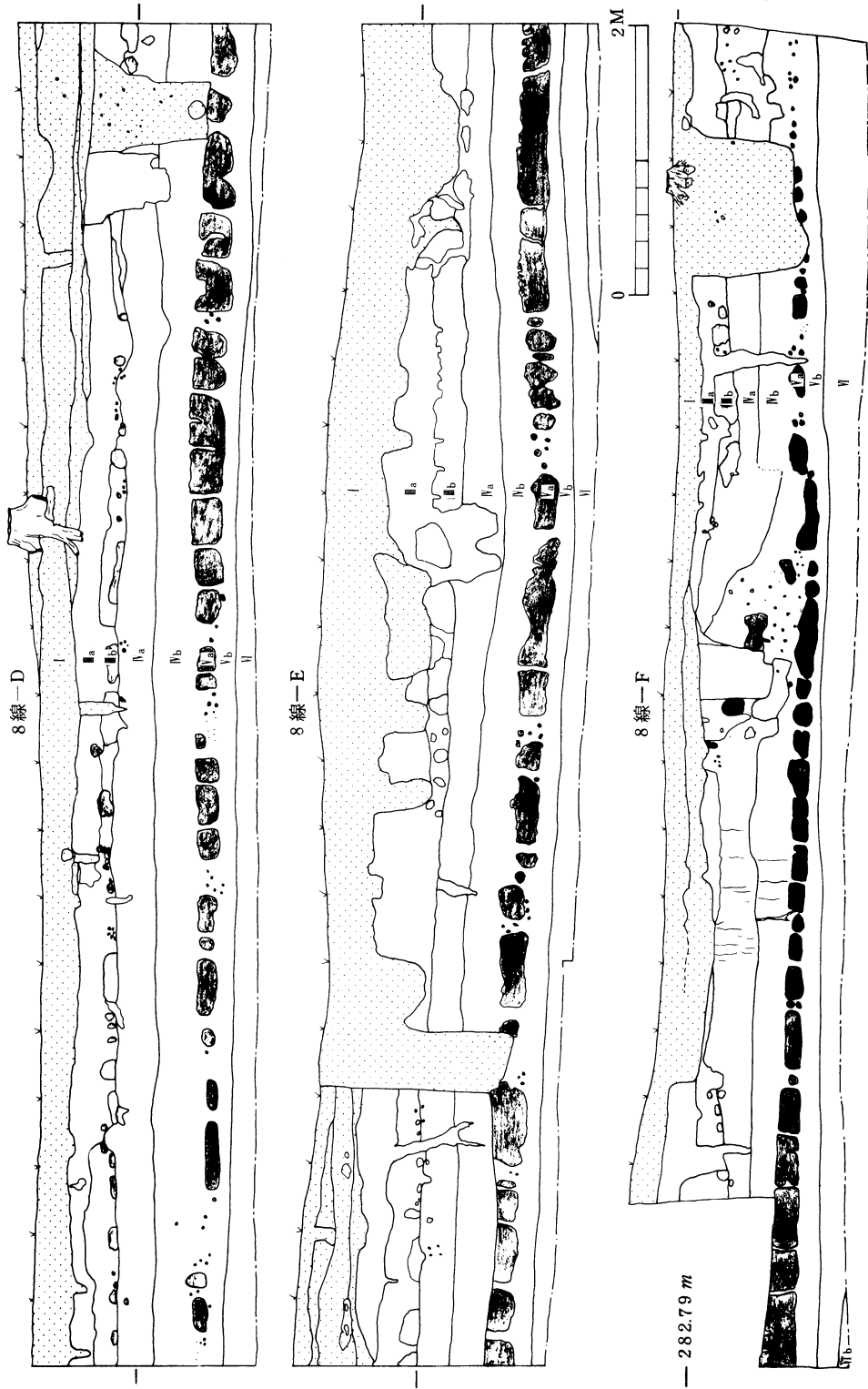
第12図 第1地点F線-4・5・6区土層断面図



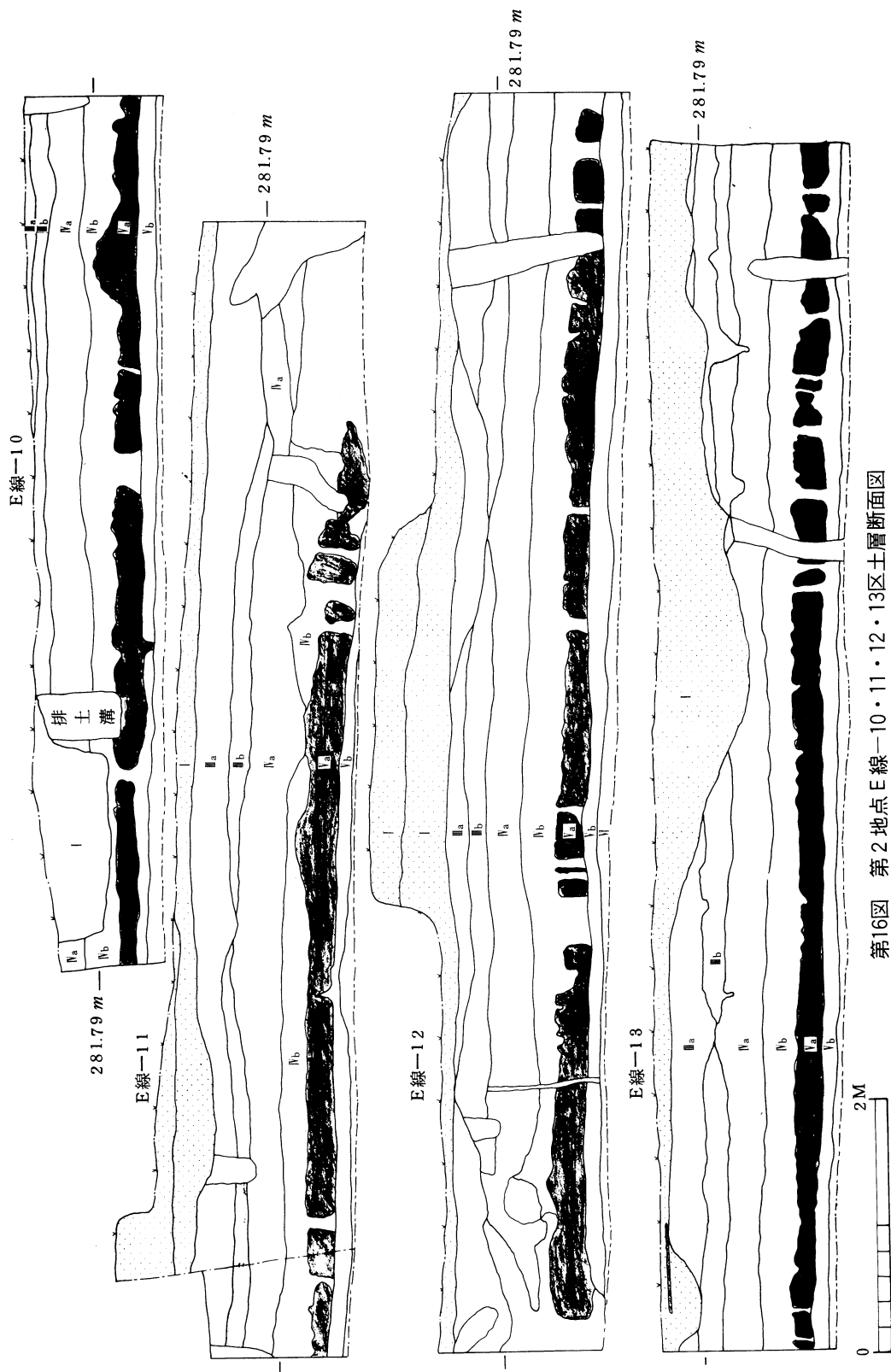
第13图 第1地点F線-7・8・9区土层断面图



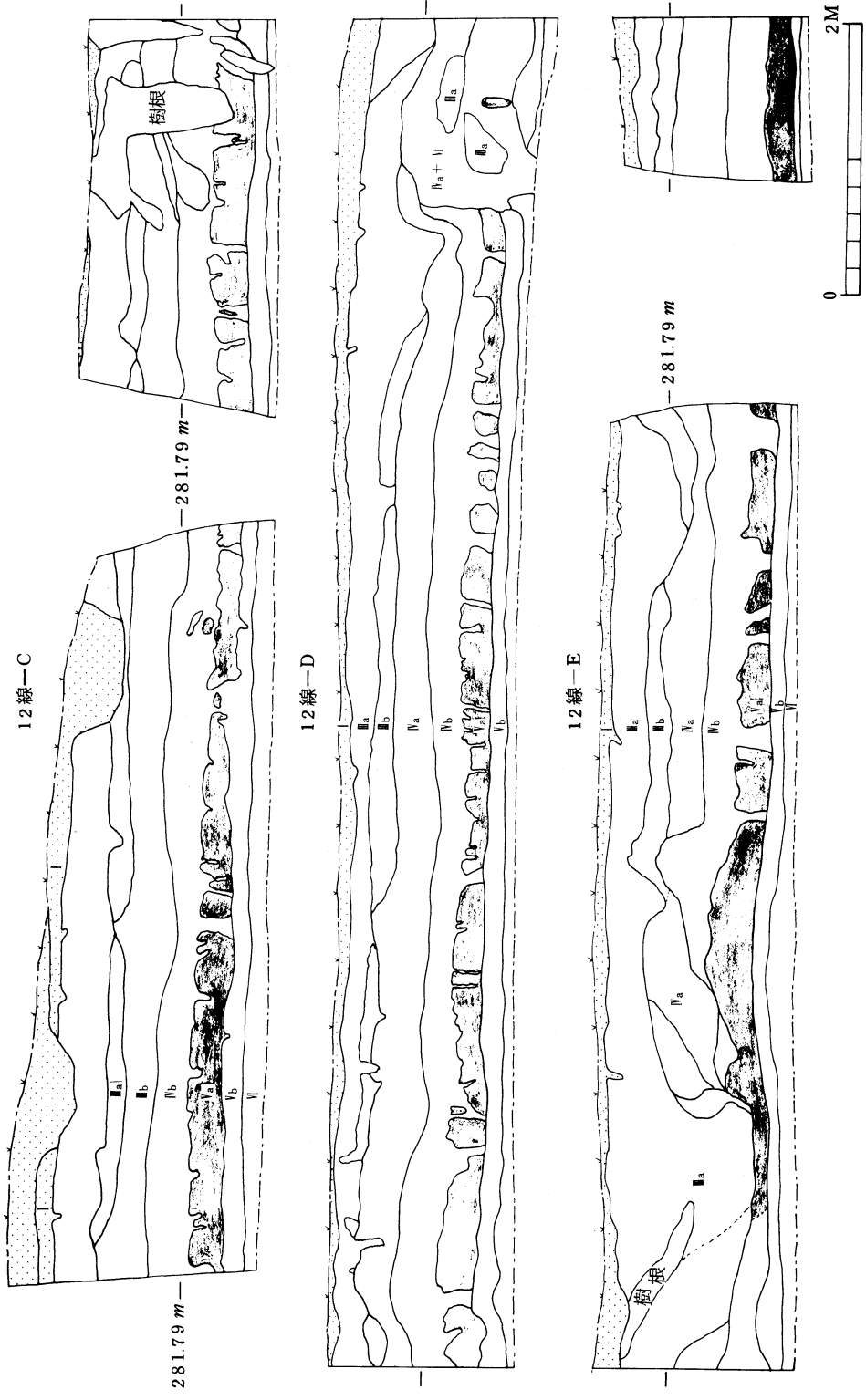
第14図 第1地点8線-B・C区土層断面図



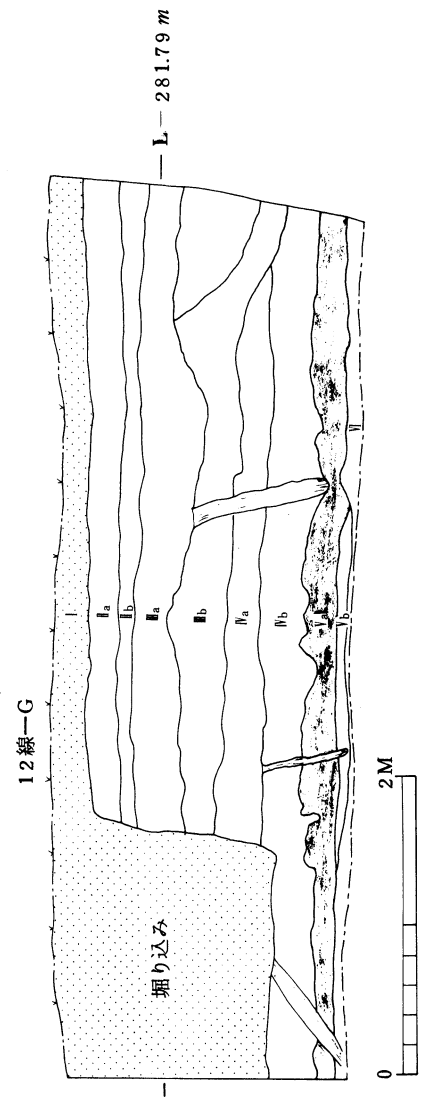
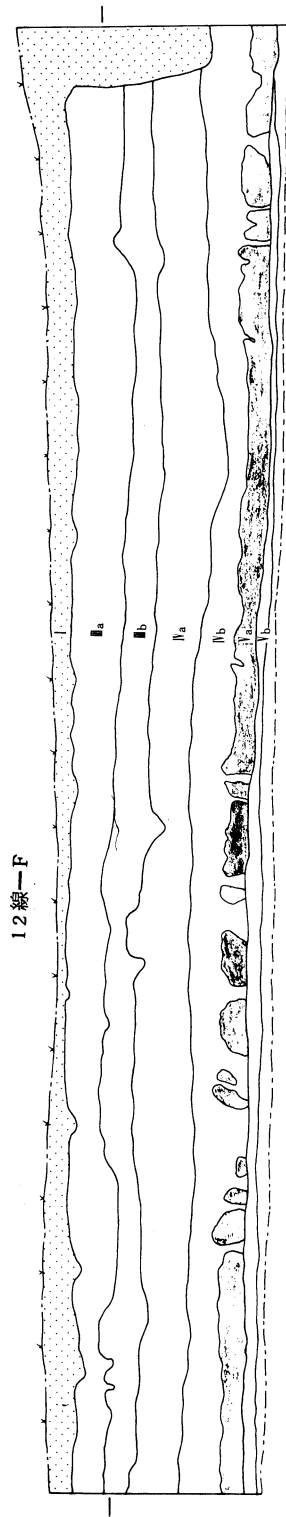
第15图 第1地点8線-D·E·F区土层断面图



第16図 第2地点E線-10・11・12・13区土層断面図



第17图 第2地点12線-C·D·E区土层断面图



第18図 第2地点12線-F・G区土層断面図

るので、そのうちの20～30cmと、県道のアスファルトないし砂利部分は、重機で除去した。

地層の残存状況は、C-14杭からG-13杭へ伸びる畑地界と同方向の広い溝によって、4 a層の上面が削られていることと、F・G-11・12区の一部に、5 a面に達する新しい深い掘り込み（コンクリートの残骸が埋没していた。）部分を除いては、全体に良好であった。また、県道部分は3 a層まで削平されていた。

上記以外の部分では、上層が厚く堆積しており、第1地点と比べて2～3層が良好に残っていた。それによって、2層下部面に多量の土師器が散布している状態を発見した。D・E・F・G-11・12区である。特にF・G-11・12区に多い。須恵器・摺鉢・瓦器質の土器等も含んでいる。さらに遺構との関係からみれば、E-10Ⅳ区からE-12Ⅳ区へ東西へ流れる溝より北方、F-10区のピット群より南、G-13杭の溝より西方と、分布範囲が限定されるようである。

包含層は、2層下部黒色土から黒褐色土（やや黄褐色を帯びる）層にある。3 a層上面にはまりこんでいる土器もみられた。

遺構は先にも簡単に述べたが、3 a層に掘り込まれた溝状の遺構と大小の落ち込み、D・E-11区、F-10区、H-10区にみられる多数のピット群が検出された。E-10Ⅳ区の溝中には、軽石を含む集石がみられ（No21）、周辺に陶磁器の破片が伴出した。

3 a層は、ほとんど遺物の出土をみなかったが、G-10区の3 a層上位に春日式土器の一括（No15）が出土した。ほかにも岩崎上層式の破片が数点出土している。

4 a層は、第1地点との関係より、どのような出土状況かが注目されたが、遺物の量が急に少くなり、平椀式土器のまとまった出土もみられなかった。しかしながら、数ヶ所に一括土器が、わりにまとまって出土した。F-10区（No16）、F-11区（No17）の山形押型文土器、H-9・10区の手向山式土器等である。

集石遺構も6基点在したが、礫が散乱して、まとまりのあるものが少ない。

4 b層には、数点出土したのみにとどまった。

5 b～6層の細石器層には、遺物の出土は認められなかった。

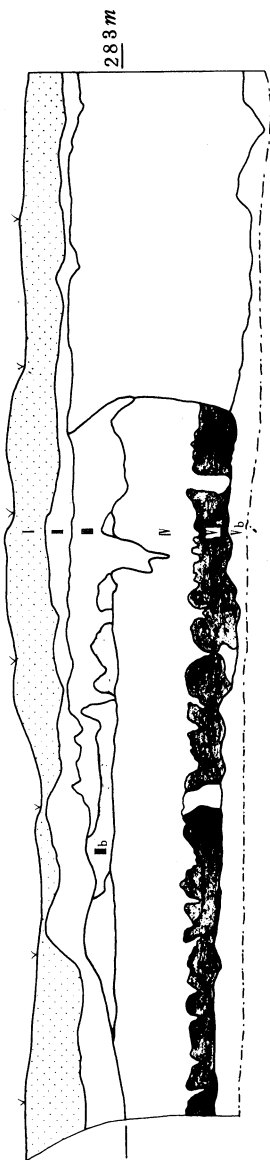
第4節 第3地点の調査（第19図～第25図）

第3地点は、14線から22線の間で、長さ80m、幅45mの地域である。STA 349+90からSTA 350+70の区間に相当する。標高は西北で284.2 m、東南端で283.2 mと1mの高低差があるが、なだらかでほぼ一面の畑地をなしている。

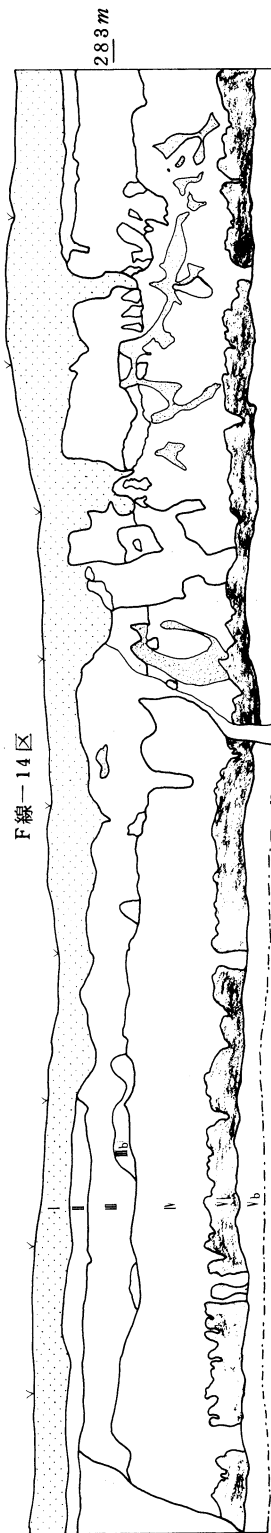
土層は表層下、正常な堆積状況を示している。

調査は、確認調査において2層に土師器の出土をみていたので、その面を全面調査し、縄文はあらためてトレンチを設けて確認することにした。その結果、土師器の散布状況は、B-18区からE-15区へ、長さ50m、幅30mのほぼ楕円形の範囲に全面にわたっていた。他区域には、ほとんど認められなかった。この範囲は、B-17・18区から西南方向の敷地外へ広がる可能性も考えられる。

F線-13区



F線-14区



F線-15区

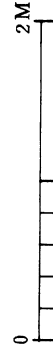


第19図 第3地点 F線-13・14・15区土層断面図

F線-16

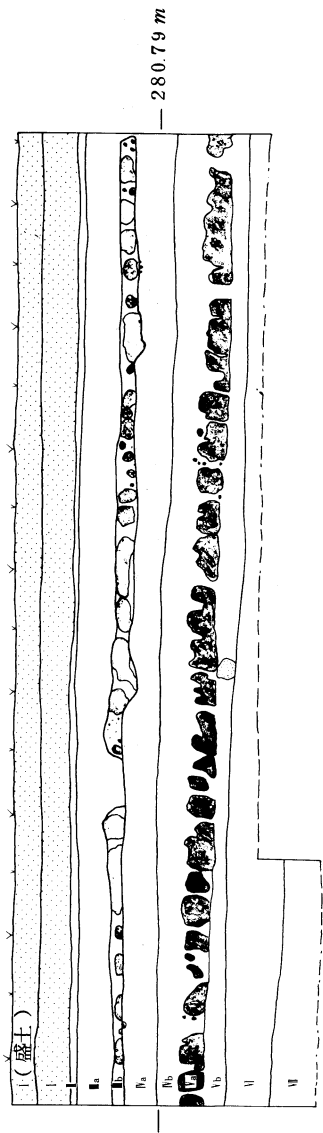


F線-17

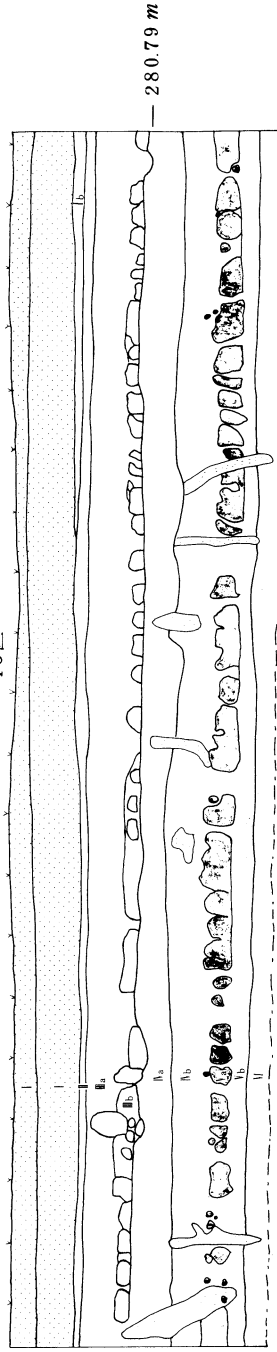


第20图 第3地点 F線-16・17区土层断面图

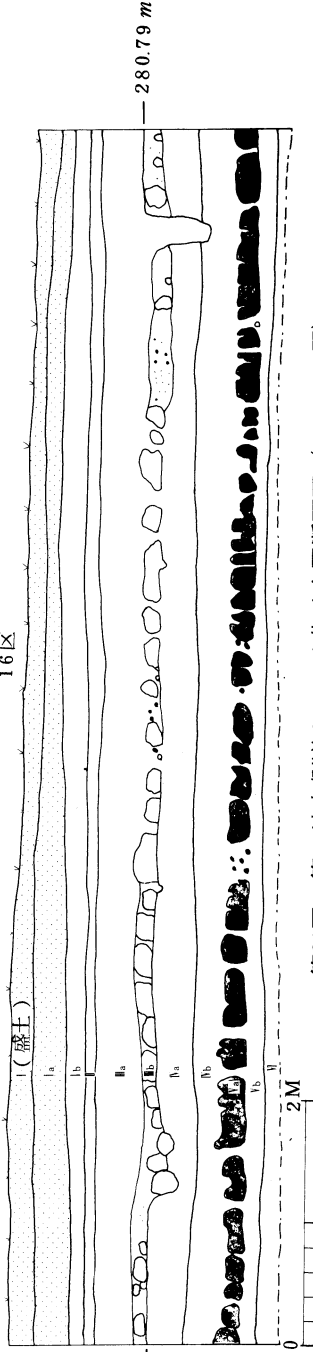
14区



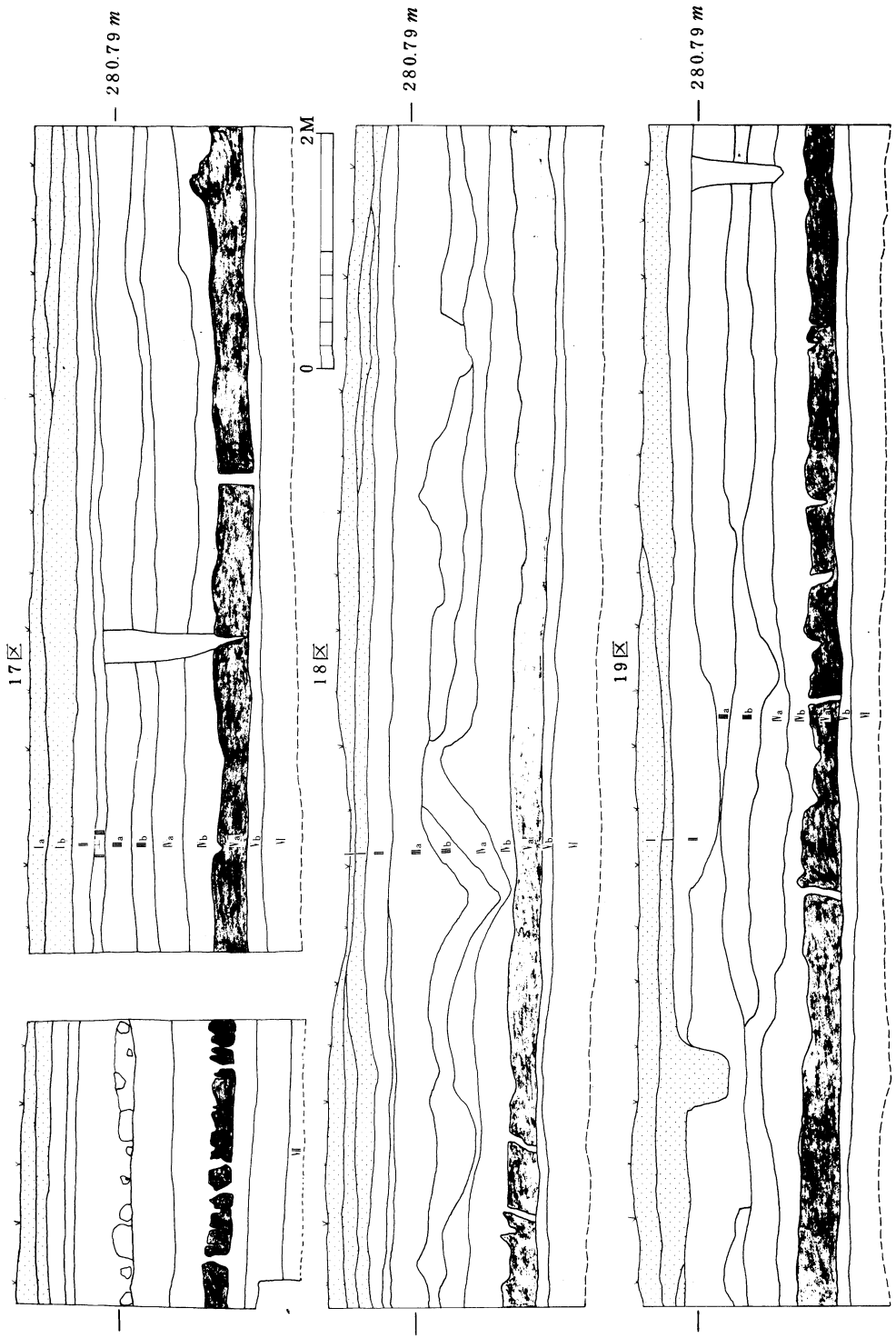
15区



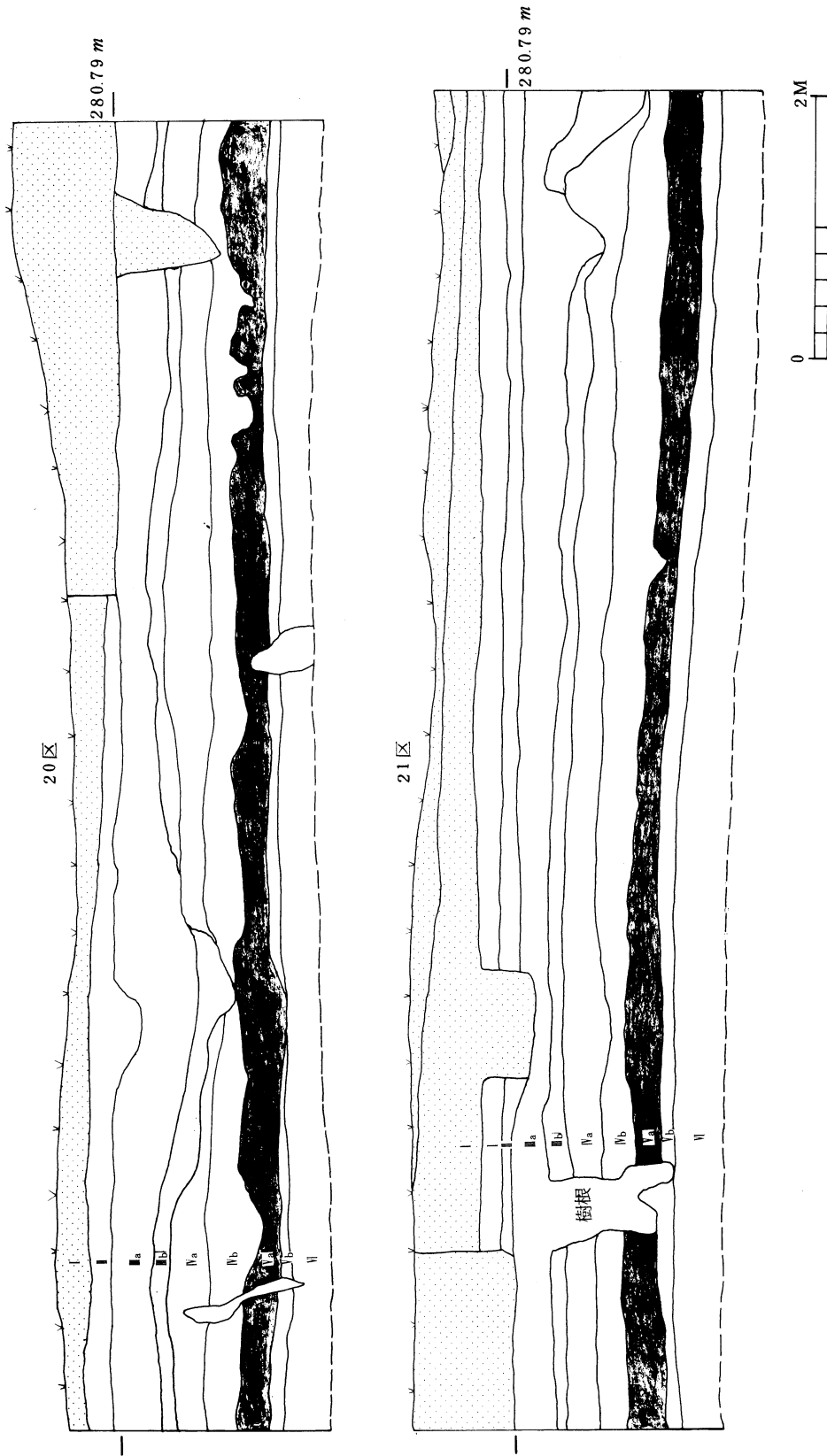
16区



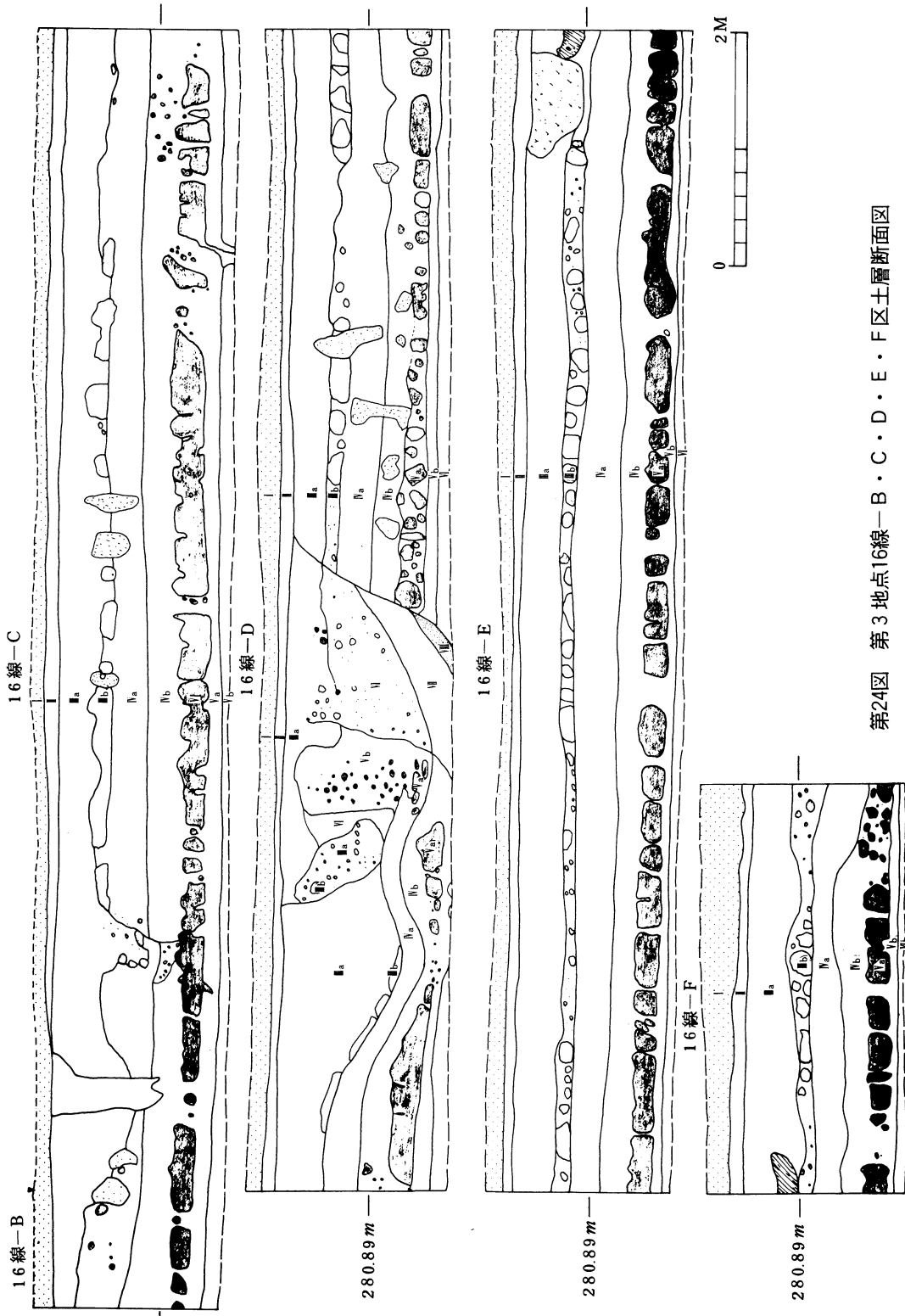
第21図 第3地点(側道トレンチ北壁土層断面図 (14・15・16区))



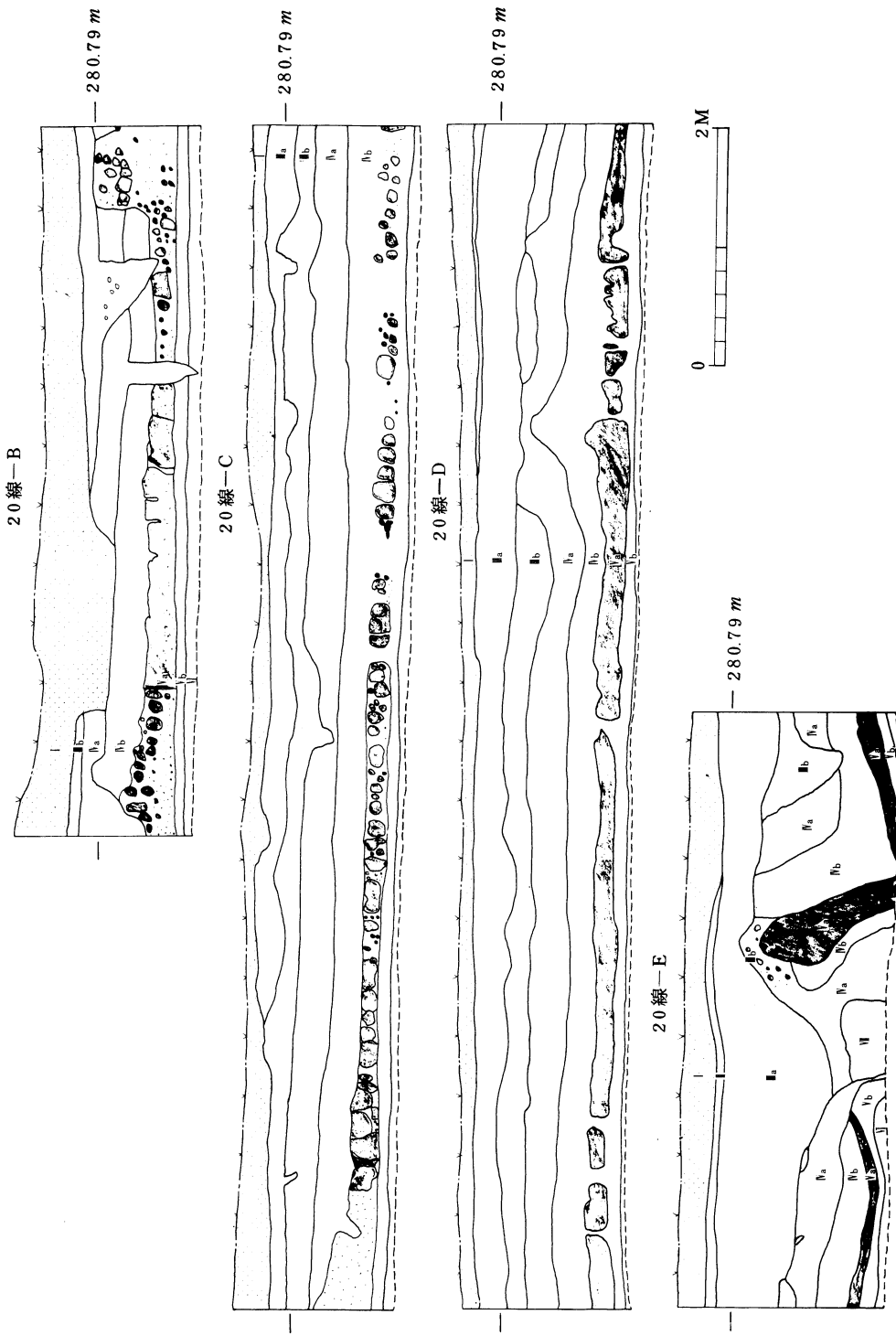
第22図 第3地点側道トレンチ北壁土層断面図 (17・18・19区)



第23図 第3地点側道トレンチ北壁土層断面図 (20・21区)



第24图 第3地点16線-B·C·D·E·F区土层断面图



第25図 第3地点20線-B・C・D・E区土層断面図

包含層は、大半が2層下であり、3 a層に入りこんでいるのは少量である。また出土遺物は甕形土器・壺形土器・皿・坏・丹塗土器・内黒土師器・瓦器・磁器なども含まれている。須恵器も数点みられた。大半は小破片となって散布しているが、C-17区の壺形土器(図版16下)のように1個体まとまって出土したものもあった。

これらに伴う遺構として、B・C-18区に6個のピットが検出されたが、性格は不明である。またF-16Ⅰ区、B-16Ⅳ区、D-18Ⅰ区にそれぞれNo8・No9・No10の3つの土壇が発見された。いずれも3 a層に掘り込まれ、内部に焼土を含んでいた。

縄文と細石器の確認を2m間隔ごとに、2m巾の横位のトレンチで行なった。その結果、E-14区(No28)、F-14区(No29)に集石遺構を検出した。No28はわりにまとまって、4 b上に位置している。他にはC-15区に礫の散乱をみるのみで、遺物の出土は認められなかった。細石器の遺物もみられない。

第5節 第4地点の調査(第26図～第31図)

第4地点は、第1地点の東南東約120 mの地点で、隣接地点は第3地点・第5地点となる。石峰遺跡のグリッドに従って呼称すれば、幅はA～F区、長さは22～23区の約3,800㎡である。

この区域は昭和50年10月～12月の試掘調査の結果、第2層(黒色やや粘土質)中に土師器片、木炭が確認された区域であった。

このため調査は表層より順次掘り下げていくことにし、第3 a層(橙色軟質土)で止めて、遺構等の詳細な確認を行なうことになった。

調査の結果、2層中の土器の包含は若干認められたが、拡大や密な分布を示すこともなく、しかも、この時期の遺構等も確認することができなかった。

3 a層以下についても、綿密な調査を念頭においたが、この区域の隣接区である第5地点において、良好な土器・遺構等の出土をみなかったために、調査方法を2m間隔のトレンチとし、万全を期することにし、土器片が出土した場合は、その区域を拡大し掘り下げるといった調査方法をとった。

この方法は第1地点の6層(茶褐色粘質土)に細石器が確認されていたため、この層まで掘り下げ細石器存在の有無についての確認にも応用された。

調査期間は昭和52年11月9日～12月21日までである。

<土層>

土層は石峰遺跡の標準土層区分、呼称によるがD線22～29区の縦線の観察によれば、表層でわずかに5 cm内外の傾斜しかもたない平坦面となる。6層(茶褐色粘質土)では、その傾斜は10cm程でやはり安定した層序を示す。

以上のようにこの区の層序はほぼ水平をとるが、5 a層(黄色パミス土)にいたっては、ブロック状の堆積がくずれその間隔は27区にいたって粗くなり、28区より29区にかけては消滅してしまう状態である。

<土器>

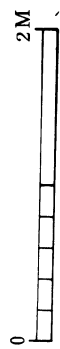
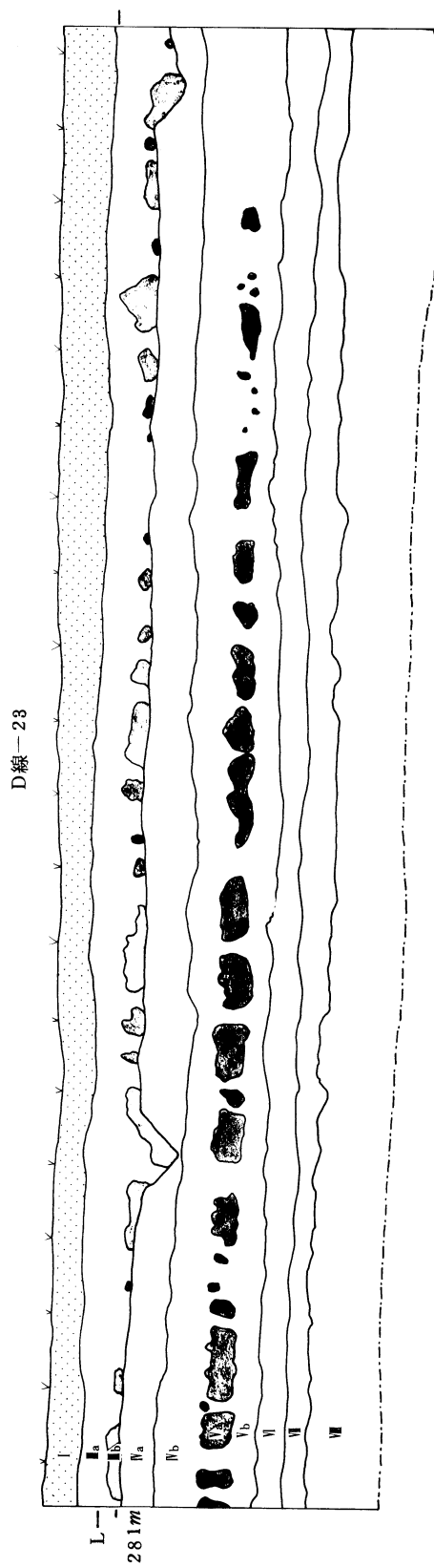
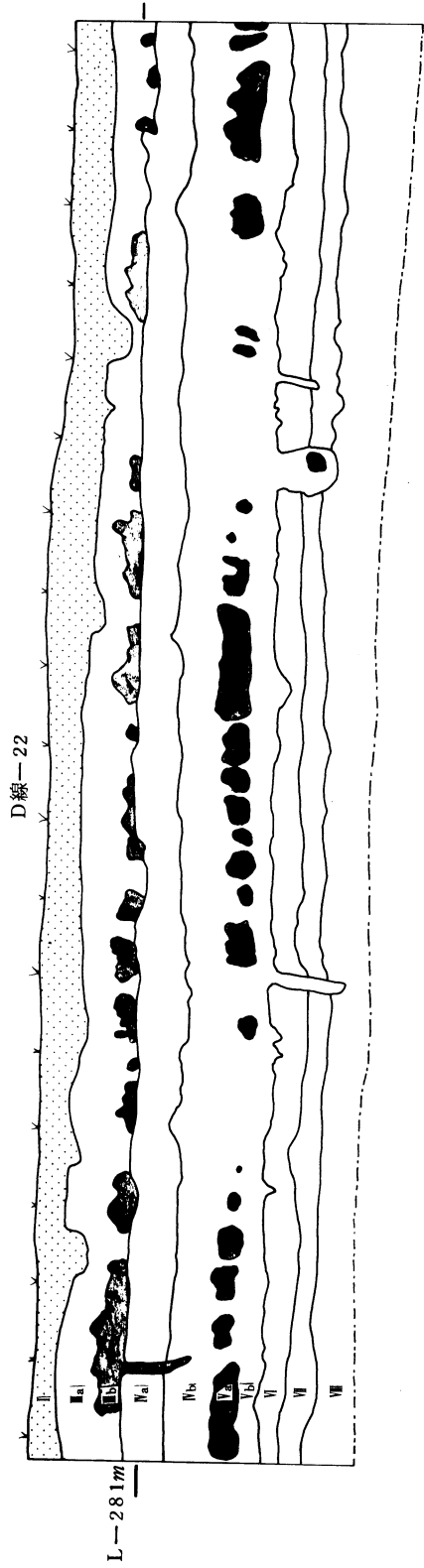
土器は表層，2層中に現代陶器，近世陶器片のほか，土師器，弥生式土器片が若干出土したほか，B-24区4b層中より押型（楕円）文土器が出土した。

<遺構>

第4地点の遺構は表層を掘り下げ精査した段階で，C-27区を中心に6基の近世墓が北西から東南にかけて並列するかたちで出土し，一部に木製数珠玉，寛永通宝，人骨片が出土した。

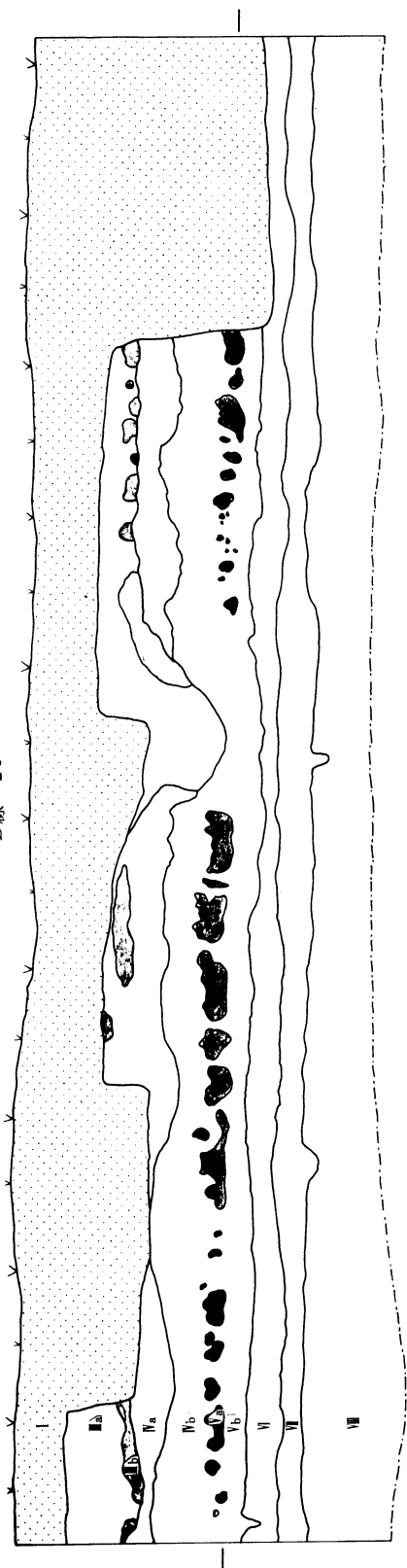
3層には遺構の確認はできなかったが，4層に長径2.2 m，短径1.3 m，及び0.8 mの土壇が検出された。この土壇の上面より床面にかけて安山岩の角礫，及び押型文土器片が伴出した。地点はB-23区である。

集石はC-24区，D-22区の4a～4b層中に確認された。

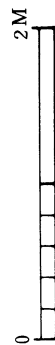
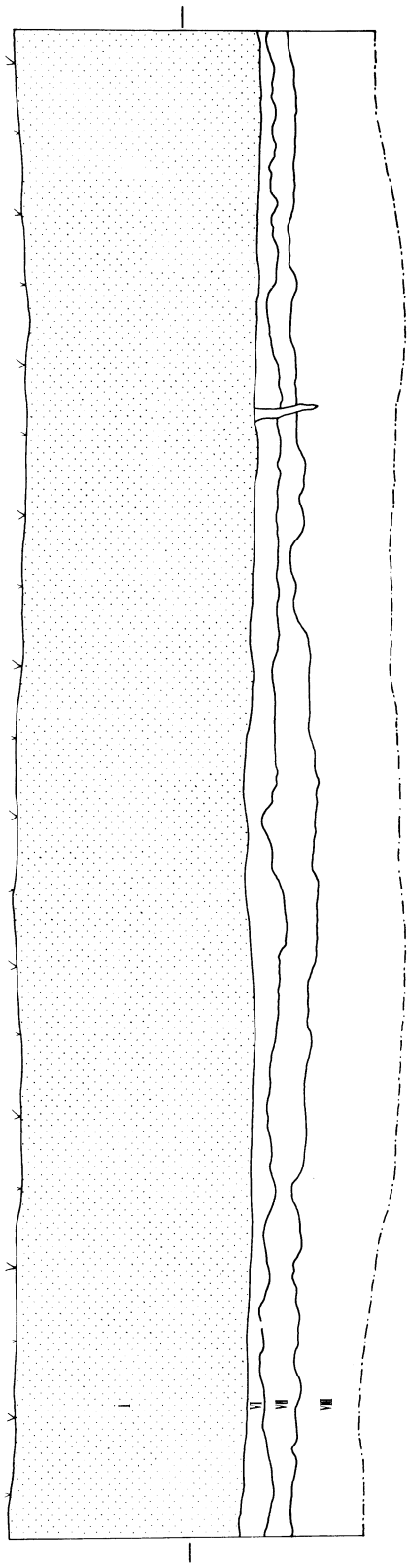


第26図 第4地点D線-22・23区土層断面図

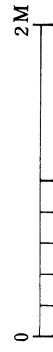
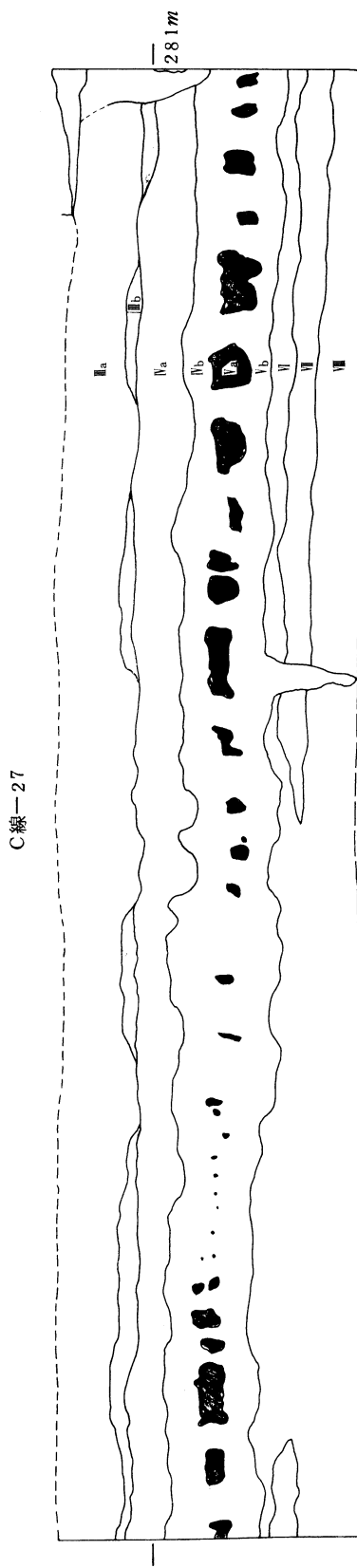
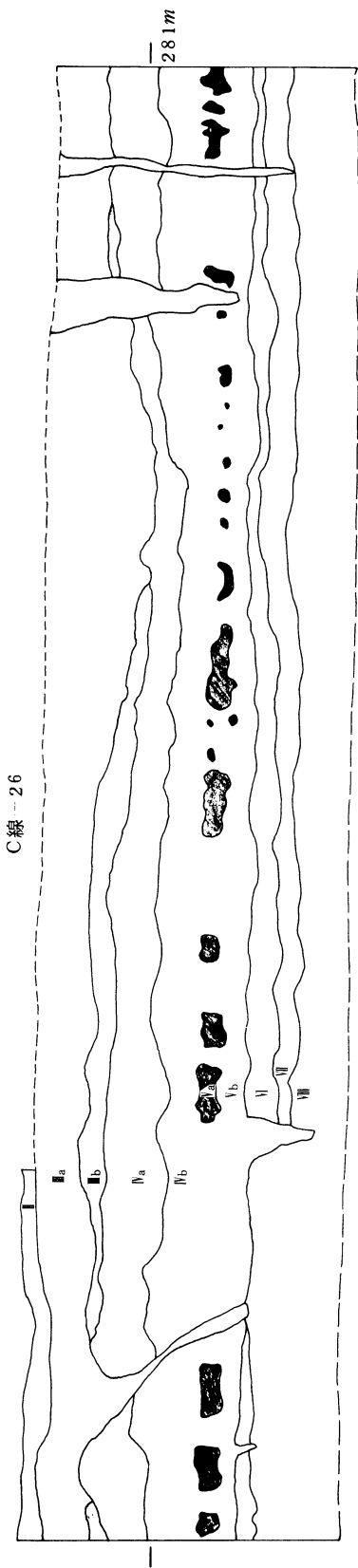
D線-24



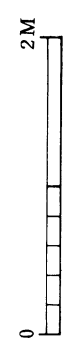
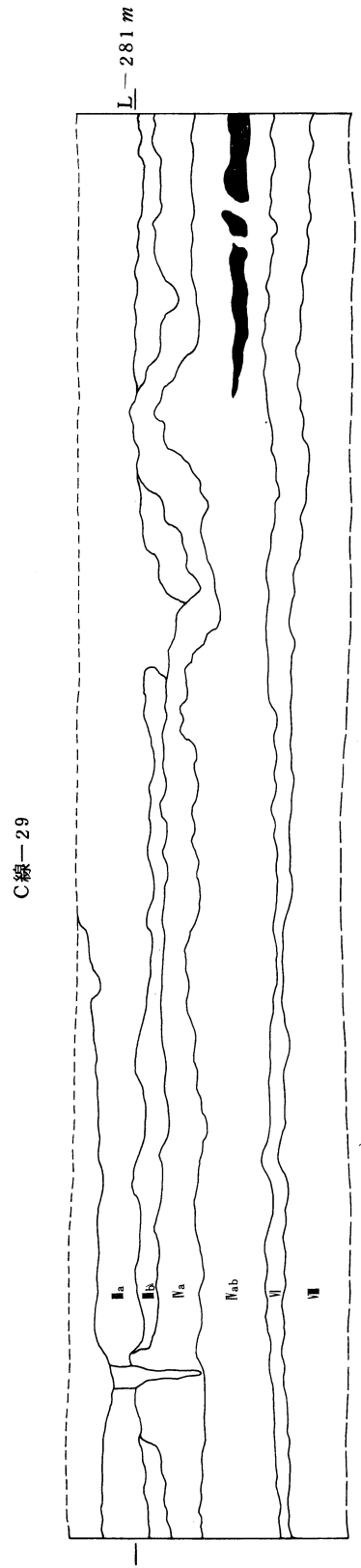
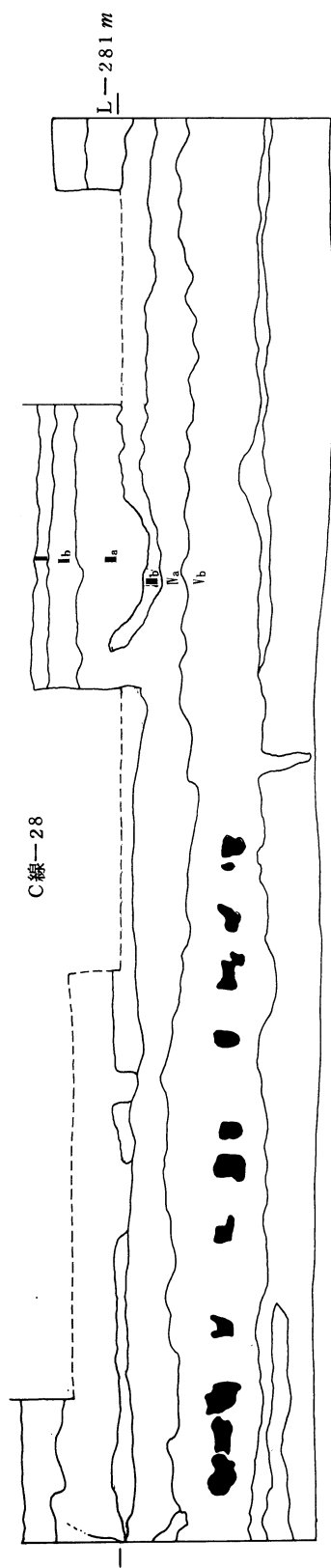
D線-25



第27図 第4地点D線-24・25区土層断面図

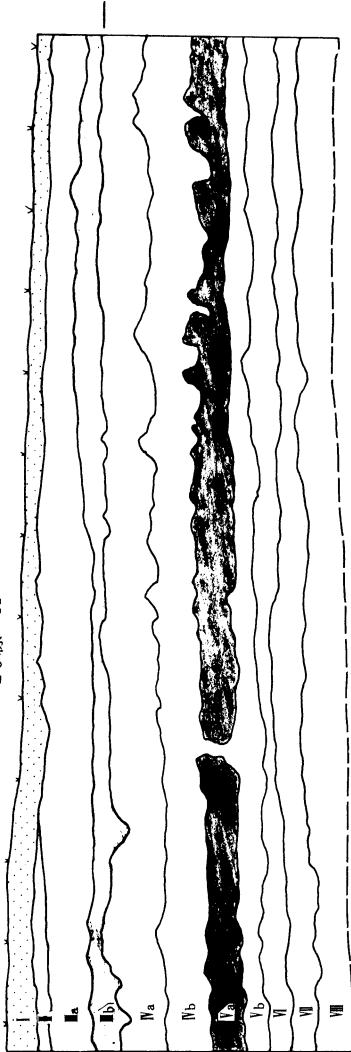


第28図 第4地点C線-26・27区土層断面図

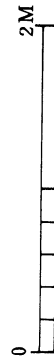
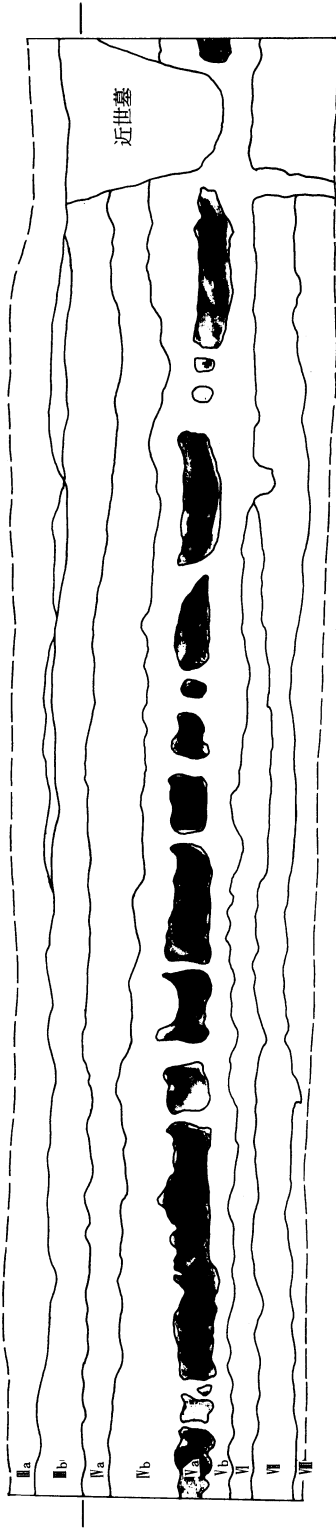


第29図 第4地点C線-28・29区土層断面図

26線-A

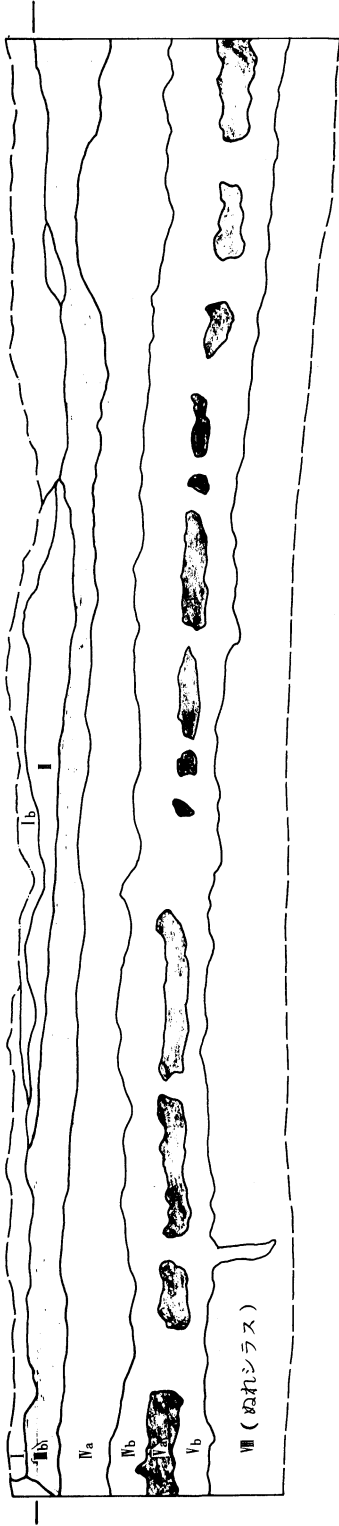


26線-B

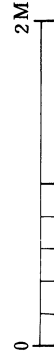
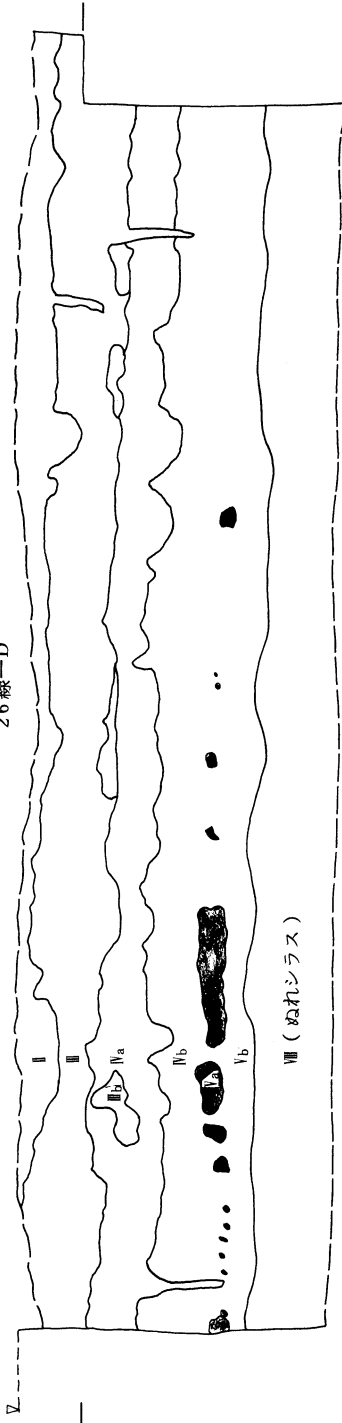


第30图 第4地点26線-A・B区土层断面图

26線-C



26線-D



第31図 第4地点26線-C・D区土層断面図

第6節 第5地点の調査

第5地点は第1地点の東南東約160 mの地点で、この地点は石峰遺跡の末尾にあたり、遺跡の台地はほどなく小谷へつながる。

設定したグリッドでいえば幅はD'～E区、縦は30～40区にいたる区域で面積は約4,300 m²である。

この区域も昭和50年10月～12月の試掘調査の結果、2層（黒色やや粘土質）及び3 a層（橙色軟質土）直上に、木炭・土師器・弥生式土器片が確認されていたため、全区について表層より順次掘り下げて調査を行なった。

調査の結果、2層中及び3層直上に弥生式土器片が検出された。特にB'～A'－36・37区に集中して出土した。

3層以下についても鋭意調査をつづけた結果、A'－30区3層中に土器の集中をみた。この3層より下位の層中には、ほとんどみるべき土器は出土しなかったため、2 m巾のトレンチを2 m巾に設定し順次掘り下げ、7層（黄褐色粘質土）のシラス層まで達した。

調査期間は、昭和52年3月15日より11月8日までである。

<土層>

土層は石峰遺跡の標準土層区分および呼称による。34線－B'～C区の土層断面によれば北西より北東にかけ表層ではほぼ水平であるが、以下の6層間でみるとB'区とC区では約60cmほどB区が厚く堆積し、5 a層（黄白色パミス土）では、C区にいくにしたがってブロック状の堆積は希薄となる。A'－32～36区についても各層は略水平となるが、5 a層は3区で10～50cmのきれ間のない堆積を示すものの、34～36区にいくに従ってブロック状、あるいはその間隔が広がる状況を示す。

<土器>

土器はB'、A'－36・37区の2層及び3層直上にかけ成川式土器の集中をみるほか、A'－30区3層中に縄文式土器が検出された。

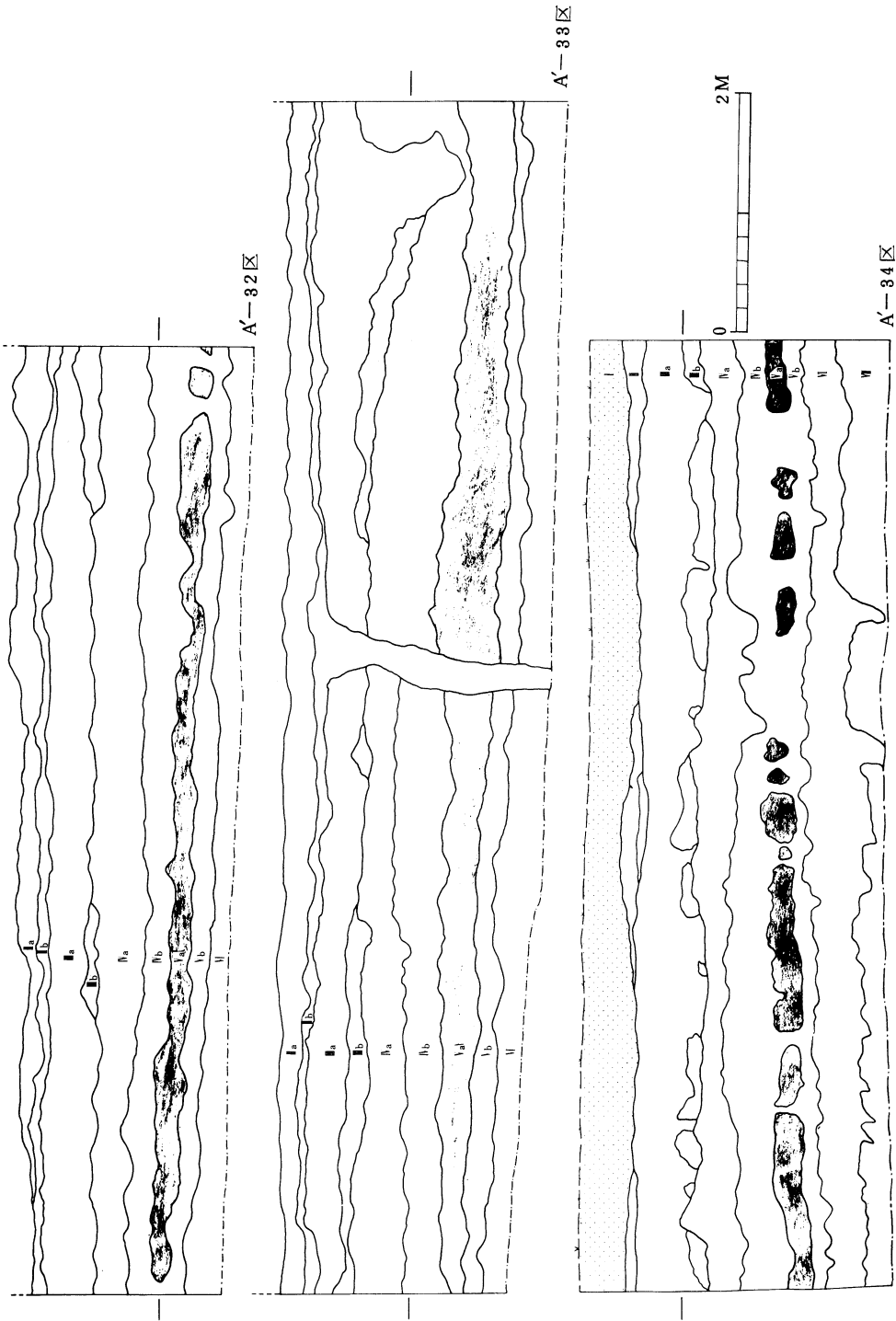
このほかの層中には土器の出土はみられなかった。

<遺構>

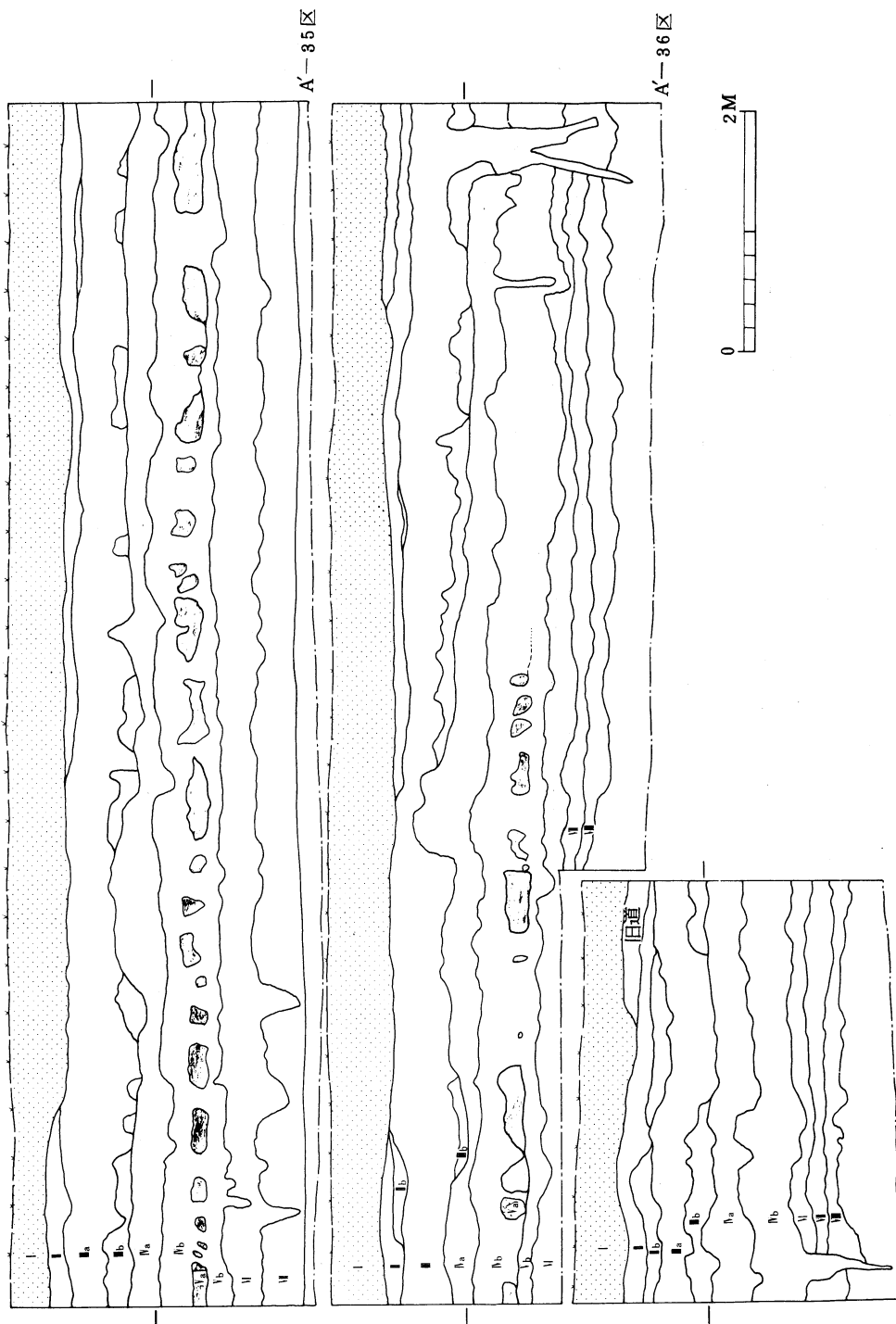
第5地点の遺構は3層を掘り込むかたちで幅約1 m、深さ約5 cm～20 cm程の溝状遺構が検出されたが、これらは畑境と一致するものもあり、2層時の遺構とは認めがたいものが多かった。

B－33区には隅丸円形の掘り込みと、東南及び南西隅に7個のピットをもつ遺構が3層に掘り込まれていた。

縄文時代では4層において、A－34区、B－34区に集石と思われる角礫が散在していたが、2×2 m範囲に数個から十数個といった工合の出土状況で、他地点にみられるように良好な集石群は検出されなかった。

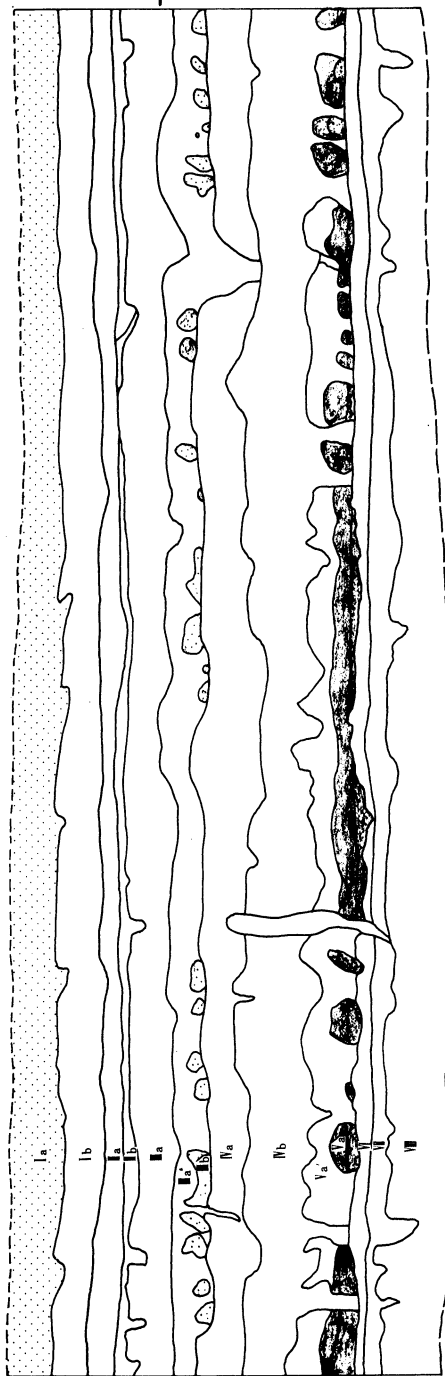


第32图 第5地点A'線-32·33·34区土層断面图

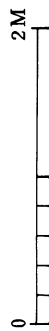
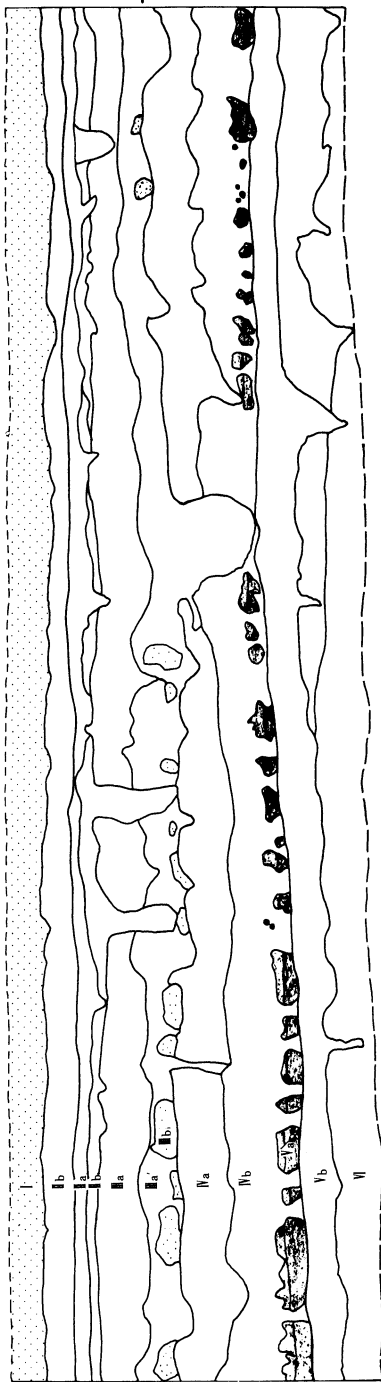


第33图 第5地点A'線-35·36·37区土层断面图

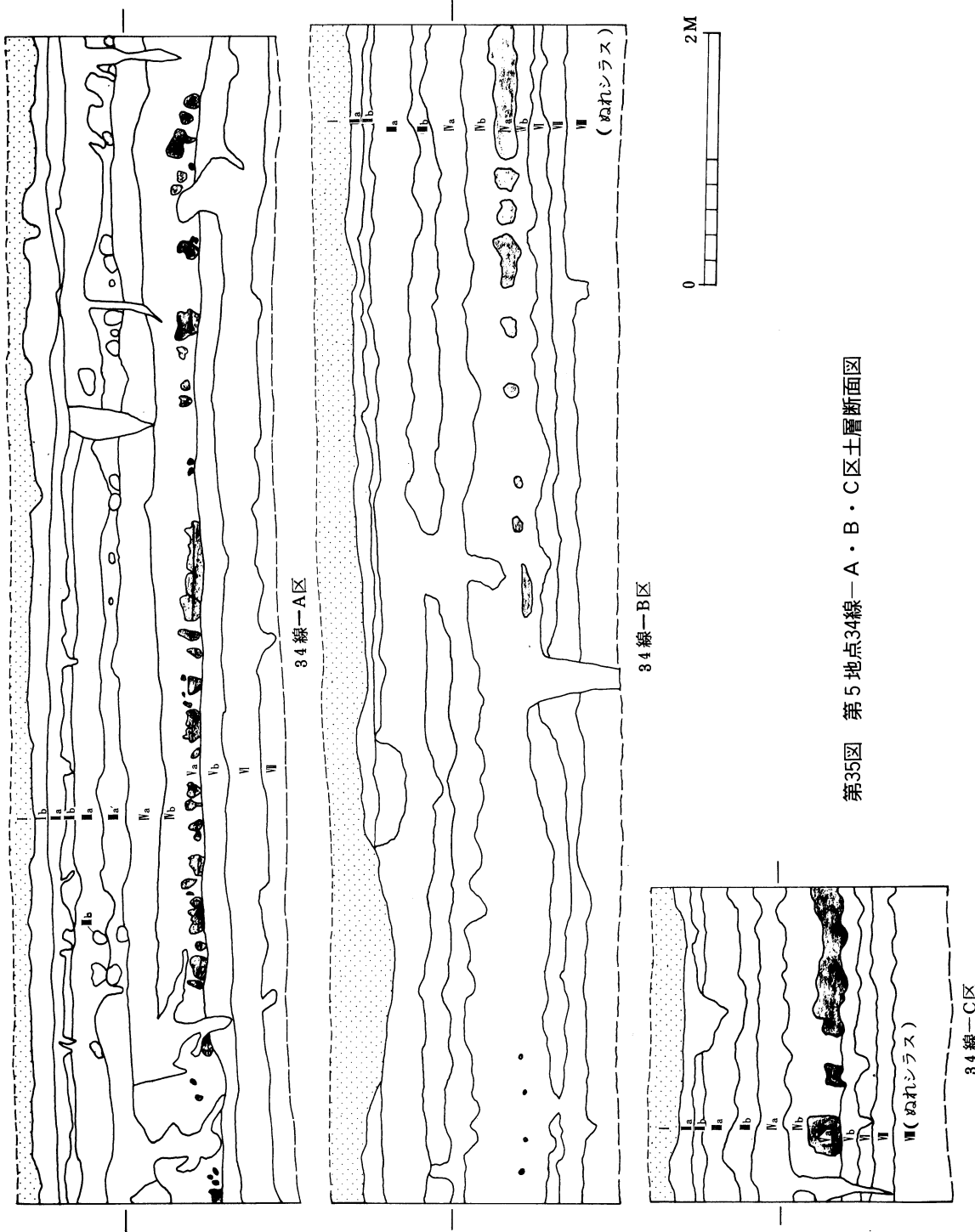
34線-B区



34線-B区



第34図 第5地点34線-B'・A'区土層断面図



第35図 第5地点34線-A・B・C区土層断面図

第6章 遺構

第1節 縄文時代

1 縄文土器の全体分布

第1地点から第5地点まで、遺跡の範囲は長さ約350 m余に及んでいるが、縄文土器の広がりには、かなりの濃淡がみられ、層によっても異なっているため、主に土器の出土した第1・第2地点を中心に説明を述べたい。

(1) 4 b層出土の縄文土器の分布 (第36図)

第1地点D・E-8区を濃密な分布域として、崖端より全面にまばらな広がりを示している。第2地点へかけては少量みられる程度で、13区からは全く出土はみられない。第1地点からおよそ150 m離れたB-24区で、2個体分の楕円形押型文土器が孤立して出土している。第1地点も土器片の量に比較して、土器の個数は限られていた。D-8区の連点鋸歯文土器・石坂式土器・E-8・9区の燃糸文土器等である。

(2) 4 a層出土の縄文土器の分布 (第37図)

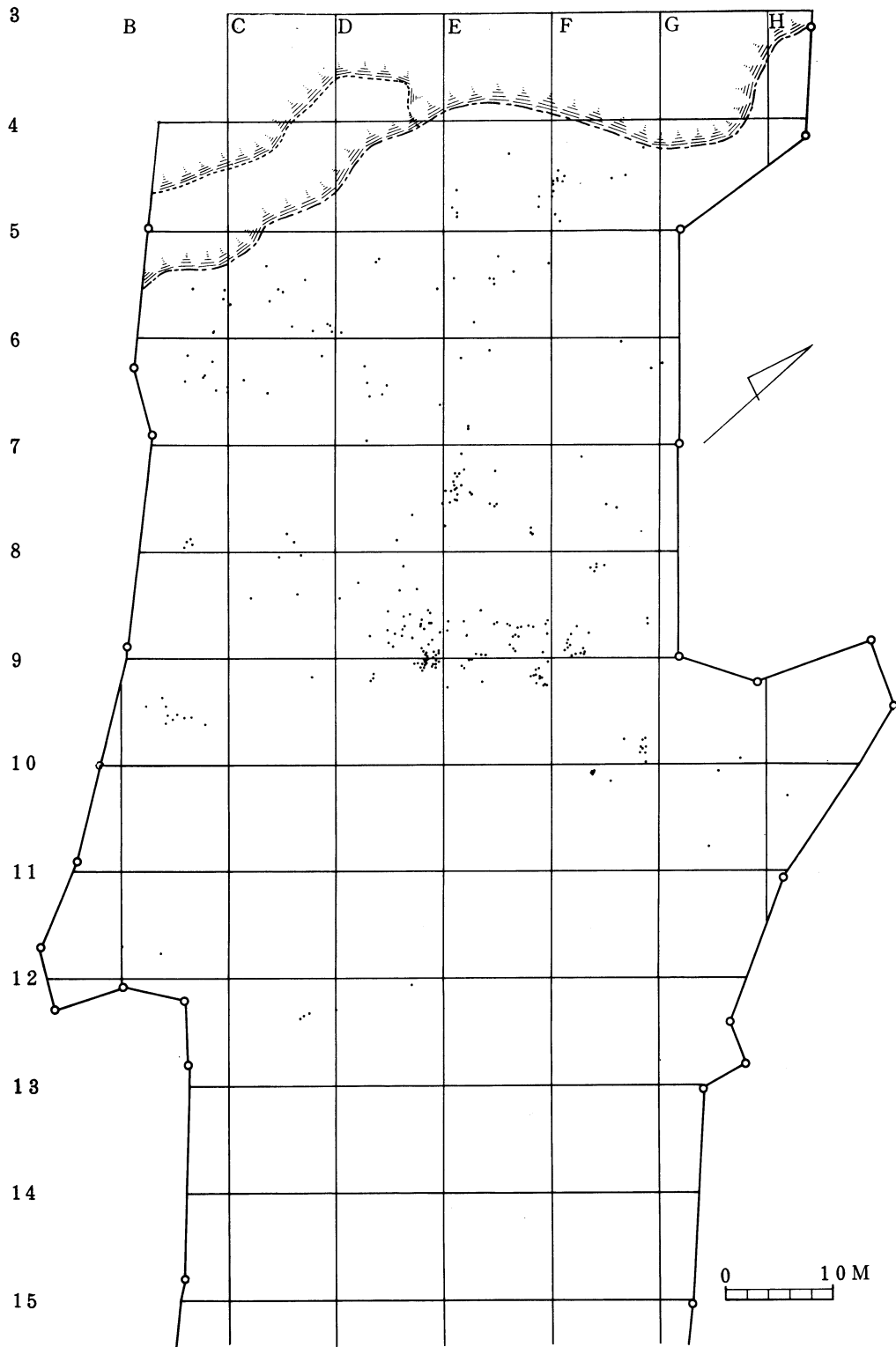
4 a層では、土器の出土量が急に増加する。特に平椀式土器の一括土器の分布がB-5区、B-9区、C-5区、C-6区、D-6区などを中心にして、それぞれみられ、他にE-8区に楕円形押型文土器の完形、D-6区に菱形押型文土器の一括、F・G-6区に円筒形条痕文土器の一括、E・F-4区に手向山式土器の一括、B-3区に塞ノ神式土器の一括、C-5区に塞ノ神式土器の一括、E-7区に凸帯燃糸文土器の一括、E-4区に変形燃糸文土器等がみられる。主に第1地点に限られており、しかも西方崖端部へ多く集中し、東北方向へ少なくなる状況がみられる。

第2地点では、さらに密度が粗となり、遺物も手向山式土器や山形押型文土器など1個体分が出土したのみで、他は少ない。第1地点との空間は、旧道掘り下げの際消滅したものとみられる。第3～第5地点では、ほとんどみることができない。

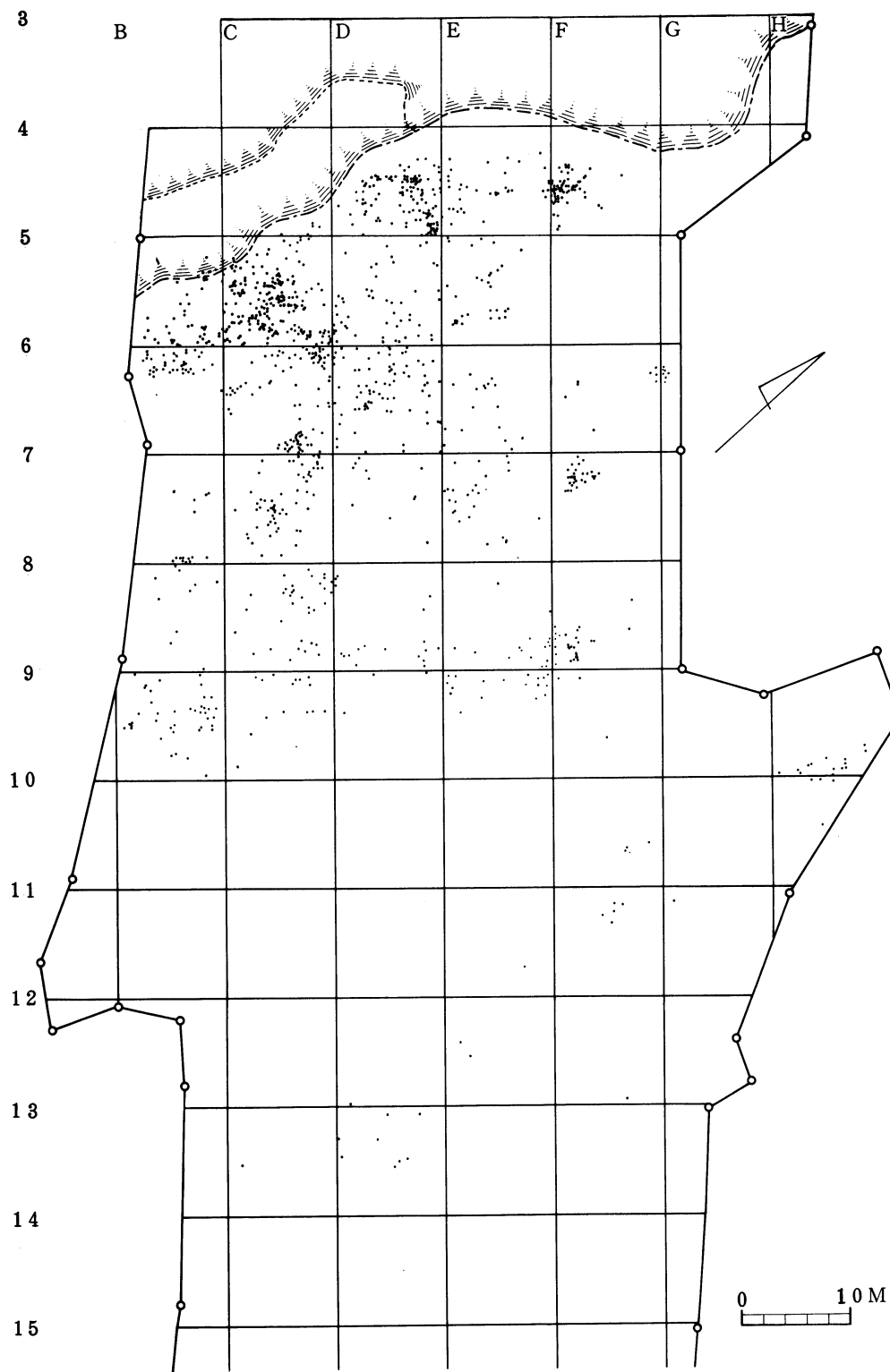
(3) 3 a層出土の縄文式土器の分布 (第38図)

3 a層内出土の土器の量は、4 a層に比べて激減する。第1・第2地点においても、数ヶ所に同一個体片がそれぞれまとまって出土したのみであった。D・E-4区に深浦式土器一括、F-8区深浦式土器(一部復元)、G-10区に春日式土器一括、D・E-5区に晩期土器等である。その他、曾畑式・阿高式・南福寺並行・岩崎上層式・草野式等の土器が少量出土した。第3～第5地点は、わずかに点々と痕跡を残すのみである。A'-30区に轟式土器が11点出土している。

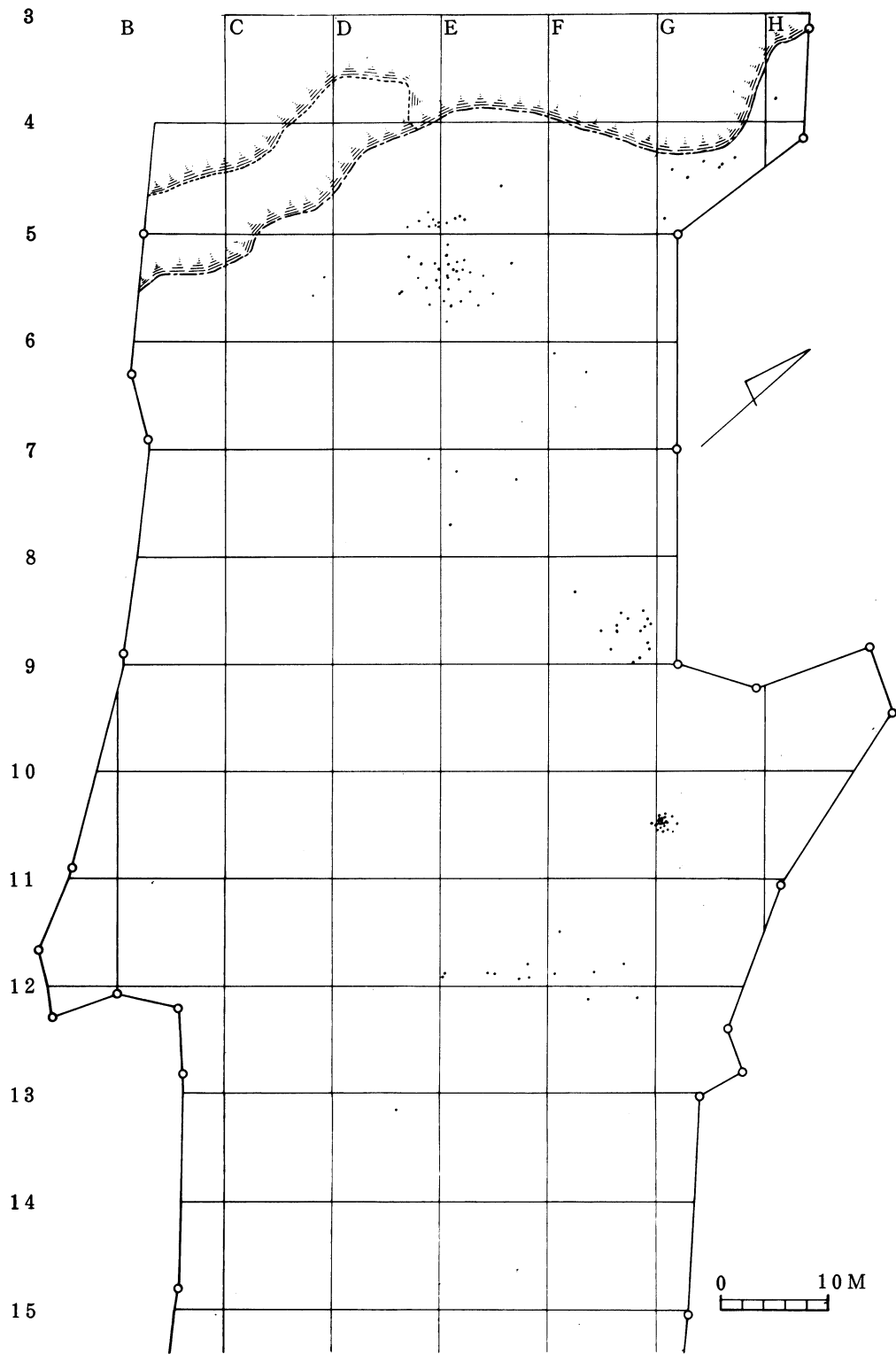
以上の状況を見ると、この調査地域内においては、縄文時代はまず4 b層の早い時期に、台地縁辺部(第1地点)に生活の跡を示したことがうかがわれ、さらに4 b層平椀式土器の時期



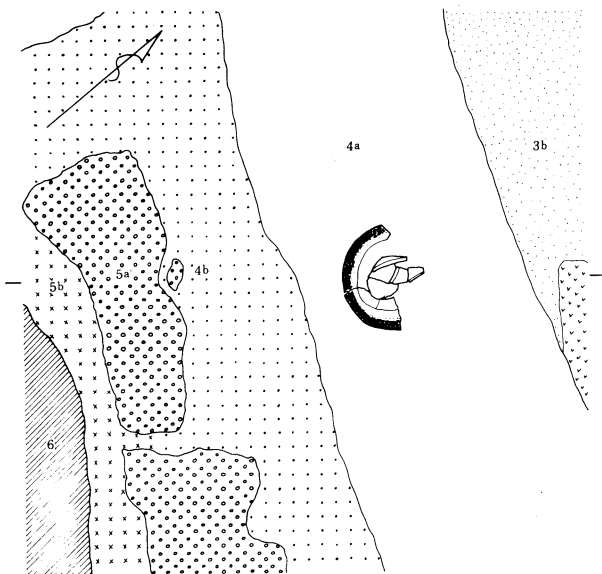
第36図 第1・2地点縄文土器出土分布図（4b層）



第37図 第1・2地点縄文土器出土分布図（4 a層）



第38図 第1・2地点縄文土器出土分布図（3 a層）

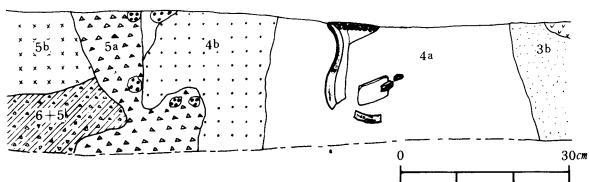


となって、生活の場として最も良く利用されたことを示している。そして3 a層、アカホヤ火山灰は堆積とともに急激に人間の活動は逼塞し、活動範囲は限少したものと考えられ、生活の痕跡は点としてしか残されていない。本遺跡において、次の活動をむかえるのは、土師式土器の時代をまたねばならない。

2 土器の出土状況

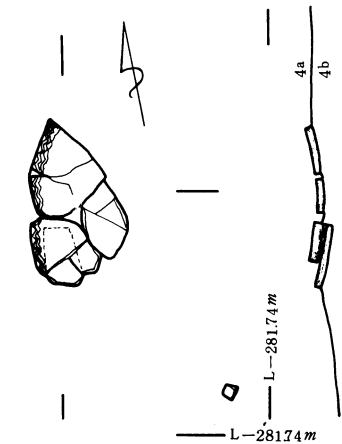
全体的な出土状況については前述した。個々の出土の状況については、まとまったもので、図化したものの中から主要なものを取りあげ説明を加えたい。

- (1) 楕円形押型文土器 No10
(第39図・図版7上)



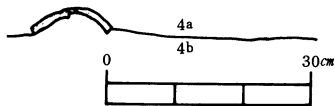
第39図 第1地点楕円形押型文土器出土状況 (E-8 II-4 a下) No10

第1地点、E・8 II区の10号



局部断層 (第8図) は、かなり大きなもので、その影響はシラス層まで及んでいる。ほぼ90°地点が横転し、層が縦位になっていた。その中の4 a層に口縁部を上にし、直立して出土した。東北方向の約半分が欠損しているが、他は口縁部から底部まで残存している。地層が横転する前は、もともと横だおしの状態であり、地層の変動と共に移動しそのまま立位となったものと考えられる。4 b層まで7~10cmの間があり、この面がひとつの生活面と推定できる。破片は若干不足している。

- (2) 山形押型文土器 No16 (第40図)



第40図 第2地点山形押型文土器出土状況 (F-10 IV-4 a~4 b上) No16

第2地点、F-10 IV区に出土した。口縁部の大片が裏面を上にし、それと重なって表面を上にした破片が1点出土している。4 b最上面に位置しているが、接合する他の土器片は周辺にあつて、4 a層・

3 a層に含まれるものもあった。

(3) 平椀式土器 No 5 (第41図・図版5上)

第1地点, D-6Ⅳ区を中心に出土した。破片はB・C-5区, C・E-6区と5グリッドに広がっており, 約110片を数えることができる。散乱状態である。図は, D-6Ⅳ区に出土したものの一部で, 口縁部が集中していたところである。層は4 a中~4 a下にあり, 4 b層から8~10cm上に多く分布している。No10の押型文土器と同じレベルであり, 平椀式土器の時期の生活面としてとらえることが可能である。同一個体の破片で近接していても, 他より13cmも上位に位置するものもみられる。

(4) 平椀式土器 No12 (第42図・図版6)

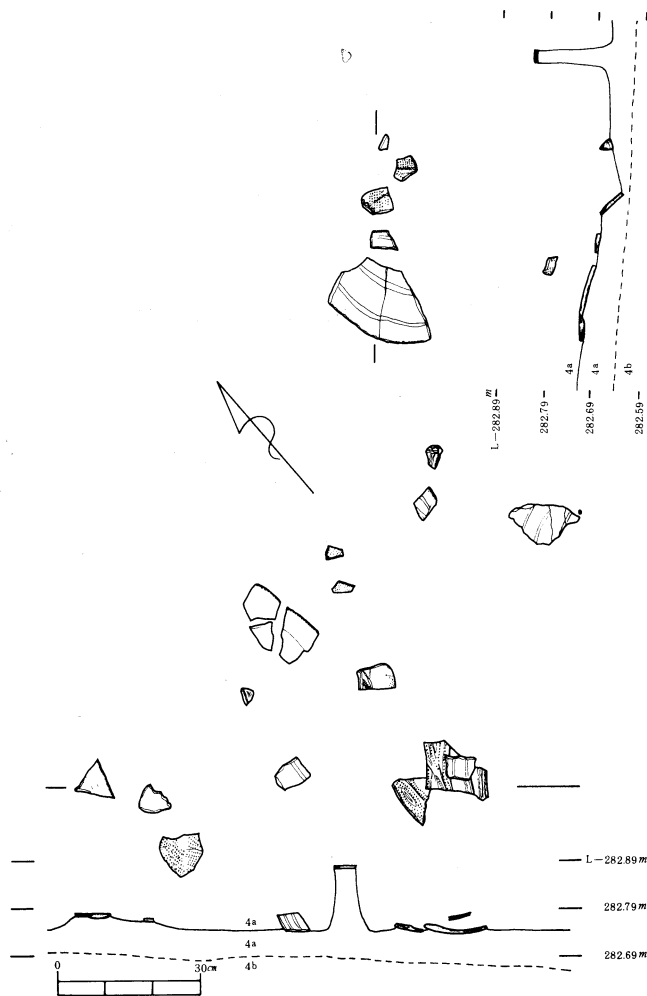
第1地点, B-9Ⅳ区に一括まとまって出土した。ほぼ1m四方内に散布が限られており, 総数52片を数える。復元された平椀式土器の中では最も小さいが, よく整った優品である。4 a層下位を主な包含層とするが, 4 b最上部に位置するものもみられる。また, 他より10~15cm上位に浮いている破片も数点みられた。No 5土器に比較すると層はや、下位でb層に近い。

(5) 春日式土器 No15

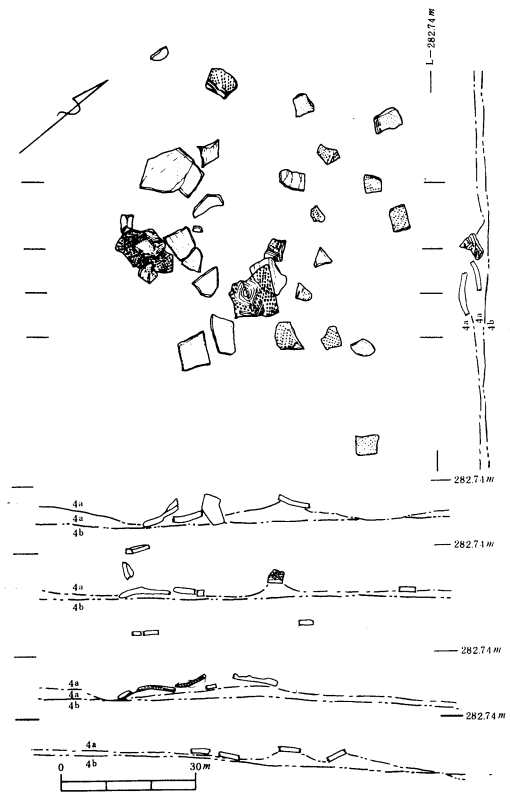
(第43図)

第2地点, G-10区Ⅰ~Ⅲ区にかけて, 約1.5m四方の範囲の中に散らばって出土した。口縁部にや、大きな破片が残るのみで, 胴部や底部など小片となっている。

層は3 a層上位a中に含まれ, 断面は一面である。周辺に他の土器の出土が全然みられず, 1個体分単独に孤立して出土している。



第41図 第1地点平椀式土器出土状況 (D-6Ⅳ-4 a中~下) No 5



第42図 第1地点平舟式土器出土状況(B-9VI-4a) No12



第43図 第2地点春日式土器出土状況(G-10I・III区-3a層) No15

3 竪穴住居址 No 3 (第44

図・図版9下)

F線-6のE区とF区にかけて住居址が発見された。4b層中に掘り込まれ、4a層土が埋土となっていた。長径3.84m、短径3.59mの円形を呈し、深さは15cmである。中心部に長径1m、短径0.8m、深さ22cmの楕円形の炉を設けている。

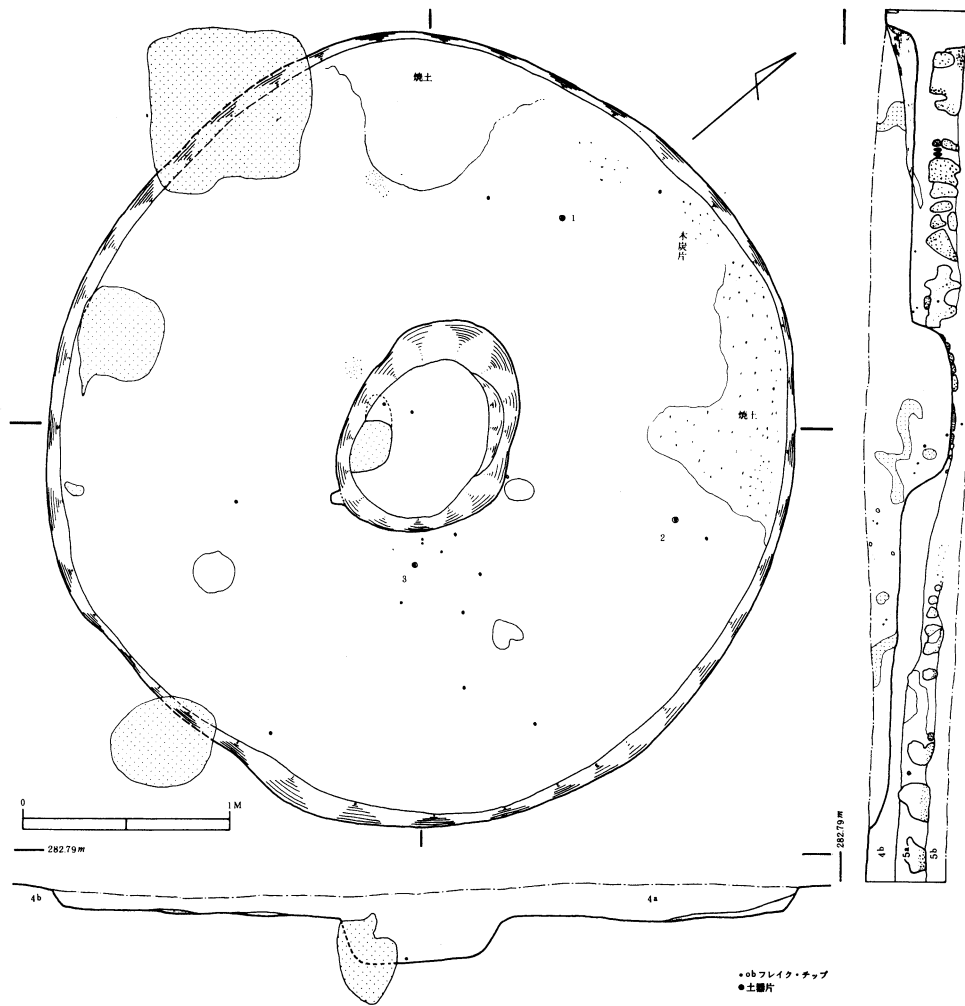
床面は堅く、小さな凹凸はあるが、平面といって良い。西隅の攪乱部分を除けば、ほぼ全部が赤褐色の粘質土をなし、かたくしまっており、埋土が鱗片状に剥離する部分がみられた。周壁に近い部分は、床面から木炭片を多く出土した。特に北隅がいちじるしい。埋土中にも炭素や紅褐色の焼け土が多く、床面にも灰や焼け土がみられた。東北隅は2cm、北西隅は10cmほどの層をなしている。

南隅や東隅また外部にピットがみられたが、いずれも3a層からの落ち込みであり、住居址に伴うものは検出できなかった。

土器は沈線文①が床面より15cm上、燃糸文②が5cm上、口縁部片③が16cm上の埋土より出土した。いずれも細片であり、また遺構に伴うものかどうか断定しかねる。黒曜石の剥片やチップが15点埋土中より検出された。

掘り込み部分の床面は、4b

層で終わっているが、炉部分は5 a層まで及んでいる。なお前述したが、住居址内北隅の埋土中の木炭によるC-14年代測定結果は、5270± 130, 3320B.Cと出ている。



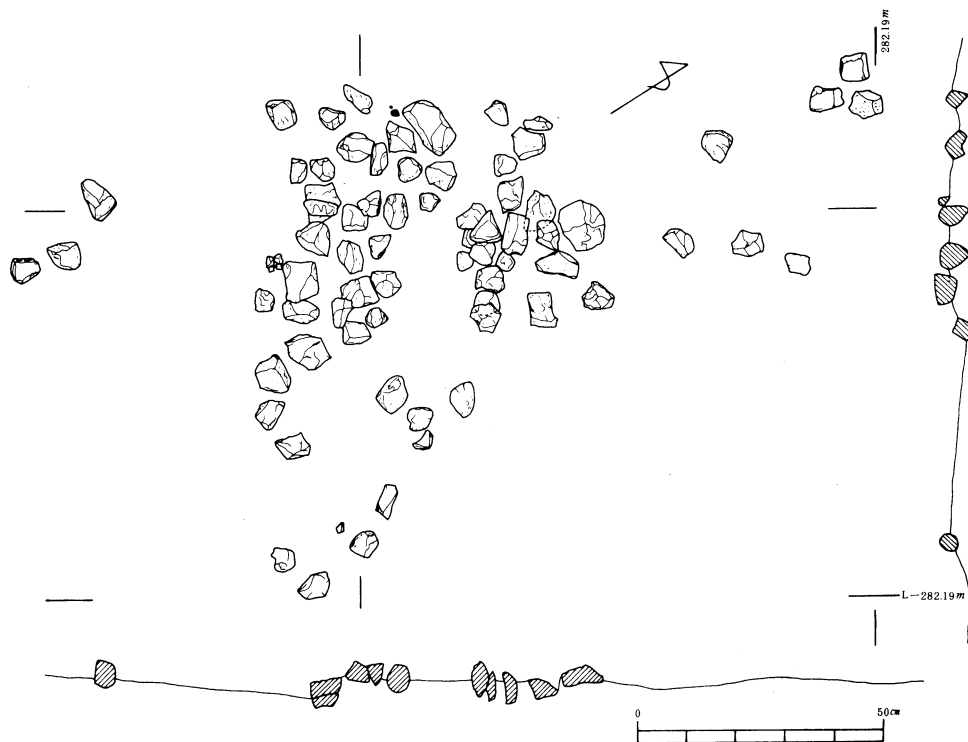
第44図 第1地点竪穴住居址実測図 (E・F-6区) No 3

4 集石遺構

縄文時代の集石遺構は、第1地点から第5地点にわたって33基確認された。まとまりをもって集中しているものから、バラツキのあるものまで加えた。ほとんど拳大の安山岩の角礫を集めたもので、円礫は非常に少ない。断面はほぼ一面となり、重層するのはまれである。

(1) 4 b層期の集石

主に4 b層の上位に位置している。No16・20・23・25・26・28・31の7基である。第1地点から第4地点まで、まばらに出土する特徴がみられた。No20周辺には、撚糸文土器が多く出土



第45図 第1地点20号集石実測図 (E-9 I-4 b 上)

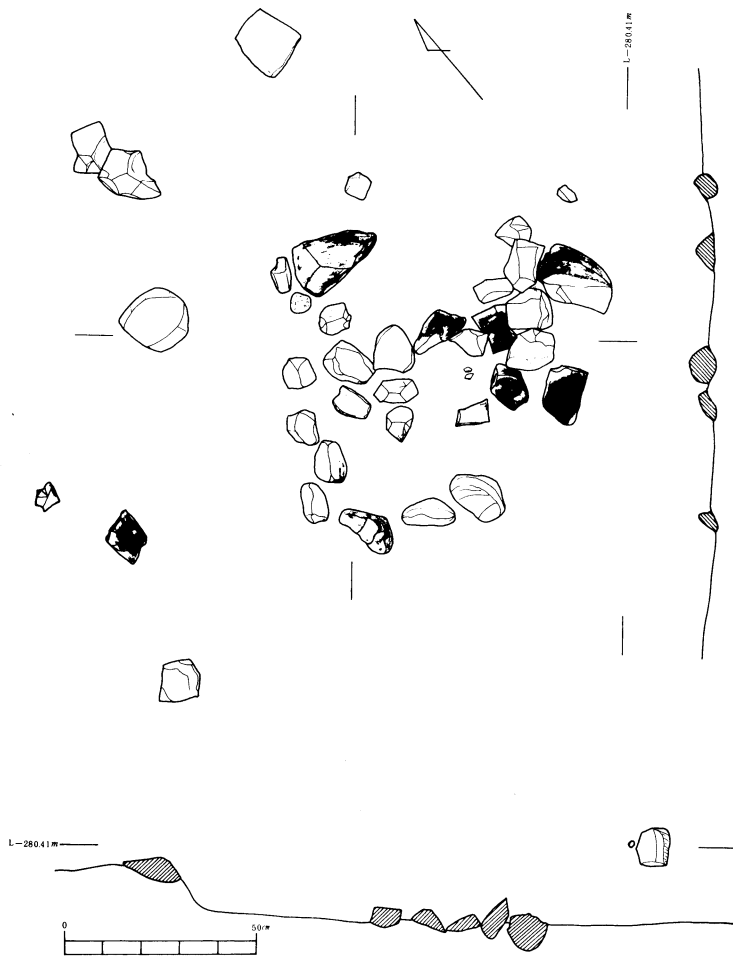
したが、集石内には1点もみられなかった。礫はまとまっている。No25は、小児頭大のわりに大きな円礫および角礫を集めたもので、他と若干異なっている。焼けた痕跡もみられ、土器片も3点混入していたが、小片のため型式不明である。No28は円形で、周辺にも散乱していた。No31は楕円形状にまとまっており、楕円形押型文土器を伴出した。

(2) 4 a 層期の集石

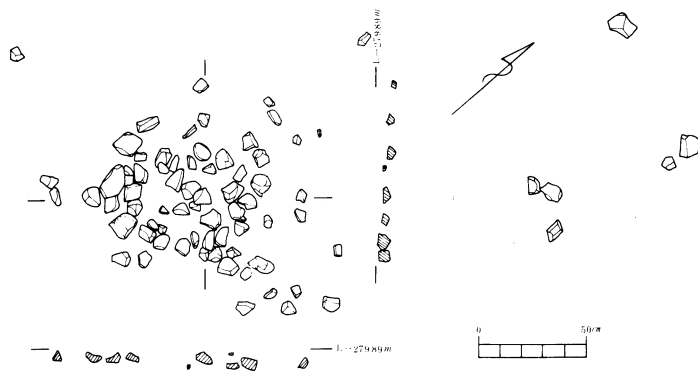
この期になると、集石遺構が大はばに増加している。4 b 層の時期で点々と粗にみられたものが、第1地点とくに崖端部に集中してあらわれてくる。総計17基を確認している。こころみに4 a 層期を上・下に分けてみると、下層にNo7・8・11・13・14・15・17・19・30と9基、上層にはNo6・9・10・18・22・27・29・32と8基になる。下層はNo30を除いて、他はすべて第1地点の出土で、しかも4・5区に集中している。

下層は、No13・14・15・17・19とまとまったものが多い。No7は撚糸文土器・変形撚糸文土器、No8は手向山式土器・変形撚糸文土器を伴出している。

上層は、No6・9・10と崖端部に位置するもののほかは、第2・3・4地点へ拡散している。No6はまとまりの良いもので、周辺に手向山式土器を伴出し、No10は東方をカットされている



第46図 第2地点25号集石実測図 (G-11-4 b上)



第47図 第3地点28号集石実測図 (E-14-4 b上)

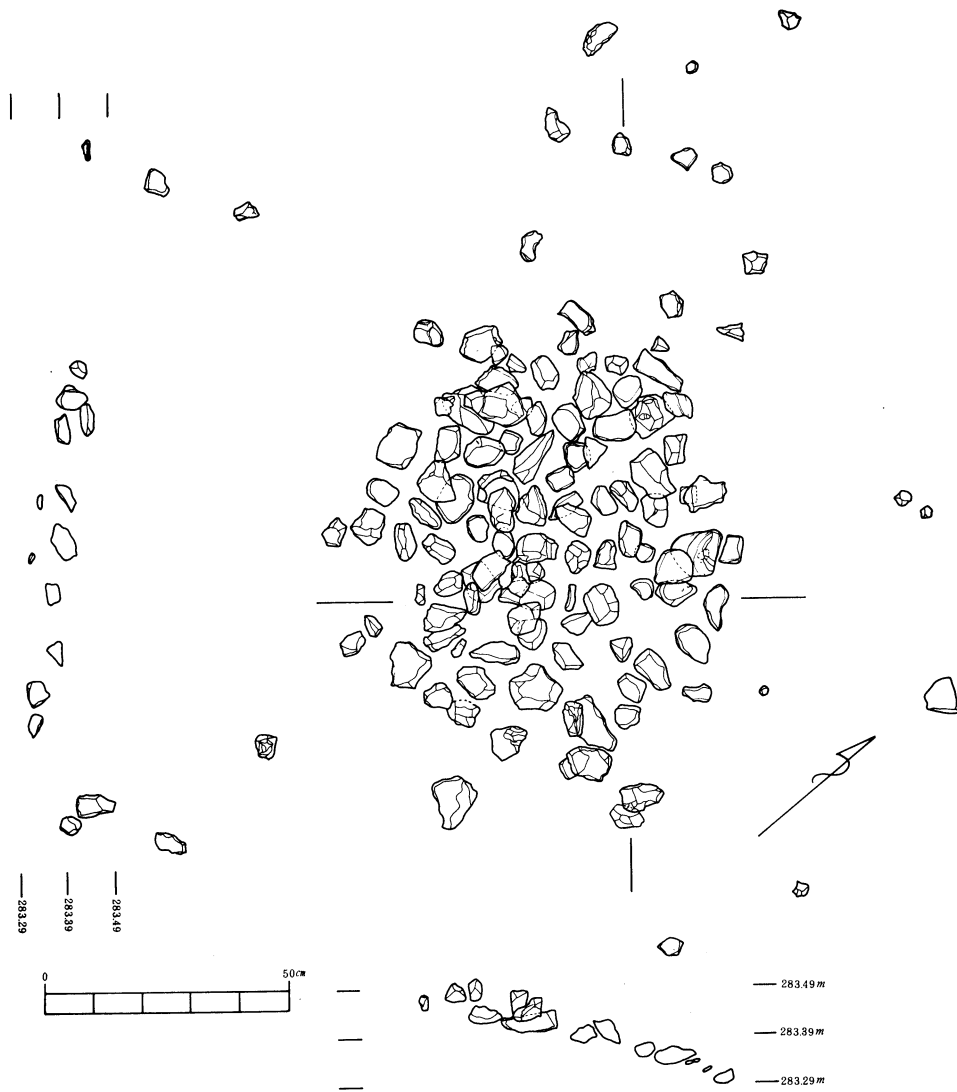
が、手向山式土器や楕円形押型文土器を伴出している。No 9は、周辺に礫が多く散乱している。

以上のごとく、4 a層の時期に最も多くみられ、かつ4 a層下位において崖端部添いに多く存在しているという現象をみる事ができた。

なお、第1地点においては、この層は平楯式土器を主に出土する層であるが、調査中においても集中にあたらぬ個々に散乱する礫が多量にみられたことを付け加えておきたい。

(3) 3 a層期の集石

3 a層には6基の集石が発見されたが、興味あることにいずれも崖端部に並列して出土した。No 1・2・3・4・5・12である。バラツキの

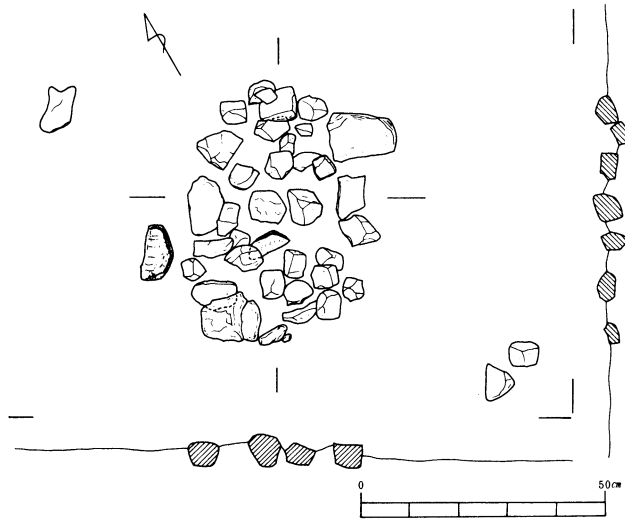


第48図 第1地点13号集石実測図 (C-5-4 a下)

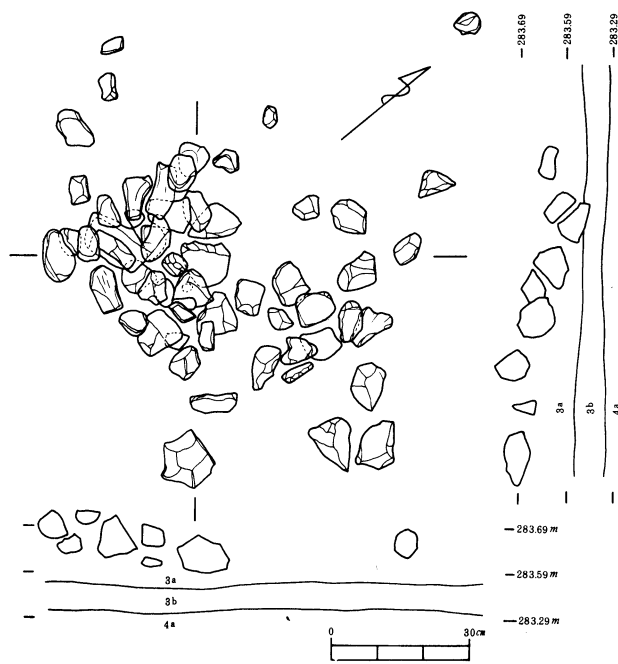
あるものが多いが、No 1・No 5は集中しており、撚糸文土器を伴っていた。第2～第5地点には全くみられなかった。全体的な出土状況を述べたが、次に個々の集石の中で、まとまっているものについて説明を加えていきたい。

○20号集石 (第45図)

第1地点、E-9 I区にあり、4 b 上位に出土した。1.5 m から 2 m の範囲に広がっているが、基底は安定している。10cm以内の拳大の安山岩角礫70個以上を用いている。礫のかさな



第49図 第1地点6号集石実測図 (E-4-4 a)



第50図 第1地点2号集石実測図 (C-4-3 a下)

10cm以内の角礫70個以上を用いている。断面は重なりがみられず一面に広がっている。

りはみられず、落ち込み等もない。周辺には燃糸文土器が多く散乱していた地点であるが、集石の範囲には1点もみられなかった。

○25号集石 (第46図・図版13上)

第2地点, G-11Ⅱ区にあり, 4b層最上面である。中心部は1m~0.6mの長円形状をなしており, 中央部が粗になっており, 東方に礫は集中している。周辺部に10個ほどみられるが, 散らばったものである。今までの礫と比較し, かなり大きい小児頭大の破碎された角礫が多く, また, 赤褐色に焼けた色調を呈しているものがある。礫の重なりはみられない。土器が中心部に2, 周辺に1みられたが, 少片のため型式は不明であった。約40個の礫を使用している。集石の中心部がやゝ鍋底状にくぼむ形跡がある。

○28号集石 (第47図・図版14上)

第3地点, E-14区にあり, 4b層上に位置する。1m四方の範囲に, ほぼ円形に集中し, 他は周辺にまばらに散乱している。礫は

○13号集石（第48図・図版14下）

第1地点、崖端部のC-5 I区にあり、4 a 下層に位置する。1 m から 0.8 m の範囲にほぼ円形となって集中し、周辺にも散乱している約 120 個もの多量の拳大の角礫を用いている。部分的に重層がみられ、また、断面も傾斜をなし平坦でない。断面で観察すれば、礫の下位 5 cm ほどに平舟式土器口縁部片や菱形押型文土器の底部片を出土し、集石がこれらと同時期か、あるいはこれらより新しい時期のものであることを示している。集石内部に土器の出土はない。

○6号集石（第49図・図版12上）

第1地点、E-4 II区崖端部にあり、4 a 層中に位置している。60cmと50cmの範囲に、ほぼすっぽり入るもので、まわりに散乱がみられず完全と思われる。礫は10cm内の角礫約40個を用い、楕円形状に配列する。外側にわりに大きめの石を使用している。赤褐色に焼けた痕跡を示すものが2個みられる。断面は平面で重層はみられない。東南方向へ90cm離れて、手向山式土器の破片がみられたが、集石との関係は不明である。

○2号集石（第50図）

第1地点、C-4 IV区崖端部にあり、3 a 下層中に位置している。中心部西方は方形状に密集しているが、東方は崩れて散乱状態となっている。元来40cm～50cmの範囲に集中していたものと考え。直径10cm内の角礫約60個を用いている。断面には礫のかさなりがみられ、北西方向へや、傾斜している。遺物の伴出は全くみられない。

○第4地点の集石（第51図・図版13下）

第4地点の集石は本項で述べるほか、拳大の角礫が数個散在するものが散見されたが、集石としてまとまりのあるものは、30号集石(D-22区)・31号集石(C-24区)の2基であった。

30号集石は、D-22のIV a 層（黝灰青色硬質土）に検出されたもので、南西側は不揃いとはなるが、40cm×45cmのほぼ円形の円周上に、小さいもので4 cm、大きい石でも8 cmの安山岩質の角礫をほぼ一線上に並べ、中心に同様の角礫を1個配石する。

周辺には数個の角礫が散在するが、同一のまとまりのものと思える。

この集石の置かれた面はほぼ水平で、掘り込みはない。同様に4 b 層（黒色粘質土）や、3 b 層を人為的に盛りあげた痕跡もないところから、4 a 層最下部に配置されたものと思える。

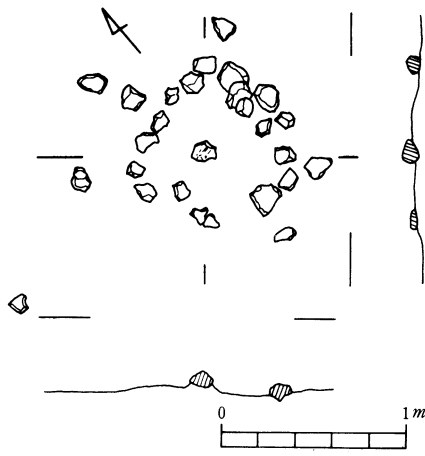
角礫の表面は包含する黒色土のために表面観察では変色しているが、焼痕と認められるものではなかった。

31号集石は、C-24区の4 a 層下より4 b 層上部に検出された集石である。

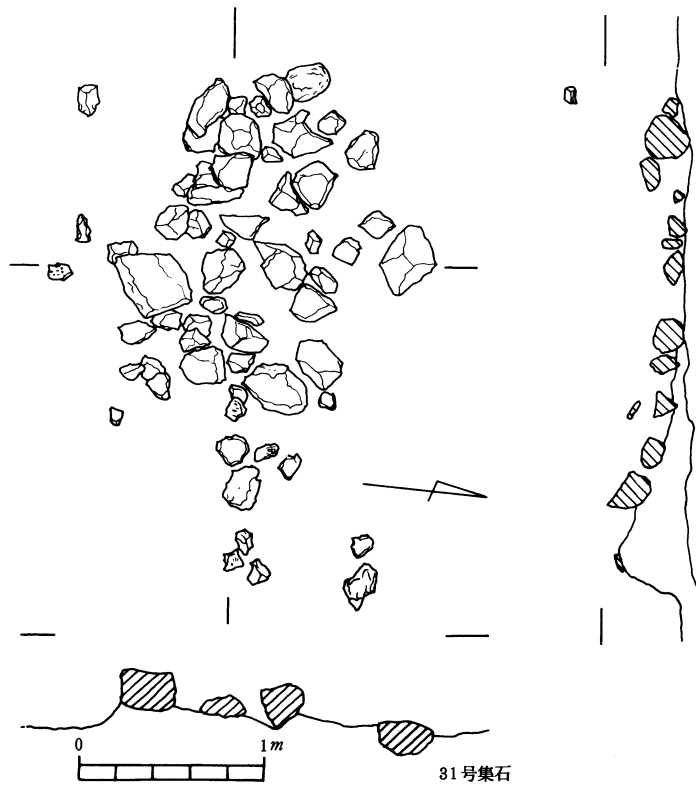
集石は東西に90cm、南北に90cmの集中する集石と、東方向に9個の散在した形状を呈している。使用された集石は、小さいもので2～3 cm、大きい石で10～15cmの安山岩質の角礫である。

集石の出土状況は以上の角礫の積み重ねるものでなく、4 b 層直上に置かれている。

30号集石同様掘り込みは見られないし、比較的大きい角礫を主体的に配置するものでもない。図の断面観察でみると、東側及び西側が10～15cm程盛り上った状況を呈すが、これは4 b 層の地形の変化であって、人為的な盛土ではない。



30号集石



31号集石

第51図 第4地点30号(D-22-4 a最下)・31号(C-24-4 a下~4 b上)集石実測図

5 土 塚

楕円形をなす落ち込み遺構が5基みられた。ここでは土塚として記録する。第1地点に3基、第4地点B-23区に2基である。第1地点の3基は、いずれも5 a・b層を剥ぎ、6層上面が出た段階で検出されたもので、時期的には細石器文化に伴う遺構と考えられるが、埋土の状況や共伴する遺物の見られないことから積極的な根拠を欠いている。第4地点はいずれも縄文時代、4 b層の時期のものと考えられる。

(1) 1号土塚 No 1 (第52図・図版7下)

第1地点、E-5Ⅳ区にある。6層面において、5 a・b層が落ち込んでいる状態で検出した。東西2つに分けられ、東側はトレンチで西北方向をカットされているが、平面では半円状に広がっていた。現状では東西間60cm、深さ10~15cmを測る。B b断面は鍋底状、A a断面は北東方向へやや深い形状を示している。

一方、西側の土塚はほぼ接して東西方向にのびて、中央部のくびれる瓢箪形を呈している。長軸の長さ1.1m、くびれ部分35cmをなしている。深さは中心部が80cmあり、7層シラス層まで達している。東方へ袋状をなして掘り込まれ、東西断面(C-c)では横穴状を呈している。東端部は、東方の浅い落ち込みの下にもぐり込む形である。下底面は長径1m、短径42cmの長方形をなしている。壁面はひじょうに堅い。

埋土は黒色粘質土を主とし、下位には5 a層のパミスがブロック状に、また、全面にパミス粒が混入していた。黒色土は5 b層と判断した。底面附近には6層の土もみられた。

東方の浅い落ち込みは、5 b層を主に5 a層のパミスのブロックが入りこんでおり、底面は6層内で終わっていた。遺物の出土はみられなかった。

(2) 2号土塚 No 2 (第53図・図版8上)

第1地点、F-6Ⅱ区にある。6層面を10cm剥ぎ下げた面で、明確に検出できた。5 a面にては、この土塚の検出はできていない。

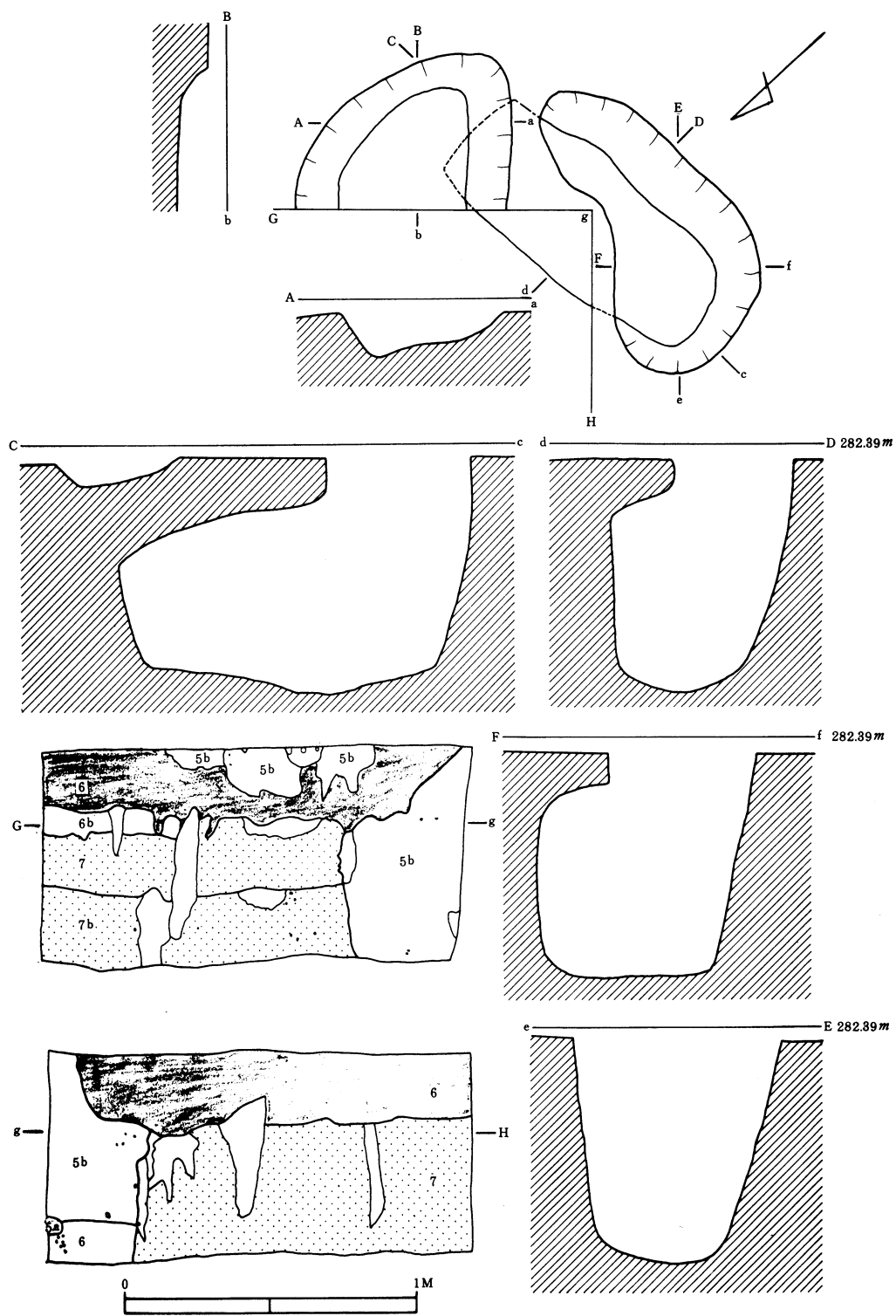
平面は楕円形を呈し、長軸は北東-南西にある。上面は長径160cm、短径88cm、下底面は長径140cm、短径70cmを測る。掘り込みは、ほぼ垂直で、深さは中心部で40~50cmである。下底面は、ピット状の浅い掘り込みで凹凸がみられる。7層まで達している。

埋土はかなり複雑で、5 b・6・7層の土がブロックをなして混交しており、5 b層中には5 aパミス土がかたまりをなして混在していた。遺物の出土はみられない。

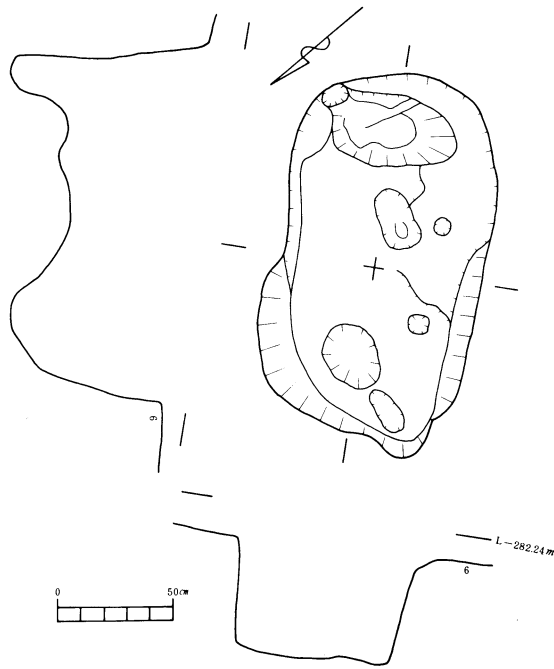
(3) 3号土塚 No 6 (第54図・図版8下)

第1地点、D-9Ⅲ区にある。6層面で検出した。長軸を北東から南西へとり、長径135cm、短径85cmの端正な楕円形をなしている。方向は2号土塚とほとんど変わらない。

下底面は、長径93cm、短径63cm、深さは70cmを測る。中心部では、さらに15cmほど深くなっており、パミスの混入した黄褐色の軟質土が入っていた。掘り込みは急傾斜をなす。



第52图 第1地点1号土坑实测图 (E-5 IV区) No 1



第53図 第1地点2号土坑実測図(F-6Ⅱ区)No 2

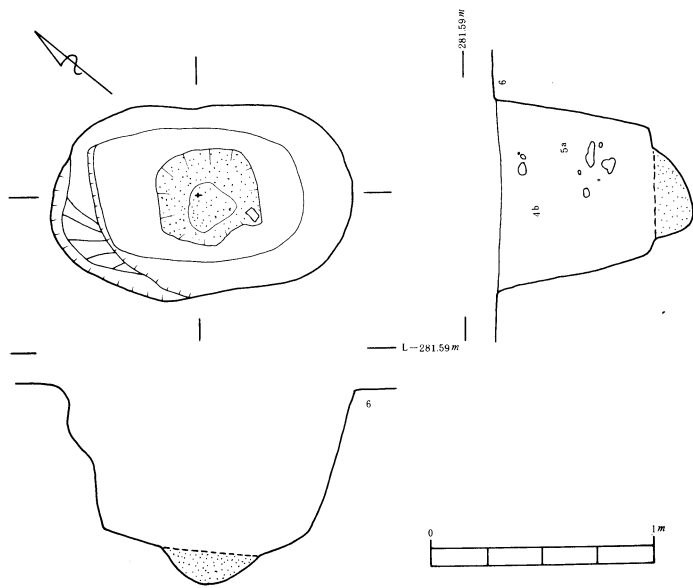
埋土は黒色粘質土で、5 a層パ
ミスのブロックが混入していた。
黒色粘質土は4 bとも5 bとも判
断できなかったが、5 a面にて遺
構の輪郭が確認できていないので、
5 b層の可能性が強い。

底面に軽石が1点出土したのみ
であった。

(4) 7号土坑(第55図・図版9)
No11

7号土坑は、第4地点B-23区
4 b層で検出されたものである。
しかし検出された面が、5 a層
であるため掘り込みの最上面はと
らえることができなかった。

この土坑は長軸1 m、短軸南西
0.8 m、北東0.5 mのダルマ形で
掘り込みの深さは0.2 mを測り、
壁面はやゝ垂直に立ちあがる。



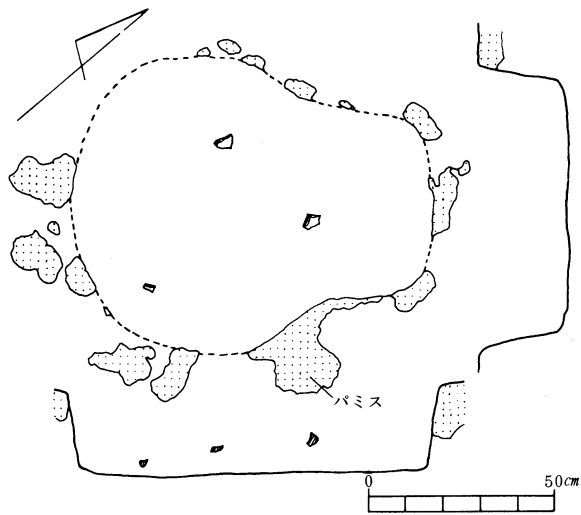
第54図 第1地点3号土坑実測図(D-9区)No 6

4 b層の埋土中、
床面より5~10cm
のところ、楕円
押型文土器片が出
土した。

(5) 8号土坑
(第56図)No12

8号土坑は、第
4地点B-23区で
4 a層(橙色軟質
土)に検出された
もので、長軸2.2
m、短軸1.3 mを
測る。しかし、短
軸の最大幅と東北

の壁面では50cmの差、および東西方向では丸みをおびてすぼまるところからダルマ形を呈する。

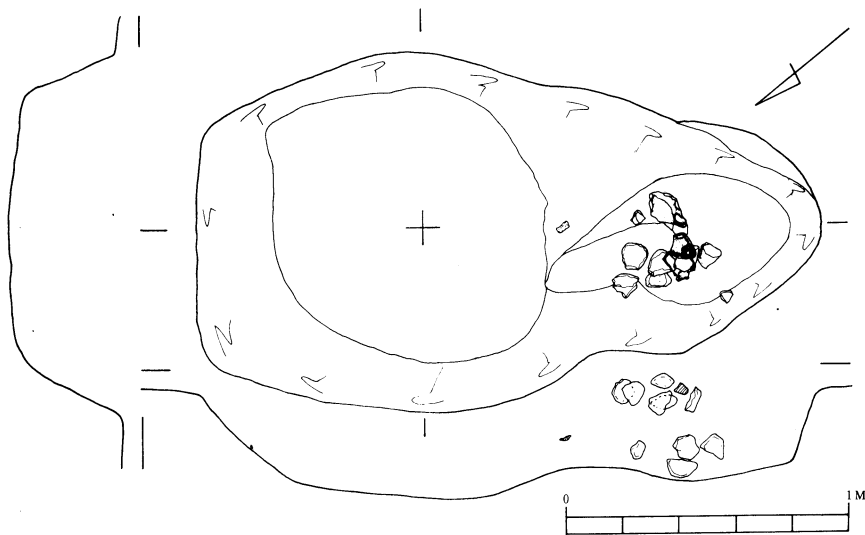


床面は、最大幅あたりで深く掘り込まれたものが中央部あたりで盛り上がり、再び深く掘り込まれ壁面で立ち上がる。この床面の深さは肩部より30cm内外で、南西隅では急激な壁となる。

南西部の深い掘り込みには、床面より13個の安山岩質の角礫が置かれ、そのうちの一部の礫は、表面が赤色変化をおこし、焼痕とみうけられた。

また、埋土の中位と南西の4 a 面に楕円形押型文土器が出土した。

第55図 第4地点7号土坑実測図 (B-23区) No11



第56図 第4地点8号土坑実測図 (B-23区) No12

第2節 弥生時代以降

1 土師器の出土状況

土師器は2層下位を主な包含層として出土する。地表より浅いため、層が消滅している部分も多いが、出土範囲は4ヶ所にわたった。

(1) 第1地点 D・E-8・9区周辺

第1地点は、後世の土地利用によって第2層はほとんど壊滅していたが、この部分は、旧道工事の際、土を盛った部分で、はからずも保護された状態であった。多量の土師器が散布していたが、なかに土製円盤などの加工品が目された。ピット群も多く検出されている。

(2) 第2地点 F・G-11・12区周辺

第2地点は3a層上面に、土師器のピット群や土坑、溝状遺構が検出された。D-1・12区からF-10・11区にかけてである。B・C-11～13区では、2層は消滅している。これらの範囲に土師器も点々とみられたのであるが、むしろG-11・12区、すなわちE-11・12区に東西に伸びる溝より北東で、しかもピット等遺構のないところに特に多く集中して出土する傾向がみられた。須恵器も数点出土している。

これらの状況より、第1・第2地点全域にわたって、ひとつの生活面があったと思われるが、まず中央部を旧道により、また県道により、さらに屋敷の構造物等によって攪乱を受けて消滅し、前述のような残存状況になったものと考えられる。

(3) 第3地点 C・D-16・17区周辺

第2地点より約30m 東南方向、C-14杭からG-13杭に伸びる溝を隔てて、土師器の散布状況がみられる。C・D-16・17区を中心として約900㎡の地域である。ここには数個のピットと土坑を除いて遺構は検出されていないが、多量の土師器が散布していた。壺・甕・埴・坏等の破片や少量の内黒土師器・丹塗土師器・青磁・瓦器等である。

(4) 第5地点 A'・A-36・37区周辺

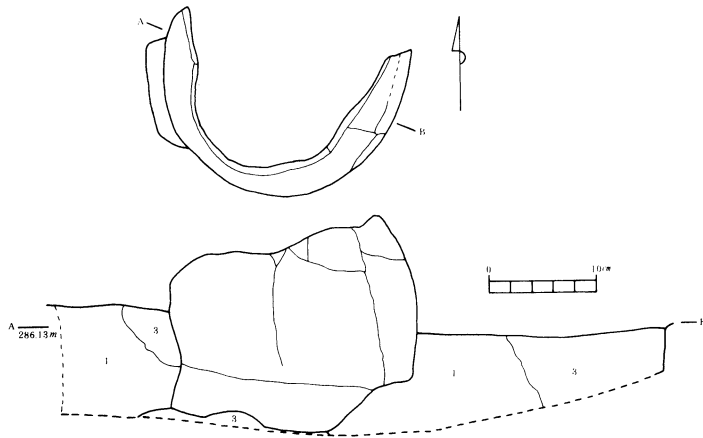
第3地点からおおよそ200m 東南方向にある。2aおよび2b層に出土した。A'・A-36・37区を中心とする約500㎡に散布している。ここには成川式土器と思われるものもあり、また、重弧文土器・L字状凸帯口縁など、弥生時代の土器も数点出土した。鉄鏃も1点発見された。

以上、小破片の全体的な出土状況を述べたが、なかには保存状態が良好でまとまって出土したものがみられたので、少し説明を加えたい。

○土師甕形土器 No 8 (第57図・図版16上)

第1地点、C-8Ⅱ区に単独で出土した。口縁部を下にして倒立した形で、底部は欠損している。地表面から15～33cmの深さにあり、口縁部は3a層へはまりこんでいる。

○土師甕形土器 No 9 (第58図)



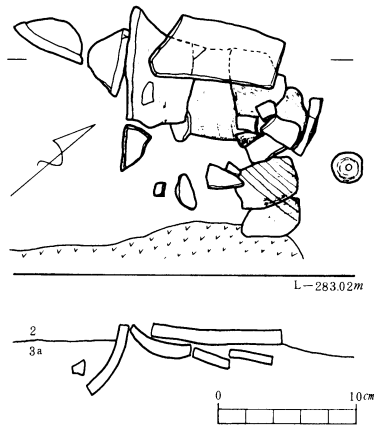
第57図 第1地点土師・甕形土器出土状況 (C-8 II) No 8

○土師甕形土器 No13 (第59図・図版15上)

第1地点, E-9 I区に出土した。旧道掘り込み部分の肩部まで1m弱しかなく, かろうじて残った状態である。口縁部内面を上にして, おしつぶされた形で出土している。底部や上部は攪乱時にとばされたものと思われる。3 a層上面に位置しているようだが, 土が黒く濁っており, 2層下(2 b)としてとらえた。周辺の土師器片は同一個体として接合できた。近接して軽石がみられる。

○土師甕形土器 No 7 (第60図)

第1地点, E-7 III区出土。4 a層面まで掘り込まれたピット中から, ほぼ立位の状態で出土した。口縁部の破片で, 他に土器片はみられなかった。埋土は2 b層である。



第58図 第1地点土師・甕形土器出土状況 (D-8区 III IV) No 9

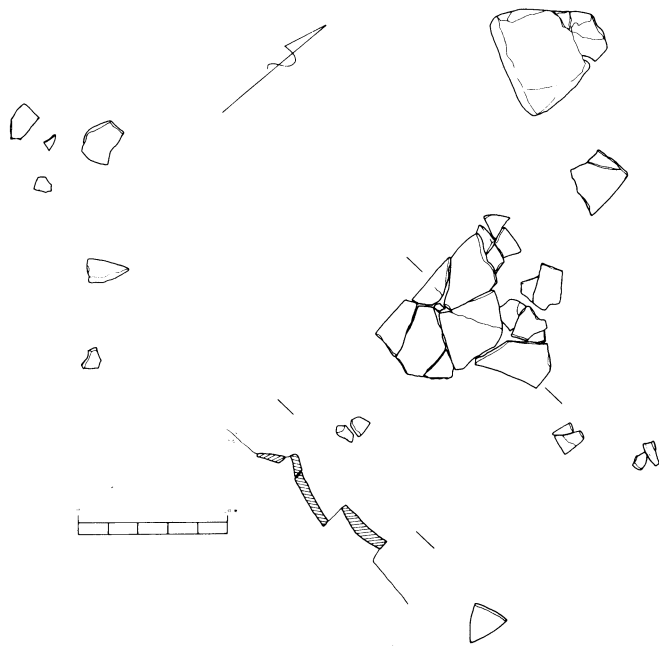
第1地点D-8 III区に出土した。周辺にも土師器の出土が多い。2層下部, 3 a層最上面にあたり, 一部3 a層内に入りこんでいるものもある。口縁部はほぼ完形となったが, 底部を欠いている。外面を上にして, つぶれた状態で出土している。

2 溝状遺構とピット群

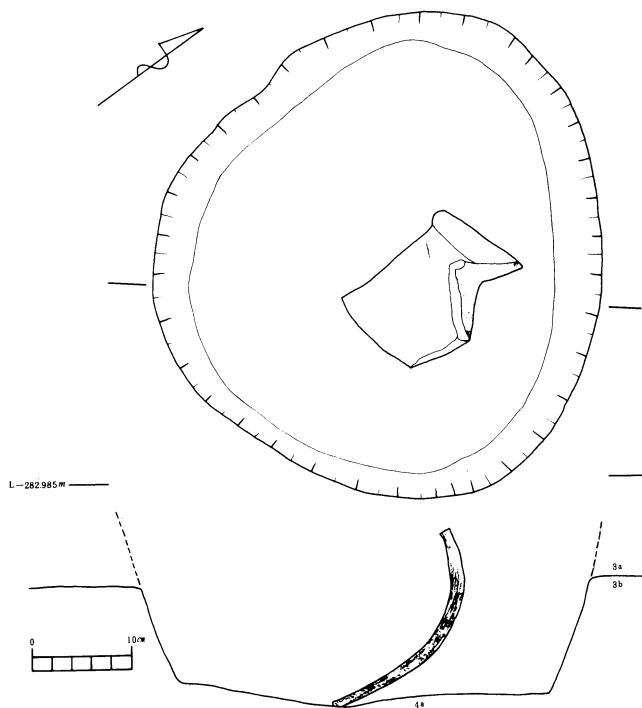
○第1地点 No 5 (第61図・図版18上)

D-7・8・9区, E-8・9区に多くのピット群があり, また土師器の散布がみられる。ピットは3 a面に至って初めて確認することができた。埋土が2層黒褐色のピット(黒)と茶褐色をなすピットの2つに分けられるが, 組合わせによる建物の復元はできなかった。

これらのピット群の広がり, 周辺が攪乱されているため不明である。



第59図 第1地点土師・甕形土器出土状況 (E-9 I-2下) No13



第60図 第1地点土師・甕形土器出土状況 (E-7 III-2下) No7

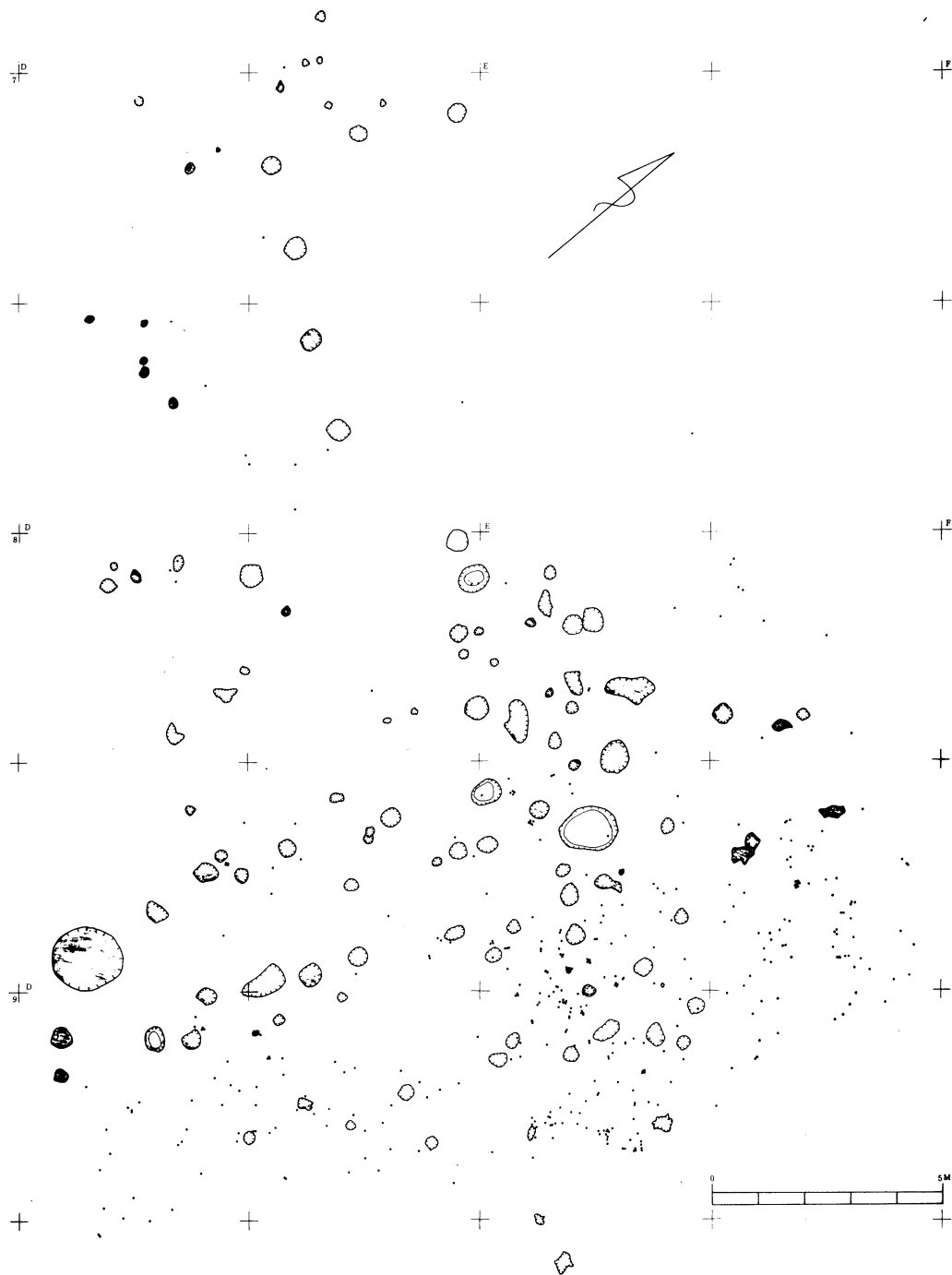
○第2地点 No7 (第62図
・図版18下)

記述の都合上、各々の溝状遺構に仮の名称をつけて説明することにした。

まず、略南北に走る溝で、D・E-11区にまたがるものを溝A、E・F-13区に伸びる溝をB、G・14杭からG・13杭へ伸びる溝をC、G-13区を溝D、その東方を溝Eとし、東西方向へ伸びるものを溝F、集石を含む溝をGとした。

さて本地点では、南側のB・C区を除いて、2層から3a層が良く残っており、第3図にある如く溝状遺構を主として、ピット群が多く検出された。

溝Aおよび溝FによってT字形に区画されている。溝Aは、南へまだ伸びていたことが予想されるし、溝Fは西進し、第1地点E-8区へつながっていたことはE-8区に同様の溝がみられたことによって明らかである。E-11区では2つに分れるが、南側の溝は3m伸びて消滅する。溝巾は50cm~70cmで、深さは15cm~20cmである。埋土は2層の中でもや、上位の褐色を帯び、白色のパミス粒を多



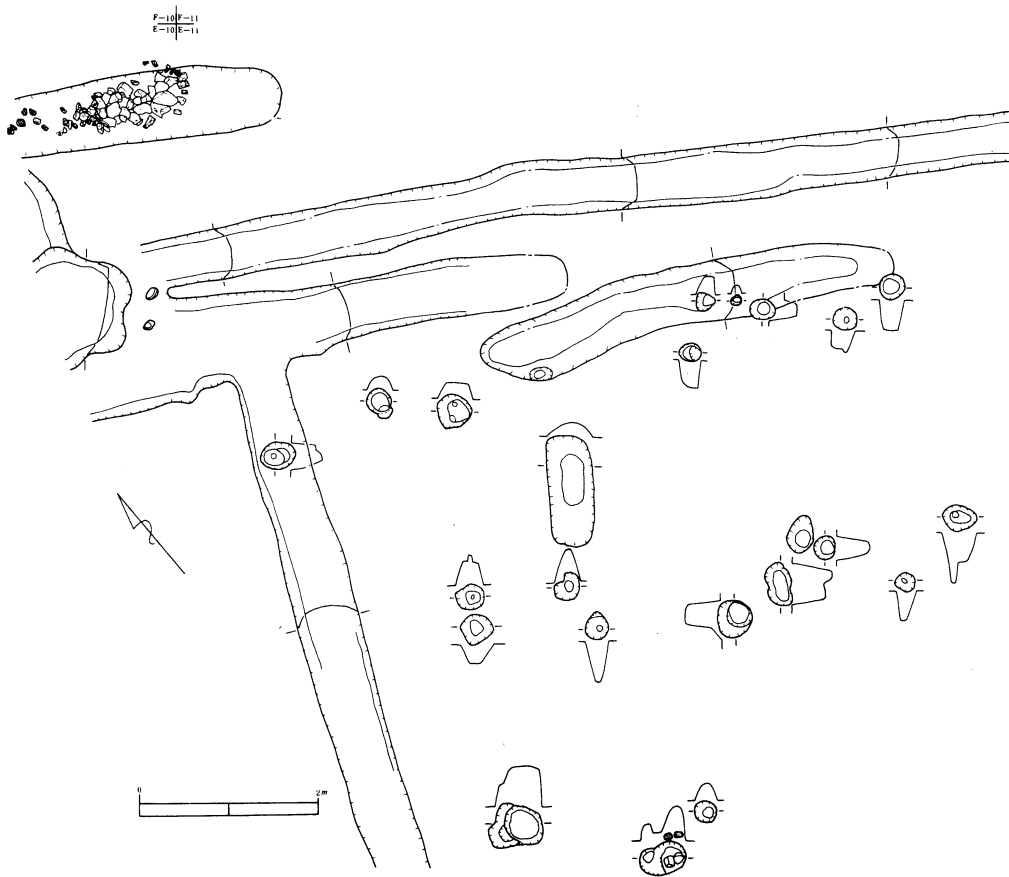
第61図 第1地点ピット群実測図 (D・E-7~9区) No 5

く含む2 a層および1 b層である。東端部はE-12IV区に達し、溝Bを切って終わっている。西から東へ低く傾斜している。溝Gは溝Fとほぼ平行にE-10IV区にあり、11区に入ったところで終わる。溝中に集石遺構(第63図)を有している。(図版11上)

ピット群はこれらの溝に画された形で、南北に分布している。C・D・E-11・12区とF-10・11区、H-9・10区がそれである。南側のピットはまとまっていたが、建物の復元までには至らなかった。F-10・11区は、ピットや複雑な落ち込みの土壇がみられ、なかには焼石や軽石、土師器を含むものもある。H-9・10区は、3 a層を若干掘り下げた面で検出できた。ピットには2 b層と3 a層の混土を含むものと、1 b層・2 a層・2 b層?いずれとも判断のつかないものに分れる。ピットの落ち込みも深くしっかりしたものであったが、全体の構造を知ることはできなかった。

溝Bは溝Aおよび溝Cに略平行をなして位置している。溝巾40~60cmで、深さは15~28cm、上面の広い台形状をなし南へ低くながれている。E-12区では、2段の掘り込みが観察され、深い溝が古いことが認められた。F-12Ⅲ区でいったん切れ連続していない。埋土中から土師器を出土している。溝Fによって切られているが、溝Aと平行関係にあり、ほとんど近い時期であろう。溝Dおよび溝Eも溝Bと同様である。

溝Cは巾3~3.5mと広く、深さは30~50cmで、断面はなだらかで丸味をもっている。軽石



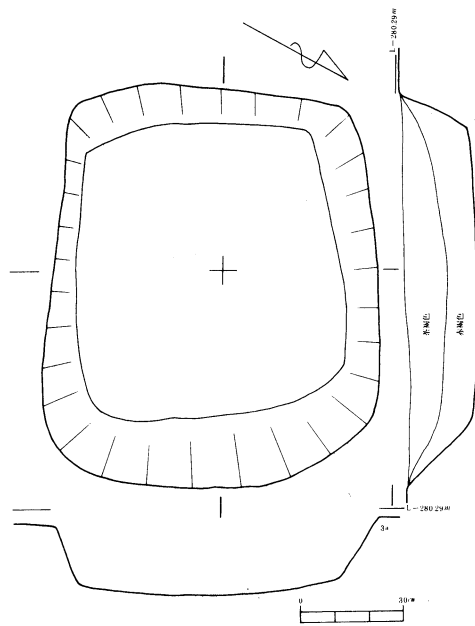
第62図 第2地点 溝およびピット群実測図(E-10・11区) L-281.39m No 7

粒を含む灰褐色層（1 b層）を埋土とし、最下部には粘質の灰褐色土を有する。溝底から35cm上部のほぼ肩部に相当するレベルで、厚さ2cmほどの灰褐色火山灰層がみられた。これは大正3年の桜島噴火による火山灰とみられるので、すでにこの時期には溝はほぼ埋っていたことを示している。

溝Cの流れる方向は、現在の畑地と宅地を区画する杉列に一致している。土師器は、溝Cの



第63図 第2地点21号集石実測図（E-10IV-3 a 最上面）



第64図 第3地点4号土坑実測図（F-16I区）No 8

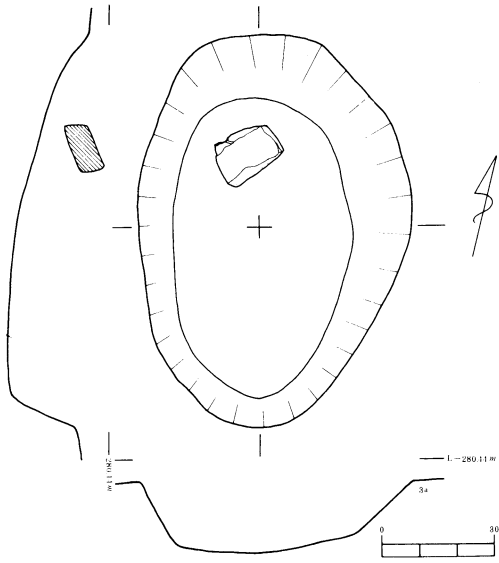
周辺にはほとんどみられなかった。

以上のことから、溝B・D・Eが最も古く、溝A・F・G、そして溝Cと新しくなるが、いずれも北北東から南南西へ伸び、溝F・Gはほぼ直交するという状態を示している。こころみに方向を測ると、溝A・B・C共にNE25°で相関関係がみられ、旧道はNE18°である。

3 集石遺構

○21号集石（第63図・図版11上）

第2地点，E-10IV区にあり、溝G内の3 a層最上面に位置している。溝内に小児頭大の安山岩の角礫や、軽石を寄せ集めた感じのもので、長さ2m、巾70cm



第65図 第3地点5号土坑実測図(B-16Ⅳ区) No 9

一11Ⅲ区にあり、直径約15cmほどの安山岩の角礫が3個並列してならび、他に小礫3、軽石1がみられた。土師器が2点伴出した。3個の礫は、3 a層中に下半部を埋没していた。集石遺構としてはどうかと考えられたが、念のために記録しておくことにした。

の範囲に広がっている。大小合わせて約50個を数える。軽石はそのうちの半分を占めている。直径が15~20cm大の礫が多いが、25cm大のものもみられる。赤褐色に焼けた痕跡を示すものが8個みられる。

礫は東南に集中し、重層してみられ西南へまばらである。礫間には黒色土が混入しており、礫底も3 a層上面に密着せず、うすく黒土をはさんでいる。

周辺に5個の土器片が出土した。1は陶器碗底部、2は染付、3は蓮弁のある青磁口縁部、4は磁器底部、5は土師器である。

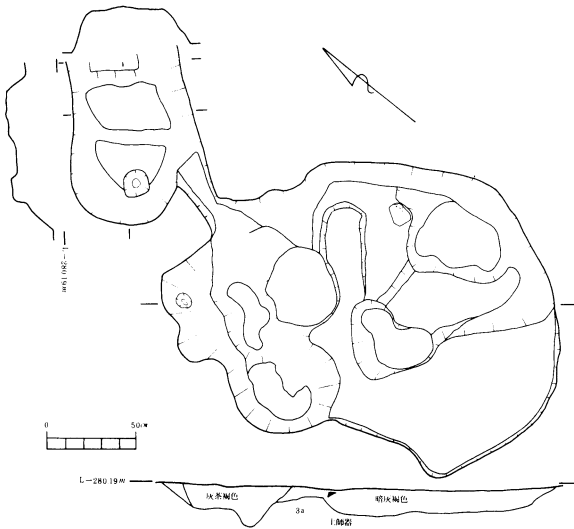
なお、土師器におけるものとして、No24を説明する。No24は、第2地点F

4 土 坑

3 a層に掘り込まれた土坑は、第2地点でもみられたが、用途の不明なものが多い。他にも第3地点に3、第5地点に1みられたので説明を加えたい。第3地点の3は、いずれも土師散布地の周辺に位置し、土坑中に焼土や炭化物を含んでいた。

(1) 4号土坑(第64図・第3図 No 8・図版17上)

第3地点、F-16Ⅰ区にある。2層を剥いだ段階で、3 a層中に落ち込む、焼土を含む土坑を検出



第66図 第3地点6号土坑実測図(D-18Ⅰ区) No10

した。平面は北東方向にや、膨らむ隅丸長方形で、長径 117 cm、短径 85 cm、深さ 21 cm を測る。埋土は 2 層に分かれ、上位 13 cm は赤褐色に焼けており、中に赤く焼けた土師器小破片や小礫、また粘土の小粒などを含んでいる。下位は茶褐色をなして焼けており固いが、取り上げるとサラサラしている。遺物は含んでいない。周辺には土師器が出土した。

(2) 5号土坑 (第65図・第3図 No9・図版17下)

第3地点、B-16Ⅳ区にある。長軸を南北にとり、長径 107 cm、短径 73 cm、深さ 20 cm で、平面楕円形を呈する。3 a 層中にて検出した。土坑底面は 3 b 層に達している。埋土は黒褐色を帯び、炭化物を点々と含んでいた。底面より 10 cm 上位に直径 20 cm 内の角礫を 1 個含み、同面に土師器片が 2 点出土した。

(3) 6号土坑 (第66図・第3図 No10)

第3地点、D-18Ⅰ区にある。3層内に焼土が落ち込んでいる。大小 2 つに分けられるので南側の大きい方を A、北側の小さい方を B と仮称して説明したい。

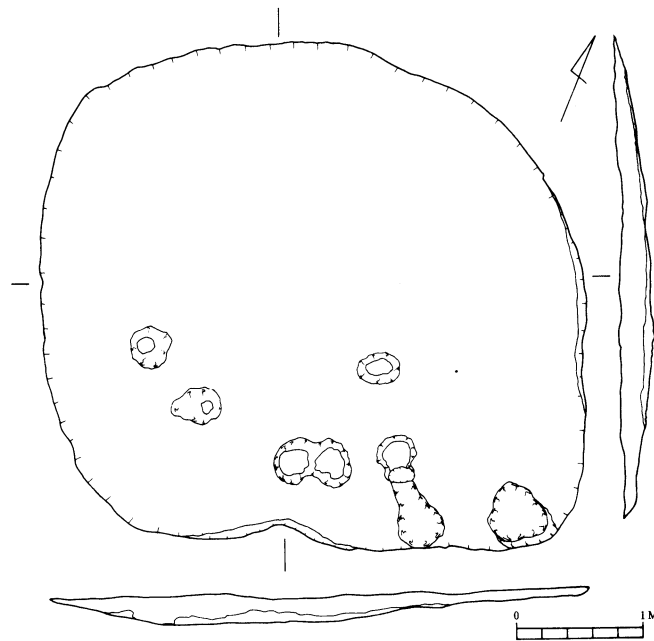
A は長径 220 cm、短径 150 cm を測り、平面は不定形をなす。内部にさらに複雑な落ち込みがみられる。深さは 15 cm ~ 20 cm にわたり、暗灰茶褐色や暗灰褐色を呈し、焼土や木炭片を多く含んでいた。土師器片や礫片を出土した。

B は南西方向の掘り込みは明確であるが、北西方向は新しい攪乱を受けて不明である。残された部分から推定すれば、ほぼ半円形をなすと思われる。短径 60 cm、長径は不明、掘り込みは複雑である。深さは 25 cm に達している。灰褐色土を含み、焼けた痕跡がみられる。

(4) 10号土坑 (第67図・第3図 No15)

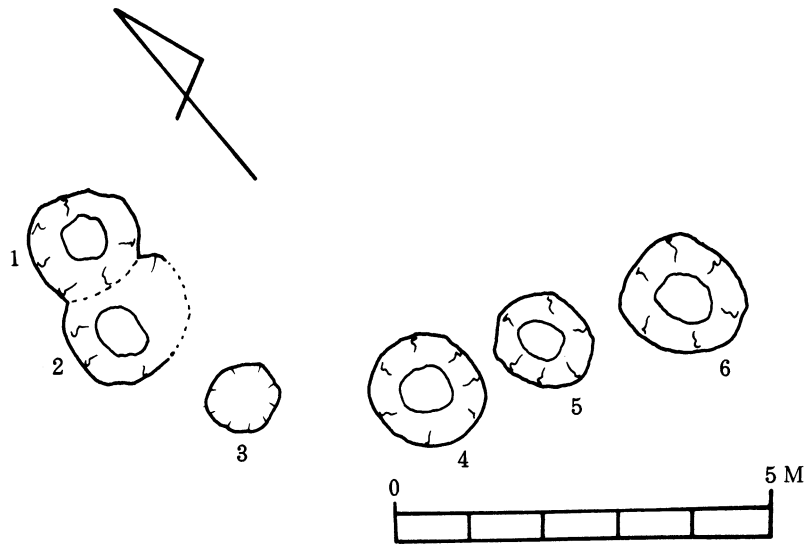
10号土坑は第5地点南西の道路予定線のや、端の B'-34 区に検出された。

遺構は 3 a 層 (橙色軟質土) を掘り込んでおり、4 m × 4.2 m を測り、北方の 2 つの隅は丸く、南は隅丸を呈す。覆土は上面 10 cm は 2 層 (黒色やや粘質土)、床面は黒褐色土が約 10 cm 堆積する。ピットは南隅を中心に 7 個が土坑内に巡り、それぞれの深さは 5 cm ~ 8 cm の深さで不定形である。このピットは北辺周辺には確認されなかった。



第67図 第5地点10号土坑実測図 (B'-34) No15

5 近世墓



第68図 第4地点近世墓実測図（C-26・27区）

近世墓は第4地点B，C-26・27区の境に2層（黒色やや粘質土）を掘り込んでいる。最初検出されたのは4号墓であるが，この墓の左右に5基発見され都合6基の近世墓となった。

径の測値は3号墓で1mを測るほかは，1.5m～1.7mで深さは1.3m前後となる。

このうち5号墓・6号墓には「寛永通宝」が供献される一方，2号墓には木製数珠玉も供献されていた。

第7章 遺物

第1節 土器

1 縄文式土器

(1) 分布

本遺跡は縄文時代を主とし、なかでも早期および前期に属する遺物が多く、中期・後期・晩期に属するものも若干出土している。分布状態では、北西の谷に沿った第1地点に中心があつて、最も濃密な出土状況を示し、第2地点がこれに次ぐ。第3・第4・第5地点はそれぞれ少量の分布が見られ、このうち第4地点ではやゝまとまった出土が見られた。

土器には多くの型式が含まれ、はじめての出土で型式名の付いていないものも相当数存在する。大きく分けると、早期に属するものは、縄文系・貝殻文系・押型文系の三つに分かれ、前期においては、これらが結合し、あるいは分岐して多様化してくるが、主流となるのは各系統の融合文化である。中期以降は少量の出土にすぎないが、他地域と同様に凹線文・沈線文を主とし、単純化の傾向をたどっている。

こまかく見ると、土器は型式によってそれぞれ独自の分布状況を示している。たとえば、撚糸文土器は第1地点の東隅に集中して出土し、押型文土器は第1地点の東隅から第2地点の北隅へかけてと、第4地点の西隅に出土している。本遺跡で最も濃密な分布を示す平椀式土器は、第1地点の南西側半分にかぎって出土し、北東側にはまったく分布を見ることができない。この他、各型式の土器分布については、第7表土器移動表によって大略を知ることができる。

(2) 層序

縄文土器は、Ⅲa層橙色軟質土・Ⅳa層黝灰青色硬質土およびⅣb層黒色粘質土から出土している。この他Ⅴb層茶褐色粘質土から細石器に伴って少量の土器が出土したが、これについては別項で述べた。

Ⅲa層 この層からは、縄文前期末から縄文晩期までの土器を出土する。他の層からの混入はないものと思われるが、層序は著しく乱れ、新旧の転倒が見られ、しかし乍ら地層の乱れはなく人為的な原因によるものではない。土は軟弱で乾燥しているところから、堆積の時期の風力によるデフレーションによることも考えられる。

Ⅳa層 縄文前期初頭から中葉に至る時期の土器を出土する。

Ⅳb層 縄文早期初頭から早期末に至る時期の土器を出土する。

Ⅳ層は共に粒子が細かで、硬質または粘質である。層序は正しく上下の転倒などはみられないが、出土状況を見ると、一固体または一型式の土器が破片となって垂直方向に上下に移行し、また、水平方向に拡散している現象が例外なく認められる。この現象は本遺跡にかぎられたものではなく、われわれが発掘調査を行なう場合、殆どの遺跡で見られるところである。

ここにいう土器の垂直・水平移動は、局部的・人為的なものではなく、遺跡の全域に渡るもので、自然的原因によって生じたと思われるものである。われわれは調査を行なうたびに、この現象に直面しながら、その原因についての究明と処置法についての考察を怠っていたように思う。

第8表・土器層別頻度表は、石峰遺跡における土器の垂直移行の実態を示すものであり、第9表・土器移動表は、石峰遺跡における土器の垂直・水平移行の状況を示す。

従来、遺跡の調査にあたっては、出土遺物の位置測定が丹念に行なわれて来た結果、遺物の平面的な分布状態の把握にはきわめて有効であった。しかし、近時の調査面積が拡大広域化する調査においては、立体的な遺物と地層の関係の把握は、水平に堆積した地層以外では極めて困難である。大多数の遺跡において、地層が複雑に傾斜しているために、せっかく測定した遺物のレベル測定数値も、地層と関連した比較が困難で実用に供することができない。例えば、遺物の地層への投影図等も地層との関係を示すことができないのである。

本遺跡の調査では、上記の欠陥を補うために遺物の出土レベルの測定に加えて、一つの地層を3分し、上・中・下に分けて遺物の採取を行なった。第8表・第9表はこれに基づいて作製したものである。

第8表によると、一個体または一型式の土器片が、上下に移行していることは明らかで、第9表によれば、このような現象は遺跡の全域にわたっていることを示している。とくに完形として復元できた土器の場合に、出土状況などから推定される本来の位置から、同一個体の破片が上下に移行していることが明瞭である。

従来、遺物は本来の位置から上方へ移行することはあっても、下方へ沈下することはない、と考えられていたようであるが、第8表に示された各個体・各型式の垂直分布の状況を見ると、とうてい下方への移行は否定することができない。その原因については、地殻の変動など種々考えられるであろうが、加世田市新川浜の実験の結果、砂丘上に散布した土器片が、僅かに3ヶ月間の冬期季節風によって最大21cm沈下した事実を考えると、温暖・乾燥といわれる縄文時代の気候も考え合せて、風力による沈下も一因と考えてよいかもしれない。

自然的原因に基づいて遺物が上下の幅をもって出土する以上、編年のために遺物の本来の位置を明らかにすることが必要である。そのためには遺物埋存の状況を、より事実近くに把握することが第一要件である。遺物の出土状況を示す実測図・写真は有力な資料であり、第8表、第9表は、遺物の埋存状況を数量的に示さんとしたものである。これらの資料を総合して、遺物本来の位置を推定し、第8表に当該位置を○印で示した。

土器の埋存状況は、土器片の移行との関連が考えられるので、完形に近く復元できた土器について出土状況を述べよう。本遺跡では原形を保って出土した土器は、E-8区より出土した楕円形押型文土器（第72図7）1個のみで、他は悉く破損し分散した状態で出土している。例えば、B-9区から出土した平椀式土器（第74図11）は、殆ど完全に近く復元できたものであるが、出土状況（第42図・図版6上下）はかなり分散しており、破片は4a層の最上部から、

下は4 b層上部まで出土し、出土地点の最高点と最下点の幅は31cmに及び、土器の高さの22cmを10cm近く上まわっている。しかも、口縁部破片は悉く4 a層下部から出土しているが、底部破片の半数近くが4 a層最上部から出土し、胴部破片の中には4 b層まで沈下したものが4片発見された。

第74図12の平椀式土器は、C-6・C-7区に分散し、層位は4 a層の上中下部の他、3層、2層まで浮上し、上下の幅は1 mに達している。また、第75図13の平椀式土器はB-5区よりE-6区まで5区に拡散し、層位は4 a層の全部に出土する他、4 b層への沈下、3層への浮上が見られ、上下の幅は60cmを越えている。

第70図3の撚糸文土器は、E-6区からE-9区まで6区に拡散し、層位は4 b層の上部・中部を主として、上は4 a層の全層、下は5層まで達し、上下の幅は60cm以上に及んでいる。第71図5の石坂式土器は、D-7区よりE-9区まで5区に拡がり、層位は4 b層の中・下部と、4 a層上・中部に出土し、出土幅は60cmに達している。

以上に挙げた他、第8表・第9表によって、その他の土器の埋存状況の概要も推察できよう。このような現時点における土器の埋存状況の観察によって、逆にそれが土器の自然的原因による、水平・垂直移動の結果であることも認識できる。

(3) 系 統

石峰遺跡における早期の縄文土器には、三つの系統がある。縄文系・貝殻文系・押型文系がそれで、出現の時期は連点鋸歯文が早く、次いで縄文系が現われ、続いて連点鋸歯文と関連のある貝殻文系の出現を見、押型文系が最後となる。

連点鋸歯文土器は、口縁部に刺突連点文を、胴部には縦位の沈線を施文する円筒形の土器(第69図1)である。初めて見る型式で、早期初頭に位置するものと考えられ、器形等から貝殻文系土器との繋りが考えられる。

続いて内外に撚糸文を施し、口縁が外反し胴部に僅かにふくらみのある丸底の土器(第70図3)が出現する。この土器も新形式である。この後に貝殻文系が現われるが、縄文系の土器はいくつかの型式を経て早期の終りに近く、口縁部に2条の刻目のある凸帯を絡らし、胴部に縦位の撚糸文と横位の凹線文を施した平底の深鉢である凸帯撚糸文土器(第70図4)が出現するが、この土器も新しく発見された型式である。

貝殻文系土器では、撚糸文土器(第70図3)の後に連点鋸歯文土器(第69図1)の器形を継ぐ石坂式(第71図5)が現われる。円筒形平底の波状口縁土器で、2カ所の隆起部を有する。文様は、口縁部に貝殻縁の刺突による羽状の連点文が施されており、この点でも連点鋸歯文土器との繋りが見られる。石坂式に続いて、貝殻縁による押し引き文を特徴とする吉田式が出現する。円筒形平底の土器で口縁部はや・外反し平担である。この後に円筒形と角筒波状口縁の二様の器形をもつ貝殻文系の前平式が続くのであるが、本遺跡ではその出土は見られない。貝殻文系土器の終りは、早期終末に位置する円筒形条痕文土器(第71図6)である。円筒形平底

の器形で、口縁部に横位の貝殻縁による拾数条の沈線文が施された土器である。

押型文系の土器は、早期末に現われる。山形押型文土器(第85図・第86図93—107)・楕円形押型文土器(第72図7・第73図9・10)・細線格子状押型文土器(第86図108—111)が殆ど時を同じくして現われる。器形は口縁部が外反し、頸部はやゝしまり胴部が僅かに張って、平底に終る器形である。この他に楕円形押型文土器には、今一つの器形がある。平底の深形土器であるが、底部から口縁部へ直線的に開くもの(第73図9・10)で、この器形の土器には口縁内面の施文が見られない。

押型文系土器ではあるが、特殊な土器と見られる石峰式土器(第78図18)がある。楕円形押型文と8字形捺糸文とを交互に施文したものである。時期は、他の押型文土器と同一時期と考えられる。押型文系文化と縄文系文化の結合を示すもので、早期においては初めて現われた現象で、前期に盛行する各系統の文化が融合して、新しい文化を形成して行く傾向の端緒と見られる。

九州地方では、縄文系文化の発現は従来、他地域に比較して非常に遅れていたと考えられて来たが、本遺跡では、細石器に伴なって縄文を施した土器片が発見されており、更に、続いて沈線文を有する連点鋸歯文土器が出現した。連点鋸歯文土器は、一方では捺糸文土器を生み、また、一方では貝殻文系の土器に発展した。このような早期土器の発展系列を見れば、本地域における縄文系文化の発現に対する従来の考えを改める必要がある。

早期に見られた各系統の土器文化が互いに結合して、新しい土器文化を発生するという現象があらわれる。この新しい土器文化が主流となる時期を、縄文前期と考える。

前期初頭に位置するのは、手向山式土器(第69図2)である。この土器の文様は、刻目凸帯文・縄文・凹線文を土器面の部分によって施文している。この型式には押型文・隆起線文等も見られるところである。凹線をもって描かれた土器文様は、すでに早期に出現したものと考えられ、県文化課立神次郎・中村耕治の両主事によって、志布志町石踊遺跡4b該当層から、篋描による凹線多重菱形文土器片(第98図260)が発見されている。

器形は、刻目凸帯によってやゝ内弯する頸部と、尖底あるいは丸底に近い下腹部に分れている。器面の部位によって異なる文様を施したために、このような器形を生じたものであろう。捺糸文土器(第70図3)などの器形から発生したものと考えられる。

手向山式土器に続いて、平椀式土器(第74図11・12、第75図13)があらわれる。文様は、連点文・凹線文・刻目凸帯文・結束縄文を、手向山式と同様に土器面の部分によって施文している。器形は波状口縁となり、外反する頸部・口縁部と、やゝ張った胴部に分かれ、刻目凸帯がその境目となっている。頸部・口縁部には、連点文・凹線文・刻目凸帯を、胴部には結束縄文を施し、文様の配置でも手向山式と共通するところがある。

平椀式に続いて塞ノ神式が現われる。塞ノ神式の文様は、凹線文と網目文が施されている。

同型式には、平椀式に見られる刻目凸帯の退化形態と見られる、屈曲部の連点文が施されたものも見られ、器形の上でも波状口縁を残存するものがある。器形は、円筒形の胴部にラッパ

状に開いた口縁部を付けたもので、まれに開いた口縁部を欠くものもある。

塞ノ神式の時期に、文様の施し方に変化が起こっている。手向山式や平楯式では、土器の一定の部位に一定の文様を施すという方式が行なわれているが、塞ノ神式では二つ以上の文様要素が、一つの器面に重ねて施文され、更に部位に関係なく、器面全体を一つの面として文様を構成するに至っている。これは、文様要素の機械的なよせ集めの段階から一歩進んで、各文様要素を自由に駆使して一つ意図を表現し得る段階に達したことを示すもので、土器文化の融合といえることができる。具体的には、塞ノ神A a式・塞ノ神A b式が、前述の様相を示している。

塞ノ神式は、更に塞ノ神B c式・塞ノ神B d式と続き、縄文系の文様を失なって、かわりに貝殻文が用いられるに至るが、本遺跡では少量の出土を見るにすぎない。

塞ノ神B d式の後、貝殻縁条痕文を特徴とする轟式、凹線文系統の曾畑式を経て深浦式土器（第77図16）が出現する。細隆起貼付文と、細沈線文によって幾何学文を構成するもので、丸底深鉢形の土器である。轟式・曾畑式の要素を受けたものと思われる。

深浦式土器の後には、春日式土器（第77図17）が続く。貝殻縁による調整痕を有し、細隆起貼付文・凹線文・連点文によって文様が構成されている。器形は、キャリッパー形の口縁部にや、張りのある胴部がつき、上げ底の底部に終る。

手向山式土器に始まった土器文化の融合現象は、春日式土器に至って終末を迎えるが、同時に前期も終了する。

前期には、これまで述べた各系統の土器文化の結合、または融合によって生じた土器文化の他に、単純な様相、或いは純粋な形を伝えるいくつかの土器文化が見られる。次に列挙すると、凹線あるいは沈線幾何学文土器・貝殻縁条痕文土器・押型文土器・縄文系土器等である。



第98図 昭和54年石峰出土

凹線～沈線幾何学文土器は、すでに早期に出現している。志布志町石踊遺跡出土の多重菱形文土器（第98図 260）がそれである。前期では、手向山式土器・平楯式土器に文様の要素とし

て現われ、塞ノ神式にも伝わっている。しかし、純粋な幾何学文としては平楯貝塚から出土した平楯I式がある。器形は塞ノ神式と同様であるが、口縁部は無文で、円筒形の胴部の全面に沈線幾何学文が施されている。本遺跡では、D-4区4a層から凹線幾何学文土器片（第92図204）が出土しているが、この土器は平楯式土器と平行位の時期と考えられる。

沈線幾何学文の最終段階に当るものは曾畑式土器であろう。本遺跡では、曾畑式は3a層から出土している。（第94図218-219）。以後、幾何学文土器文化は変容の道を進んで行くようである。

貝殻縁条痕文土器の初現は、栗野町花ノ木遺跡出土の尖底又は丸底と思われる口縁部のひらいた波状口縁土器で、口縁部から胴部へかけて細隆起帯貼付文を施したものである。早期中葉に位置するものと思われる。本遺跡では、この系統に属するもので轟式土器の底部と思われる尖底土器片（第94図217）が3a層から出土している。前期後半に位置するものであろう。

押型土器は、本遺跡では前期前葉に、菱形押型土器（第72図8）があらわれる。他の地域では多重楕円形などの変形押型土器が現われるが、前期前葉頃で、この時期が押型土器の終末期のようである。

縄文系の土器は、本遺跡においては、さ程大量に出土するわけではないが、早期から前期へ切れ目なく出土している。この中で注意を引くのは、変形撚糸文土器と網目文土器である。変形撚糸文土器（第82図・第83図55-70）は、石峰式土器（第78図18）に関連のあるもので、石峰式土器の文様のうち撚糸文だけを施文したように見えるものである。4a層・4b層のいずれにも出土しているが、4a層に重点があり前期に属するものであろう。

網目文土器は、塞ノ神式土器との関連が考えられる。時期も塞ノ神Aa式に近いものと思われる。

中期は、前期に見られたような多様性、或いは土器文化の融合現象から脱却して凹線文土器に統一され、その構成の変化に時代の流れが見られる。本遺跡では、阿高式土器（第95図227-230）・南福寺平行の土器（第95図234・235）が出土している。従来、岩崎上層式としたものには、岩崎下層の土器に近いものと指宿式土器に近いものが含まれている。前者を、垂水市協和小学校校庭より出土した土器を標式として協和式とし、後者のみをそのまま岩崎上層式とする。本遺跡では、第95図237-239の土器が協和式に該当する。協和式は、中期終末に位置するものと思われる。

後期は、中期の凹線文が細線化する傾向を生ずる一方、貝殻縁を器面調整に使用するだけでなく、施文具として用いた文様が盛行する。後期のいま一つの特色は、前期の地域的特色をもつ土器文化に加えて、瀬戸内地域より伝播した磨消縄文土器が少量共伴出土することである。後期後葉に至って地域的特色をもつ土器文化は終末を迎え、かえって部分的存在にすぎなかった磨消縄文の系統の土器文化（三万田式土器・御領式土器）が、後期の終末に位置を占めることになった。本遺跡では、地域的特色をもつ土器のなかで最後の時期を占める草野式土器（第95図241・242）が出土している。

晩期は、地域的特色が失われ土器の器形が分化し、黒色研磨の精製土器と貝殻縁による条痕調整の粗製土器とが製作されるようになる。本遺跡では、研磨された土器片（第96図 250・251）が出土している。

(4) 土 器

○連点鋸歯文土器

第69図1の土器である。口径22.8cm、口唇部に平坦面を有し、器形は円筒形である。文様は口縁部の上端に近く、小さな円形よりなる連点文を横位に接近して二条、これとやゝ間隔をおいて下位に一条施文し、両者の間の空間を同様の連点文よりなる鋸歯文で埋めたもので、連点文帯以下の胴部には連点文に使用した施文具を用いて、縦位の平行沈線を密に施文している。胎土には石英の細かな粒子を含み、焼成は良好で、色調は黄褐色を呈し、器面は刷毛様のもので横なでして調整し、割合に平滑であるが、内面は粗である。

出土層位は、4 a層・4 b層・5層にわたっているが、4 b層に中心があり（第8表）、出土状況などより見て、4 b層の下部と中部の堺位に本来の層位があったものと考えられる。本遺跡で最も古い型式であるだけでなく、早期初頭の位置を占めるものと考えられる。

○石 坂 式 土 器

第71図5・第80図31-33の土器である。石坂上遺跡下層出土の土器を標式として名付けられた。円筒形平底の土器で、2個の山形隆起部をもつ波状口縁の土器（5・31・32）と、平坦な口縁の土器とがあり、直口で口唇部の平坦な土器（5・31-33）、口縁部が外反し、口唇部は蒲鉾状に膨隆したもの、口縁部外壁に2箇の三角状突起を有するもの（32）などがある。

土器面は内外ともに指頭で調整され、内面はかなり平滑なのが特色である。文様は調整された器面に、貝殻縁を施文具として施されている。口唇部には、篋による浅い刻線を有し、口縁部には、貝殻縁の刺突による羽状の連点文、同じく貝殻縁によって胴部には綾杉状の条痕文、底部外面には、横位の条痕文をそれぞれ施文している。

胎土には、石英・長石の粒子を混じり、焼成は良く、色調は黄褐色または紅褐色を呈する。

出土層位は、4 b層の中位に中心があり、撚糸文土器（第70図3）にやゝおくれで出現したもので、早期前半に位置するものと考えられ、土器文化の系統から見ると、連点鋸歯文土器の系列に属するものといえる。

貝殻を土器製作の工具として使用するものに轟式の系統の土器があるが、轟式系統の土器では、貝殻を器面調整具として用いているが、石坂式土器の場合は、施文具として使用している点が異なっており、系統の異なる土器文化として取扱う必要がある。

本遺跡出土の石坂式土器のうち、口縁部に把手状の三角状突起を有する土器（32）は、やや

後出のものと考えられる。復元した土器（5）は、口径15cm、高さ23.5cm、底径10.5cmである。たて長の楕円形補修孔を外面から穿孔しているのが見られる。石坂式以後に、吉田式・前平式が続くが、この系統の土器では、補修孔に同様の穿孔法を行なっているようである。

○吉田式土器

第79図26—29の土器である。大原遺跡第2層出土の土器を標式として名づけられた。円筒形平底の土器で、口縁は平担である。器壁・底部ともに薄く、土器内面は篋磨きされ華麗な文様を有する精巧な土器である。口唇部は平坦面をなして外傾し、浅い篋刻目を密に施文する。文様は、口縁部・胴部・底部外側の三部分に分けて施文されている。

口縁部の文様は、貝殻縁によって削り出した凸帯、又は楔状の凸帯を二列乃至三列に絡らすもの、貝殻縁を横位に密接に刺突して出来る文様帯を一行乃至二列めぐらすもの、木ノ実を横並びに押圧してできた文様帯と、貝殻縁の押し引きによる文様帯を、交互に三列めぐらすものなどがある。

胴部の文様は、貝殻縁による押し引き文と条痕文とを横位に交互にめぐらすもので、底部側面の文様は、篋による縦位の刻線を密接に施文するものである。

吉田式土器の文様の特徴は、帯状にめぐらした各種の文様帯が上下に交互に並んで装飾的效果を現わすことにあるといえ、押し引き文の手法もその一つといえよう。

本遺跡出土の吉田式土器は、口唇部の刻線を欠き、口縁部より直ちに押し引き文を施している。層位は4b層の中位上部に中心があり、早期中頃と見られる。石坂式に続く型式である。石坂式に続く型式であることは、大原遺跡の層序によっても明らかである。

○前平式土器

本遺跡では出土していないが、吉田式土器と関連があるので記述する。鹿児島市前平遺跡出土の土器を標式として名付けられた。器形には、平担な口縁をもつ円筒形平底の土器と、波状口縁で四箇の山形隆起部を有する角筒土器の二種類がある。一般に、器壁・底部ともに厚く、胎土には粗粒を含み、色調は赭褐色であるが、中には粒子の細かな土器もある。

口唇部には平坦面をなすものと、舌状断面のものがあり、平坦面では浅い篋刻みの沈線を施すものが多く、舌状断面のものには、口縁稜線に貝殻による刻目を施したものが多い。

口縁部は、貝殻縁を縦位又は横位に刺突した文様で飾られる。胴部は、横位または斜位に貝殻縁による条痕文が施され、更にこの上に重ねて貝殻縁による刺突によって縦線文・菱形文・連点文を施文し、或いは貝殻縁による縦位、菱形などの条痕文を施している。

なお、この他に楔形凸帯を、口縁下にとびとびに二段または三段に貼付したのも見られるが、吉田式土器では楔形凸帯が密接しているのに対し、前平式土器では凸帯に間隔があって、

その間に貝殻縁刺突文が施されており、その位置も口縁部文様帯より下位に施文されている。

底部外側には、縦位の刻線を施すことは、吉田式と同様である。

吉田式土器と前平式土器との差異は、器形では、前平式土器には角筒波状口縁の器形がふくまれるが、吉田式土器は口縁の平坦な円筒形の器形のみであるという点であり、文様では、前平式土器は貝殻条痕文の上に、更に刺突文・条痕文を重ねて施文しているが、吉田式土器は貝殻縁による押し引き文を施文するだけである。

石坂式土器では、連点鋸歯文土器の要素を貝殻縁を施文具として表現することが行なわれ、吉田式土器では、貝殻縁による各種の文様を交互にめぐらす方法で、文様効果を高める工夫が行なわれ、前平式土器では面の対比ではなく、文様の上に文様を重ねるという方法で新たな効果を生んでいる。しかし、この系列では前平式土器に至って、一応の極限に達したものと考えられる。

○円筒形条痕文土器

第71図6の土器である。口径21.5cm、高さ26cm、底径12.5cm、円筒形平底の土器で内外面ともに磨き仕上げである。器壁・底部は厚く、口唇部は蒲鉾状に丸味をもつ。文様は、口縁部に14条ないし16条の貝殻縁による条痕文を横位に施文したものである。

施文には、サルボウか、それに類似した貝殻を割って放射肋2条を有する施文原体と、放射肋5条を有する施文原体を作り、先づ2条の原体を用いて口縁端に沿って左より右へ引いて、3条の溝と2条の隆起線をめぐらす。次に5条の原体を用いて、2条の隆起線のうち下の隆起線に沿って上下にゆらし乍ら、右に引いて6条の溝と5条の隆起線をめぐらす。結果として、波状の条痕が施文されることになる。更に、再び2条の原体によって、前の文様に沿ってその下部に直線の条痕を施し、続いて5条の原体を用いて、波状条痕を施文する。最後に、2条の原体による直線條痕を施すが、磨きによって断続する結果となっている。施文の最初には、やや力が加わるために原体の貝殻縁の圧痕(図版21-6の右上)が残る。これによって土器面に施文するために、原体を一回に移動した長さは、最長24.3cm、中長17cm、最短11.2cmであった。これによると、器面を一周り施文するのに4回を要したことになる。

胎土は、砂粒を多く含み焼成良く、色調は黄褐色である。煮沸に使用したために底部付近は器面が剥離し、器面にはふきこぼれた汁が炭化して付着したあとが見られる。

出土層位は、4a層と4b層の堺で、早期終末に位置するものと思われる。石坂式土器にはじまった貝殻縁を施文具とする土器文化が、この型式で終末をつける。前平式で極限に達した貝殻縁施文の土器文化は、文様を口縁部に集約化し、簡素化・単純化する傾向に達して終結している。

○ 撚 糸 文 土 器

第70図3の土器である。口径31cm、高さ約32cm、胴部がやゝ張り頸部で僅かにしまり、口縁部は外反する器形で、底部は尖底に近い丸底であろう。口唇部は舌状断面をなす。

文様は、数本の繊維を束ねた紐を左撚りし、二本合わせて右撚りした（R { $\frac{1}{1}$ }）原体を押圧施文したものである。口縁部・頸部・胴上部は不規則ではあるが、右より左へ傾斜して施文し、胴下部では左より右へ傾斜して施文するか、或いは水平に施文している。口縁内面にも右より左へ傾斜した短い押圧施文が密接して行なわれている。

胎土は粒子は細かで、焼成はあまり良好ではない。色調は、胴部以下は黄褐色であるが、頸部以上は炭素の付着によって黒色を呈している。

出土層位は、4 a層・4 b層・5層にみられるが、中心は4 b層の中位にあり、出土状況から見ても、早期初頭に位置するものと見られ、連点鋸歯文土器に続くものと考えられる。

縄文系統の土器では最も古く、細石器に共伴した縄文土器片との関連も考えられ、南九州地域の縄文文化が意外に古いことを示している。

○ 撚 糸 文 土 器 片

第81図34-39の土器片である。同一個体の胴部付近の破片で、胎土は粒子を多く含み、焼成はやゝ良好である。外面は紅褐色、内面は灰黒色を呈し、内面には土器製作時の指頭による圧痕が見られる。表面には、左撚りの紐2本を合せて、右撚りした（R { $\frac{1}{1}$ }）原体を押圧施文したものである。第70図3の土器に比較すると、ともに無節右撚りの原体を押圧しているが、この土器の方が施文が密接し、層位はやゝ上位に位置している。同一時期か、或いは少し遅れるものかもしれない。

○ 凸 帯 撚 糸 文 土 器

第70図4の土器である。高さ20cm、胴径16cm、底径7.6cm、僅かに外反した口縁部から、頸部・胴部と変化なく下り底部へしまり、平底に終る器形である。胎土は粒子が細かで、器面は指頭でなでて仕上げし、割に平滑である。色調は黄褐色であるが、頸部の炭素が付着した部分は、灰褐色を呈する。口縁内面には、製作時の指の圧痕が一部にそのまま残されている。

文様は、舌状断面の口唇部に細い刻目を施し、これに接して断面三角形の凸帯を二条めぐらし、これにも刻目を施している。凸帯以下には右撚りの紐を棒に巻いた幅2cmの施文原体を縦に、底部まで廻転押捺した撚糸文を施し、この上に頸部から胴部へかけて8条ないし10条の篋描き凹線文を横位に施文したものである。

層位は、4 b層から4 a層にわたっているが、4 b層に中心があり、4 b層の中位と上位の

塚に位置するものと思われ、早期中葉よりやゝおくれるものであろう。

口縁部に絡縄凸帯をめぐらし、頸部には撚糸文に凹線文を重ねるなど、純粹の縄文系の土器文化から一歩を進めて結合の様相を示してくる状態は、前平式土器文化と軌を一つにするもので、早期後半には早くも文化融合の兆があることを示すものであろう。

○楕円形押型文土器 1

第73図9・10の土器である。縄文式土器の大部分が谷に近い第1地点か、第2地点北西部から出土したが、この土器は、中心部から遠く離れた第4地点から出土したものである。

9の土器は、口径25cm、底径8cm、高さは約25cmである。器形は、平底の底部から直線を描いて口縁部へ開いた深鉢形である。器壁はやゝ厚く、口唇部は丸味をもち、内面とともに施文はない。胎土は割合に粒子が細かで、焼成は良い。色調は黄褐色であるが、口縁部付近は炭素の付着によって黒褐色を呈している。

文様は、粒子の小さい楕円形押型文を、器面全体に施文している。施文原体の長さは約2.5cmあり、口縁に平行に横に廻転押圧を行なっているが、器面が傾斜しているために原体が平行に廻転しにくい。そのために原体をもちかえて、修正しながら施文を行なっている。この部分が器面に段状となって残り、あるいは扇形に原体を廻転施文したと思われる部分が見られる。胴部以下は、左から右へやゝ傾斜して施文し、底部付近では器形に応じた施文法を行なっている。

10の土器は、口径29cm、底径推計10cm、器高推計35cm、器形は9の土器に類似しているが、9に比較して胴部にやゝ張りが見られる。その他、胎土・色調・焼成・施文法なども9の土器に類似している。ただ楕円の粒子が心もち大きく、原体の長さもやゝ大きく3.5cmである。

層位は、4b層・4a層より出土しているが、出土状況などから見て4b・4a層の塚が、本来の層位と考えられる。早期の終りに位置づけられる。押型文土器文化の南九州への伝播もこの時期であろう。

○楕円形押型文土器 2

第72図7の土器である。第一地点E-8区の局部断層中より出土した。この部分では、水平に重なっていた地層が局部断層作用によって垂直に並列し、土器も地層とともに移動して4b層と4a層の塚に直立の状態ではほとんど完形のまま出土したもので、本来は横位であったと推定される。口径19cm、底径7.5cm、器高17cmである。

器形は、外反した口縁部から頸部へしまり、陵線に近い屈曲をもって胴部へ移行し、孤を描いて底部へ下り平底に終る。胎土は粒子が細かで、焼成は良く、色調は黄褐色であるが、頸部は、炭素の付着によって黒褐色を呈している。土器内面には、輪つぎの痕跡を示すくぼみがめ

ぐり、器面は指頭で、なでて調整され、指頭が止まった部分にできる粘土のしわが残されている。

文様は、楕円形の押型文を口縁部内面と、外面の殆ど全面に施文しているが、口唇部の外傾した平坦面と、底部外側には施文が見られない。施文原体は長さ2.6cm、内面では横に、外面では縦に廻転押捺している。但し、下腹部の半面は左より右へ斜めに施文している。

層位は前記の通りであるが、器体は4b層に接してはいるが、4a層中にふくまれており、第73図9・10の土器より後出のものかもしれない。早期の終りに位置するものである。

○山形押型文土器

第85図・第86図93—100・102・103・105—107の土器である。第1地点と、第2地点の北隅に出土している。口縁部が外反し、胴部は張らず底部へ移行する器形である。ただし105の土器は胴部に張りが見られる。文様は山形押型文を、土器外面では縦に、口縁内面には横に施文する。文様の単位は大きいものも多く、93—100の土器は2cm、102・103の土器は3cmであるが、他に101のような小単位のものもある。104・106の土器は同一個体と思われるもので、文様が錯そうしている。

層位は、単位の大きな押型文土器は、4b層・4a層のうち4b層に中心が見られるが、単位の小さなものは、4a層最下部に中心がある。いずれも早期の終りに位置するものと考えられる。

○細形格子状押型文土器

第86図108—111の土器である。細片が少量出土した。器形は外反した口縁部、内弯した頸部、張りのある胴部、底部への移行部分の破片などから推定すると、平底でやゝ胴が張り、頸部はしまつて、口縁部は外反する形である。胎土は粒子が細かで、焼成は良く、色調は灰褐色である。文様は蓆を思わせるような格子状文を、器面全体に縦位に、口縁部内面に横位に施文している。

層位は、4b層・4a層に亘っているが、その堺に中心があったと思われる。早期終りに位置するものであろう。

○石峰式土器

第78図18の土器である。昭和41年、第1地点の北東に隣接する宅地の発掘によって出土したものである。口径41cm、器高推計49cm、胴径推計40cm。器形は口縁部は外反し、頸部はしまり胴部はやゝ張り、底部へ直線を描いて下るもので底部は不明である。胎土は粒子が細かで、焼成は良く、色調は黄褐色で、頸部以上は、炭素の付着によって黒褐色を呈する。

文様は土器外面、外傾した口唇部平坦面、口縁部内面に楕円形押型文と変形燃糸文とが施文されている。楕円形押型文は普通のものであるが、変形燃糸文は特殊なもので、4条の燃糸が8字状に交叉したものである。変形燃糸文の施文原体は軸になる棒に樹脂などの粘質物を塗り、左撚りの繊維束2条を右撚りした紐（R { $\frac{1}{1}$ }）を8の字に巻いて、前記の粘質物で接着固定したもので、長さは楕円形押型文原体と同じで2.6cmである。

土器外面における施文は、楕円形押型文と変形燃糸文とを、口縁部上端から右へ傾斜して交互に施文し、胴部以下では上下に配するなどや、不規則な施文部位もみられる。口唇部には楕円形押型文を施文し、口縁部内面には変形燃糸文を2条、横位に施文している。

層位は、4b層の上面から10cm程の深さに至る間から一括出土したもので、他の押型文土器と同様に、早期の終りに位置するものと考えられる。縄文系の土器文化が早くより存在した本地方に、押型文化が伝播するや直ちに縄文系文化と結びついたものといえよう。

以上に挙げた土器の他に、第92図195の表裏に孤文を有する土器、全196の口縁に凸帯を有する土器、全197の微隆帯を有する土器などが早期に属するものと考えられるが、少量の出土であるため全貌が明らかでないだけでなく、時期も確言できない。

○手向山式土器

第69図2・第87図112—114の土器である。手向山遺跡出土の土器を標式として名付けられた。2の土器は、口径推定31cm、胴径27cm、器高推定28cmである。

器形は僅かに内弯する発達した頸部と、急に底部へ向って細まる胴部との継目に、刻目凸帯をめぐらして土器を上下に区分した形となっている。底部は小さな平底と考えられる。宮崎県耳載遺跡出土の手向山式土器など、頸部がより深く内弯したものも多い。

この型式の土器は、押型文・幾何学沈線文・曲線文・隆帯文・縄文・燃糸文・絡縄凸帯などの文様要素のうち、二種類ないし三種類を土器の部分に配置施文しているが、2の土器は、口唇部に刻目を施し、頸部には三角形・菱形を多重沈刻線で描いた、いわゆる幾何学を付し、胴部と口縁内面には、左撚りの繊維束を二条合せて右撚りした紐（R { $\frac{1}{1}$ }）を、押圧施文した燃糸文を施文し、口縁部と、頸部・胴部の堺とに一条の刻目凸帯をめぐらすものである。

112—114の土器は、H-9区から一括出土したもので同一個体と見られるものである。器形は、耳載遺跡の土器に類し、頸部は2の土器より強く内弯し、胴部との堺に一条の刻目凸帯をめぐらす。胴部以下は僅かに出土だけで、施文は不明であるが、器形では2の土器に一致するものと思われる。文様は口縁部内面と頸部に燃糸文を施す他、口唇部に太めの刻みを入れている。

層位は、2の土器は4b層・4a層・3層にわたるが、本来の位置は4a層下部と考えられる。112—114の土器は、4a層の中位に中心がある。手向山式の時期は前期初頭と考えられる。手向山式土器は、早期の各系統の土器文化の要素をはじめて結合して新しく生れた土器文化で

あるから、文化の新段階にはいったと見るべきで、手向山式以降を前期と見るべきであろう。

○平 楯 式 土

第74図11・12, 第75図13, 第87～91図の土器である。平楯貝塚出土の土器を標式として名付けられた。器形は、頸部と胴部との堺に刻目凸帯をめぐらすことで、手向山式土器と一致している。頸部から口縁部へ外反し、四個の隆起部をもつ波状口縁となっている。胴部はや、張りがあり、大きな平底に終る形である。口縁部には肥厚帯を有し、土器内面は平滑に磨きするのが特色である。文様の種類は、連点文・曲凹線文・幾何学凹線文・波状凹線文・結束縄文・絡縄凸帯などである。縄文系の文様で、早期に現われたのはほとんど押圧した撚糸文であったが、前期の平楯式土器に至ってはじめて斜行縄文の出現を見たのである。

施文には一定の法則があり、一定の部位に一定の文様が施されているのである。例えば、口縁部の肥厚帯には、先づ口唇部に半截竹管によって削った刻目を上面、或いは内外の稜線上に施し、肥厚帯面には半截竹管による連点と凹線とを用いて、菱形または三角形の連続文様を描くのである。

頸部には、波状の凹線または肥厚帯と同様の文様を付け、胴部との堺・肥厚帯との堺・中央の三ヶ所、またはその内二ヶ所に刻目凸帯をめぐらす。

胴部には、左撚りの繊維束2条を合せて右撚りした紐 ($R \{ \frac{1}{1} \}$) を、更に2条合せて左撚りし ($L \{ \frac{R}{R} \}$)、途中で片方の条で残りの条をからむようにして結束し、残余の部分を左撚りした施文原体を縦に施文する (12・13)。また、 $L \{ \frac{R}{R} \}$ と $R \{ \frac{1}{1} \}$ とを中央で連結し、それぞれ片方の紐で残りの紐をからんで結束し、続いてL 2条は右撚り ($R \{ \frac{L}{L} \}$)、R 2条は左撚り ($L \{ \frac{R}{R} \}$) して作った原体は中央に2個の結束をもち、左右に右撚りと左撚りの紐をもつものとなる。この施文原体を、縦に一回毎に原体の左右を交換して連続施文する (11)。

前者の場合は、中央に蛇行する撚糸文をはさんで両側に右に傾いた縄文が施文され、後者の場合は、2条の撚糸文をはさんで両側に羽状縄文が施文される。

胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好で、色調は、紅褐色・灰褐色・黝褐色などが見られる。

大きさは大小種々あり、11の土器は口径21cm、高さ22cm、底径10cmで小型であるが、形がよく整い、文様も美しく、平楯式土器中の逸品である。12の土器は、口径29cm、高さ28cm、底径13cmで中型である。胴部の強く張った特色ある器形である。13の土器は最も大きく、口径38cm、高さ推定40cm、底径推定21cmで容量が大きい。この土器は、実用の跡がよくのこり、煮沸によって煮汁がこぼれて炭化し、外壁に黒くしみついている部分が7ヶ所あり、いずれも山形隆起部をはずれているのは当然であるが、こぼれた場所が移動しているのは土器の据え具合が、時によってかわったためであろう。脆いと思われる土器が大事にされ、永く使用されていたことを示す好例であろう。土器に入れた食物が煮沸の際に残した今一つの跡は、土器の内面にある。煮汁の上限を示す線が頸部の下部の線と、それより更に10cm下に黒線となって残り、生活のあ

とを偲ばせる。

文様の中で、手向山式土器との関連が見られるのは、口縁部に見られる菱形・三角形などの幾何学文である。同様な文様が手向山式土器にもみられる。宮崎県跡江貝塚・種子島現和田ノ脇遺跡などからは、口縁部に鋸歯状の見事な沈線文を有する平椀式土器が出土しており、平椀貝塚からは、円筒形の胴部にラッパ状に開く口縁部をつけた平椀Ⅰ式土器が出土しているが、この土器は胴部に曾畑式土器の文様にそっくりの幾何学文が施されている。手向山式との関連と共に、やがて曾畑式土器が出現する下地となるものであろう。

第91図170—172の土器は、無文の平椀式土器である。第88図125の土器は、口縁部の肥厚の痕跡が屈曲となって残り、刻目凸帯が細隆線化し、頸部と胴部の堺の土器内面の稜線は、次に出現する塞ノ神式の特徴であり、移行形態としての様相を示している。第88図・第89図には、このような様相を示すものが見られる。

平椀式の層位は殆ど4 a層からの出土であり、中心は4 a層の下部にある。4 a層の中位に位置するものは移行型式に見られる。したがって、平椀式は前期前半に位置し、手向山式に続くものと言えよう。

○塞ノ神 A a 式土器

第76図14・15、第91図173・174・187の土器である。器形は、やゝふくらみのある円筒形の胴部にラッパ状に開いた口縁部の付くもので、口縁部が更に屈曲するものは平椀式の要素を残留するものである。底部はやゝ上げ底気味の平底である。内面は良く研磨され、口縁部と胴部の堺に明瞭な稜線を形成するのが特徴である。

文様は平椀式土器に引きつがれた、連点文・幾何学文・結束縄文のかわりに用いられた網目文または燃糸文である。口唇部には、細い刻目を一列につけたものと、内外の稜線上に刻目を施して、二列の刻目を有するものがある。口縁部には幾何学沈線文を施し、胴部との堺には、刻目凸帯の名残りの連点文をめぐる。口縁部が屈曲している土器にあっては、この部分にも連点文を施している。

胴部には、網目文または燃糸文を縦位に間隔をおいて施文し、平椀式の結束縄文の代りとしているが、塞ノ神の場合、胴部にも幾何学文・連点文を、網目文または燃糸文の上に重ねて施文するという新しい手法が行なわれ、施文法の革新が見られる。手向山式土器・平椀式土器では、単に各種の文様要素を集めて使用しただけで部分的に分離した状態であったが、塞ノ神式土器に至って各種の文様要素を融合して、一つの効果を上げようとするところみが行なわれるようになった。

14・15の土器は共に、口縁部の文様を欠くものである。173・174の土器は無文で、184の土器は胴部の破片である。

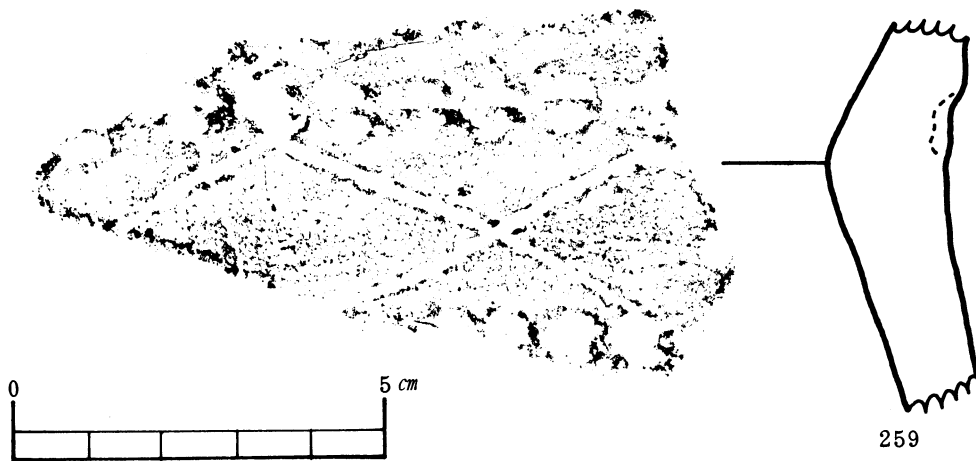
層位は、4 a層の中位または上位に中心があり、上位と中位の中ほどが本来の位置であろう。

前期前半に位置し、平椀式土器に続くものである。

塞ノ神A a式—塞ノ神A b式と続き、縄文系の要素を失なって、かわりに貝殻縁による刺突文の要素を加え、塞ノ神B c式・塞ノ神B d式と移行する。

○塞ノ神B d 式 土 器

第97図22・30、第96図249、第97図259の土器である。器形は、口縁部は外反し胴部へ移行する内面に明瞭な稜線を形成して、塞ノ神A a式からの特徴を残している。胴部は張りがあり、大型の平底に終る。外反する口縁部には直線的に開くものと、内弯するものが見られる。文様は、貝殻縁による刺突連点文、貝殻縁または篋描きによる菱形格子文を口縁部及び胴部に施文する。口唇部の刻目も貝殻縁による刺突によるものがあり、口縁部と胴部との堺の連点文も、貝殻縁による刺突文が施文され、縄文系の網目文・撚糸文が完全に影を潜め、貝殻縁文がこれにかわる。塞ノ神B c式以後、中期終末に至るまで縄文系の文様は見られなくなるのである。



第97図 塞ノ神B d 式 土 器

22・30・249の土器は同一個体に属し、胎土は粗粒を含み、焼成は通常で、刷毛様のもので器面調整を行ない、色調は褐色である。259の土器は、胎土が密で焼成は良く、土器内面は研磨されて平滑で、色調は灰褐色を呈している。

層位は、22・30・249の3片は4 a層から出土し、259の土器は3 a層下位から出土している。昭和54年8月に行なった北東の隣接地の補足調査の結果によれば、塞ノ神B d式土器が、4 a層の上位に集中出土することが判明した。以上の状況から見て、塞ノ神B d式土器は4 a層上位に位置するものと思われる。時期は前期中葉に属し、塞ノ神B c式に続くものと思われる。

○深浦式土器

第77図16, 第94図221—225の土器である。深浦遺跡出土の土器を標式として名付けられた。

器形は、口縁部は外反し、胴部は直線的に下り、ゆるやかに弯曲して丸底に終わる形で、口縁部の内弯するものも見られる。文様は、刻目のある隆帯と沈刻線からなり、三角形・菱形・放射状などの形に隆帯文を貼付け、その間の空間を同様な細い沈刻線で埋めるもので、その間に環状の隆帯文をあしらったものもある。この他に、貝殻縁によって連点状の鋸歯文を加えたものもある。器面は、内外ともに研磨されたものと、貝殻縁によって調整されたものがある。

16の土器は、胎土は粒子が細かで、焼成は良く、色調は灰褐色で、器面は内外とも研磨されている。

221—223の土器は、胎土は粒子が細かで、焼成は良好で、色調は黄褐色である。器面は内外ともに研磨されている。

224・225の土器は、胎土が粗で砂粒を多く含み、共に貝殻縁による連点鋸歯文が施されている。裏面は貝殻縁による調整が加えられ、224は灰褐色、225は紅褐色を呈している。

深浦式土器は、阿多貝塚出土のV類土器に、文様・器形ともに類似し、これに続くものと考えられる。

層位は、16の土器が3層下位に出土数の多いのが注意される。北手牧遺跡において、春日式土器の下層に出土して、前後関係が明らかになっている。前期後葉に位置するものであろう。

○春日式土器

第77図17, 第95図226の土器である。春日町遺跡出土の土器を標式として名付けられた。器形は、胴部はや・張り頸部で僅かにしまり、口縁部は外開きから内弯して、いわゆるキャリッパ形を呈する。底部は、周縁を糸底状に残し、内側を削った特徴のある上げ底である。器形には、他に上げ底の底部から直線状に開くバケツ状のものがある。

胎土は、粒子が細かで滑石を混ぜたものがあり、焼成は良好である。器壁は薄く仕上げられているのが特徴で、器面は、内外ともに浅い貝殻縁条痕を有する。

文様は、口縁部を細い粘土紐の渦巻文・波状文などで飾り、その間に、沈線文・連点文・凹線文をあしらって華麗な文様を形成している。胴部は無文のもの(17)もあるが、北手牧遺跡出土のものは胴部に楕円形の凹線文を二重に施文し、或いは楕円の内側に縦の凹線を二本加えるなどしたものを二段に連続施文して器面をめぐらし、楕円文の間には、縦にふと目の連点を二列に並べるなどした見事な曲線文を施文している。

直線を組み合わせたこれまでの文様から、渦巻文・曲線文を特色とする春日式土器が出現したことは唐突の感があるが、中期の並木式土器との関連は明瞭である。前期の主な流れをなした融合文化は、春日式土器で終る。

層位は3層の上位であるが、3層では上下の混交が行なわれているために、層位による判断が困難である。前に述べた北手牧遺跡では、深浦式土器の上層から出土していることで、春日式土器の時期を推定することができよう。前期終末に位置するものと思われる。

次に、前期におけるその他の系統の土器について述べよう。

○菱形押型文土器

第72図8の土器である。口径24cm、器高推計22.5cm、底径約9cm、胴径約18.5cm。器形は、重心の低い安定した土器で、胴が張り、頸部でしまり、口縁部は外反する形である。文様は、中に一字を囲んだ四重の菱形押形文である。施文原体は長さ約3cmあり、土器外面、口唇部、口縁部内面に施文が見られる。外面では縦に回転押圧しているが、口唇部も同時に施文している。なお、外面の施文は文様の一部重複が行なわれているために、交錯した文様が見られる。口縁内面は、横位に一回だけの施文のため重複が見られない。

層位は、4b層・4a層にわたるが、4a層が主であり、その内上位と下位に集中が見られる。4a層の下位と中位の堺あたりが本来の層位であろう。押型文土器の最終期のものと考えられる。前期前葉に位置し、手向山式土器より僅かに遅れるものかもしれない。

○網目文土器

第83図77、第84図78の土器である。器形は、胴部はやゝ張り頸部はしまり、口縁部は外反する。底部は不明である。胎土は粒子が細かで、焼成良く、色調は黄褐色である。器面は、内面外面ともに指頭でなでて仕上げ、その上に施文原体を廻転押捺している。

77の土器は、左撚りの繊維束を用いて施文原体を作っている。原体の長さは約3cmで、外面は縦に、内面は横に一系列施文している。この土器は、細い棒で器面をつき刺したあとが見られる。

78の土器は、左撚りの繊維の束を右撚りした紐で施文原体を作っている。原体の長さは3cmあまりで、施文方法は、77の土器と同様である。

層位は、4a層の中位に中心がある。前期前葉に位置するものと考えられ、塞ノ神Aa式に平行か、或いはやゝそれよりも早い時期であろう。塞ノ神Aa式土器に見られる網目文と関連があるものと考えられる。

○変形撚糸文土器

第82図、第83図55-70の土器である。器形は、胴部に張りがあり頸部はやゝしまり、口縁部は外反する形である。石峰式に見られる撚糸文に類似したもので、関連のあるものと考えら

れる。施文原体は、左撚りまたは右撚りの撚り合せた紐を8字状に巻いたもので、はじめに紐を密に棒に巻き、その上に8字状に更に巻き重ねたもの(66)もある。また、施文の際に前後の施文を一部重ねて施文することによって孤文の連続した形となったもの(62・64・67)などもある。変形撚糸文と楕円形押型文とが結合して石峰式が発生したものか、石峰式から変形撚糸文が派生したものか、現在のところ不明であるが、層位的にはむしろ後者の考え方も成り立ちそうである。前期前葉に位置するように考えられる。

○轟式土器

第94図217の土器である。貝殻縁による器面調整が土器の内面・外面に加えられ、浅い条痕が横位に残されている。器形は尖底であるが、上部を欠くために全容は不明であるが、轟式の底部と考えられる。前期後半に位置するものと考えられ、塞ノ神B d式の後に来るものと考えられる。

○曾畑式土器

第94図218-220の土器である。3片であるが、内1片は表層の出土であるが、残りの2片はF-6区とG-4区と、互いに約20m内外の距離をもって出土しているが、共に3層から出土している。黒川洞穴では、轟式土器出土層の上層から曾畑式土器が出土していることから、轟式土器に続く時期に位置することが考えられる。

凹線による多重菱形文土器は、すでに早期に石踊遺跡から出土(第98図260)しており、前期初頭には、手向山式土器の頸部・口縁部の文様に、重線によって描かれた鋸歯文があり(手向山・白坂)、石峰出土の手向山式土器(第69図2)は、菱形と三角形を組合せた重線文を施文している。手向山式土器に続く平椀式土器の口縁部には、殆ど菱形・三角形の重線文が施されていることは、本遺跡の出土遺物が示すとおりであり、跡江貝塚・田ノ脇遺跡出土の平椀式土器の口縁部には、重線よりなる鋸歯文だけが単純に施文されている。そして平椀貝塚では、口縁部は無文で、胴部に重線鋸歯文のみを全面に施文した平椀I式が出土しているのである。この土器は、曾畑式土器によく似たものである。

石峰遺跡では、4 a層から凹線による鋸歯文と思われる土器片(第92図204)が出土しており、平椀式土器に続く塞ノ神式の各型式土器においても幾何学文の要素は、継続して行なわれているのである。したがって、この後に幾何学文のみからなる曾畑式土器が出現したのは当然の帰結というべきで、現われるべくして現われたものというべきであろう。

曾畑式土器の幾何学文は、阿多V類に引き継がれ、続いて深浦式にその系統を見ることができるのである。

○斜行凹線文

第91図188—191, 第92図192の土器である。器形は胴部が張り、頸部がやぶしまつて、口縁部は外反する形である。器面は指頭によるなで仕上げである。胎土は粒子が細かで、焼成は良く、色調は灰褐色で、191の土器は煮沸のために、胴部内面に焼けただれて無数のすゝが見られる部分がある。文様は鋸歯状の施文具を用い、左より右へ僅かに傾斜して器面をかくように引いて施文したものである。191の土器は、この文様の上に更に右から左へ急角度をもって傾斜した小連点を間隔をもって施文している。口縁内面には、外面と同じ施文具を縦に引き、横位の連点を施している。188の土器は、器面に施文した工具を用いて、口唇部にも刻目を施している。

層位は4 a層下位に中心があり、前期初頭に位置するものと考えられる。

○縄文土器

第83図71—74の土器である。71の土器は、L { $\frac{R}{R}$ の原体を縦に施文したもので、口唇部も同じ施文原体を、右より左へ廻転押捺した縄文を施したものである。72の土器は複節縄文、73の土器は単節縄文、74の土器は複節縄文をそれぞれ施文している。層位がそれぞれ異なっており、文様に差異があるので一概に言えないが、大部分は前期に属するものであろう。

以上が、前期のうち融合形態の土器以外のものである。次に、中期以降は出土量も少なく、型式も単純であるから、時期別に一括して述べる。

○中期の土器

中期は、凹線文を施す単一な文様と、底部が独自の形態をもつ深鉢形とに特徴がある。本遺跡では、阿高式（第95図227—230）・南福寺式平行の土器（第95図234・235）・岩崎上層式土器（第95図237—240）が出土しており、第96図258のように、阿高式土器の底部とわかるものも出土している。岩崎上層式には指宿式に近い形態と、岩崎下層式に近い形態とがあり、垂水市協和小学校遺跡から出土した土器が、岩崎下層式に近い型式だけを出土するところから、これを協和式と呼ぶことにしたい。本遺跡出土の岩崎式は、いわゆる協和式に該当するものの一部である。

○後期の土器

後期の土器は、中期の土器に見られた凹線文から細い沈線文を施すようになり、更に早期に

見られた貝殻縁を施文具として使用する手法が廻り、同時に器面調整にも使用されるようになる。一方、瀬戸内地方から波及してきた磨消縄文土器が、地域の土器に少量共伴するという現象が、中期との区別を明確にさせる。そして、地域の土器文化は草野式土器を最後として終末を迎え、磨消縄文系統の土器文化にその地位を譲ることになる。

本遺跡では、後期の土器としては指宿式に近い沈線文を施した第95図 231・232の土器、および草野式土器（第95図 241・242）が出土している。

○晩期の土器

第96図 250・251の土器である。外反する口縁部で、内外面とも篋磨きされている。黒川式土器に属する深鉢形土器であろう。

第6表 縄文土器一覧表

插图	番号	型式名 (器形・文様)	出土区	層位					
				I	II	III	IVa	IVb	V
69	1	連点鋸齒文	D-8					○	
	2	手向山	F-4					○	
70	3	撚糸文	E-9					○	
	4	凸帯撚糸文	E-7				○		
71	5	石坂	D-8					○	
	6	円筒形条痕	G-6				○		
72	7	楕円形押型	E-8				○		
	8	菱形押型	D-6				○		
73	9	楕円形押型	C-24					○	
	10	楕円形押型	B-24					○	
74	11	平楯	B-9				○		
	12	平楯	C-6				○		
75	13	平楯	D-6				○		
76	14	塞ノ神	C-5				○		
	15	塞ノ神	D-3				○		
77	16	深浦	D-4			○			
	17	春日	G-10			○			
78	18	石峰							
79	19	条痕文	E-4				○		
	20	〃	E-4				○		
	21	〃	D-4			○			
	22	〃	G-4				○		
	23	〃	E-4				○		
	24	〃	E-4				○		
	25	貝縁刺突文	F-4				○		
	26	吉田	C-5					○	
	27	〃	B-6					○	
	28	〃	B-6					○	
80	29	〃	E-8	○					
	30	条痕文	G-4				○		
	31	石坂	E-8					○	
	32	〃	D-8					○	
	33	〃	E-8					○	

插图	番号	型式名 (器形・文様)	出土区	層位					
				I	II	III	IVa	IVb	V
81	34	撚糸文	F-8					○	
	35	〃	F-8					○	
	36	〃	F-8					○	
	37	〃	F-8					○	
	38	〃	E-8					○	
	39	〃	F-8					○	
	40	〃	D-4					○	
	41	〃	C-6					○	
	42	〃	E-4					○	
	43	〃	F-4					○	
	44	〃	D-8					○	
	45	〃	E-4			○			
	46	〃	E-4			○			
	47	〃	F-4					○	
	48	〃	E-4					○	
	82	49	〃	E-4					○
50		〃	F-7					○	
51		〃	F-7					○	
52		〃	F-7					○	
53		変形撚糸文	F-7					○	
54		〃	E-4					○	
55		〃	C-8					○	
56		〃	E-4	○					
57		〃	C-4					○	
58		〃	E-4	○					
59		〃	F-4					○	
60		〃	D-4					○	
61		〃	E-4					○	
62		〃	G-4					○	
63		〃	G-4					○	
64		〃	G-4					○	
65		〃	E-4					○	
66		〃	E-4					○	

挿 図	番 号	型 式 名 (器形・文様)	出 土 区	層 位					
				I	II	III	IVa	IVb	V
82	67	変形燃糸文	E-4				○		
	68	〃	E-4				○		
83	69	〃	E-4				○		
	70	〃	B-4	傾 斜 面					
	71	繩 文	E-12				○		
	72	〃	H-4					○	
	73	〃	D-4				○		
	74	〃	D-4				○		
	75	〃	E			○			
	76	〃	C-5				○		
	77	網 目 文	F-4				○		
	84	78	〃	F-4				○	
79		〃	D-7				○		
80		〃	D-4				○		
81		〃	D-4				○		
82		〃	F-4				○		
83		楕円押型文	D-4				○		
85	84	〃	E-5			○			
	85	〃	E-4				○		
	86	〃	G-4					○	
	87	〃	D-4				○		
	88	〃	E-5	○					
	89	〃	E-5	○					
	90	〃	G-4				○		
	91	〃	F-5				○		
	92	〃	F-4					○	
	93	山形押型文	B-9					○	
85	94	〃	C-5				○		
	95	〃	表採						
	96	〃	F-5				○		
	97	〃	F-8	○					
	98	〃	F-8					○	
	99	〃	D-6				○		

挿 図	番 号	型 式 名 (器形・文様)	出 土 区	層 位						
				I	II	III	IVa	IVb	V	
85	100	山形押型文	D-7				○			
	101	〃	E-4				○			
	102	〃	F-10					○		
	103	〃	表採							
	104	〃	D-4				○			
	105	〃	B-4					○		
	86	106	〃	D-4				○		
		107	〃	B-7					○	
		108	細線格子状 押型文	B-5				○		
		109	〃	B-6					○	
		110	〃	B-5					○	
111		〃	B-5				○			
87	112	手 向 山	H-9				○			
	113	〃	H-9				○			
	114	〃	H-9				○			
	115	平 楸	C-8				○			
	116	〃	D-7				○			
	117	〃	B-6				○			
	118	〃	E-6				○			
	119	〃	B-6				○			
	120	〃	C-7				○			
	121	〃	B-6				○			
	122	〃	B-6				○			
	123	〃	C-7				○			
	124	〃	C-5				○			
	88	125	〃	D-4				○		
126		〃	C-4	傾 斜 面						
127		〃	C-5				○			
128		〃	C-5				○			
129		〃	C-5				○			
130		〃	C-5				○			
131		〃	D-5				○			
89	132	〃	C-5				○			

挿 図	番 号	型 式 名 (器形・文様)	出 土 区	層 位					
				I	II	III	IVa	IVb	V
89	133	平 椀	C-5				○		
	134	〃	C-7					○	
	135	〃	D-4				○		
	136	〃	D-5				○		
	137	〃	D-4				○		
	138	〃	C-5				○		
	139	〃	C-5			○			
	140	〃	表採						
	141	〃	C-8				○		
	142	〃	C-7				○		
	143	〃	C-7				○		
	144	〃	B-5				○		
	145	〃	C-5				○		
	146	〃	B-6				○		
	147	〃	B-6				○		
	148	〃	表採						
	149	〃	C-5				○		
	150	〃	D-8				○		
	151	〃	B-6				○		
152	〃	D-8				○			
153	〃	B-6				○			
154	〃	E-4				○			
155	〃	E-4				○			
156	〃	F-4				○			
157	〃	E-4				○			
158	〃	表採							
159	〃	B-6				○			
160	〃	B-6					○		
161	〃	B-5				○			
162	〃	F-4					○		
163	〃	E-4				○			
164	〃	E-4				○			
165	〃	C-4		傾斜面					

挿 図	番 号	型 式 名 (器形・文様)	出 土 区	層 位					
				I	II	III	IVa	IVb	V
90	166	平 椀	D-4				○		
	167	〃	C-5				○		
	168	〃	C-7				○		
	169	〃	D-8				○		
	170	〃	C-5				○		
	171	〃	B-5				○		
	172	〃	B-5				○		
	173	〃	D-4				○		
	174	〃	C-6				○		
	175	〃	D-5					○	
91	176	〃	E-4			○			
	177	〃	C-4				○		
	178	〃	C-6				○		
	179	〃	D-4				○		
	180	〃	D-4				○		
	181	〃	B-4	傾斜面					
	182	〃	D-4				○		
	183	〃	C-6				○		
	184	〃	D-4				○		
	185	〃	C-5				○		
	186	〃	C-6				○		
	187	〃	C-6				○		
	188	斜行凹線文	E-5					○	
	189	〃	E-5					○	
	190	〃	G-10				○		
	191	〃	B-6				○		
	192	〃	E-5				○		
	193	刻目細隆帯 口縁	C-5				○		
	194	刻目細隆帯 底部	C-5				○		
195	表裏孤文	G-10					○		
196	口縁凸帯	F-4					○		
197	微隆帯	C-21					○		
198	ヘラ磨き	C-21				○			

挿 図	番 号	型 式 名 (器形・文様)	出 土 区	層 位						
				I	II	III	IVa	IVb	V	
92	199	無 文	C-4	傾斜面						
	200	〃	C-5				○			
	201	無文(口縁)	F-8					○		
	202	〃(胴部)	F-8					○		
	203	〃(底部)	B-6				○			
	204	凹 線 文	D-4				○			
	205	貝殻刺突文	E-4				○			
	206	円筒形波状文	F-4				○			
	207	二重施文	D-4				○			
	208	平行連点文	E-5					○		
	209	口縁把手	G-10				○			
	210	連点波状文	C-4				○			
	211	波 状 文	E-5				○			
	212	刻目凸帯裏 面縄文	F-4				○			
93	213	複合押型文	C-24					○		
	214	平 底	E-5					○		
	215	〃	E-7				○			
	216	〃	D-4				○			
94	217	轟(尖底)	A'-30			○				
	218	曾 畑	F-6			○				
	219	〃	F-6	○						
	220	〃	G-4			○				
	221	深 浦	B-9	○						
	222	〃	表採							
	223	〃	D-9	○						
95	224	〃	F-8			○				
	225	〃	F-8			○				
	226	春 日	F-10				○			
	227	阿 高	4地点							
	228	〃	〃							
	229	〃	〃							
	230	〃	G-4				○			
	231	凹 線 文	E-11				○			

挿 図	番 号	型 式 名 (器形・文様)	出 土 区	層 位							
				I	II	III	IVa	IVb	V		
95	232	凹 線 文	E-11			○					
	233	条 痕 文	E-11			○					
	234	岩 崎 上 層	E-7			○					
	235	〃	E-7			○					
	236	〃	D-7			○					
	237	〃	F-12			○					
	238	〃	F-12			○					
	239	〃	E-11			○					
	240	〃	D-13			○					
	241	草 野	D-5			○					
	242	〃	D-5			○					
	96	243	刻目凸帯	D-7	○						
		244	条 痕 文	C-7			○				
		245	〃	E-11			○				
246		〃	G-10			○					
247		〃	E-12		○						
248		貼付け凸帯	F-12			○					
249		貝殻刺突格 子文	G-4				○				
250		研 磨	E-5			○					
251		〃	D-5			○					
252		平 底 (底に縄文)	A-30		○						
253		平 底	E-7			○					
254		〃	C-18			○					
255		〃	E-4			○					
256		〃	E-15			○					
97	257	上 げ 底	B-19			○					
	258	阿 高 底 部	4地点			○					
	259	塞ノ神B	D-6			○					
98	260	幾何学文	志布志町石踊遺跡								
	261	爪 形 文					○				

∴18, 261 は河口貞徳による昭和41年発掘調査の資料である。

第7表 南九州縄文土器編年表

<p>○ 大 平 ○ 上 場 木 場(縄文)</p>	<p>草創期</p>
<p>石 踊(凹線菱形文) 石 峰 手向山 平 椀 I 凹線文(石峰) 曾 畑</p> <p>花ノ木 連点鋸齒文 石 坂 吉 田 前 平 凹筒形条痕文</p> <p>燃 糸 文 凸帶燃糸文</p>	<p>早期</p>
<p>押型文 菱形押型文 塞ノ神 Aa 塞ノ神 Ab 塞ノ神 Bc 塞ノ神 Bd</p> <p>阿 多 V 深 浦 春 日</p> <p>網 目 文</p>	<p>前期</p>
<p>岩 崎 協 和 凸帶文</p> <p>並 阿 木 高 ○ ○ ○ 南 福 寺</p>	<p>中期</p>
<p>岩崎磨消 福田 K I 平 城 鐘ヶ崎 西 平 中 岳 I 中 岳 II 三 万 田 御 領</p> <p>岩崎上層 指 宿 市 来 ○ ○ 草 野</p> <p>出 水 北久根山</p>	<p>後期</p>
<p>上加世田 入 佐 黒 川 井 下 下 原</p>	<p>晚期</p>

第8表 土器層位別頻度表 (4層)

挿図番号	69	70	81	80	80	71	79	70	92	92	92	92	72	84, 85
遺物番号	1	3	34~39	31, 33	32	5	26~29	4	195	196	197	198	7	83-92
型式	連点鋸筒文 (凹筒形)	燃糸 (復元文)	燃糸 文	石坂 式	石坂 (把手) 式	石坂 (復元文) 式	吉口 (啓刻目な 田)	凸帶 (復元文) 燃糸文	表裏 弧文	口縁 凸帶	微隆 帶	篋磨 研	槽凹形 押型文 (完形)	槽凹形 押型文
層位														
表						1								1
I			2			1								3
II						1								
III	上	1	1			1								
	中			1										1
	下			1		2								
IVa	上	5 13	1 1	7 11	1 5	1 14		1 11						2 9
	中	2 5	8 8	16 26	1 5	2 29	3 9	2 22	5 13					10 45
	下	1 3	11 11	9 15				1 11	11 30			1 33	29 100	1 5
IVb	上	4 11	43 43	15 24			12 35	1 11	10 27					7 32
	中	21 55	37 37	15 24	1 36	3 43	16 47	3 33	10 27	1 100	1 100	3 100	2 67	2 9
	下	2 5			1 4	1 14	3 9	1 11	1 3					
V	3 8	1 1												
計	39 Na21 Nb71 (38) V 8	10 Na20 Nb80 V 1	67 Na52 Nb48 (62)	22 Na10 Nb90	7 Na43 Nb57	40 Na9 Nb91 (34)	11 Na44 Nb56 (9)	37 Na43 Nb57	1 Nb100	1 Nb100	3 Nb100	3 Na33 Nb67	29 Na100 Nb100	27 Na59 Nb41 (22)

挿図番号	89	76	76	91	91	92	79	92	92	92	92	92	92	92
遺物番号	132・133 139 他	15	14	173・174 177-186	187	193	25	199-203	204	205	206	207	208	209
型式	平 樽	塞ノ 神 Aa (小) (復元文)	塞ノ 神 Aa (大) (復元文)	塞 (無文) 神	塞ノ 神 Aa	刻目 細隆 帶	凹 筒 痕 文 自 線	無 文	凹 (幾何学文) 線	貝 縁 刺 突 文	縦 位 波 状 文 (凹筒形)	二 重 施 文 波 状 文	平 行 連 点 文 露 目 五 段 連 点 文	特 (把 手) 殊
層位														
表				1										
I				2										
II														
III	上	2		1		1								
	中	3	1	1	6									
	下	8		5	5		2		1					
IVa	上	13 32	5 83	17 23	35 38		7 41	1 17	3 30			1 100	1 100	
	中	19 46	1 17	30 41	30 33	1 100	7 41	2 33	3 30	1 100	1 100			
	下	9 22		24 32	22 24		3 18	1 17	2 20		1 100			1 100
IVb	上			2 3	2 2			1 17	1 10					
	中			1 1	3 3			1 17	1 10					
	下													
V														
計	57 Na100 (41)	7 Na100 (6)	80 Na96 (74) Nb4	106 Na95 (32) Nb5	1 Na100	20 Na100 (17)	6 Na66 Nb34	11 Na80 (10) Nb20	1 Na100	1 Nb100	1 Na100	1 Nb100	1 Na100	1 Na100

註 破線の左側枠内の数字は土器片数，右側枠内の数字は土器片総数に対するパーセント。但し攪乱等による浮きあがり片は総数よ

73	73	85, 86	86	86	72	86	71	91	91	91, 92	69	87	84	83	84
9	10	93-100	102-103	104-107	8	108-111	6	191	190	188-189 192	2	112-114	78	77	79, 80
槽 凹形押型文 (復元)	槽 凹形押型文 (復元)	山形 押型文 (単位2cm)	山形 押型文 (単位3cm)	山形 押型文	菱 形押型文 (復元)	細押 線格型 子状文	凹 筒形条痕文 (復元)	斜 行凹線文 (櫛描)	斜 行凹線文 (櫛描)	斜 行凹線文 (櫛描)	手 沈線凸 得燃悉 向山	手 (燃糸 凸帶) 山	網 (復元) 目文	網 (運点 を重ぬ) 目文	網 目文
		1			1										
		3			1					1	2				
					2						4	1			
			1				1				2		1		
		3 25	3 10	2 15	22 38			1 20			10 13	2 10			1 50
7 41	10 23	4 33	7 24	2 15	9 16	1 20	1 8	2 40		2 29	19 24	18 90	6 50	8 100	1 50
○	○	3 25	5 17	6 46	17 30	2 40	6 50	2 40	1 100	3 43	38 48		2 16.6		1 50
	21 48		13 45	3 23	5 9	○	4 34			2 29	9 12		2 16.6		
10 59	13 29	2 17	1 4		4 7	2 40	1 8				2 3		2 16.6		
17 Na41 Nb59	44 Na23 Nb77	16 Na88 (12) Nb17	30 Na51 (29) Nb49	13 Na76 Nb23	61 Na84 (57) Nb16	5 Na60 Nb40	13 Na58 (12) Nb42	5 Na100 Nb	1 Na100	8 Na72 (7) Nb28	85 Na85 (77) Nb15	21 Na100 (20)	13 Na67 (12) Nb83	8 Na100	2 Na100

4層 ← ○ → 3層

92	93	93	92	94	94	77	94	94	77	95	95	95	95	95	95
212	214	216	194	217	218-220	16	224-225	221-223	17	226	230	227-229	234-235	236	237-240
刻 目凸 帯 (裏面 縄文)	平 (上げ 底)	平 底	平 底	轟 (尖底)	曾 畑	深 (復元 式) 浦	深 浦	深 浦	春 (復元 式) 式	春 日 式	阿 高	阿 高	南 福 寺 並 行	岩 崎 上 層 並 行	岩 崎 (協 和) 層
				1				4							
					1	1									
						3 23			34 100				2 50	1 100	1 25
				11 100	2 100	4 31	13 100				7 100		2 50		2 50
						6 46									1 25
		1 100								1 100					
1 100			1 100												
	1 100														
1 Na100	1 Na100	Na100	1 Na100	11	2	18	18	4	84	1	7	4	4	1	4

り減じ()内で処理した。

82, 83	84	83	81, 82	81	81	74	74	75	87-90	挿図なし	91	88
55-70	81, 82	71-74	50-52	47-49	41-46	11	12	13	115-121 他		170-172 175	125
変形 燃糸文	網目・ 燃糸	縄 文	燃 糸 文	燃 糸 文	燃 糸 文	平 (復元完 小)	平 (復元完 中)	平 (復元完 大)	平 楯	平 楯	平 楯	平 楯
									3			
							1					
									16		4	
		1	4		1		2		18	1	1	
2				2	9			2	20	1	1	1
2 13		1 14	21 77	1 20	1 20	15 27	20 21	15 16	70 28	4 31	9 24	4 50
5 31	2 100	5 72		3 60		9 17	21 22	30 32	101 40	8 62	9 24	4 50
3 19			4 15	1 20	1 20	27 49	55 67	48 60	69 27		19 50	
1 6		1 14	1 4		2 40	4 7		1 1	9 3	1 7	1 2	
4 25			1 4		1 20			1 1	3 1			
1 6									2 1			
18 Na63 (16) Nb37	2 Na100	8 Na86 (7) Nb14	31 Na92 (27) Nb8	7 Na100 (5)	15 Na40 (5) Nb60	55 Na93 Nb7	99 Na100 (96) Nb	98 Na98 (96) Nb2	311 Na95 (254) Nb5	15 Na98 (13) Nb7	(44) Na98 (38) Nb2	9 Nb100 (8)

95	96	95	96	96	96	96	96	96	96	96	96	96
241・242	250・251	231・232	243	248	246	245	254	252	253	256	255	257
草 野	晩 期	沈 線 文	刻 目 凸 帯	口 縁 三 角 断 面	貝 条 (表 裏)	貝 条 (表 裏)	平 (阿 高) 底	平 (繩 文 らし き) 底	平 底	平 底	平 (内 外 条 痕) 底	上 げ 底
			1									
	4 11							1 100				
1 17	10 27	2 18		1 100		1 100					1 100	
5 83	18 49	9 82			1 100		1 100		2 100	1 100		1 100
	2 5											
	3 8											
6	37	11	1		1	1	1	1	2	1	1	1

第9表 土器移動表（4層）

挿図番号	71	72	72	71	69	74	74	75	76	76	70
遺物番号	5	7	8	6	2	11	12	13	15	14	4
完・否	完	完	完	完	完	完	完	完	完	完	完
型式名	石 坂	楕 円形 押型	菱 形 押 型	円 筒 形 条 痕	手 向 山	平 楕 (小)	平 楕 (中)	平 楕 (大)	塞 ノ 神 (小)	塞 ノ 神 (大)	凸 帯 燃 糸 文
拡散度	5	1	7	2	4	1	2	5	3	7	3
移行度	4	1	5	4	5	4	3	5	2	5	5
集中度	層	Ⅳb中	Ⅳa~Ⅳb	Ⅳa上	Ⅳa下	Ⅳa下	Ⅳa下	Ⅳa下	Ⅳa上	Ⅳa中	Ⅳa下
	%	47	100	38.5	50	48.7	49	57	50	83.3	40.5
集中度	層	Ⅳb		Ⅳa上		Ⅳa下	Ⅳa下	Ⅳa下		Ⅳa下	Ⅳa下
	%	32		45		54	69.2	60.9		42.8	30.5
出土状況		DE	E	BCDE	FG	DEF	B	C	BCDE	CD	BCDE
		7 2 8 197 9 91	8 29	4 1 5 9 1 1 6 1 6 4 4	6 5 7	4 6 1 5 6 1 5 1 6 1	9 5 2	6 8 2 7 1 8	5 2 1 1 6 6 8 0 8	3 3 6 4 3	4 1 2 6 5 3 4 7 1 6 1 1 3

4層 ← → 3層 土器移動

挿図番号	91	89	83	82, 83	91	91, 92	83	94	94	77	77
遺物番号	170-175	132・133・139	77	55-70	191	188・189・192	71-76	217	218-220	16	17
完・否	片	片	一部復元	片	片	片	片	一部復元	片	完	完
型式名	平 楕	平 楕	網 目 文	変 形 燃 糸 文	斜 行 凹 線 文	斜 行 凹 線 文	繩 文	轟	曾 畑	深 浦	春 日
拡散度	8	6	3	6	1	3	6	1	2	2	1
移行度	4	3	4	7	3	3	3	1	1	3	1
集中度	層	Ⅳa下	Ⅳa中	Ⅳa中	Ⅳa中	Ⅳa下	Ⅳa下	Ⅳa中	Ⅲ中	Ⅲ中	Ⅲ下
	%	50	46	50	31	40	43	72	100	100	46.1
集中度	層	Ⅳa下	Ⅳa中	Ⅳa中			Ⅳa下				
	%	90	65.3	45.4			60				
出土状況		BCD	BCD	EFG	BCDEFG	B	E	A'	FG	DE	G
		4 1 5 20103 6 2 2 7 1 8 4	4 2 4 5 2 2 2 6 3	4 1 1 1 3	1 1 1 2 1 3 5 1 6 1	6 5	4 2 5 5 6 1	C-5, 1 D-4, 2 E-10, 1 F-12, 1 G-4, 1 H-4, 1	4 1 5 2 6 2	4 9 5	10 3 4

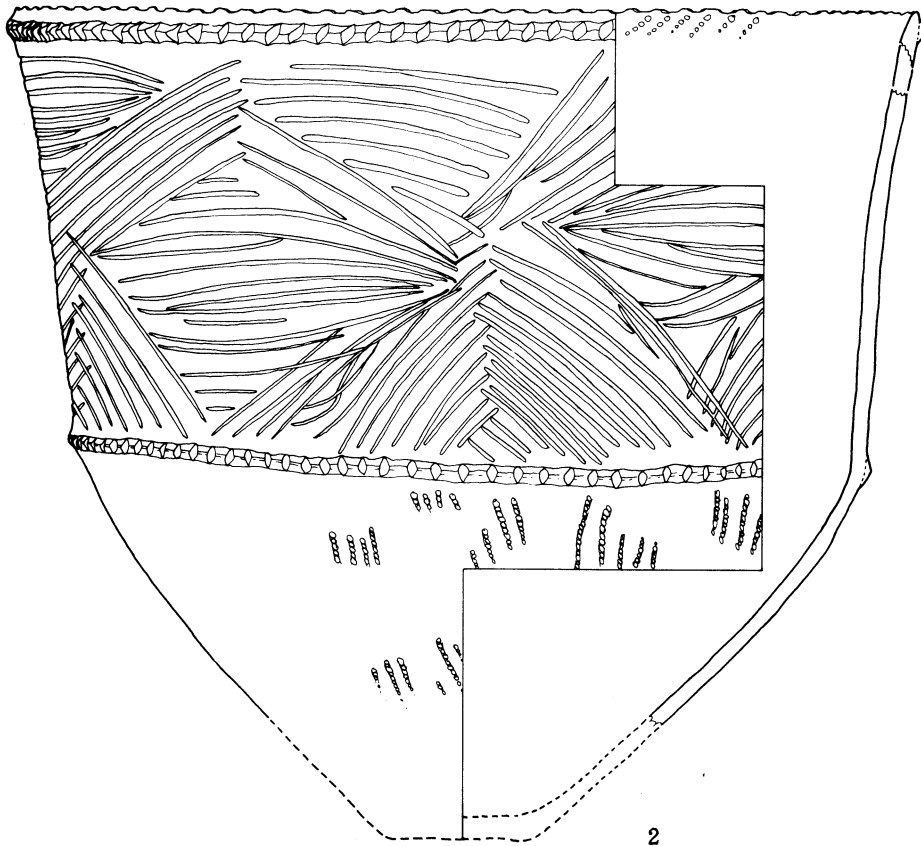
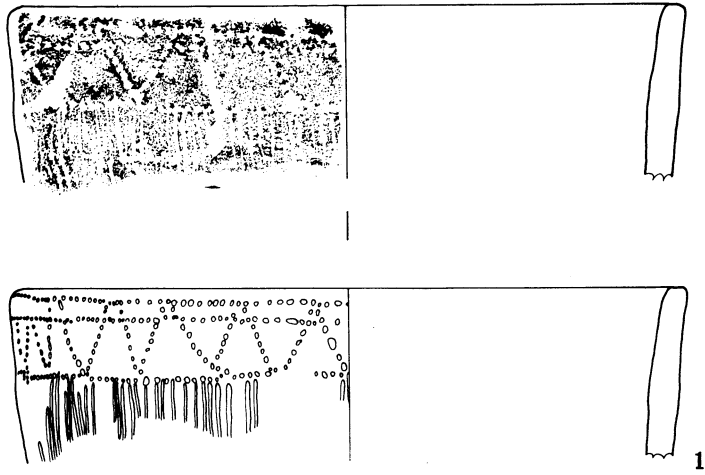
土器移動表註

1. 拡散度 土器の個体または型式が10m4方の区画を1として、ひろがった範囲を数字でしめしたものである。
2. 移行度 土器の個体または型式が、上下に移行した割合を地層の数で示したものである。(1層を上中下に3分し、各々1とした)
3. 集中度 土器の個体または型式が、破片として移行した結果、最も多く土器片が残留する層の土器片の数を%で示す。
1は、個体または型式の総片数(同一欄内)に対する%。
2は、最も多く集中した区画内の土器片のうち、最も多く集中した層に残留した土器片の数が、同区画内土器片の総数に対する割合を%で示し

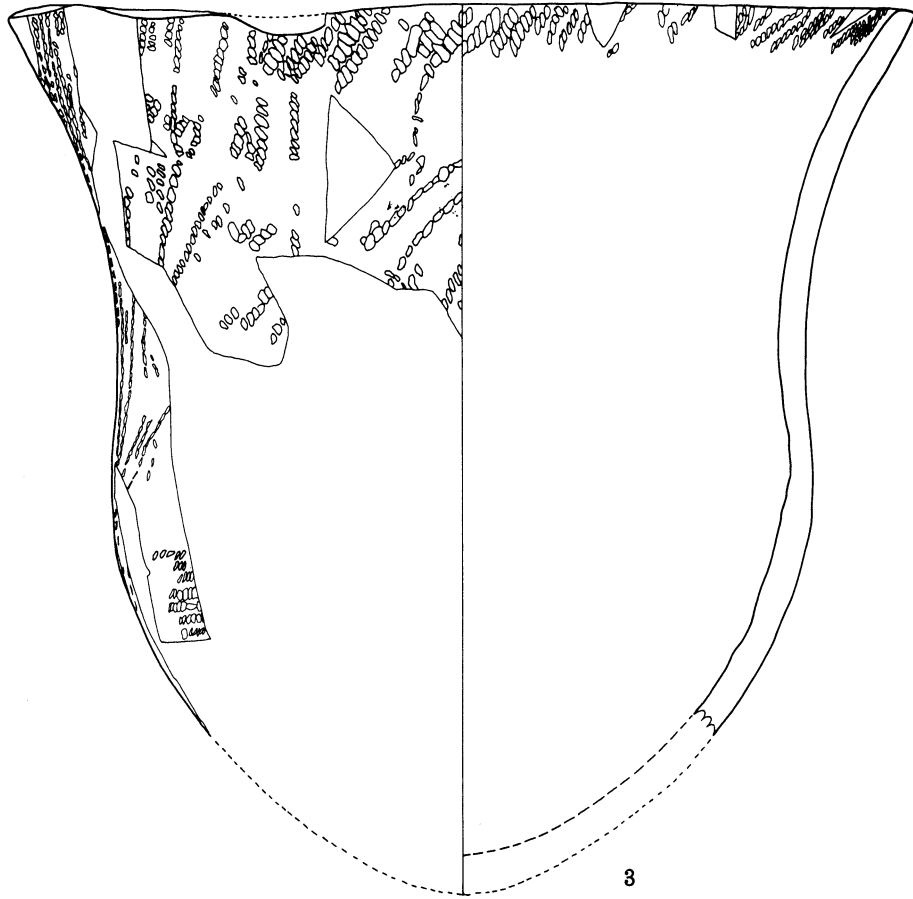
69	70	73	84 85	73		81
1	3	9	83 84-92	10		34-39
一部復元	完	完	片	完	片	片
連点鋸歯文	燃糸文	槽形押型文	槽形押型文	槽形押型文	燃糸文	燃糸文
5	6	2	8	2	6	4
7	6	2	5	3	5	5
Ⅳb中	Ⅳb上	Ⅳb	Ⅳa中	Ⅳb上	Ⅳb中	Ⅳa中
55.2	43	59	45	48	40	25.8
	Ⅳb	Ⅳb		Ⅳb上	Ⅳb中	Ⅳa上
	28.3	64.2		55.2	60	35
DE	EF	C	DEFG	AB	EF	EF

表 (3層)

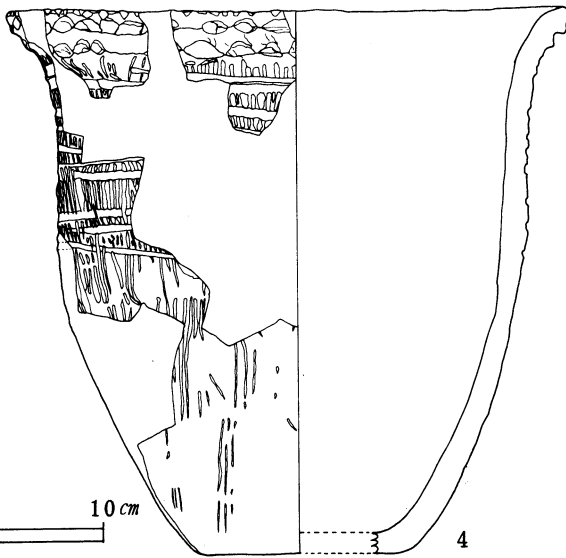
95	95	95	95	95	95	96
226	230	234・235	236	237-240	241・242	250-251
片	片	片	片	片	片	片
春	阿	南福寺並行	岩崎上層並行	岩崎上層	草	晩
日	高				期	期
1	2	1	1	3	1	2
1	1	2	1	3	2	5
Ⅳa上	Ⅲ中	Ⅲ上~Ⅲ中	Ⅲ上	Ⅲ中	Ⅲ中	Ⅲ中
100	100	50 50	100	50	83	49
F	GH	E	D	DEF	CD	DE



第69図 連点鋸齒文・手向山式土器



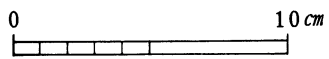
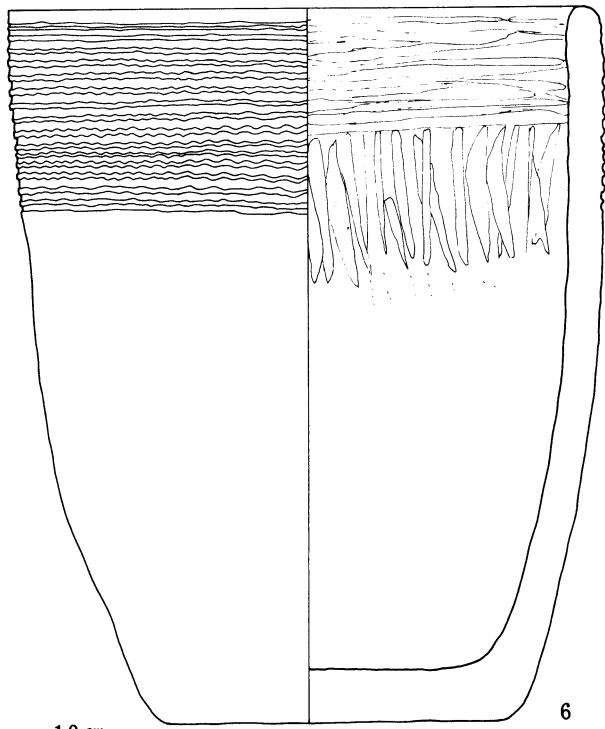
3



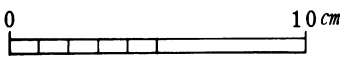
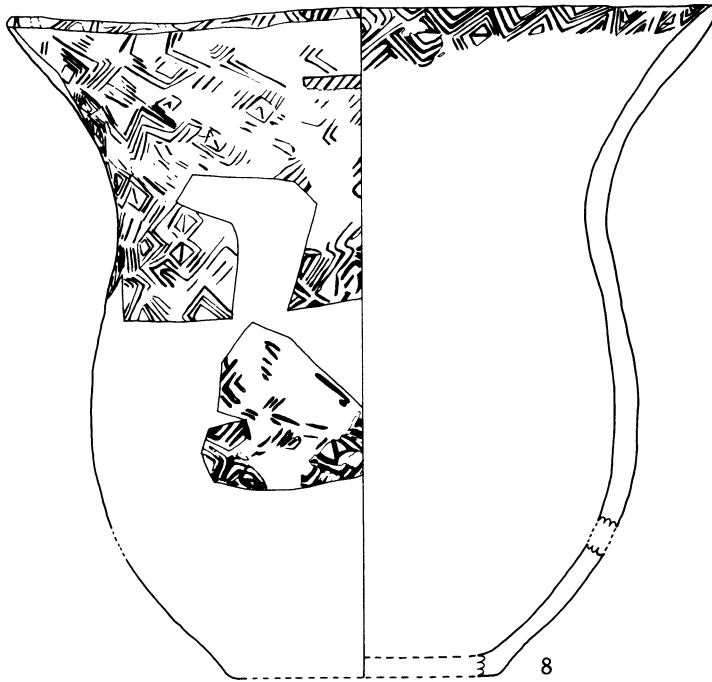
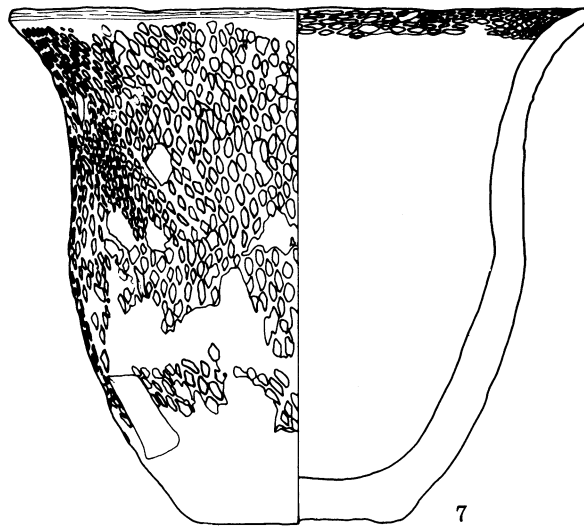
4

0 10 cm

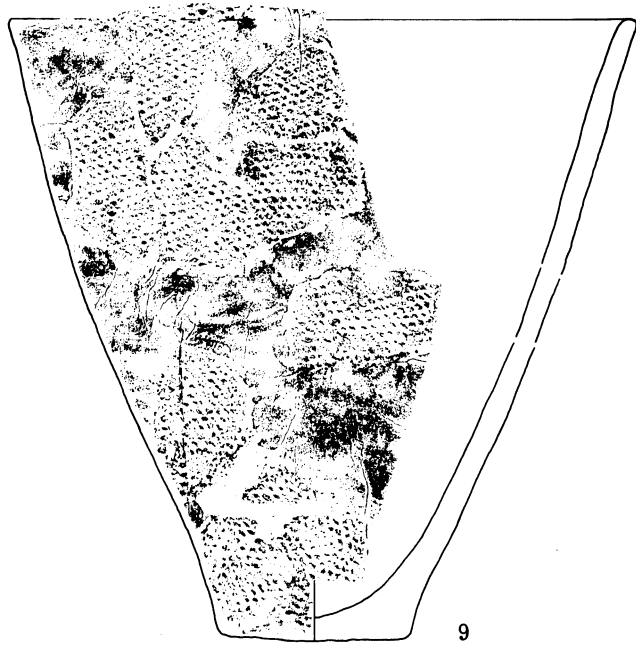
第70図 燃系文土器・凸帶燃系文土器



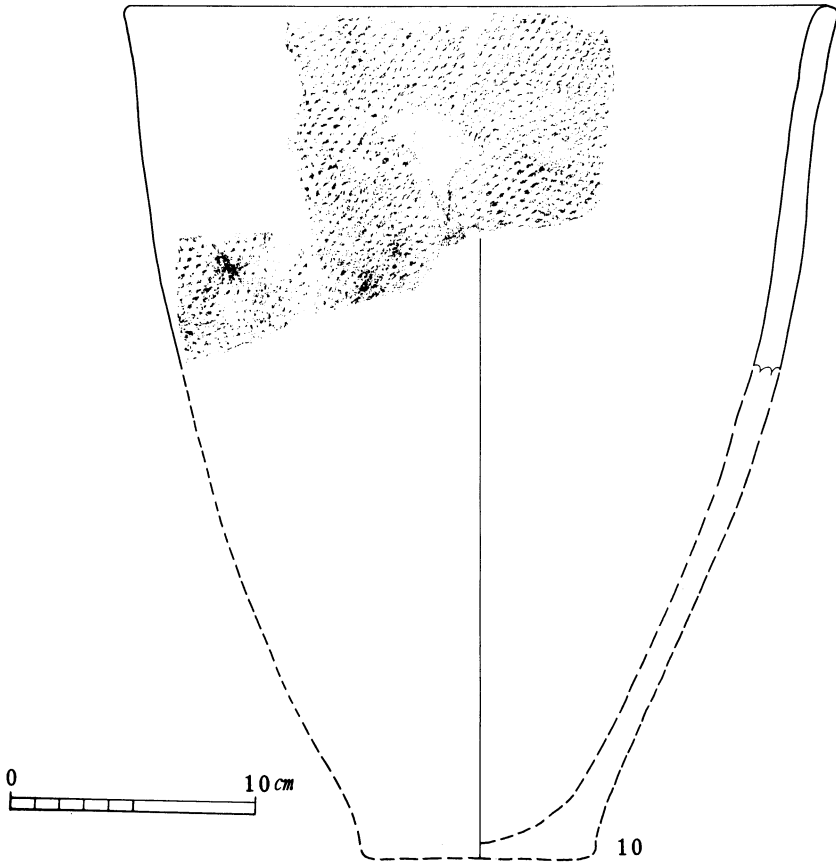
第71図 石坂式土器・円筒形条痕文土器



第72図 楕円形押型文土器・菱形押型文土器

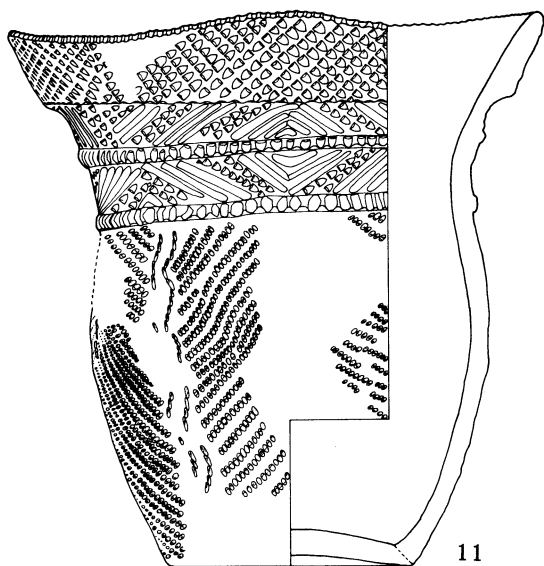


9

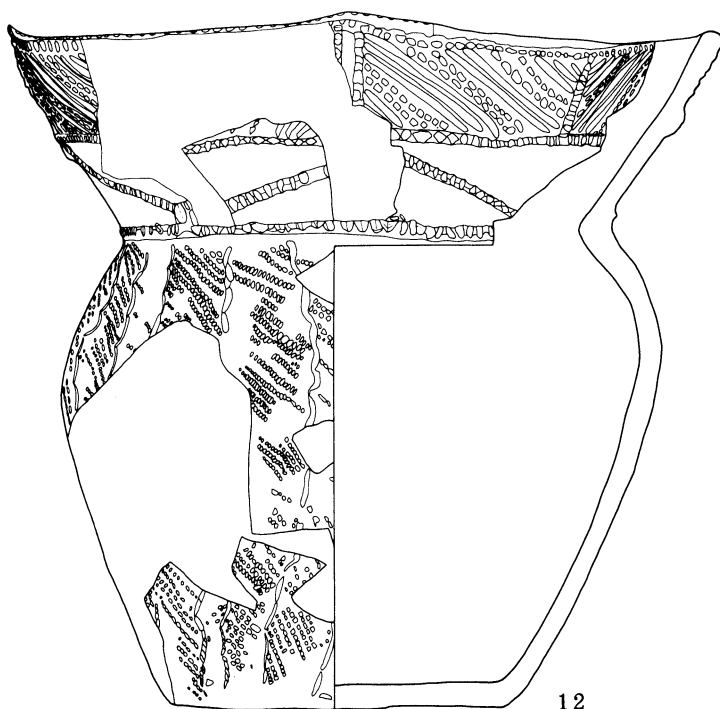


10

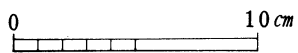
第73図 橢円形押型文土器



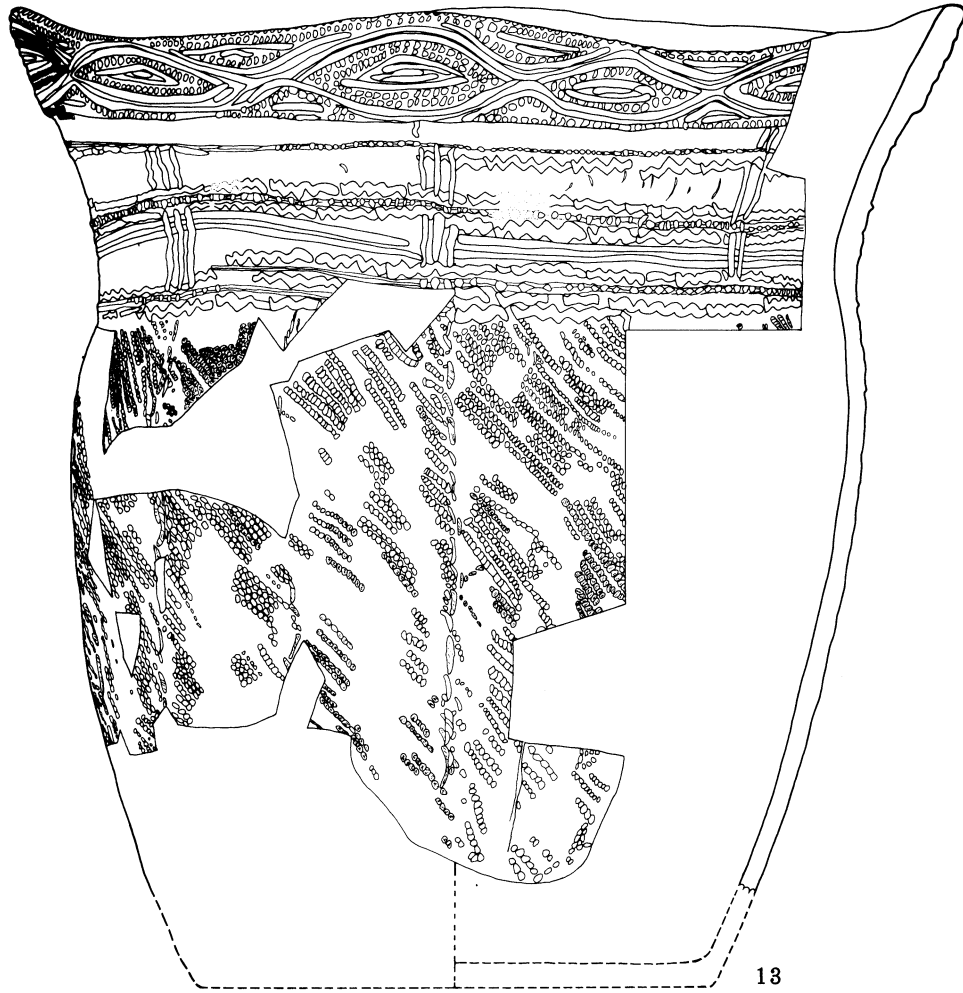
11



12

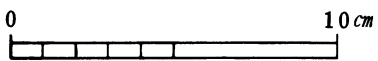
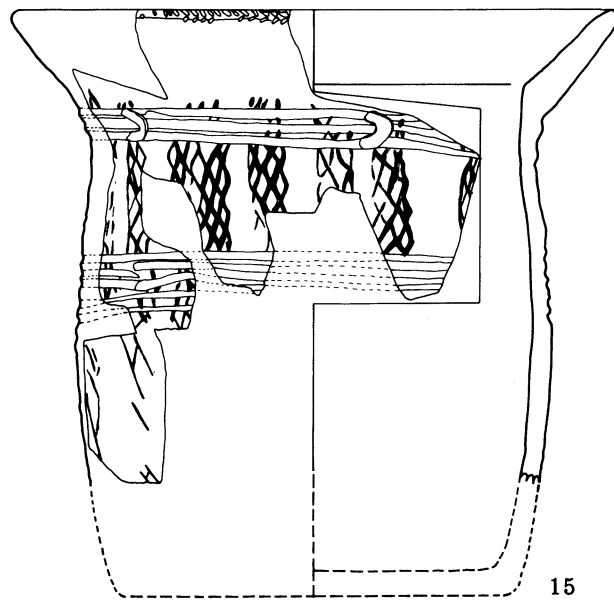
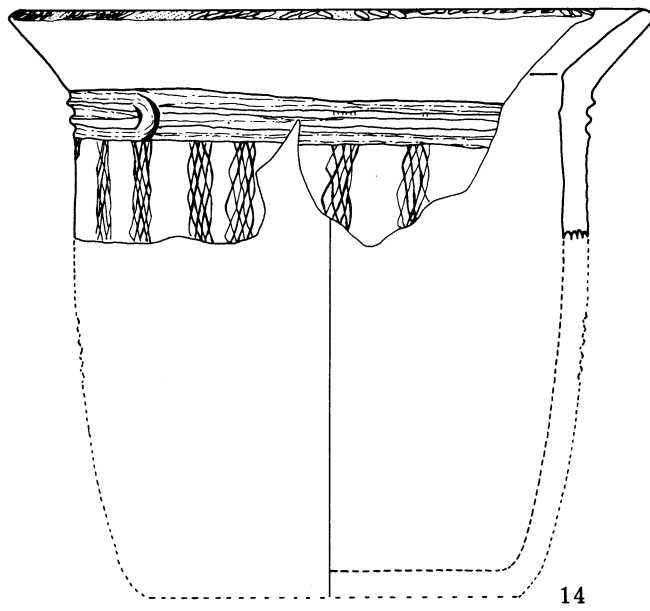


第74図 平 楯 式 土 器

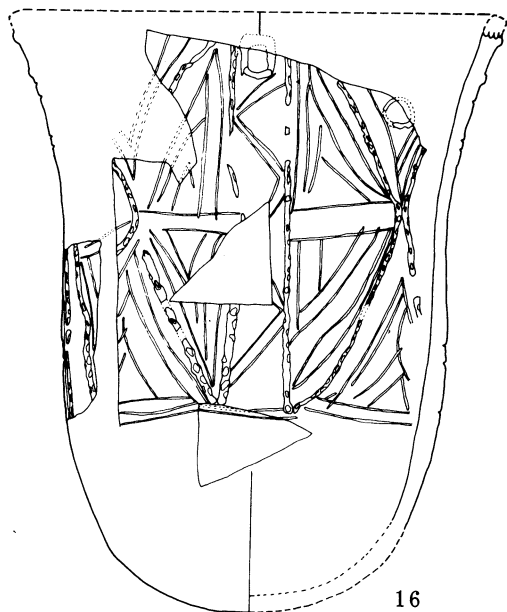


0 10 cm

第75圖 平 樽 式 土 器



第76図 塞ノ神 A a 式土器



16

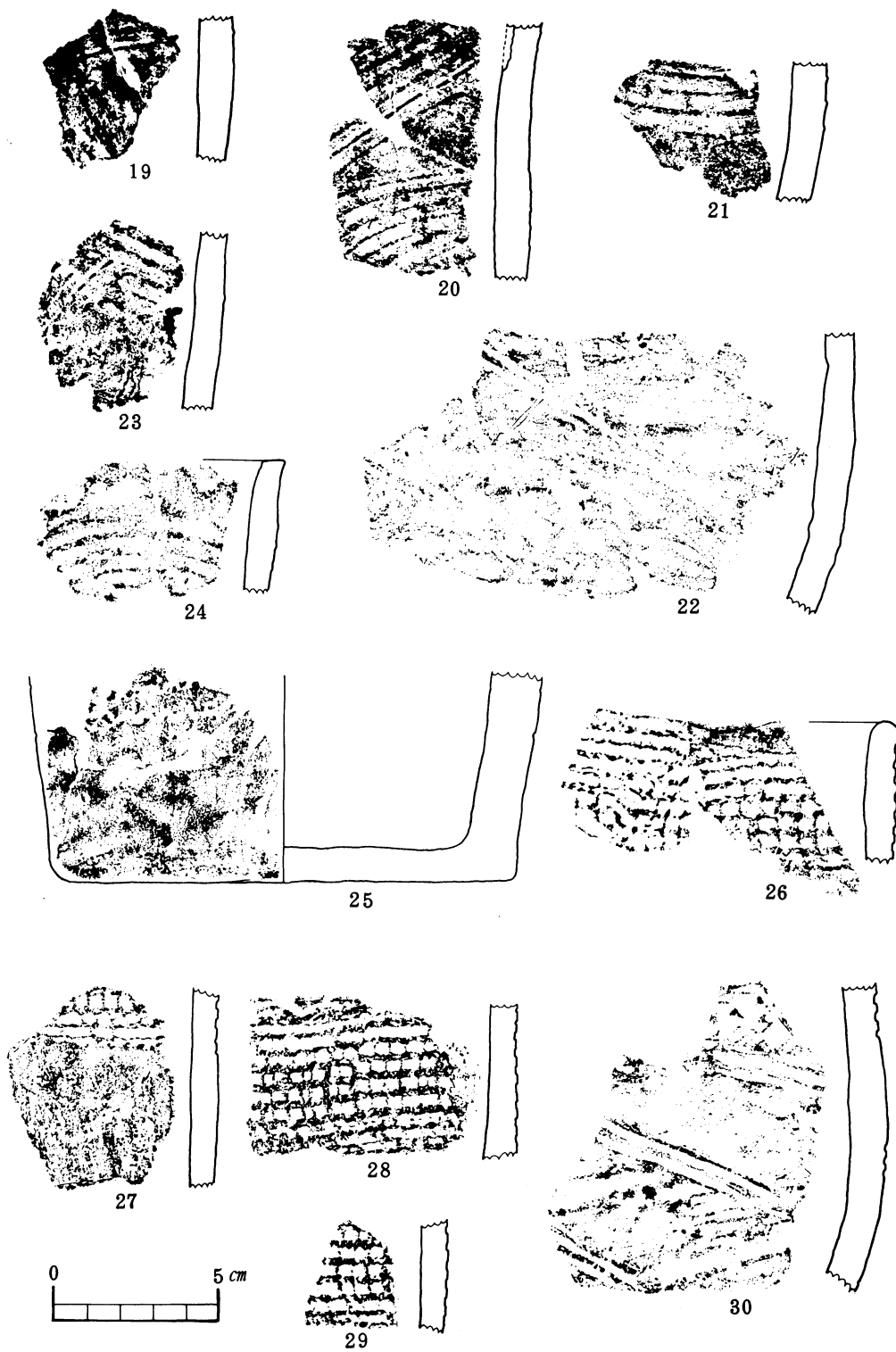


17

第77図 深浦式土器・春日式土器

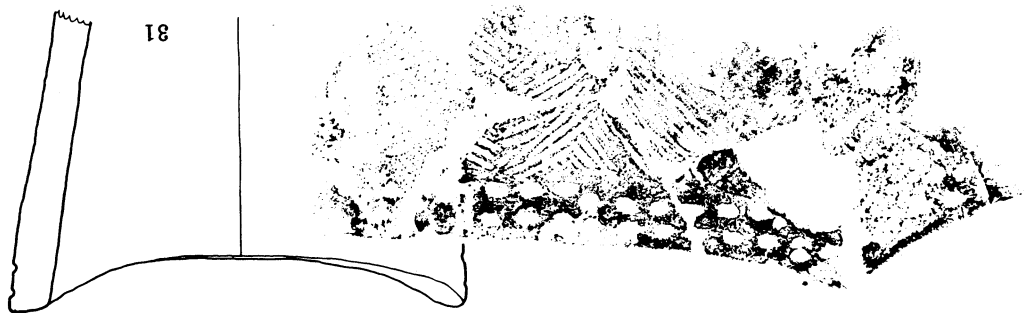
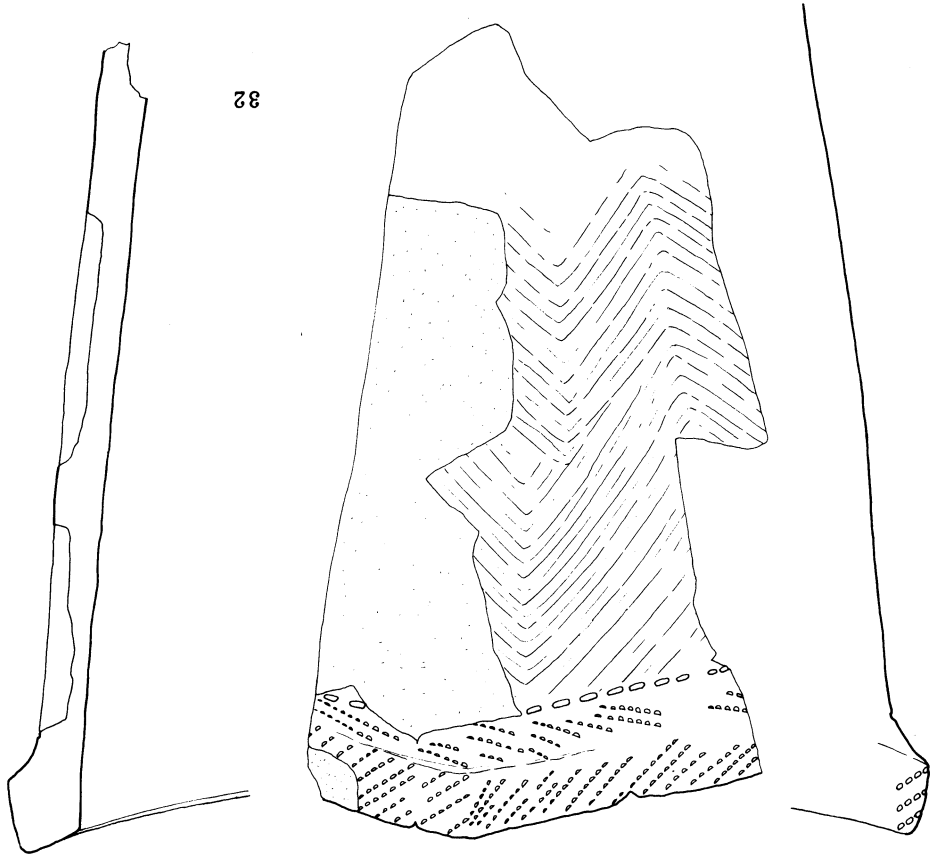
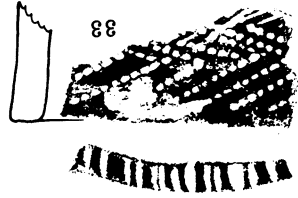
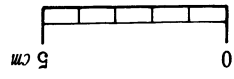


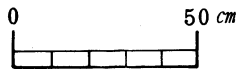
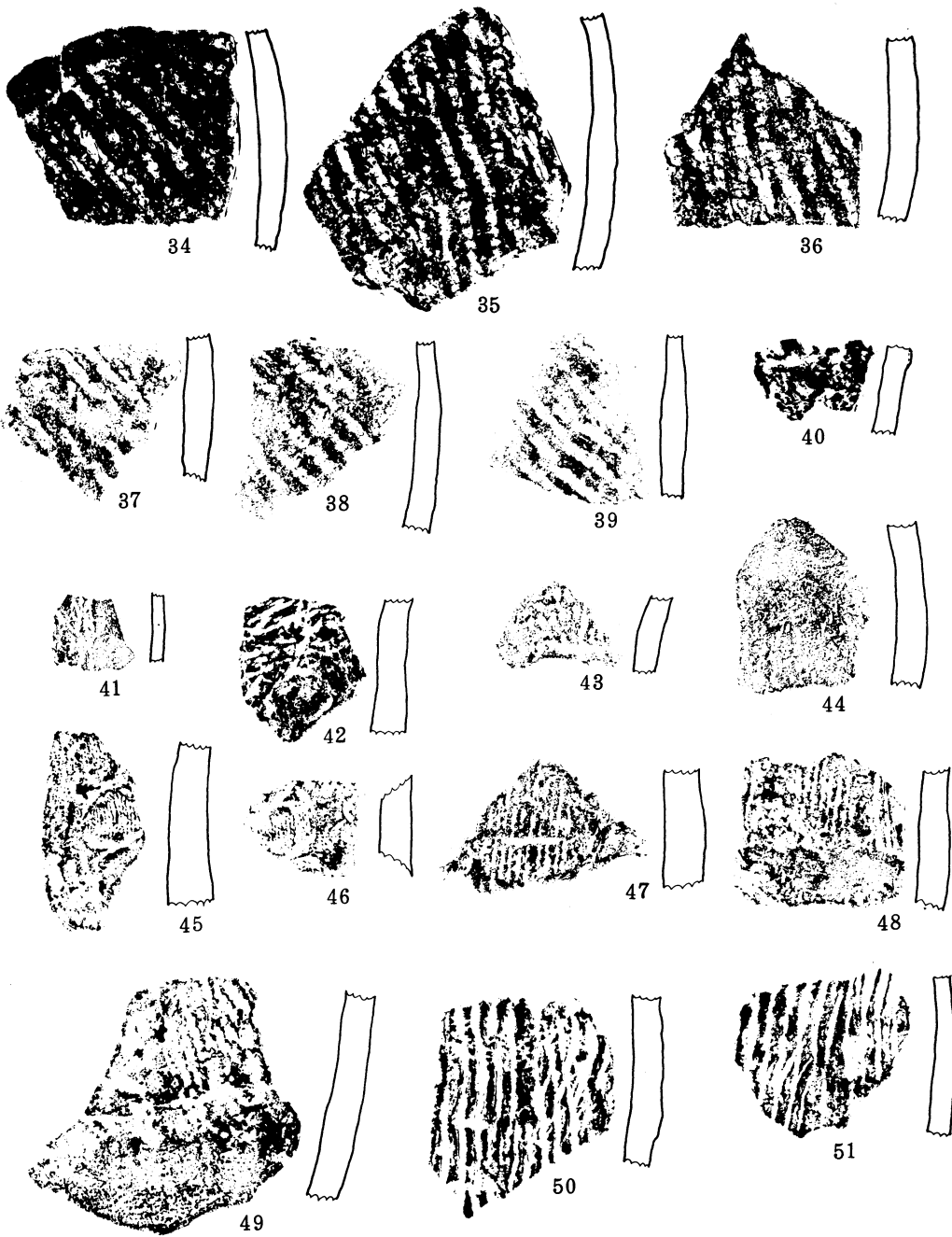
第78図 石 峰 式 土 器



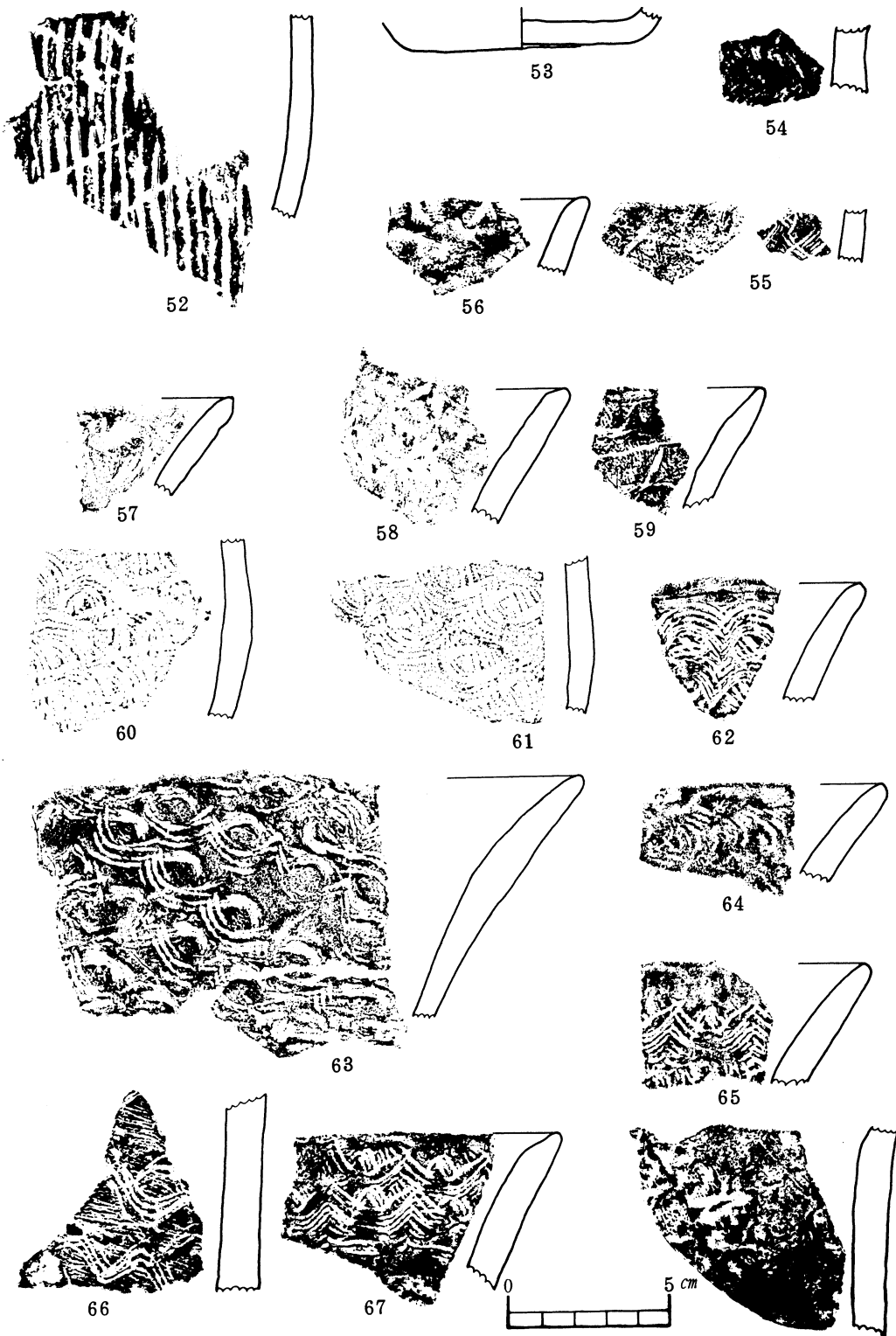
第79図 条痕文・貝縁刺突文・吉田式土器

第80圖 石 坂 式 土 器

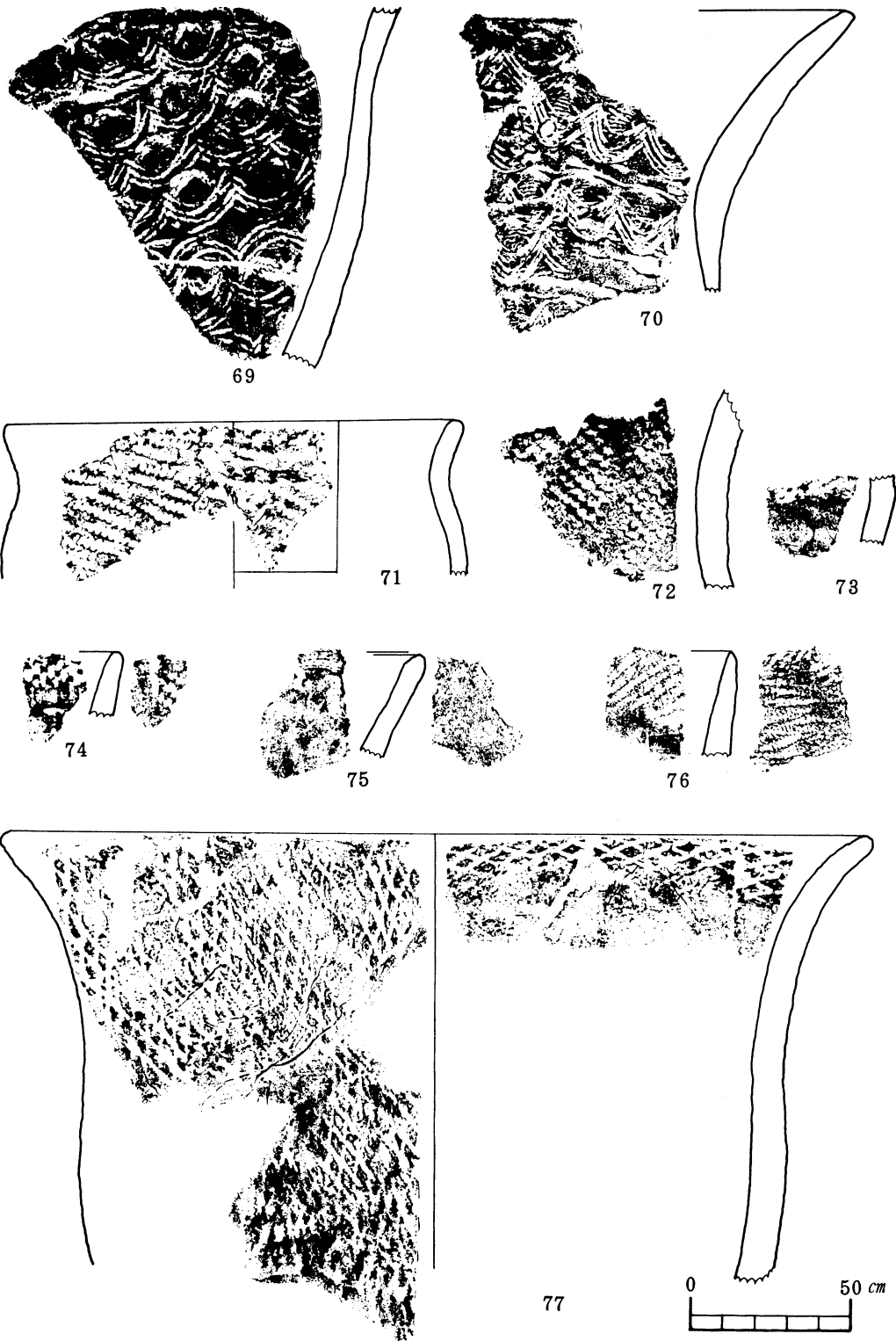




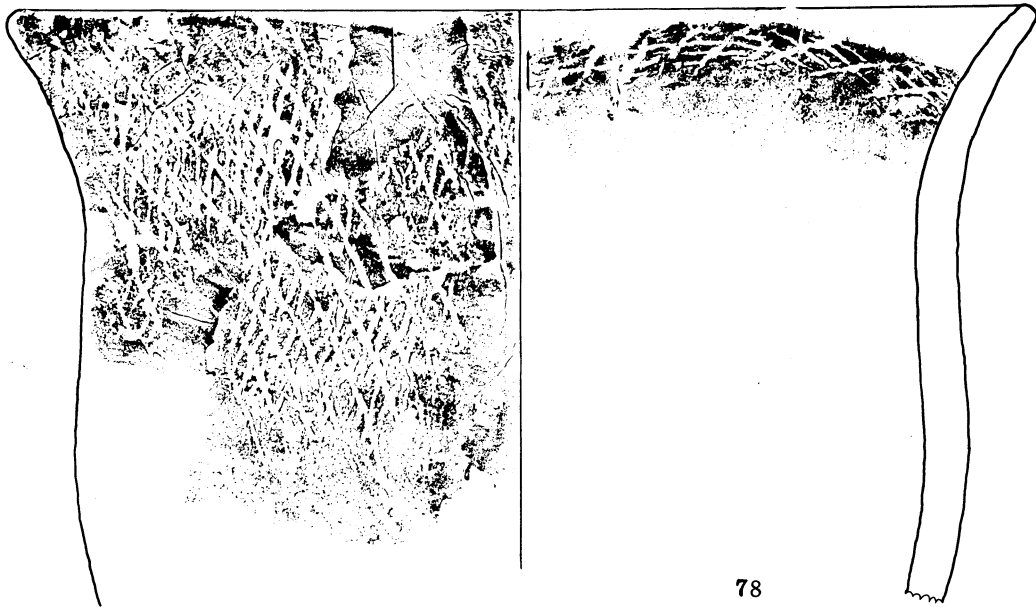
第81図 燃 糸 文 土 器



第82图 捺糸文土器・变形捺糸文土器



第83図 変形燃糸文土器・縄文土器・網目文土器



78



79



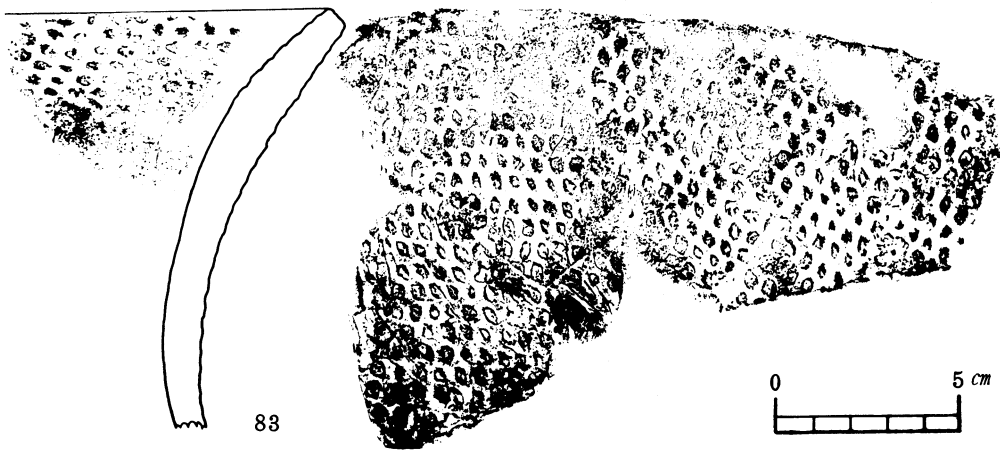
80



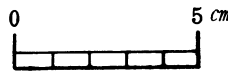
81



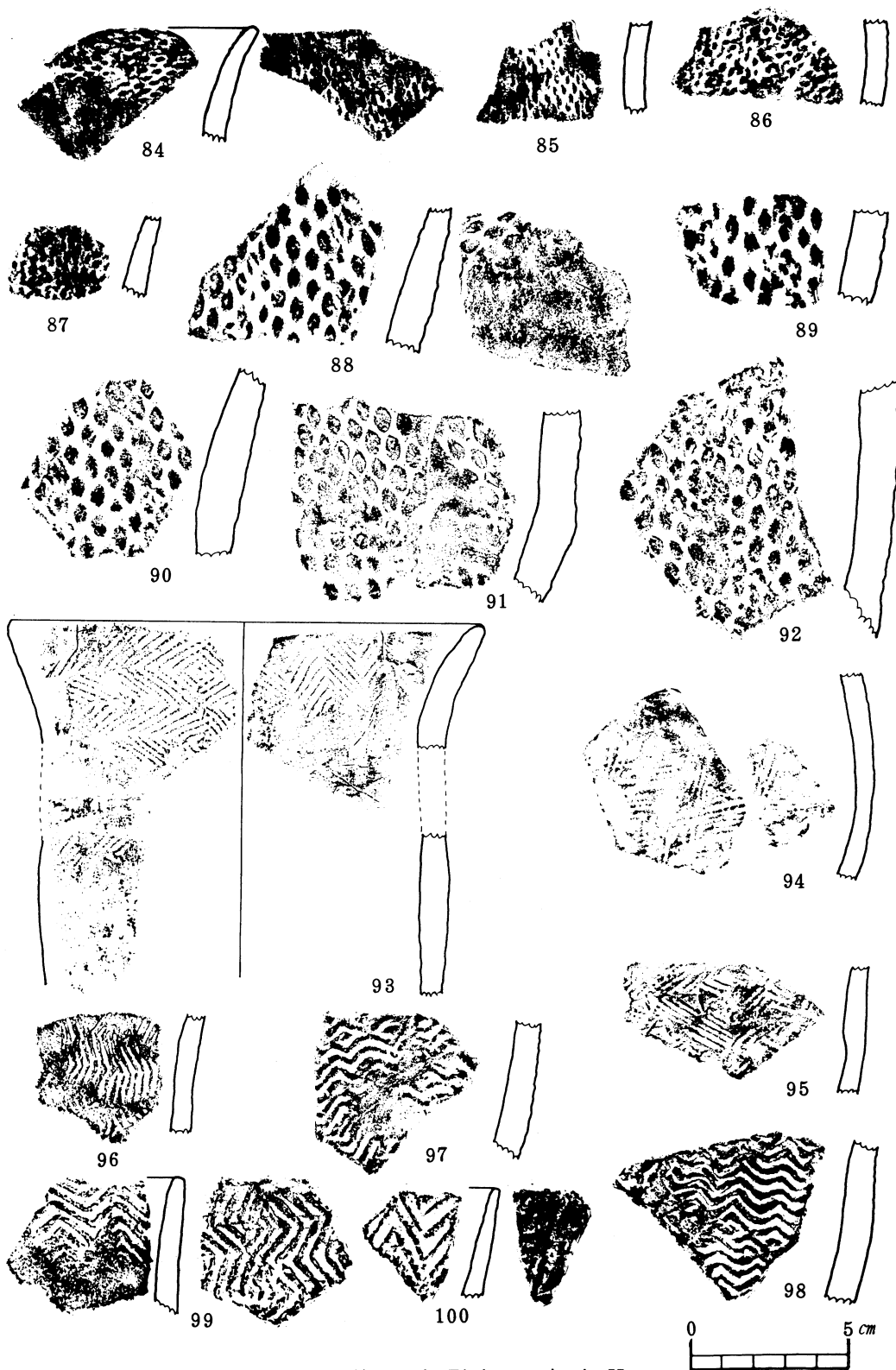
82



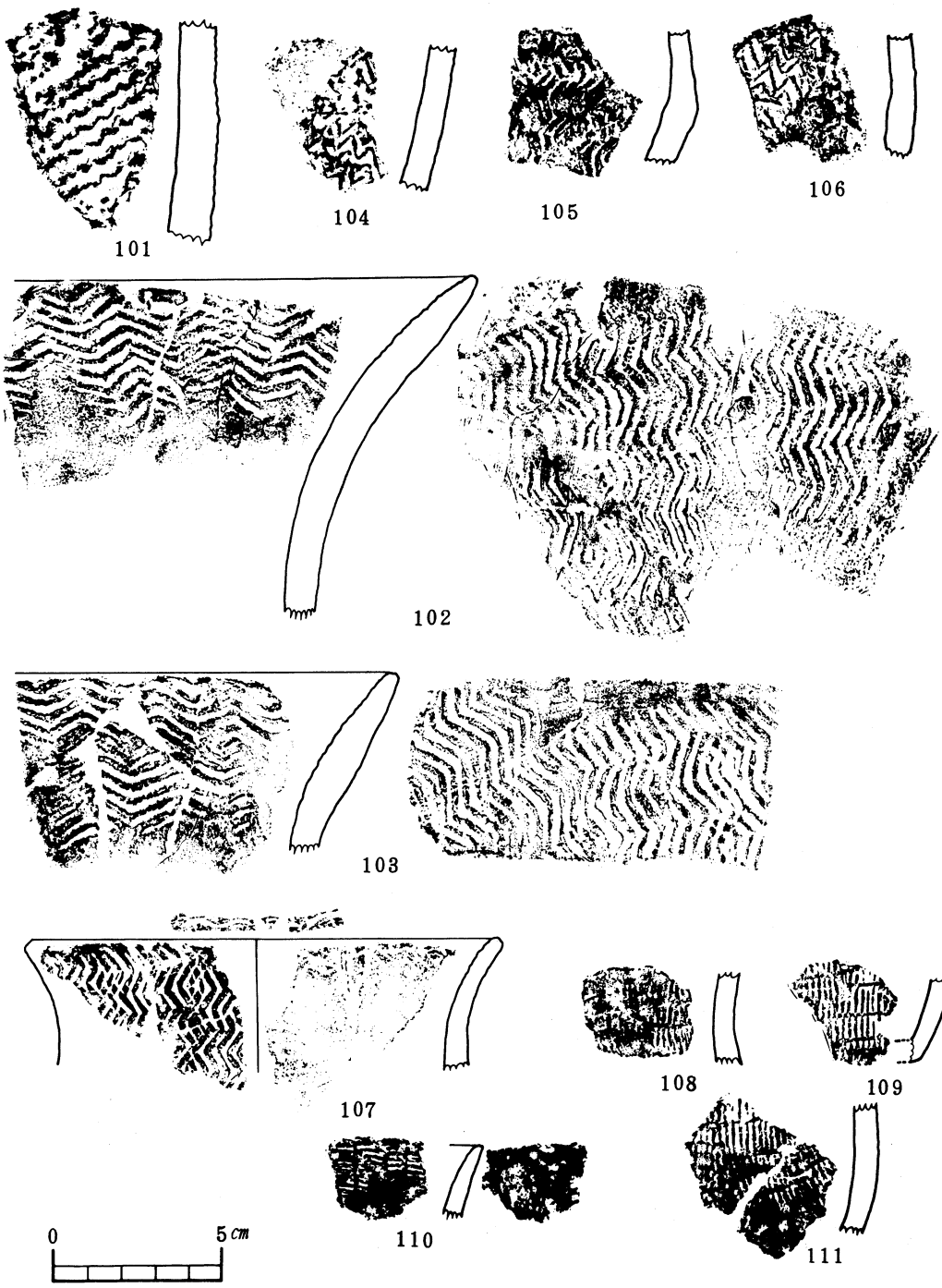
83



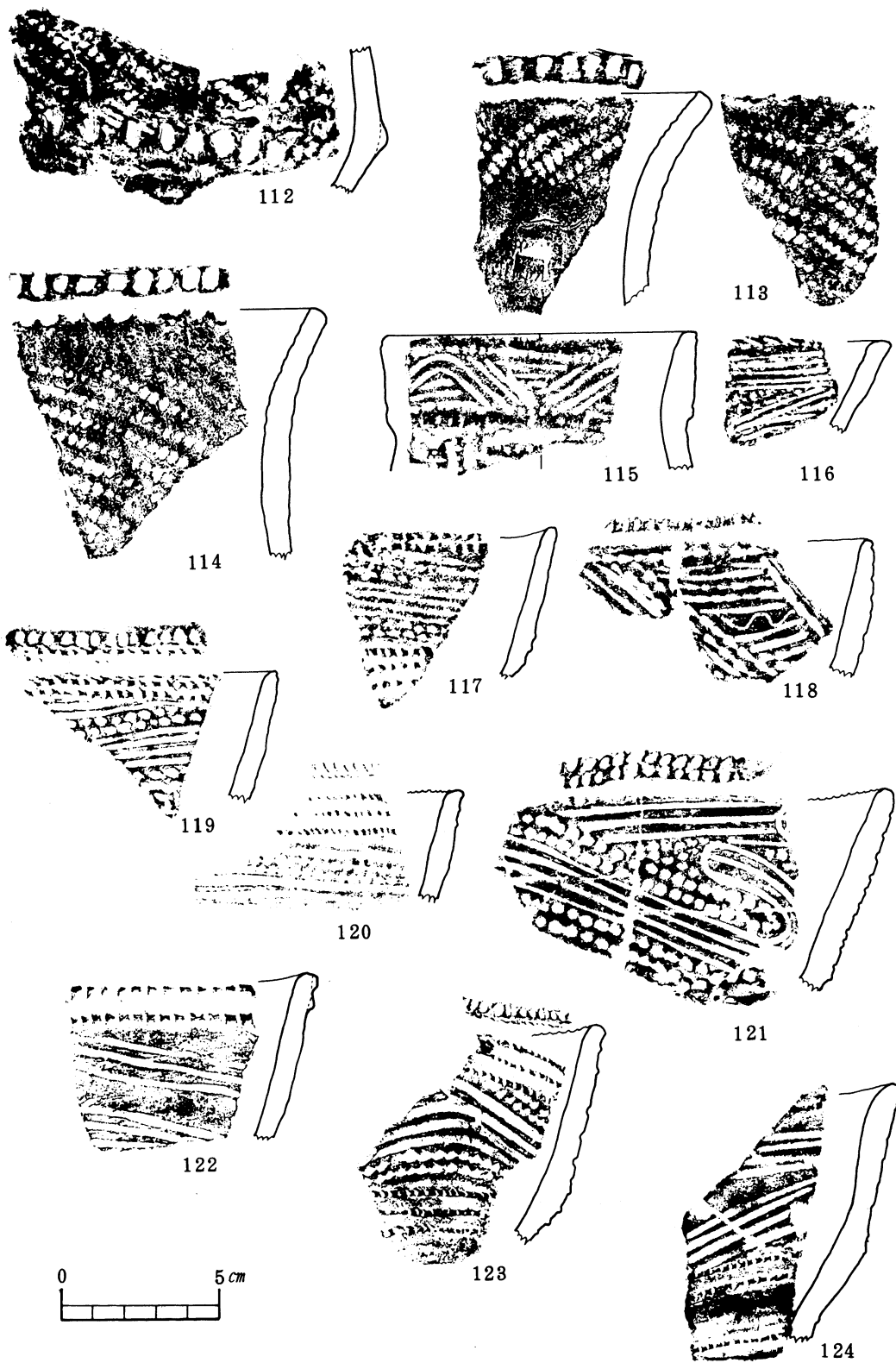
第84図 網目文土器・楕円押型文土器



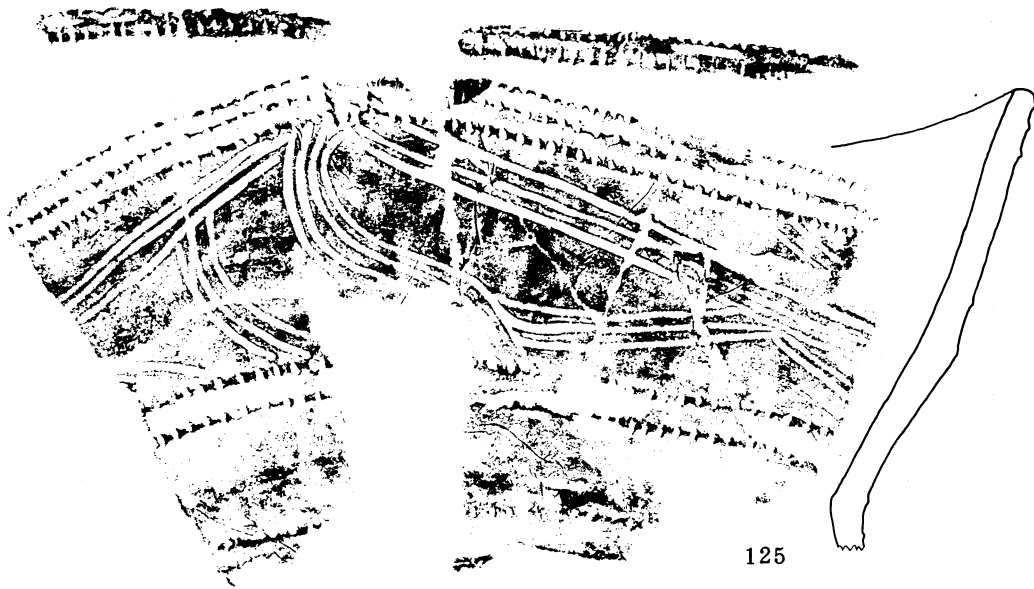
第85図 楕円山形押型文土器



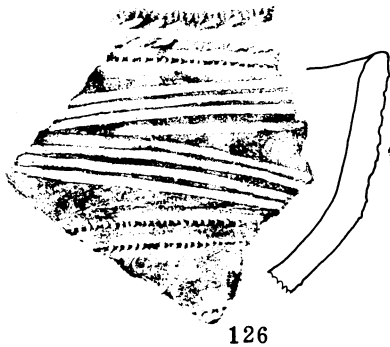
第86図 山形押型文・細線格子状押型文土器



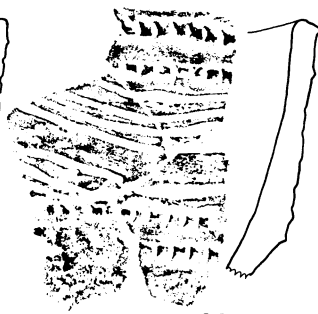
第87图 手向山式土器・平楸式土器



125



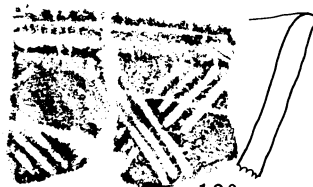
126



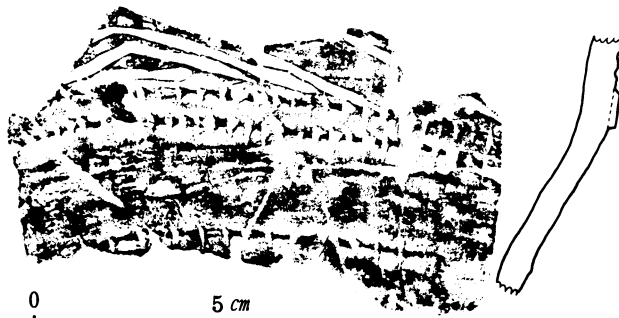
127



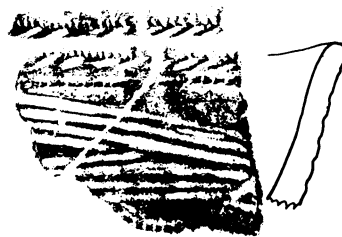
128



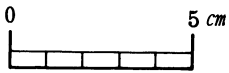
130



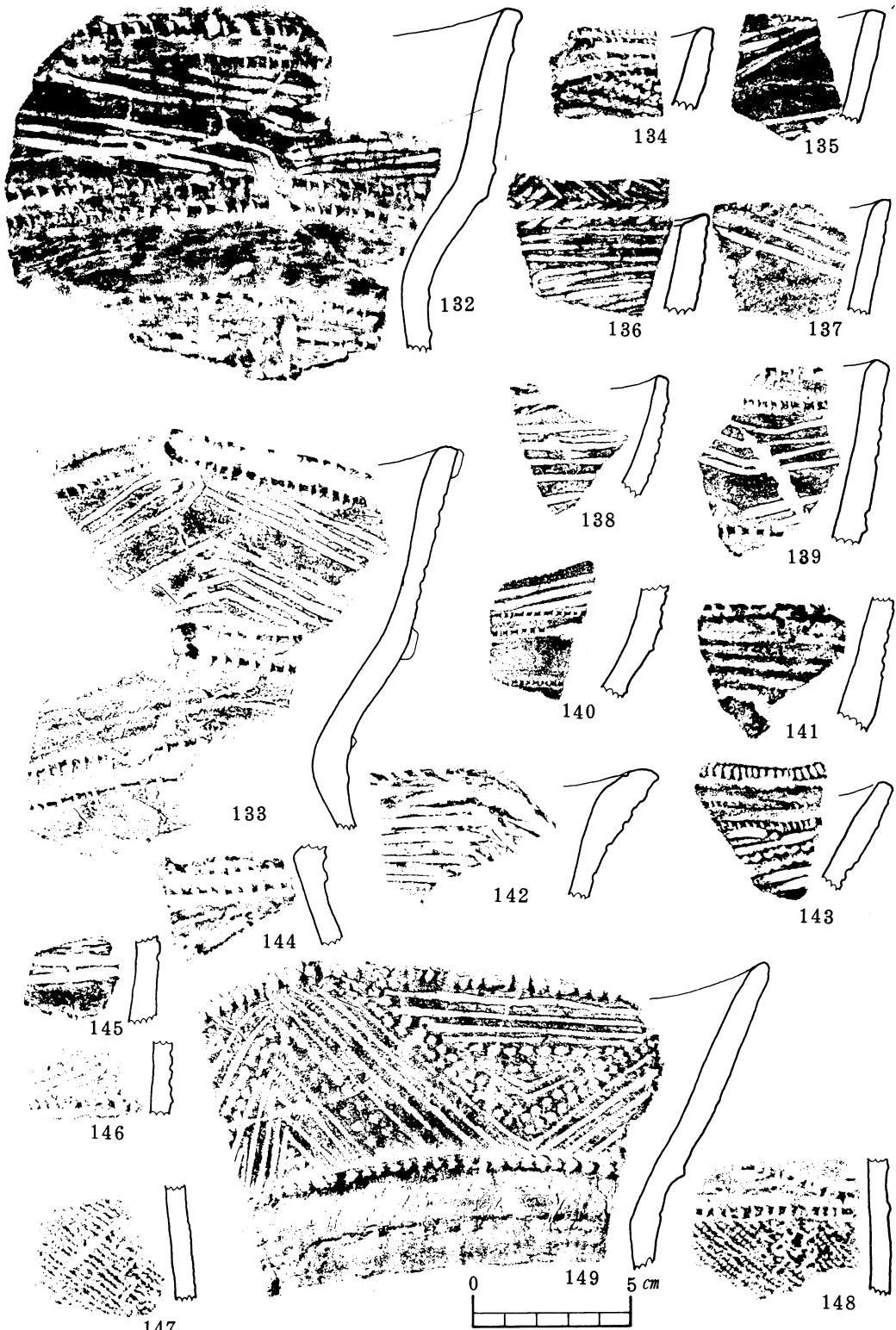
129



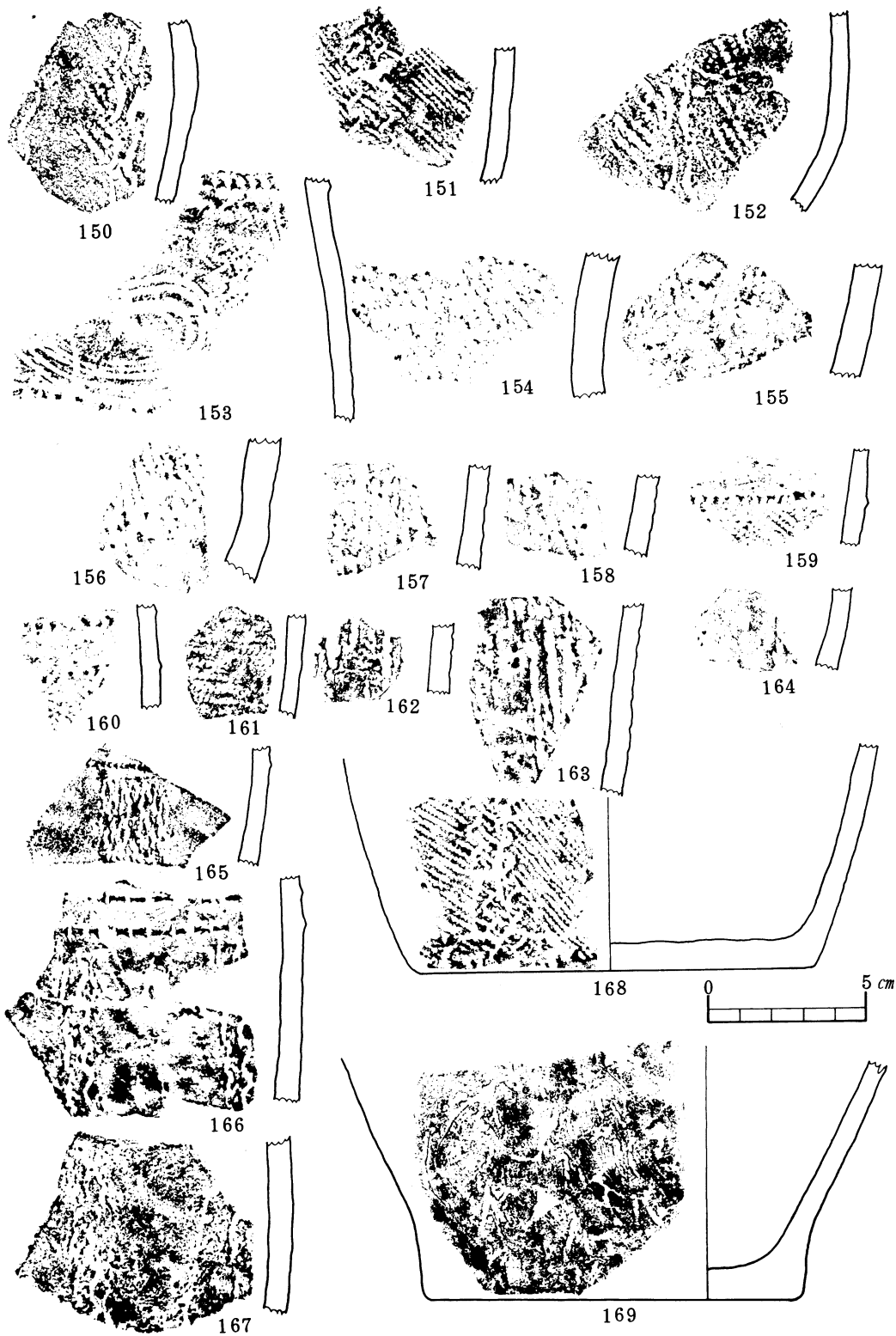
131



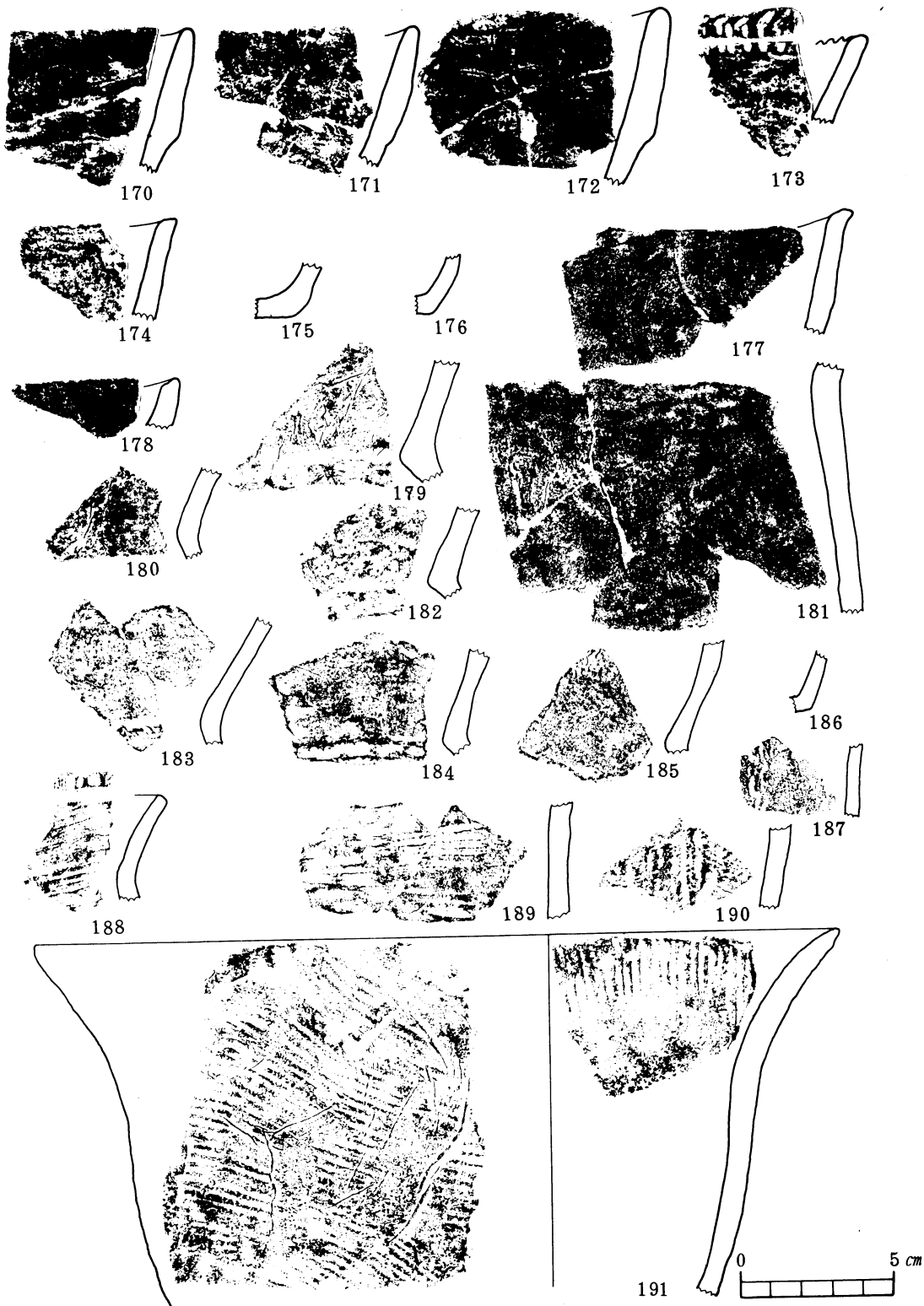
第88図 平 楯 式 土 器



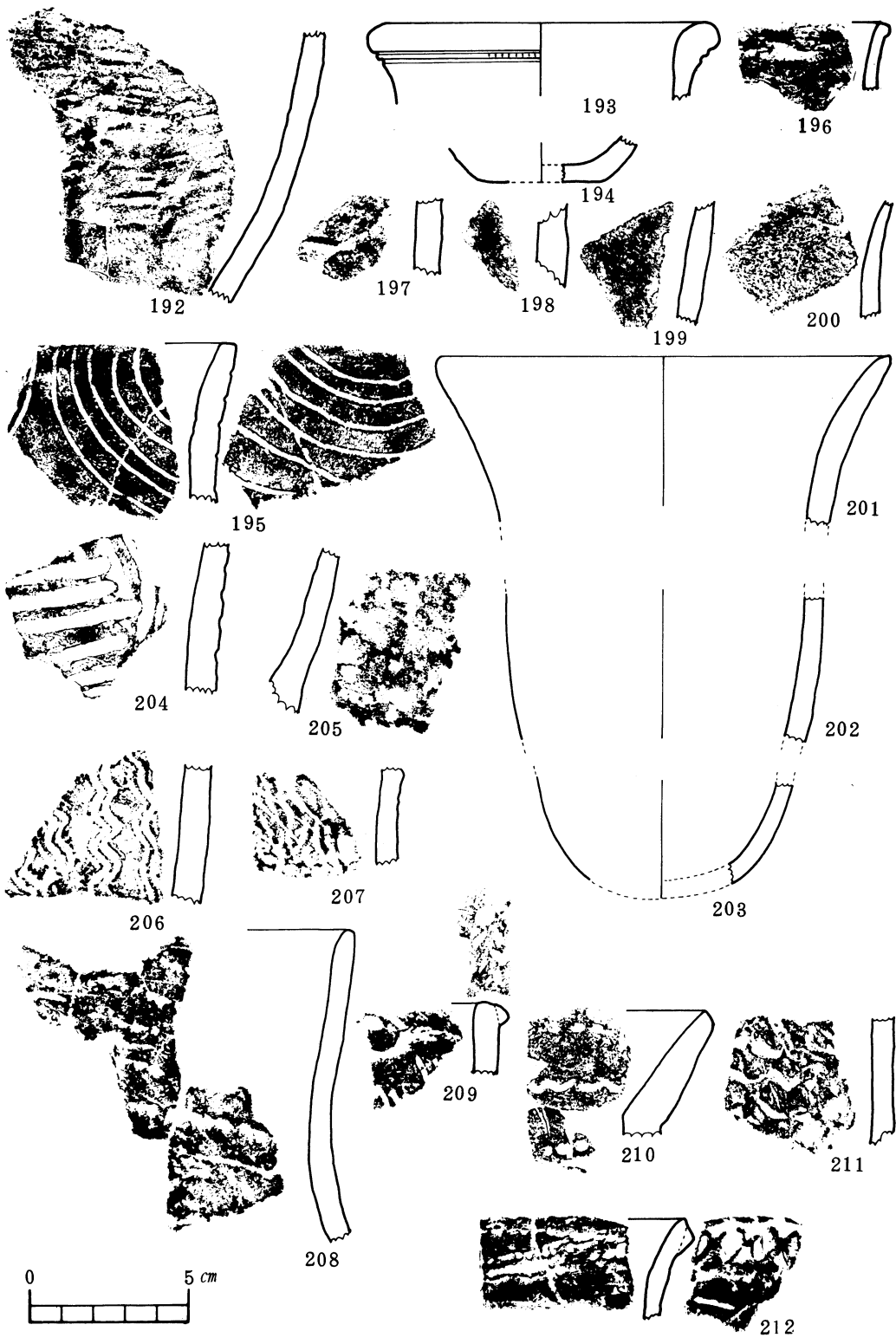
第89図 平 椀 式 土 器



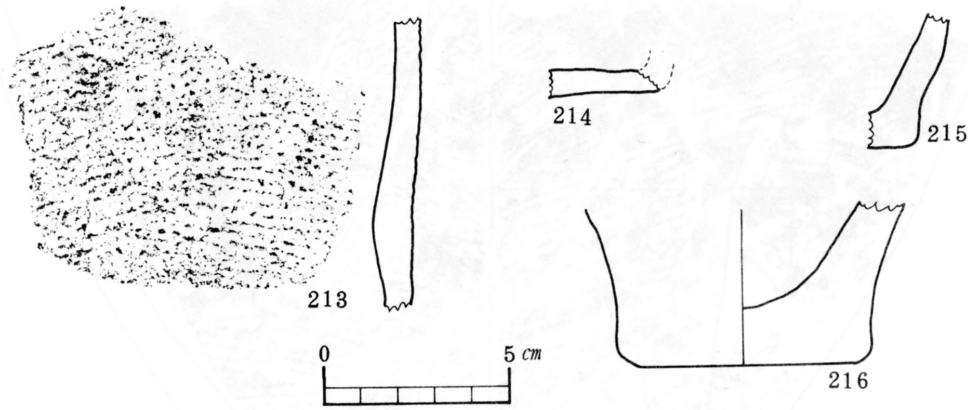
第90圖 平 楯 式 土 器



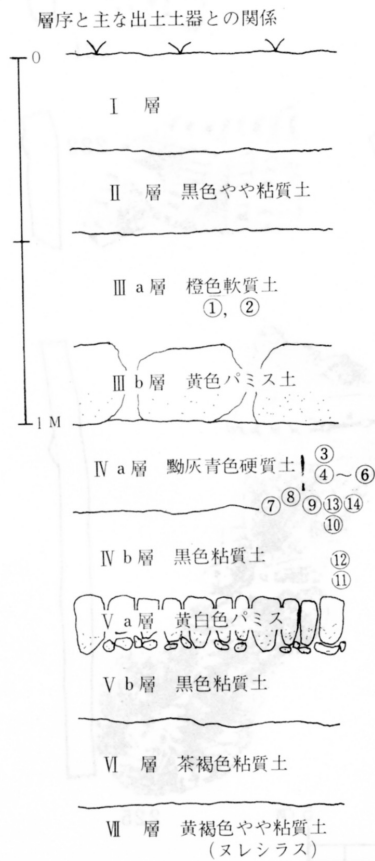
第91図 平楯式（無文）土器・斜行凹線文土器他



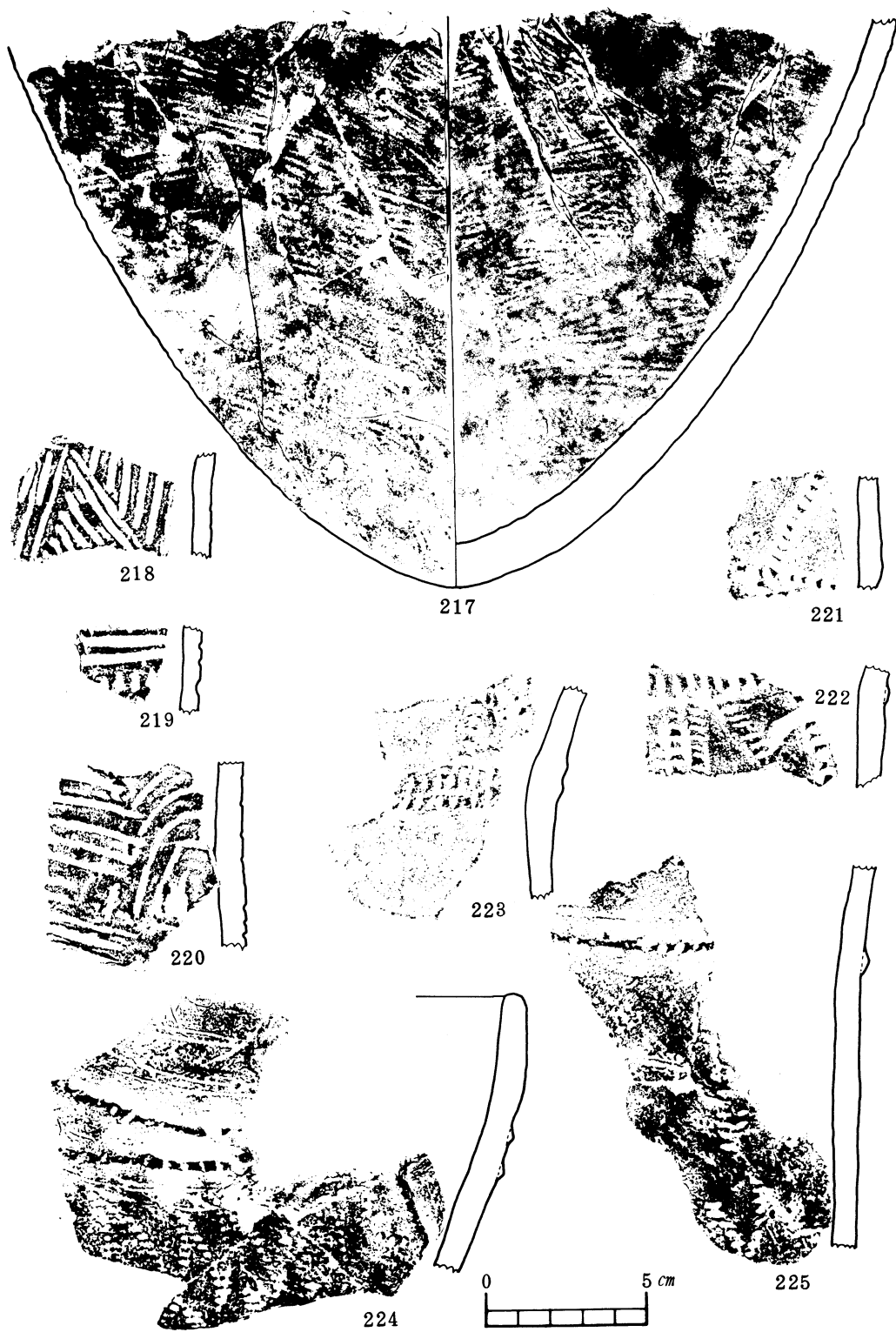
第92図 表裏孤文土器他



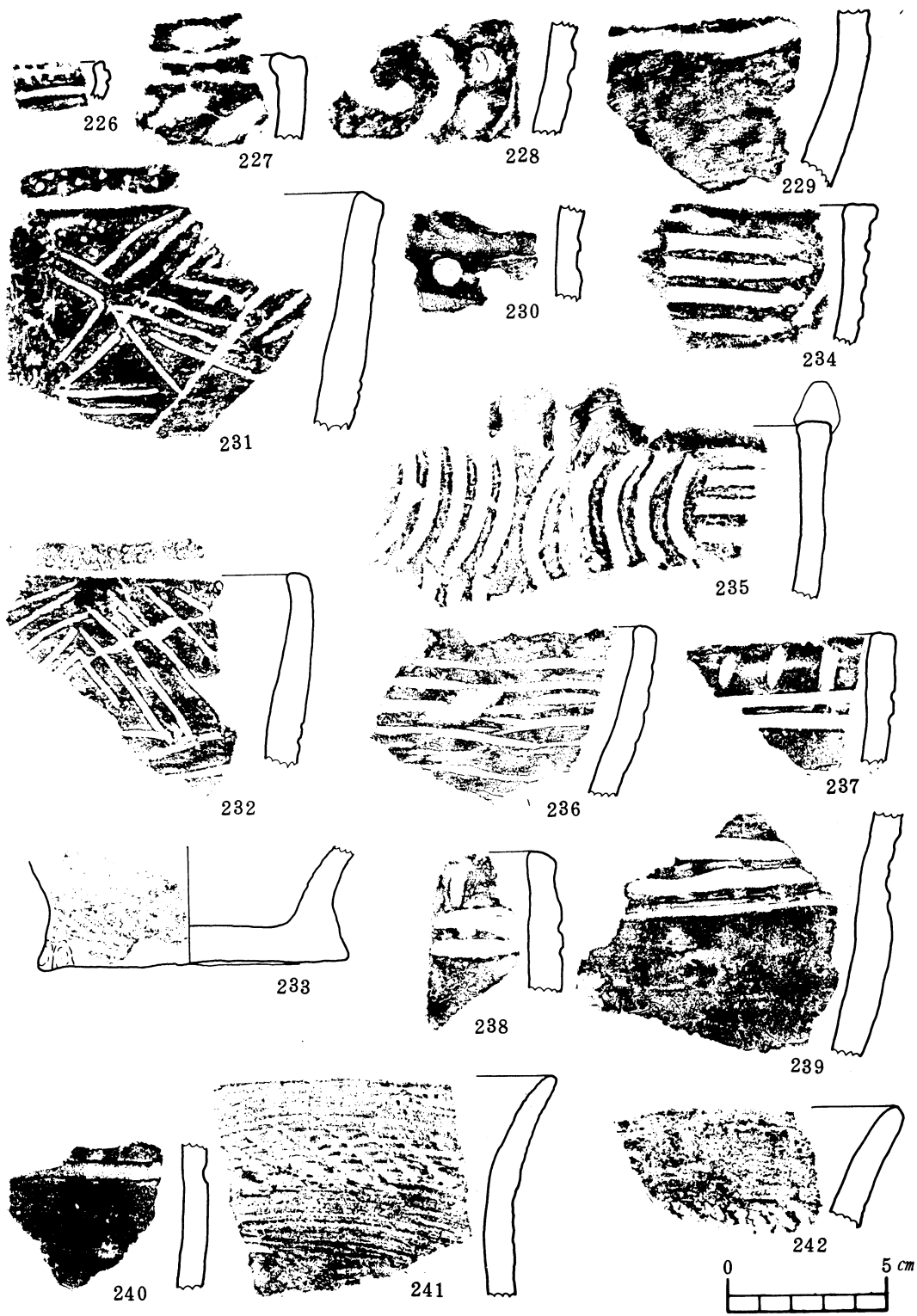
第93図 押型文土器・底部



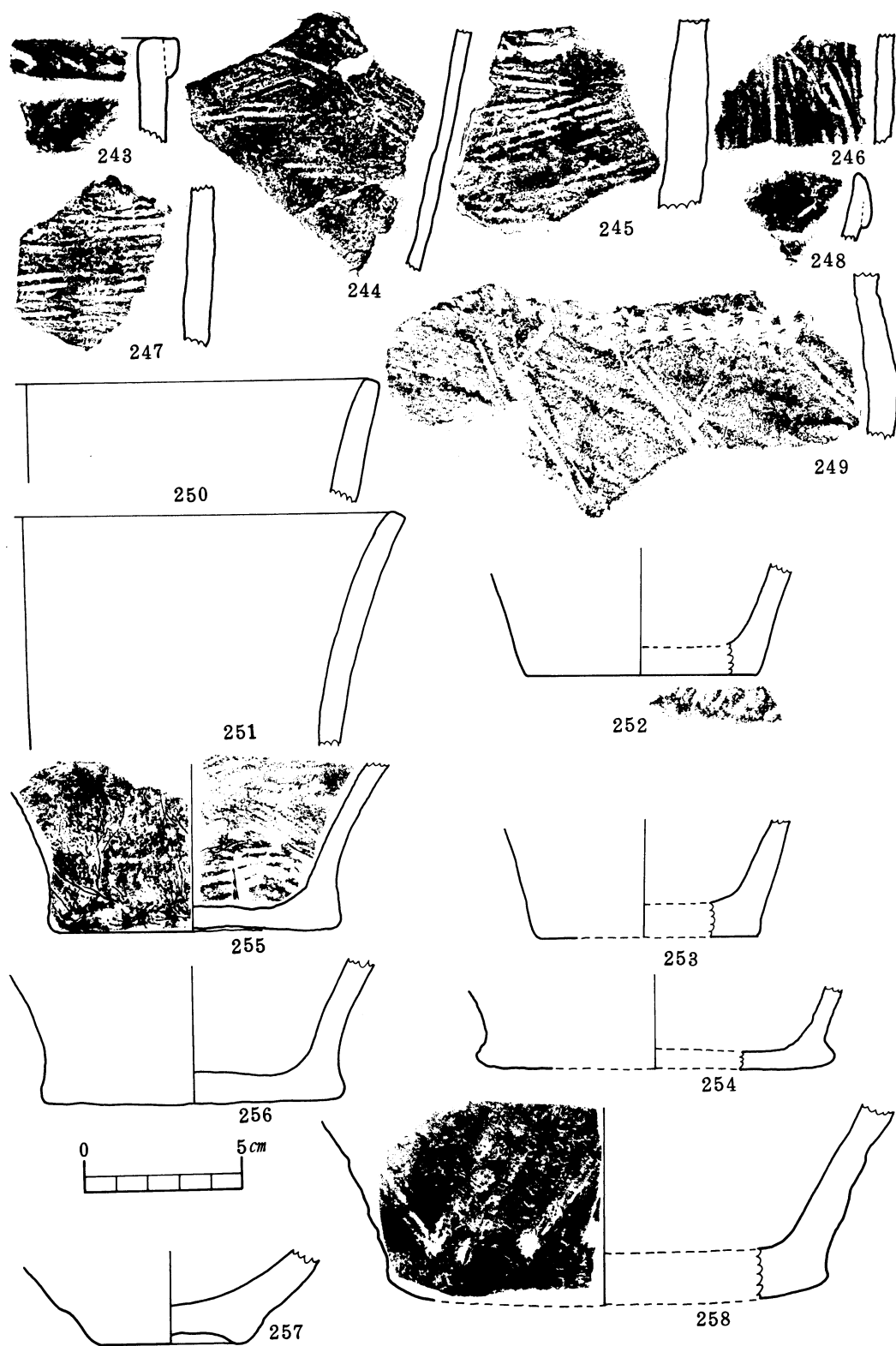
器土九新、紋、器土六義 図93



第94图 彝式土器・管畑・深浦式土器



第95図 阿高式・岩崎上層式・草野式土器

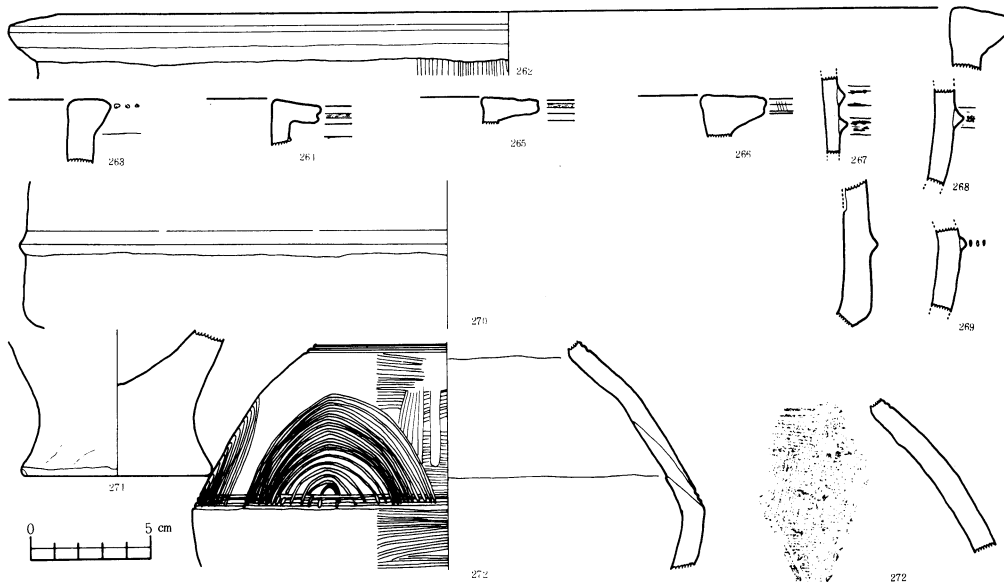


第96图 条痕文土器・底部

2. 弥生式土器 (262~272)

第5地点を中心に第1地点, 第2地点の1層, 2層から, 弥生式土器の破片が出土しているがその出土量は多くない。

甕形土器は, 第5地点に集中して出土している。262は口縁部の直径42cmを測る大きな甕形土器の口縁部である。逆L字形をしているが, 端部がやや下がっている。胴部外面は幅の広いハケ様施文具でたて方向になでられており, 口縁部との境に段をもつ。内面はていねいなヘラなでにより仕上げ, 内面, 外面とも光沢がみられるほどていねいに仕上げている。263~266も甕形土器の口縁部である。すべて逆L字形で, 口縁上面は平坦となっているが, 264~266は外がやや下がる。口縁部にはきざみのあるものと, ないものがあり, きざみも細かいきざみとなっているものと太いヘラ押様になっているものがある。また, 口縁部内面に若干張り出すものもみられる。264・265は薄いつくりになっており, 口縁部が外方に長く伸び, 端部には一条の凹線がみられる。264は口縁部の下に突帯がみられるが, 形は不明である。266も口縁部に凹線がみられる。これらは茶褐色を呈し, 焼成は良好である。267~269は甕形土器の胴部で, 内外面ともヘラなで仕上げられ, 1~2条のはりつけ三角突帯を有する。三角突帯の頂部にはきざみのあるものとないものがある。270は一条の三角突帯を底部近くに有し胴部が直立する鉢形土器である。径36cmと大型で, 底は平底である。内面, 外面ともていねいな横方向のヘラなで仕上げられ焼成は良好である。271は, 甕形土器の底部で, 底径8cmを測る。充実した高い底である。272は重弧文をもつ壺形土器でソロバン玉形の器形をしている。最大径をもつ胴部中央の上方に3条のヘラ描き凹線があり, その上に16条の重弧文がかかれる。



第99図 弥生式土器

頸部には3条以上のヘラ描き凹線がみられる。外面はこまかいハケ様施文具で横方向になでられ、その上を部分的にヘラでなでてある。内面はヘラで横方向になでてあり、輪積み技法によりつくられる。明茶褐色を呈し、石英を多く含む砂質の胎土である。

262～271の土器は中期中葉（高橋Ⅲ式）の土器と思われる。272は後期末に比定される免田式土器である。

番	地点	区	層	264	5	トレンチ12	267	5	トレンチ12	270	2	G-12	2
262	5	B-31	1b	265	〃	〃	268	〃	〃	271	1	E-9	1
263	〃	トレンチ12		266	〃	〃	269	〃	〃	272	5	B'-36	2

第10表 弥生式土器の出土地一覧表

3. 弥生系土器 (273～303)

壺形土器、高坏形土器、甕形土器の3器種がある。これらは第3地点と第5地点に集中して出土している。

壺形土器(273～280)の口縁はやや外反し、頸部には一条の凹線が巡らされる。274は小形の壺であり、口縁部が直立する。外面はヘラでていねいになでられ研磨に近い。精製された土を使用しており、焼成良好である。276は肩部に一条の台形状貼り付け突帯を有し、これにはヘラ押しの刻みがつく。277は三条の三角突帯がつく。胴部は内面、外面ともヘラでなでられる。底部は不安定な平底である。280は小形の壺で摩耗が激しい。不安定な平底を有する。

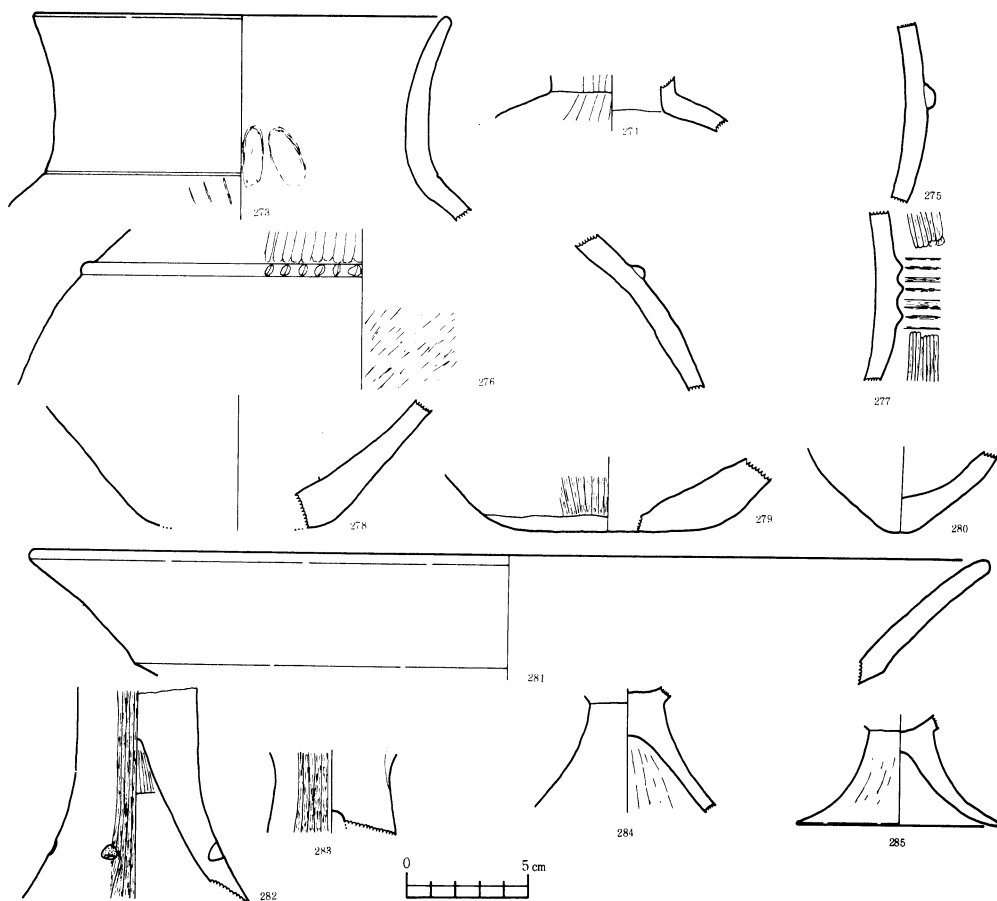
高坏形土器(281～285)の坏部は浅く口縁部が強く外反する。口縁径39.2cmを測る。脚部は、長脚のものと、裾が開く短いものがある。282は4つの円孔がみられ、そのうち1孔のみが表から裏へと抜けており、他の3孔は途中までをえぐり取った形で貫通していない。284～285はゆるやかに広がりながら端部に至る。これらの胎土は石英、黒雲母などの細かい砂粒を含む砂質胎土で、外面はヘラでていねいになでられている。

甕形土器(286～303)の口縁部はやや外反する。286は最大直径が23cmと口縁部にあり、

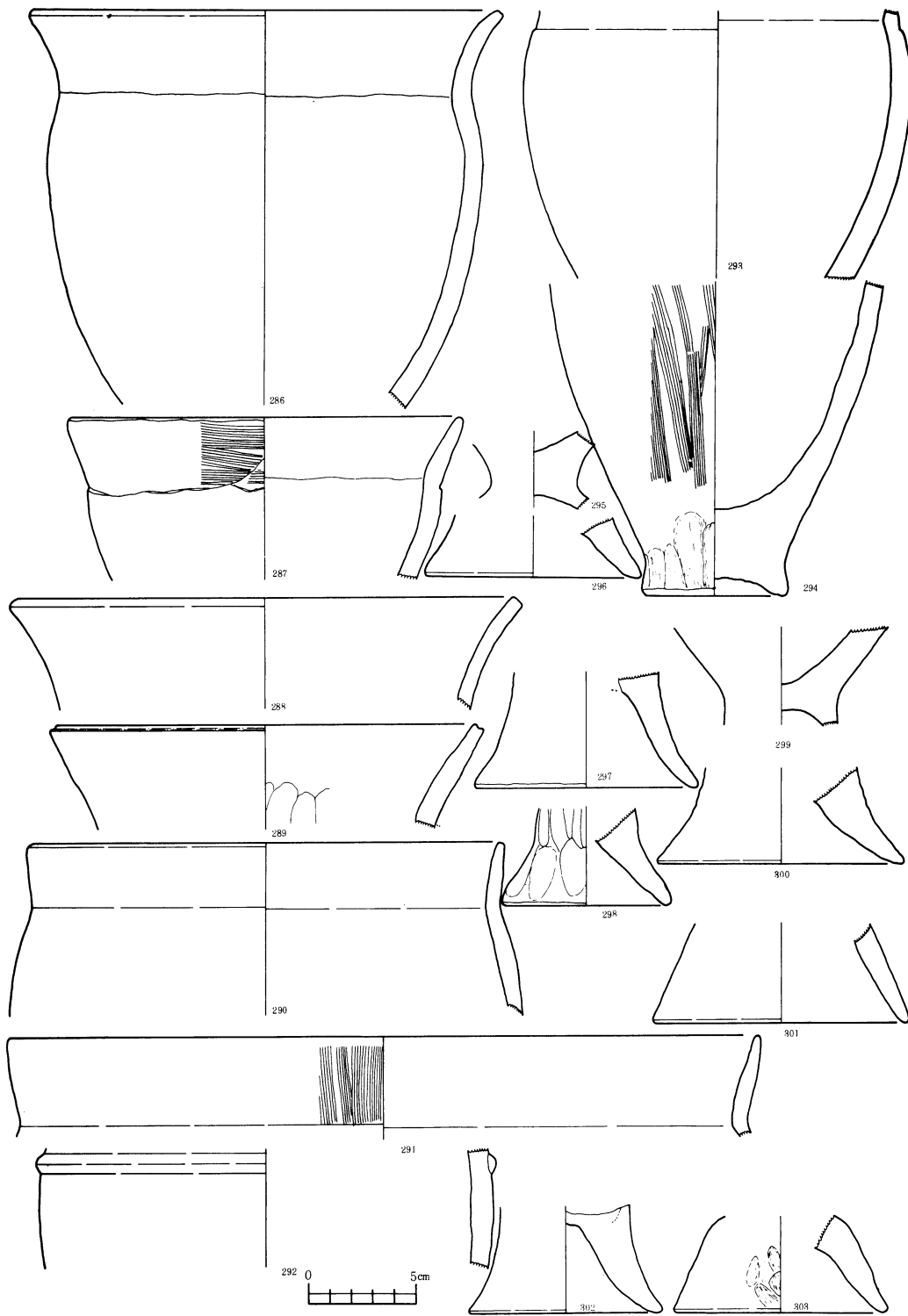
番	地点	区	層	器形	283	3	C-17	2	高坏	294	3	B-18	3 a	甕
273	5	A'-37	2下	壺	284	5	A'-37	2下	〃	295	〃	C-18	〃	〃
274	3	B-18	3	直口壺	285	1	C-8	1下	〃	296	〃	B-18	3	〃
275	〃	C-18	3上	壺	286	〃	〃	2	甕	297	〃	C-17	3 a	〃
276	〃	〃	3	〃	287	3	B-18	3	〃	298	〃	〃	〃	〃
277	5	A'-36	2下	〃	288	5	A'-36	2下	〃	299	〃	D-15	〃	〃
278	3	C-18	3	〃	289	3	C-18	3	〃	300	〃	C-17	〃	〃
279	5	A-36	2下	〃	290	5	A'-37	2下	〃	301	5	A-37	2 b	〃
280	3	C-18	3	〃	291	〃	A-36	2 b	〃	302	〃	〃	〃	〃
281	〃	〃	〃	高坏	292	〃	A-37	3 a	〃	303	〃	〃	〃	〃
282	5	A'-37	2下	〃	293	〃	A'-36	2下	〃					

第11表 弥生系土器の出土地一覧表

肩は張らず、ゆるやかに底部へ移る。外面および内面の頸部より上はなで整形によるが、頸部より下の内面はヘラ削りによって仕上げられる。内面は頸部に段をもつ。287は口縁端部が丸くなっており、口縁部と胴部の境は段ができる。289は端部に凹線が巡り、頸には突帯らしき痕跡を残す。291は口縁直径35.2cmと大きく、やや外反するが直立に近い口縁である。292は頸部に台形様の貼り付け突帯が付される。293は頸部に突帯がつかず、肩がやや張って底部に至る。頸部には段がみられる。294は浅いあげ底の脚台をもつ土器で外面は細いハケなで、内面は繊維状のハケなで仕上げられる。脚台付近はヘラで粗くなでている。脚台は浅いものと深いものがある。脚台と甕本体は別々につくられ、貼りつけられるが、この貼り付け部はヘラあるいは指のようなもので強く押され、その痕跡を残しているものもある。茶褐色あるいは淡茶褐色を呈し、胎土には石英、黒雲母などの細砂粒を多く含む。焼成はふつうである。



第 100図 弥生系土器(1)



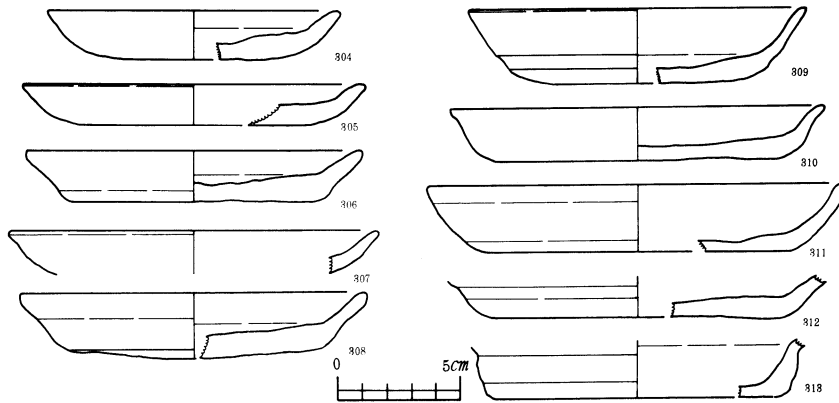
第 101 図 弥生系土器(2)

4. 土師器

表層および2層より多量の土師器が出土した。器種には皿、坏、蓋、甕、鉢、こしき、壺があり、他に坏底部を加工した円盤形土製品がある。

(1) 皿 (304~313)

口縁径12.6cm~17.6cm, 高さ2.0cm~3.1cmを測る。底部は安定した平底あるいは不安定な平底を呈し、外方に開きながら口縁端部に至る。口縁端部付近でややくびれるものもあるが、313は底部付近でもくびれ、丸みをおびて底部に至る。底部内面はろくろびきのため凹凸が目立ち、306では右回りの回転がうかがえる。底部の切離しはすべてヘラ切りで、そのあとヘラでなで仕上げている。色は茶褐色あるいは淡茶褐色を呈し、胎土は微石粒を多く含む砂質の精製粘土である。焼成度は普通であるが、311は焼成度が良く堅致である。



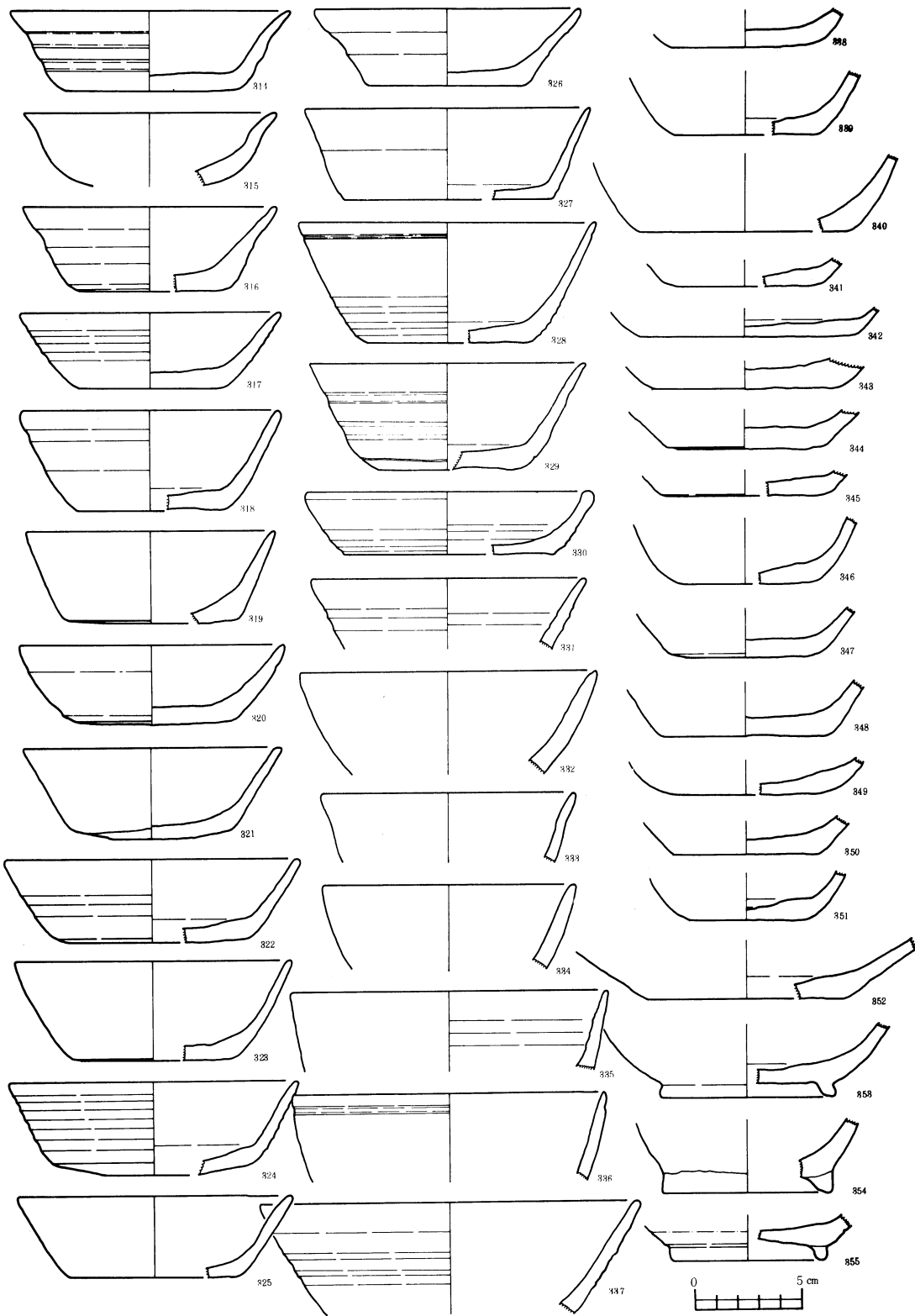
第102図 土師器(1) (皿)

(2) 坏 (314~355)

口縁径11.8cm~14.0cm, 高さ3.0cm~5.7cmを測る。底部から口縁部へは外へ開きながら、まっすぐ端部に至る。途中、ろくろびきにより数ヶ所のくぼみをもつものが多いが、336などは口縁部付近に凹線を一条施す。底部内面は、体部と底部との間に、明瞭な境をもつものが多い。底部の切離しはヘラ切で、そのあとヘラなどで仕上げるが、付け高台のつくものもある。底部は安定した平底あるいは不安定な平底で、底部付近に沈線のみられるもの(329・355)もある。色は茶褐色あるいは淡茶褐色のものも多く、白っぽい灰色、黒褐色、あるいは外に黒斑のあるものなどもある。胎土は微石粒を多く含むが精製された粘土を使用している。焼成度は良好で固く焼けているものが多い。346は須恵質に焼けている。

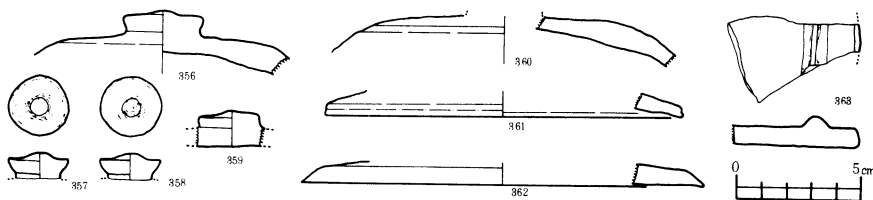
(3) 蓋 (356~363)

扁平なつまみを持ったものと、平坦なものに凸帯のついたものがある。356~361は天井部が平坦で、口縁端部は鳥嘴状に下方に突き出しここに一条の凹線がみられる。頂部には中央部がやや高い扁平なつまみがつく。内面、外面とも横方向のヘラなでがほどこされる。362は摩滅の激しい軟質の土器で、口縁端部はほそくなっておわる。363も下面が平坦となっており、



第 103 図 土師器(2) (坏)

上部の周縁近くに台形状の突帯が一条巡っている。



第104図 土師器3) (蓋)

(4) 甕 (364~402)

口縁部がくの字状に外反し、長胴形の胴部をもつ。口縁部は折れ曲がる部分の長いものと短いものがあり、種々の形態がある。ほとんどは内面に稜をもたないほどゆるやかに曲るが、強く屈曲して稜をもつものもある。端部の厚さも薄いもの、厚いものと種々様々であるが、372・373のように端部が玉縁状になるものもある。外面の調整は多くヘラでなでているが、中にはハケなでもみられる。内面は頸部より上がヘラなで、頸部以下はヘラ削りの仕上げである。402は浅い脚台が付き、表面には礫の露出が目立つほど砂粒を多く含んでいる。内面がヘラなでであり、他の土器とは時期を異にするかもしれない。

(5) 鉢 (403・404)

中型と小型のものがある。403はやや外反しながら端部にいたるもので、端部には二条の凹線が巡る。外面はハケなでの上をヘラでなでており、内面は頸より上をヘラなで、下をヘラけずりで仕上げる。404も口縁部が外反するもので胴部には2ヶ所の凸部がみられる。

(6) こしき (405)

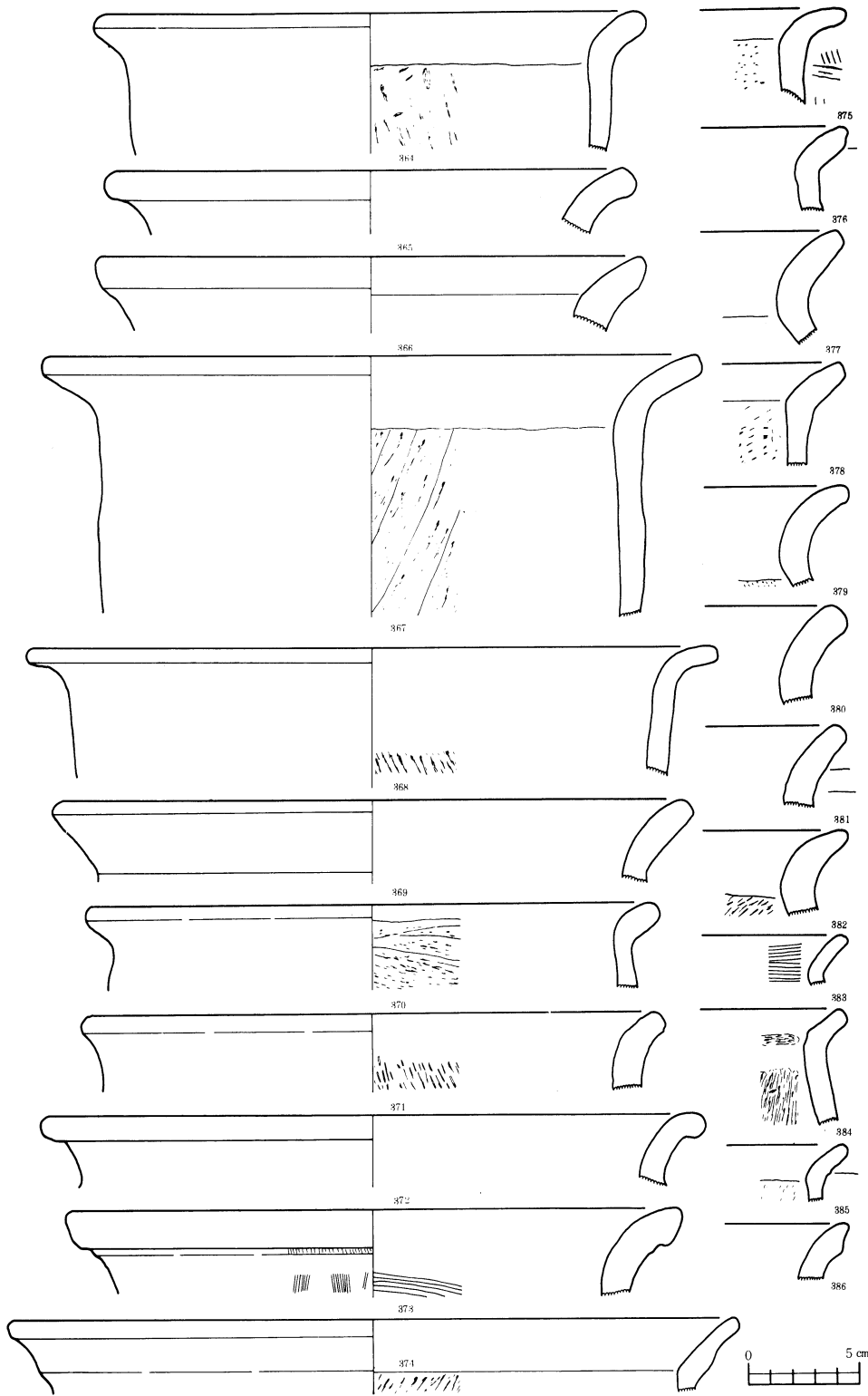
底に方形孔のみられるこしきである。方形孔の数は不明であるが、外面はたて方向のハケなで、内面はヘラ削りで仕上げている。茶褐色を呈し、砂粒の多い胎土である。

(7) 壺 (406~409)

406は口縁部、底部を欠くが、丸みをおびた器形をしている。肩部はハケなでにより凹線風になっている。外面はハケなでのあとヘラでていねいになでており、内面は削りに近いヘラなでである。底部には安定した平底と丸底がある。

(8) 土製品 (410~412)

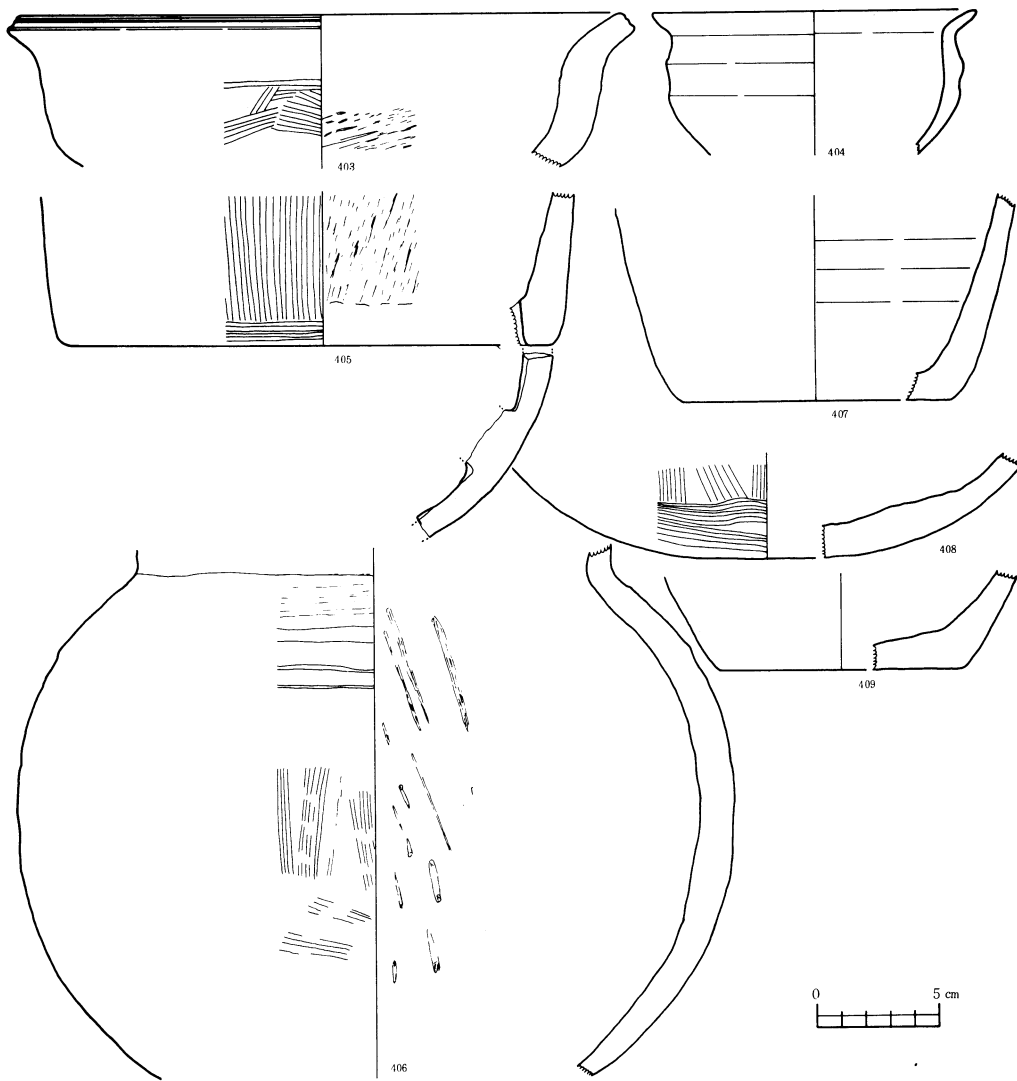
坯の底部の周辺をみがいて円盤状にしたものがある。410は上下に孔をあけているが、抜けていない。411は上面にヘラ描き沈線がみられるが、意図しているのは不明である。



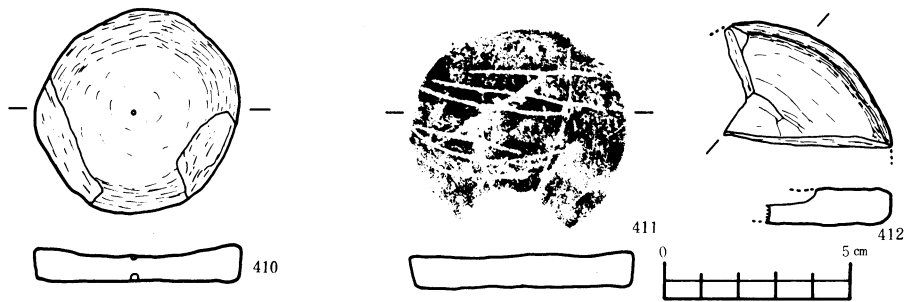
第 105 図 土師器(4) (甕 - 1)



第106図 土師器(5) (甕-2)



第107図 土師器(6) (鉢・こしき・壺)



第108図 土師器(7) (土製品)

番	地点	区	層	器形	番	地点	区	層	器形	番	地点	区	層	器形
304	3	E-16	3上	皿	339	3	C-16	2	坏	375	1	C-6	pit	甕
305	〃	〃	2	〃	340	〃	〃	〃	〃	376	〃	D-7	2	〃
306	2	F-10	3	〃	341	〃	E-15	〃	〃	377	〃	〃	〃	〃
307	3	D-15	3上	〃	342	〃	F-16	3a	〃	378	3	C-16	2下	〃
308	〃	D-16	2	〃	343	2	F-12	2	〃	379	1	D-9	1	〃
309	〃	F-16	3a	〃	344	〃	G-12	〃	〃	380		不明		〃
310	1	D-7	3a上	〃	345	〃	E-11	2a	〃	381	1	D-7	2	〃
311	〃	E-6	3a	〃	346	5	B-32	1b	〃	382	〃	E-7	1	〃
312	〃	E-8	2下	〃	347	2	F-10	3a	〃	383	〃	D-8	1	〃
313	2	F-11	1	〃	348		不明		〃	384	3	F-16	3a	〃
314	〃	F-12	3a上	坏	349		〃		〃	385	〃	D-15	3上	〃
315	3	C-15	3上	〃	350	1	E-8	2下	〃	386	1	D-7	2	〃
316	2	F-11	3a上	〃	351	〃	〃	〃	〃	387	〃	D-8	2下	〃
317	〃	F-10	〃	〃	352	2	F-12	〃	〃	388	3	D-16	2	〃
318	〃	F-13	〃	〃	353	3	F-16	3a	〃	389	1	B-8	2下	〃
319	1	D-4	〃	〃	355	〃	C-15	2	〃	390	3	D-15	3上	〃
320	1	E-8	2下	〃	356	2	F-12	〃	蓋	391	〃	D-16	2	〃
321	2	E-12	3a	〃	357	1	D-8	2下	〃	392	〃	C-16	〃	〃
322	〃	F-11	ピット	〃	358	〃	E-8	〃	〃	393	1	E-7	2下	〃
323	〃	不明		〃	359	3	E-17	3上	〃	394	3	D-16	2	〃
324	〃	F-10	2b下	〃	360	〃	E-16	3a	〃	395	1	F-10	3a	〃
325	〃	G-12	2	〃	361	2	F-12	1b	〃	396	3	D-15	3上	〃
326	〃	F-11	3a上	〃	362	3	C-15	3上	〃	397	2	F-11	2a下	〃
327	〃	〃	2a下	〃	363	5	A-36	2	〃	398	1	E-9	3	〃
328	1	E-8	2	〃	364	3	C-16	2	甕	399	2	G-12	2	〃
329	〃	D-9	2下	〃	365	2	G-11	2	〃	400	1	E-8	3a	〃
330	〃	D-6	pit	〃	366	〃	E-12	3a上	〃	401	〃	E-1	2	〃
331	3	D-16	2	〃	367	1	E-9	2下	〃	402		不明		〃
332	2	F-11	1	〃	368	3	D-16	2	〃	403	1	E-9	2下	鉢
333	3	C-16	2	〃	369	2	G-11	〃	〃	404	〃	E-1		〃
334	2	G-11	〃	〃	370	3	F-16	3a	〃	405	〃	D-7	3a上	こしき
335	3	C-16	3上	〃	371	〃	C-17	3	〃	406	〃	D-9	2下	壺
336	2	E-11	2a	〃	372	2	G-11	2	〃	407	2	G-12	2	〃
337	3	E-16	2	〃	373	2	F-10	3上	〃	408	3	C-17	3	〃
338	1	D-9	2	〃	374		不明		〃	409	2	G-11	2	〃

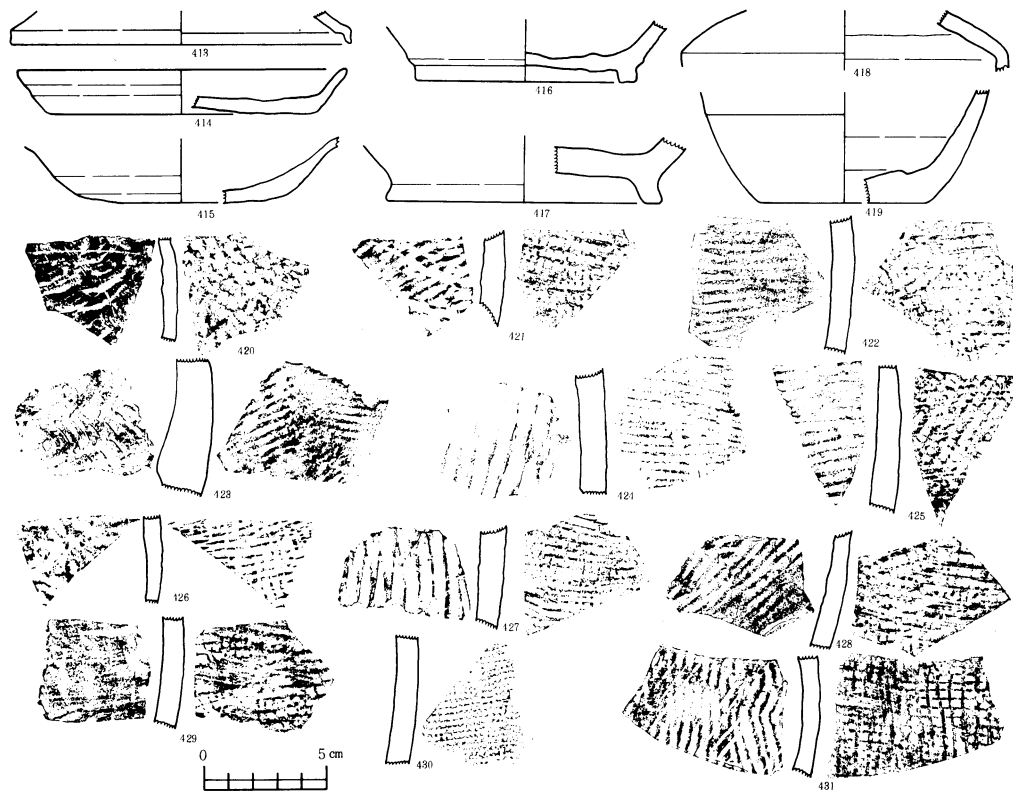
第12表 土師器の出土地一覧表

5. 須恵器 (413~431)

坏蓋は口縁端が下方に鳥嘴状に突き出し、扁平なつくりである。皿はあげ底ぎみの平底からまっすぐ口縁端にいく。口縁径13.5cm, 高さ1.8cmを測る。丸みをもった平底の坏は口縁部がやや外反する。碗の高台は端部がやや外に張り出す。418は瓶の肩部である。肩部は丸みをもって頸部に至り、胴部はやや細まってまっすぐ底部に至る。419も瓶の底で、底部近くに細い沈線が1本みられる。安定した平底で丸みをもちながら胴部に至る。417もあるいは瓶の脚台かも

番	地点	区	層	器形	419	2	F-11	2a下	瓶	426	5	A-32	2	かめ
413	3	D-16	2	蓋	420	1	D-9	2下	甕	427	1	D-8	2	〃
414	2	G-12	2	皿	421	4	A-29	1	〃	428	2	F-11	2a下	〃
415	3	D-15	2	坏	422	1	E-9	2下	〃	429	〃	G-11	2	〃
416	〃	C-16	2	碗	423	2	F-10	2a	〃	430	〃	F-10	3a上	〃
417	〃	〃	〃	〃	424	〃	F-11	1	〃	431	〃	G-11	2	〃
418	1	E-4	1	瓶	425	5	A-35	2	〃					

第13表 須恵器の出土地一覧表



第109図 須恵器

しれない。甕の胴部は外面に格子あるいは平行の叩き、内面に平行あるいは円弧の叩きがほどこされるが、ハケで消されるものもある。外面の叩きにも幅の広いものと狭いものがあるが特に430の叩きは狭い。内外面とも灰色を呈し、硬質に焼けたものと、断面が褐色を呈し軟質のものがある。

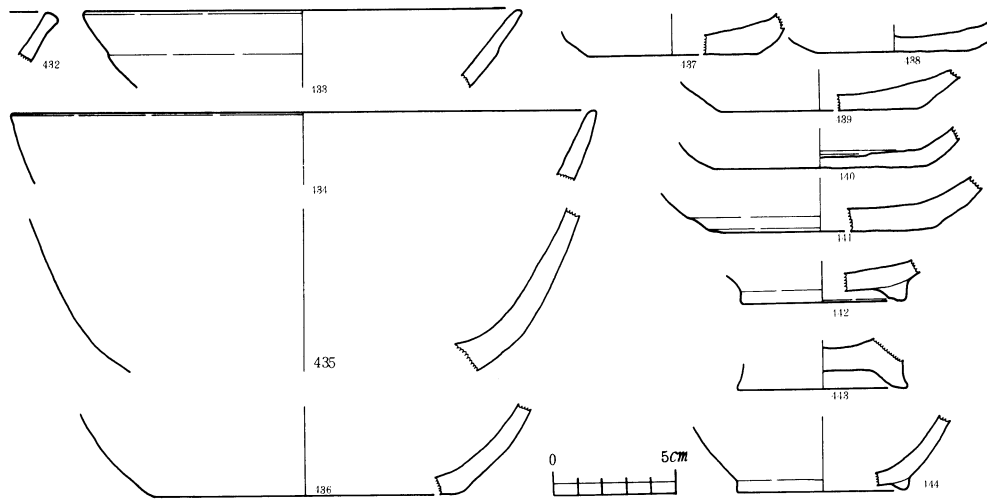
これらの須恵器は7世紀後半から8世紀頃のものと思われる。

6. 黒色土器 (432~444)

黒色土器は、内面の黒い内黒土師器と呼ばれるものだけで、器形は坏と碗のみである。坏は外に開きながらまっすぐ口縁部に至り、底は安定した平底である。口縁部は細くなりながら丸みをもっておわる。432は端部がやや広がり方形状になっておわる。内面は光沢をもっているが、434・438・441は光沢がにぶい。434・435・436は大型の碗で、口径24cm、底径12.4cmを測る。丸みをもった器形で、まっすぐのびて口縁端部に至り、安定した平底である。底には貼り付け高台がつくものもある。442は直立に近い高台がつくが、443はやや外反しながら端部に至る。444は小さい貼り付け高台がついており、底面との高さは低い。色調は淡茶褐色、暗茶褐色を呈し、胎土は砂質であるが、精製されており致密である。

番	地点	区	層	器形	436	3	E-15	2	碗	441	3	D-15	2	坏
432	1	D-8	2下	坏	437	1	E-6	1	坏	442	2	G-11	〃	碗
433	2	G-11	3a上	〃	438	2	E-11	2a	〃	443	1	B-9	1	〃
434	〃	F-11	3a上	碗	439	〃	F-12	3a上	〃	444	〃	D-8	2	〃
435	〃	〃	〃	〃	440	3	C-16	2	〃					

第14表 黒色土器の出土地一覧表



第110図 黒色土器

7. 磁器 (445~452)

磁器には染付 (445~449)、白磁(450)・青磁(451・452)がある。445の外面には口縁下部と底部近くに各1条の横線が描かれ、内面には横線と文様が描かれる。446は高台の付く口縁部が若干外反する坏で、外面には口縁下部と底部近くに各1条の横線が描かれる。内面には口縁近くに1条の横線と見込みに横線と草花文が描かれる。447は青っぽい白磁に暗い青色で描かれ、外面には横線と草花文がみられる。448・449は碁笥底で、448が見込みまで施釉されるのに対して449は施釉されない。448は外面・内面とも文様がみられる。449は見込み周辺と底部周辺に暗緑色の横線がみられる。450は割合に高い台がつき、高台内面には施釉されない。451の外面にはヘラ描きの蓮華文があり、弁の先端は連続した山形の刻線によって表現する。見込み付近にも線刻がみられる。452は深い高台で、高台内面は周辺のみ施釉される。

8. 陶器 (453・454)

453は軟質に焼けたすり鉢で、内面に7条以上のかき目がみられる。外面にはうすくハケ目が残っている。454は内面・外面とも上部分に紅色の釉がかかったすり鉢である。内面には8条のかき目が割と密に引かれている。口縁端部は内外に若干張り出しており、外面には浅い凹線がみられる。口縁下にはやや下を向いた三角突帯が1条貼りつけてある。

9. 瓦器 (455~460)

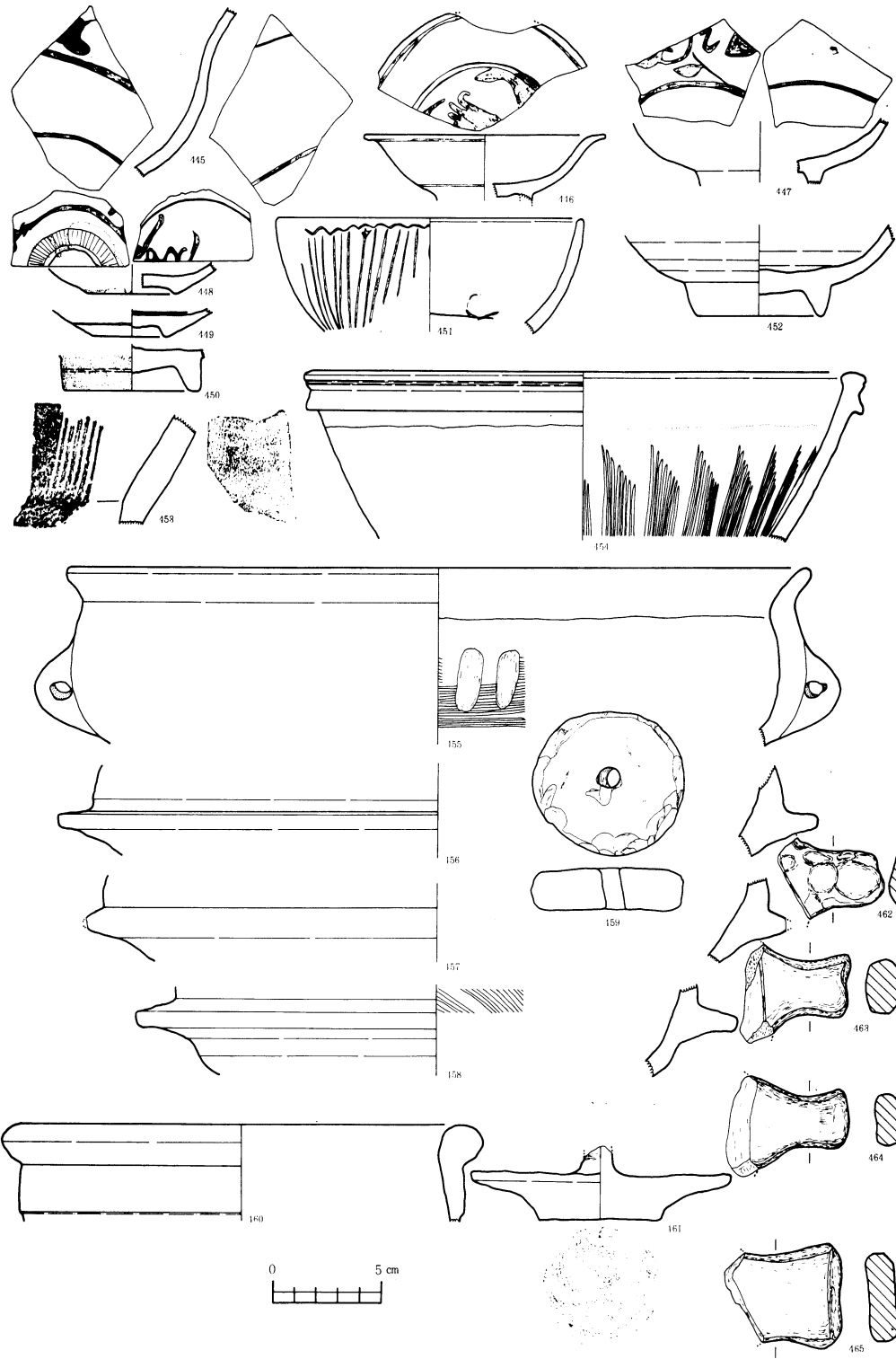
土鍋と鉢がある。土鍋は口径34.0cmを測り、口縁部がくの字状に外反する。肩の部分には棒状のもので穿孔された把手があるが、その数は不明である。胴部には断面矩形のつばがみられ、その下にススのついたものもある。外面はヘラなどで、内面はハケあるいはヘラなどで仕上げる。459は瓦器を再利用して紡錘車にしている。周辺をみがいて丸く仕上げ、中央に穿孔している。460は玉縁状の口縁をもつ鉢で、内外面ともヘラでていねいになでて仕上げてある。

10. 土師質土器 (461~465)

蓋と土鍋の把手がある。461は上部に棒状のつまみがあり、蓋と思われる。上部はろくろ痕跡を残すが、ほぼ平坦で、最大径12.0cmを測る。底部は回転糸切りで離しており、焼成は良好である。462~465は土鍋の把手で、接続部からはずれている。指なのであるいは、ヘラなどで仕上げてあり、焼成は良好である。

番	地点	区	層	種類	452		不明		青磁	460	5	A-30	1	瓦器
445	1	C-5	ピット	染付	453	2	E-13	2	陶器	461	1	C-6	1	土師質土器
446	2	E-10	集石	〃	454	3	D-17	〃	〃	462	1	C-7	1	〃
447	〃	E-12	落込	〃	455	2	E-13	〃	瓦器	463	1	D-6	P-2	〃
448	〃	E-12	2	〃	456	3	D-15	〃	〃	464	2	B-10	1	〃
449	〃	E-10	集石	〃	457	2	G-12	〃	〃	465		表採	1	〃
450	〃	〃	〃	白磁	458	〃	E-13	〃	〃					
451	〃	E-11	〃	青磁	459	1	E-7	1	〃					

第15表 磁器・陶器・瓦器・土師質土器の出土地一覧表



第 111 図 磁器・陶器・土師質土器

第2節 石器

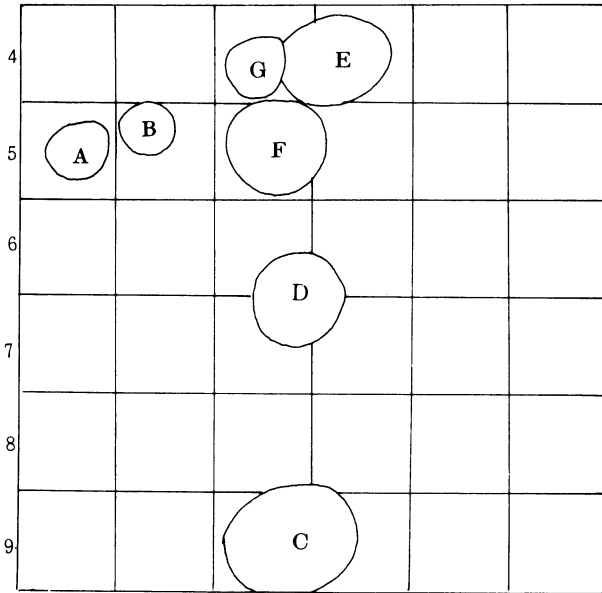
1. 先土器時代の石器

(1) 石器・剥片類の分布

先土器時代の遺物は、5・6層より出土している。遺物には、細石刃・細石刃核・ブランク・スクレイパー・剥片・碎片・石鏃・打製石斧・土器片および礫があり、これらの遺物は、散在的ではあるがあるまとまり（ユニットとして記録）をみることができる。これらのユニットは第112図に示すような分布となっている。

石峰遺跡での遺物集中ケ所（ユニット）は7ヶ所認められた。

このユニットの設定には、平面的なまとまりをその第一条件とした。次に、5層・6層の2層に出土している遺物とユニットとの関係については、①5層と6層の遺物（特に主体である細石器）に、形態的な差異を認められない。②層位別に出土している遺物の出土位置（垂直分布・レベル）には極めて近い関係が認められ、分離が不可能である。③5層と6層の石器に接合関係が認められる。以上の要因を認め、5層と6層の遺物が同一時期の所産であるとの観点に立って、5層と6層の全ての遺物を投影し、平面分布、垂直分布によるユニットを7ヶ所としたものである。ユニットとして最も把握しやすいのはAユニットであり、B・C・Dの3ユニットは、散在的であり、分布している遺物群の中心地としての把握の方法に基づいている。また、Gユニットが最も多くの遺物を持っている。G・E・Fの3つのユニットも分離は困難な状況である。E・Fのユニットは、Gユニットを取りまく遺物群としての性格も充分考えられ

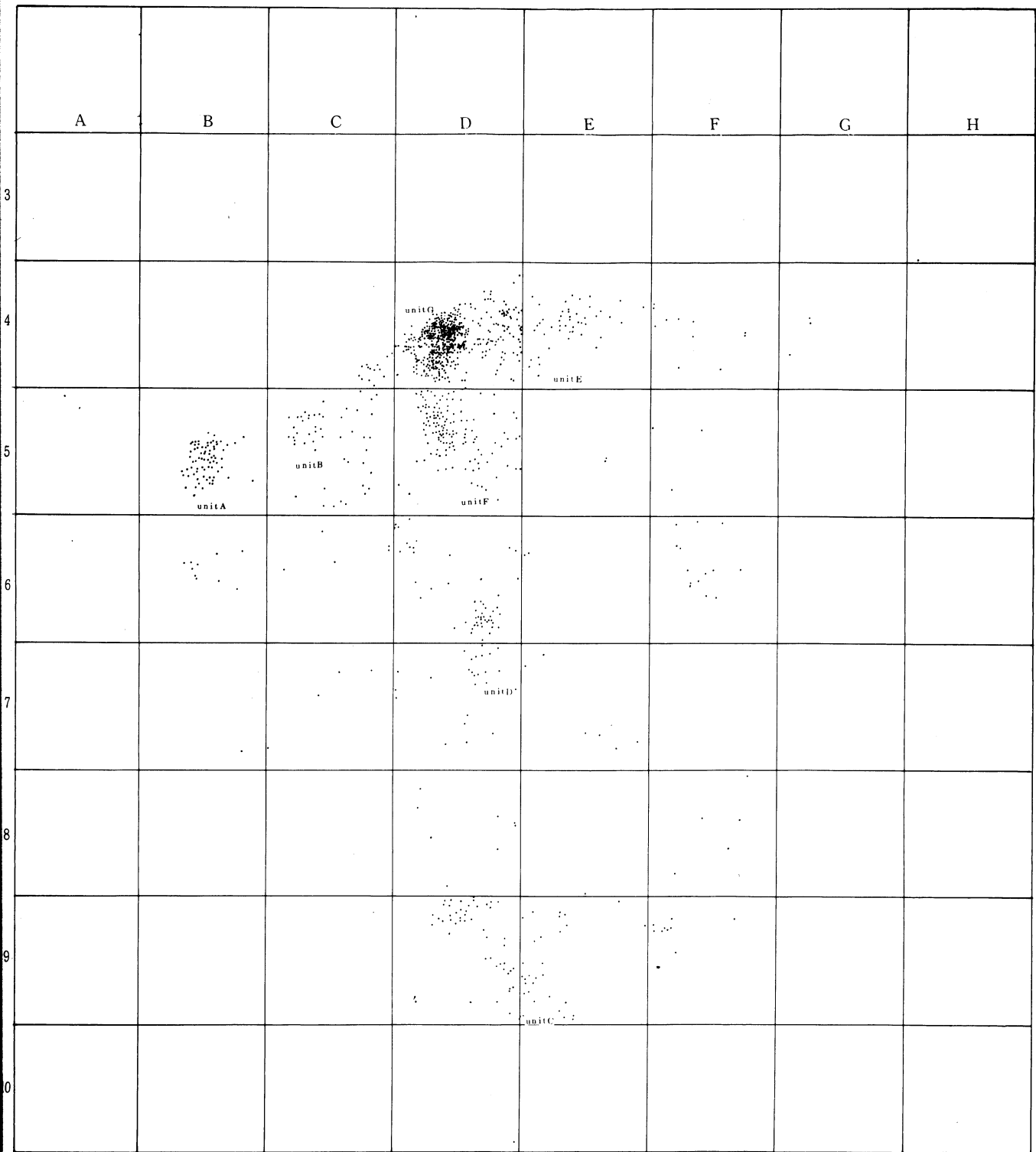


第112図 先土器時代ユニット略図

れユニットとしての基本的な問題にかかわることでもある。

第113図に黒耀石、安山岩、硅岩の分布を示し、頁岩の分布状況は、第136図頁岩を素材とした石器分布と接合関係の中で示してある。

遺物番号は、全てを共通番号とし、遺物番号と本文中の番号は同一であり、グリッド別出土図に記入している番号も同一である。



第113図 先土器時代 遺物分布図

2. ユニット出土の遺物とその他の遺物

(ア) Aユニット (第114図, 1~38, 図版53)

ユニットAは、89点の出土品があり、その全てが黒耀石を石材としている。

細石刃38, 細石刃核1, 剥片36, 碎片14の出土数で、細石刃の占める割合は、52%となる。細石刃には、切截手法が認められ、頭部・中間部・末端部の三部分にとりあつかうことができる。細石刃の形状には特に、大きな変化はみられないが、幅に17・18の3~4mmのものから、4・26の6~7mmに至るものが使われている。また、19・23・24などの側縁には、使用痕と考られる刃こぼれ状剥離が残されている。37は、内側に反る縦長剥片の先端部の片側に主要剥離面方向からの刃つぶしを施している。この石器が何に使用されたか不明であるが、鋭利な先端部の主要剥離面に一枚の剥離痕が観察される。ナイフ形石器的製作過程を見ることができ、1点だけであるので分類から外した。細石刃核は、38の1点だけで良質な黒耀石を用い、打面調整は、細石刃剥出面より行ない、打面角は40度で、正面より背面方向に傾斜する打面となっている。

石器の出土は、5層・6層にみられる。

(イ) Bユニット (第114図, 39~49, 図版53)

29点の石器が出土し、細石刃10, 剥片18となり、細石刃出土比率は34%となる。石材の比率では、黒耀石が86.2%になる。図示した石器は、全て黒耀石を用いたものである。

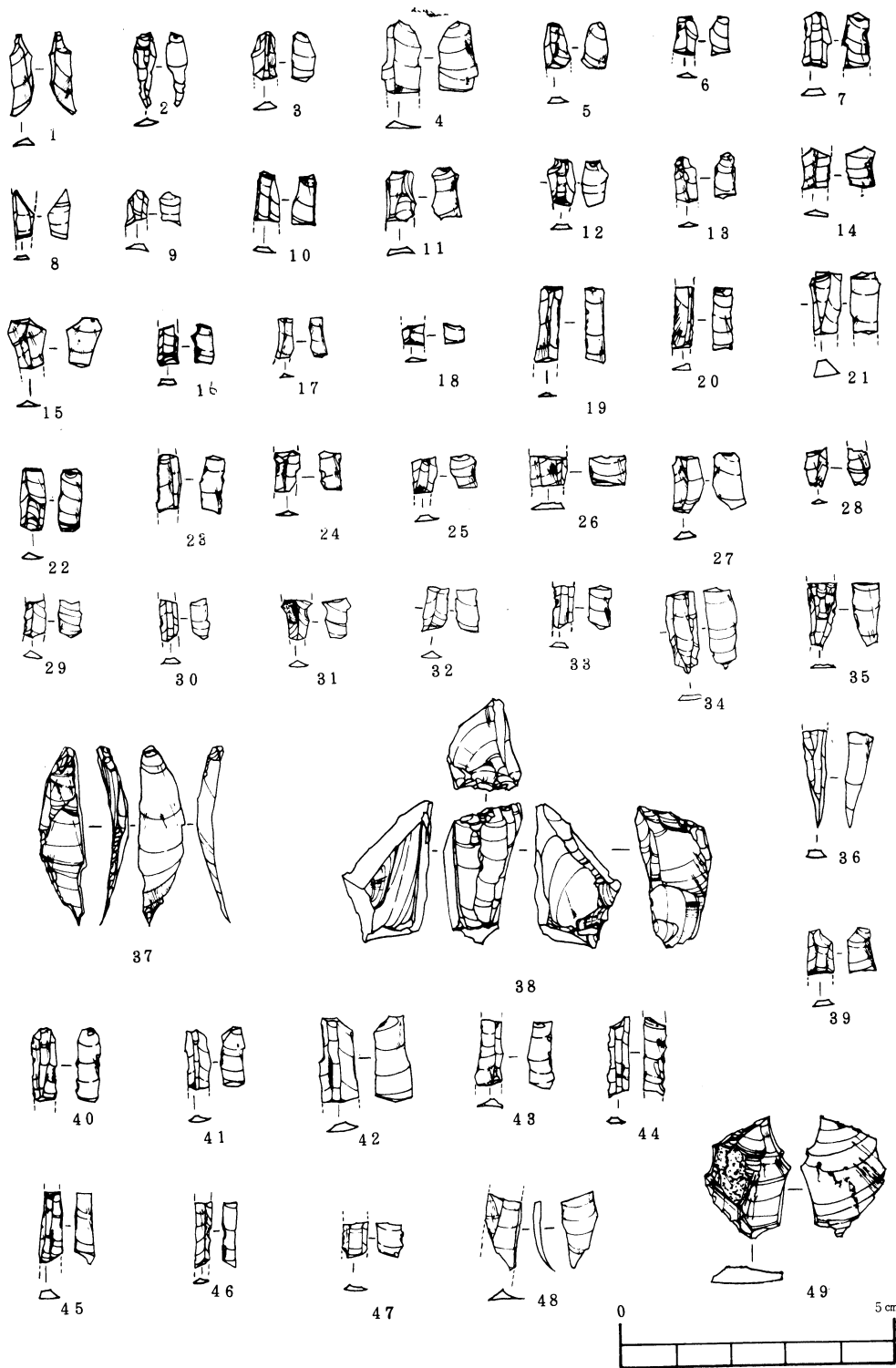
このBユニットより出土している細石刃は、形状の整ったものが目立ち、刃部には、明瞭な刃こぼれ状剥離痕が認められる。49は、左側縁の一部に、刃こぼれ状剥離があり、使用痕のある剥片とすべき石器なのかもしれない。

(ウ) Cユニット (第115図, 50~84, 図版54)

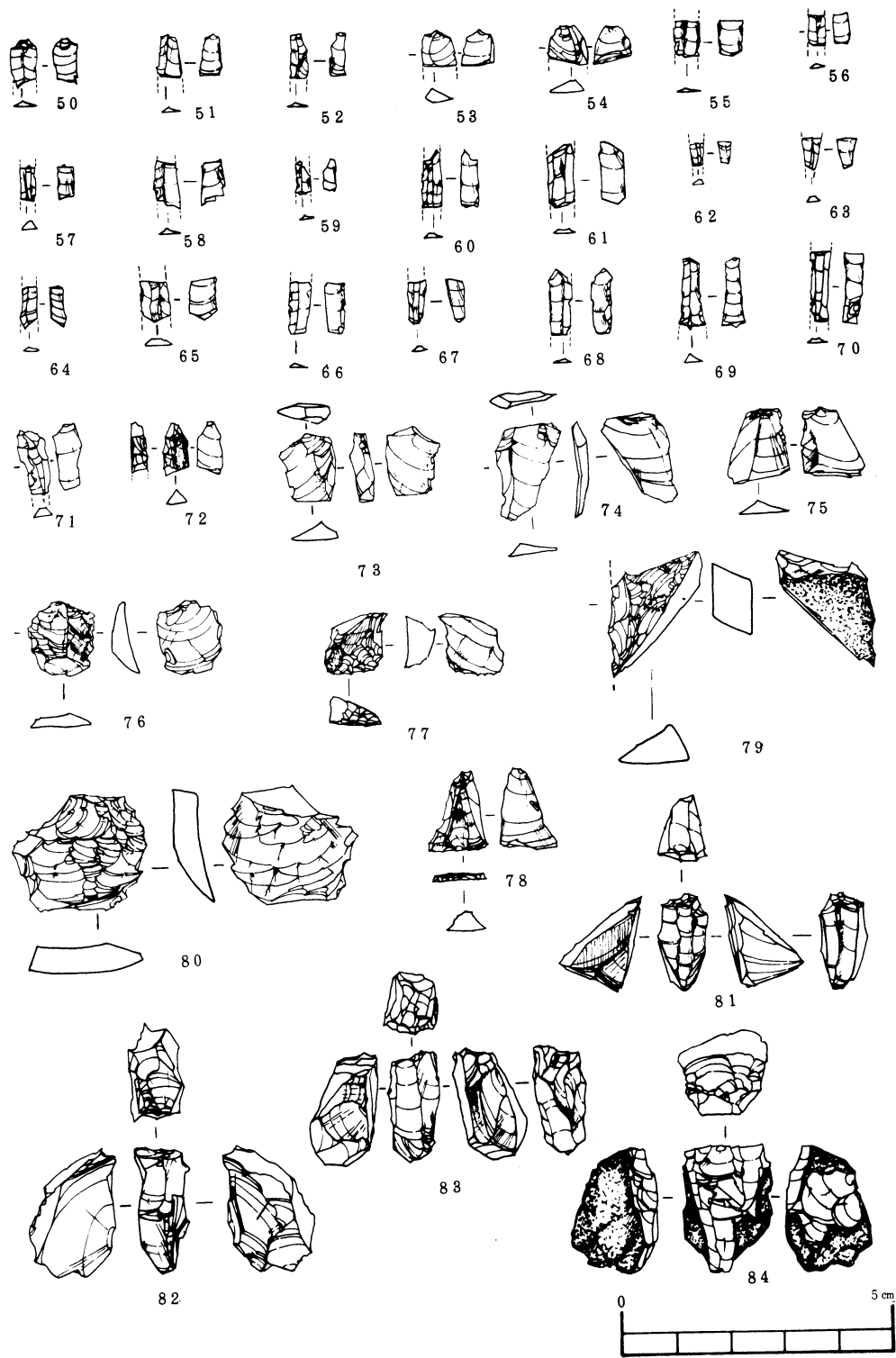
Cユニットでは、78点の分布がみられ、石材は全て黒耀石を利用している。

72は、自然面を一部に残す石核調整剥片の一部とも考えられる。76~80は、スクレイパー的機能をもつものと考えられ、76は、不定形な剥片を選び、その剥片の先端部に、主要剥離面方向から細部加工を行ない、親指状搔器 (thumb-nail-scraper) 的形狀を呈している。77も、76に近いものと考えられる。78は、石核調整剥片を再利用したものと考えられ、剥片の下端部に刃部調整を行なっている。80は、特に入念な刃部加工は見られないが、剥出した剥片がスクレイパー的機能と形状を備えており、加工なしで使用している。

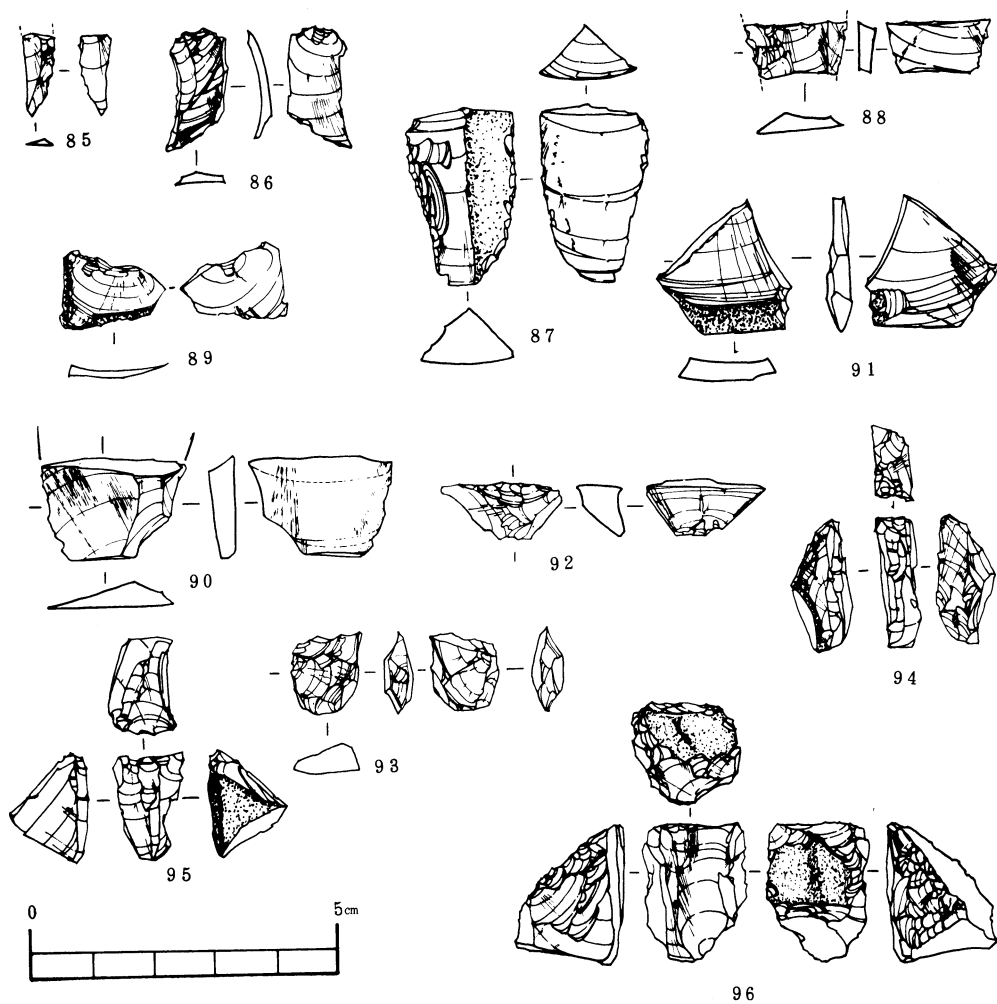
細石刃核4点 (81~84) で、81は、正面・打面の二面にフルーティングが見られ、打面角は39度である。82・83の打面角は55度・85度となり、正面にのみフルーティングを行なっている。84は、原石に小礫を用い、打面には自然面を残し、右側縁に大まかな石核調整を行ない、打面角は68度である。



第114図 ユニットA (1~38) ユニットB (39~49)



第 115 図 ユニット C (50~84)



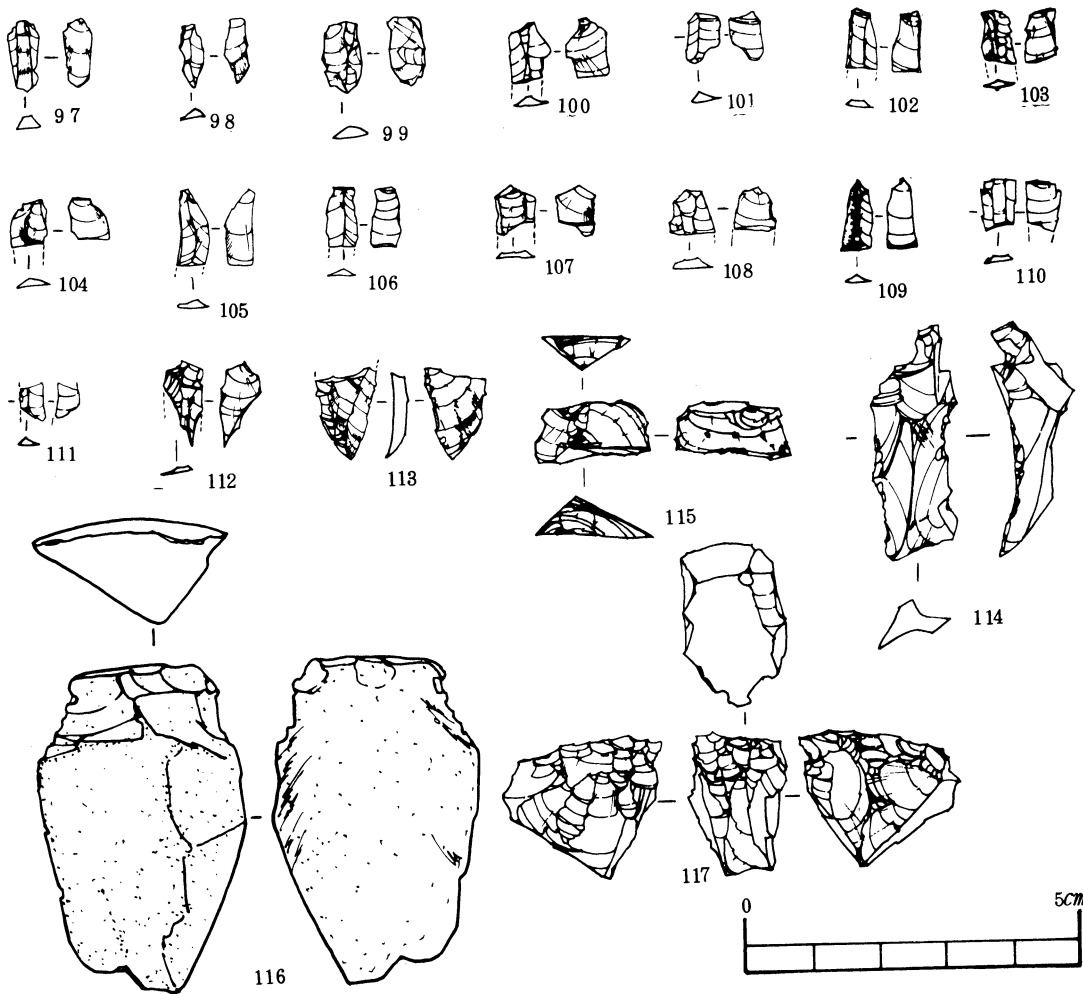
第116図 ユニットD (85~96)

(工) Dユニット (第116図, 85~96, 図版54)

このユニットでは、真正な細石刃の出土は認められていない。

87は、稜の高い断面三角形の剥片の両側縁に、裏面方向からリタッチを行ない刃部としている。88は、縦長剥片の頭部と末端部を取り去ったもので、折断(分割)剥片である。90は、安山岩製で剥片の末端部にあたり、打面転移が行なわれている。93は、不定形の剥片を用い、正面、裏面とも横方向よりの剥離により構成されている。先端部も横方向からの調整がなされ、リタッチが施され、鋭利で平坦な刃部を作り出し、両側縁に背つぶしに近い剥離が見られ、断面は台形の形状を呈している。

細石刃核3点(94~96)で、96は、打面に自然面を残し、フルーティングは正面にのみ見られ、打面の転移を行なっている。石核調整は両側縁に集中し、円礫を縦割りにしたものを使用している。3点の打面角は、それぞれ33度、42度、50度(83度)となっている。



第 117 図 ユニット E (97 ~ 117)

(オ) E ユニット (第 117 図, 97 ~ 117 図版 55)

16 点の細石刃が出土し、頭部が最も多く、完形品でも短いものが目立っている。

114 は、内側に反る縦長で不定形な剥片を利用している。両側縁に、裏面方向よりの剥離痕が見られ、刃こぼれの剥離である。115 は、折断剥片で、上位は正面より、下位は裏面より力が加えられている。116 は、唯一石材に砂岩を用いたものである。

細石刃核出土はなく、117 は母核 (ブランク) と考えられる不純物を含んだ黒耀石を素材とし、背面部はほとんど形成されていない。打面、下端部は、右方向よりの一撃の加撃で形成され、フルーティング面は、打面右斜め方向より形成している。細石刃剥出を数回試みてはいるが、フルーティング面上位で、打瘤が残されている。

(カ) Fユニット (第118, 119図, 118~154, 図版55・56)

ユニットFでは、総数 162点の遺物が採集されている。細石刃として取り扱った19点のうち頭部9, 中間部3, 末端部6と、中間部が少ないことに気づく。

143 は、不定形な剥片を横位に使用し、両側縁の打瘤部と末端部を切断して除去している。刃部は、上位に設けられ内反する抉入形となる。144 は、自然面を残す不定形な剥片を、横位に使用し、両側縁ともブランディングを施しており、形状は、台形石器に類似し、上位に平坦な刃部を作り出している。142 は、縦長剥片の右側と末端部にリタッチを行ない、スクレイパー様の刃部を作り出している。147 は、安山岩質の石材で、翼状剥片に近く、風化が激しく刃部の観察は困難である。148 は、安山岩の扁平礫で欠損しているが、用途は不明である。145 は、石核調整剥片で、断面三角形の形状で、正面に細石刃剥出の行なわれた後が残され、背面の剥離観察では、打面より一撃で剥離が行なわれている。146 は、ブランクであり、上面観は打面の広い長方形で、側面は舟底形に近い。

さらに、石材に頁岩を使用した石器が22点出土している。これらの石器には、接合関係が認められているので後に記す。

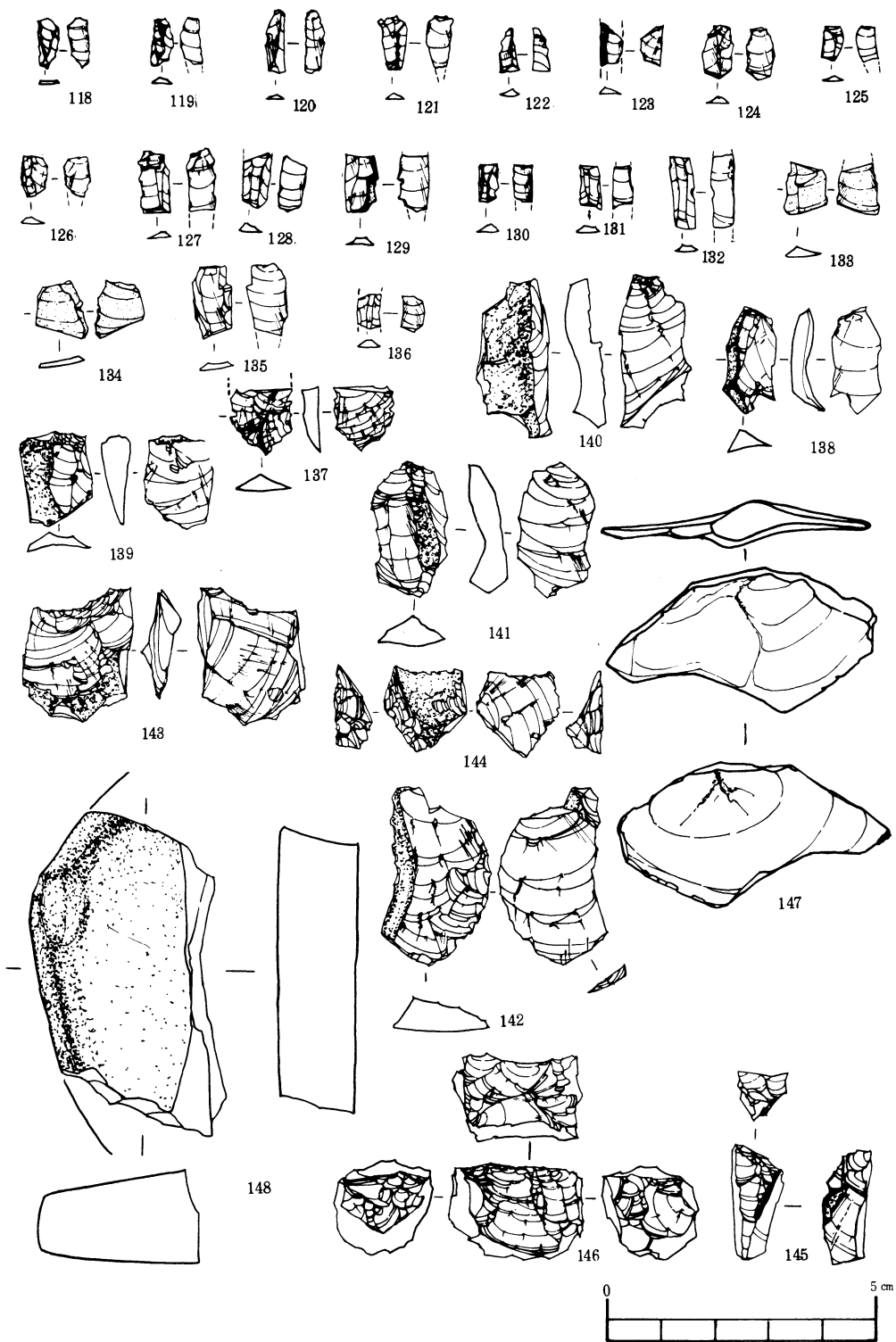
(キ) Gユニット (第120, 121図, 155~199, 図版56)

最も出土量の多いユニットであり、総数 446点の遺物が出土している。

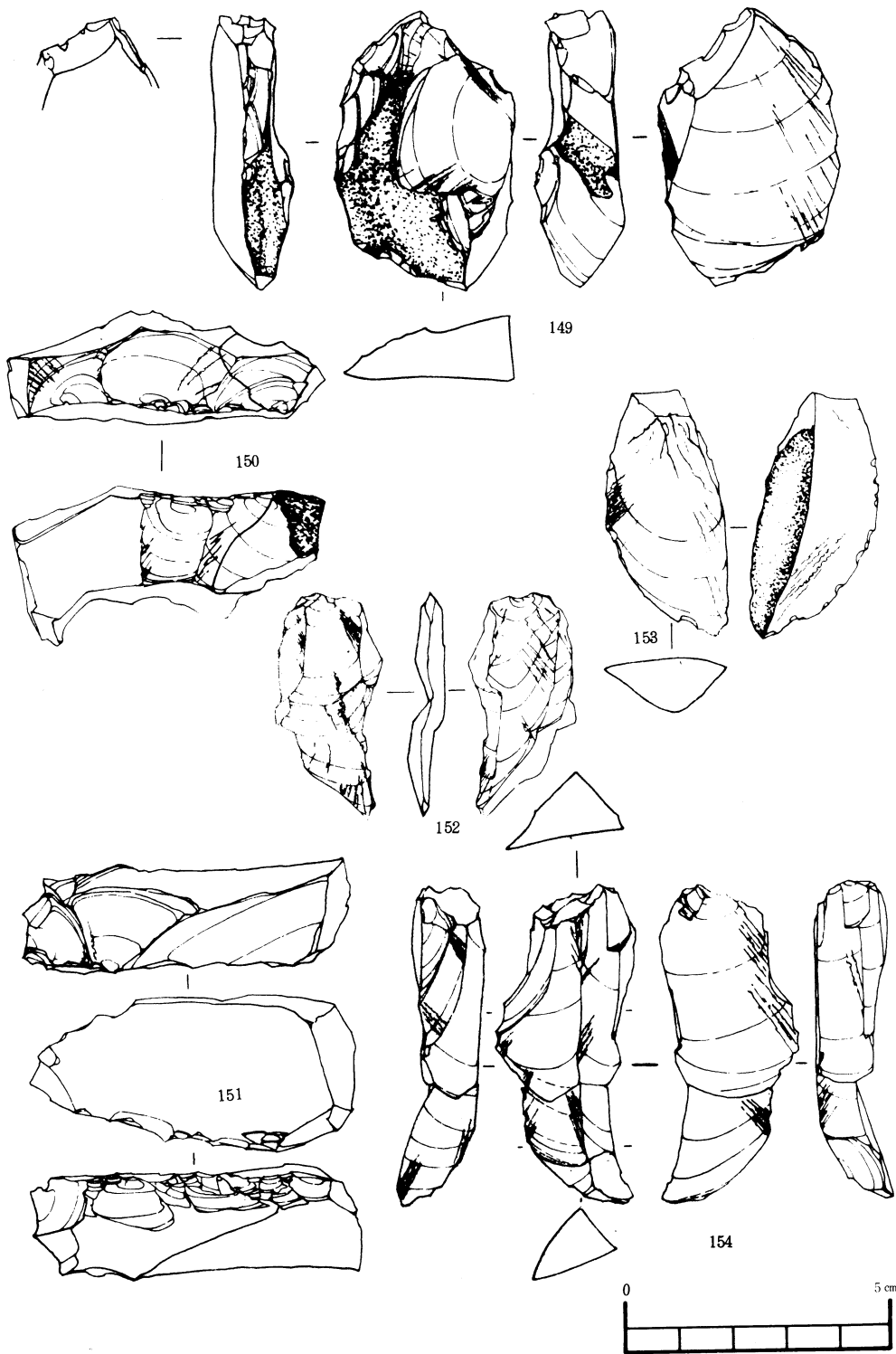
細石刃として取り扱った20点は、頭部14, 中間部1, 末端部5と極単に中間部の少ない分布となっている。また、剥片と碎片の石器に占める比率もそれぞれ44%, 48%となり両者で92%の高い数字を表わしている。以上のような内容は、他のユニットには全く見られず、Gユニットの性格、他のユニットとの比較に重要な要素をもつものと考えられる。

183・184は、縦剥ぎの剥片の末端部に裏面方向からのリタッチが施され、スクレイパー様の石器に仕上げている。187・190は、剥片の頭部と末端部を折断したものであり、同じ製作技術を看過できる。

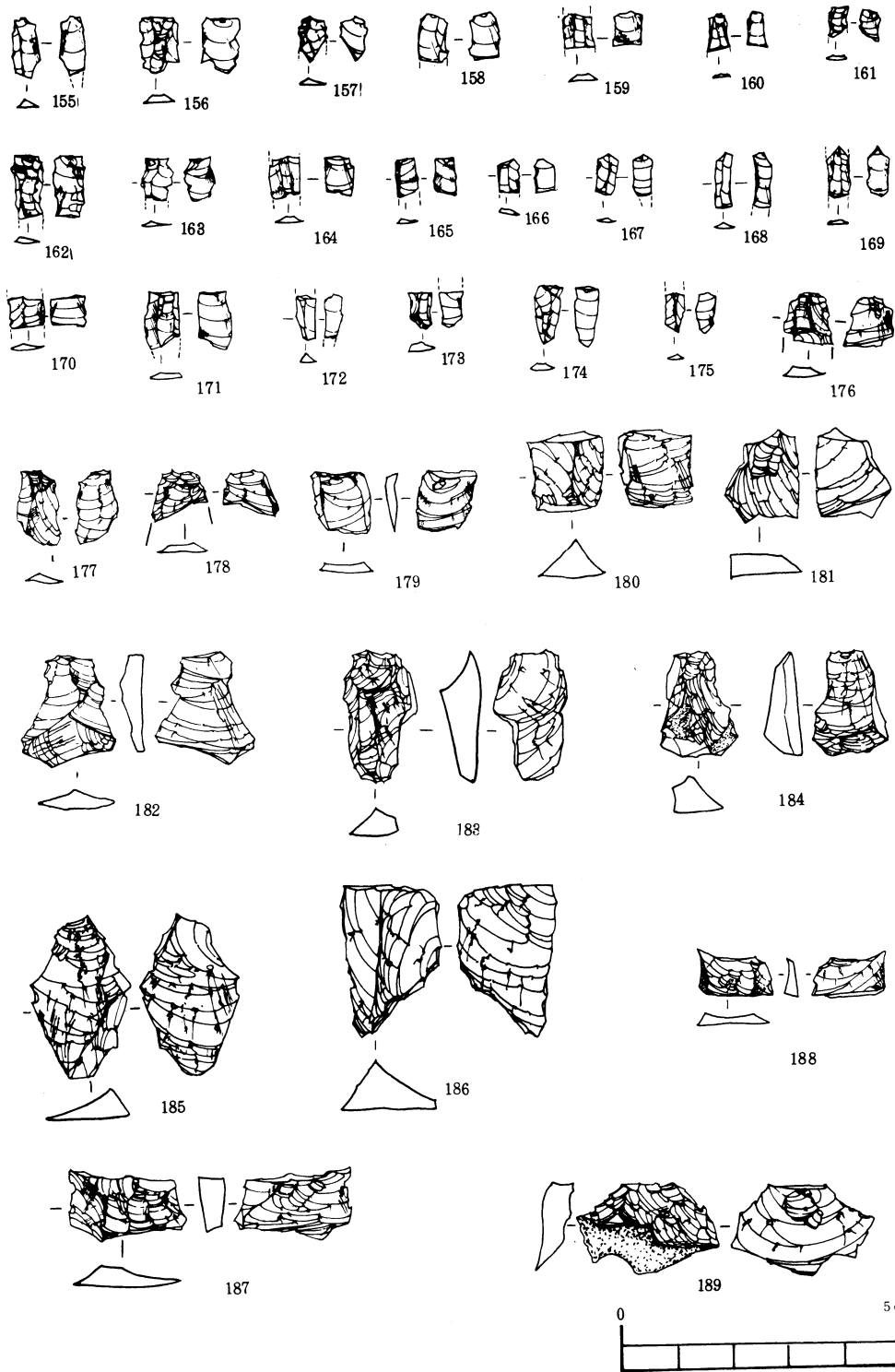
ブランクが4点出土している。全て平坦打面であり、196, 197は、打面方向よりの石核調製が見られ、198は、調製剥離の方向を、上下に回転しながら行なっている。



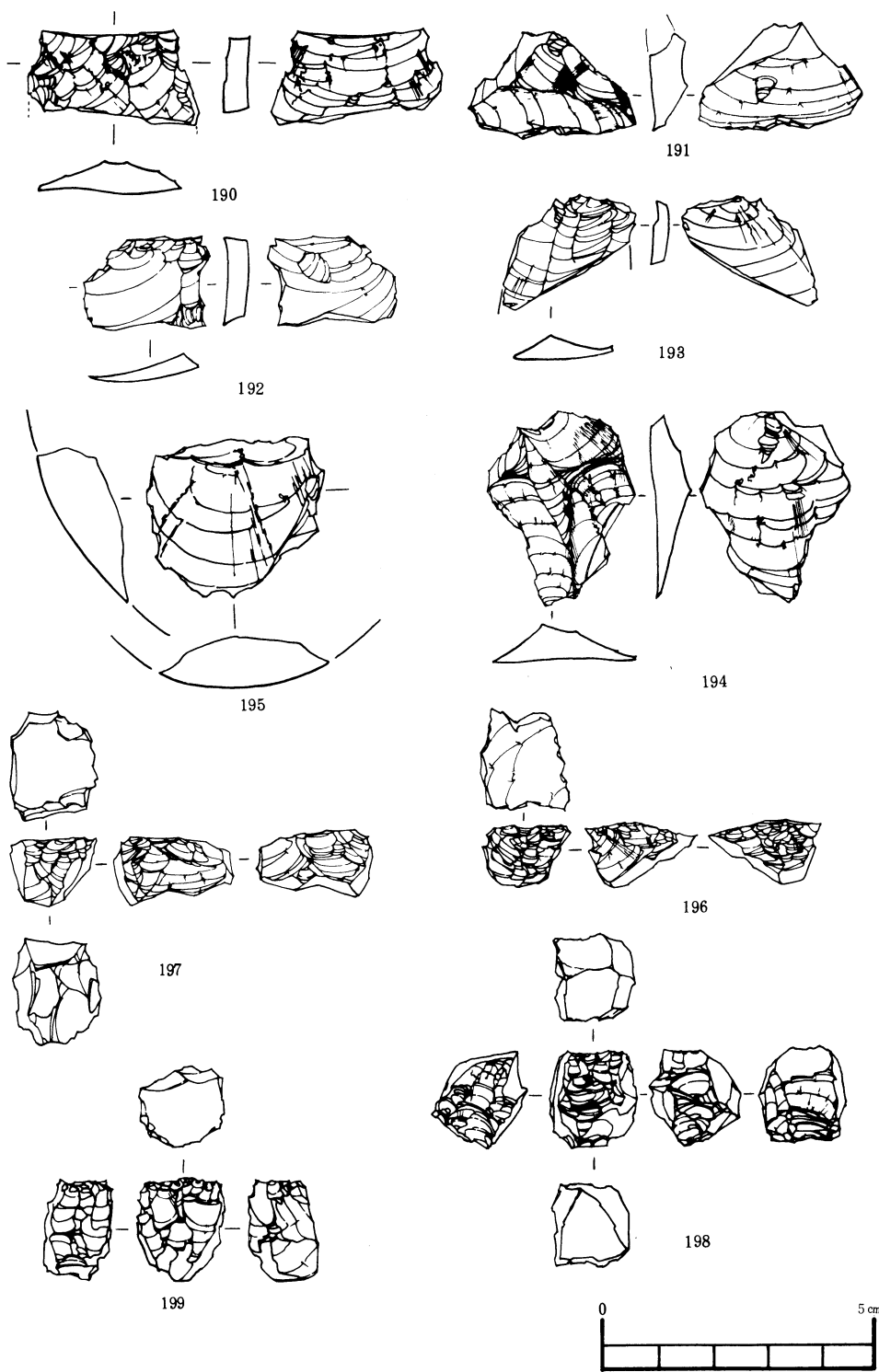
第 118 図 ユニット F (118~148)



第 119 図 ユニット F (149~154) 頁岩使用の石器



第 120 図 ユニット G. (155 ~ 189) No. 1



第 121 図 ユニット G (190~199) No. 2

(ク) ユニット外の出土品 (第 122, 123, 124図, 200～268, 図版57, 58)

200～268は、以上のA～Gまでのユニットに含まれない、一連の出土品である。

222は、厚手の剥片の両面に、正面、裏面とも側縁方向より剥離を加えた石器で、両面加工石器となっている。使用目的は明らかでない。224～226は、頁岩を素材とした剥片で、横剥ぎとなっている。これらの剥片を剥出した石核は、採集されていないが、連続して剥離したことは想定でき一連の技術をもっていたことがうかがえる。229は、舟底形の側面を呈するブランクで、打面部の作製は終了しておらず、中央に稜が残されて山形の形状を呈している。

251は、右側部分が欠損していると考えられ、左側縁と下部に裏面方向からの調整で刃部を設け、サイドスクレイパーとして使われたものとする。254は、台形状を呈し、左側縁に裏面方向よりブランディングを施し、刃部は上位に平坦に仕上げている。257は、F-5区4層上部より出土し、石材は灰白色の硅岩で重さは520mg、258は、F-6区4層上部より出土し、石材は乳白色のチャートで重さは1gである。258は、先端部と側縁上部に欠損がみられる。なお、左側上部の欠落は、裏面方向より一方的な力が加わった結果となっている。

259～261はブランクで、259・260は舟底形に、261は半舟底形の形態になっている。3点とも打面は平坦で、細石刃剥出面は、打面に対し直角に設けられている。

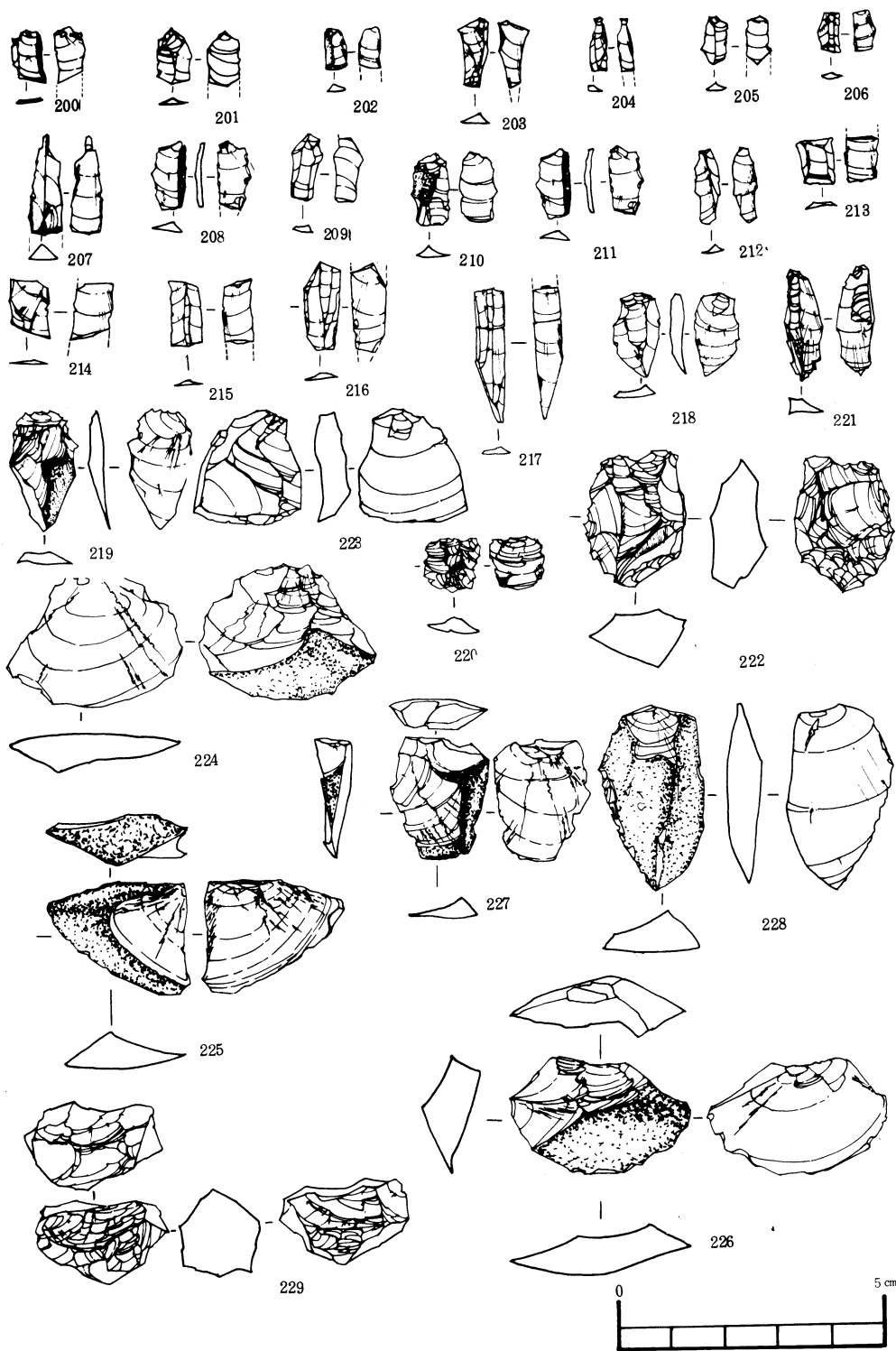
細石刃核は、5点(262～266)で、262は、角礫の原材を縦割にし、その面を細石刃剥離に使用し、打面角は60度である。263は、小礫を使用し、89度の打面角をもつ、264は、黒色で光沢のある良質の黒耀石を用い、正面に5条のフルーティングをもっている。両側縁は、下端部より打面方向にかけて、同種の石核調整剥離を行ない、正面観は逆三角形につくり上げている。打面調整は、全て正面より行ない入念である。打面角は44度である。265・266はそれぞれ72度、70度の打面角をもつ。

267は、平坦打面をもつ石核で、縦長剥片の剥出を目的としている。

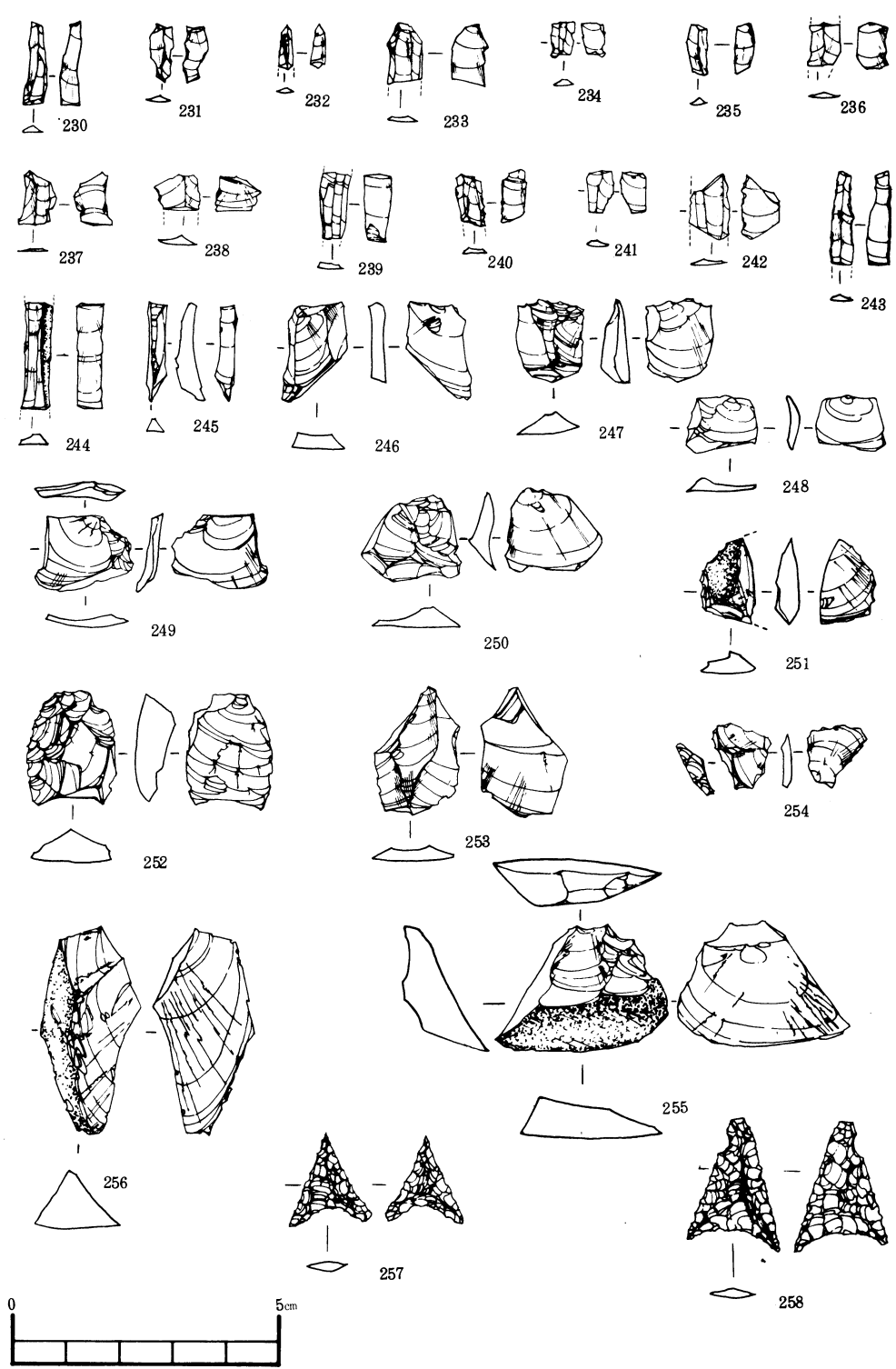
さらに、石斧も1点出土している。(第125図, 図版59)

刃部が欠損しているが、出土品の最大長8.4cm, 最大幅3.65cm, 最大厚は1.4cmである。薄手の剥片を素材とし、両側縁部は、交互に側縁調整を行なっている。石材には、結晶片岩を用い、遺跡周辺での産地はなく、熊本県の球磨川流域が最も近い産地となる。

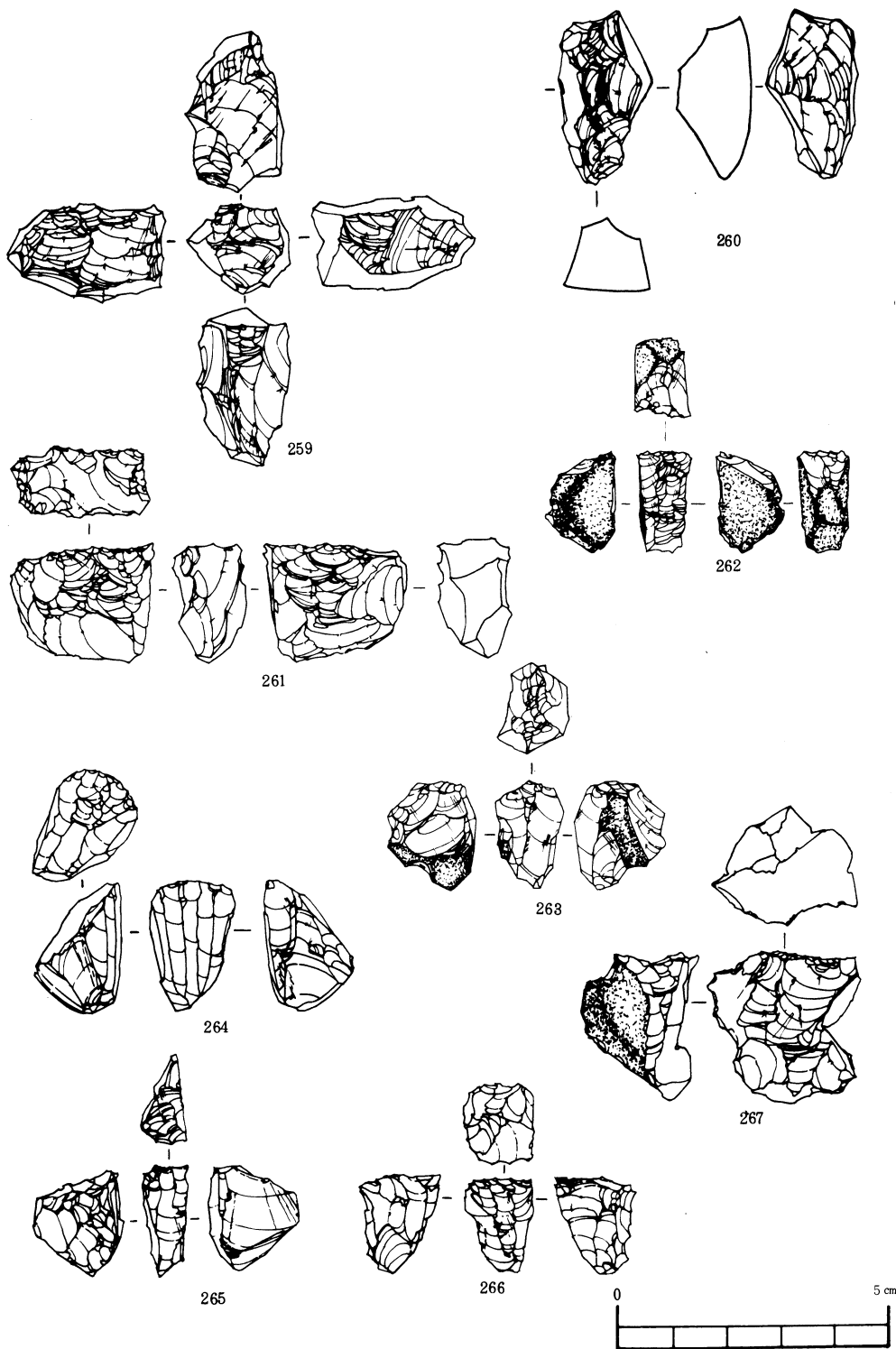
以上、出土した石器について説明してきたが、細石刃、細石刃核の出土、さらに石鏃、打製石斧の共伴と新しい問題点が指摘されてきている。これらの事実については、細石刃核等の検討を試みるなかで考えてみたい。



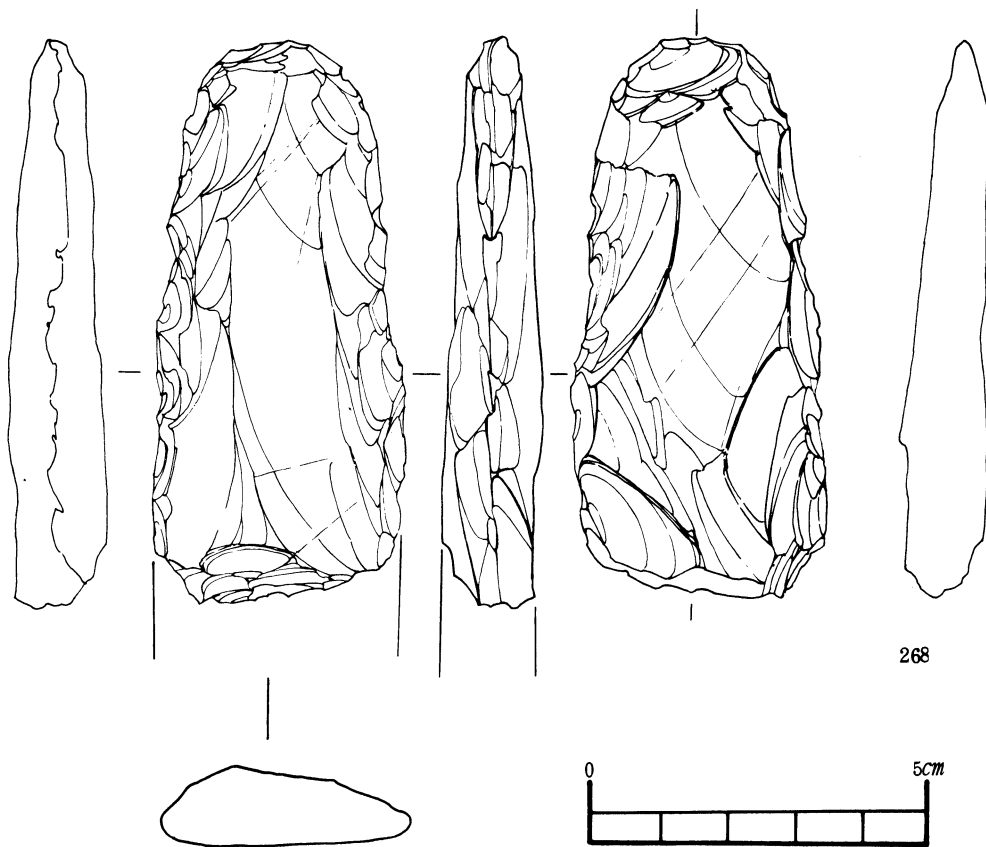
第 122 図 ユニット外出土の石器 No. 1 C・D-4 区, C・D-5 区



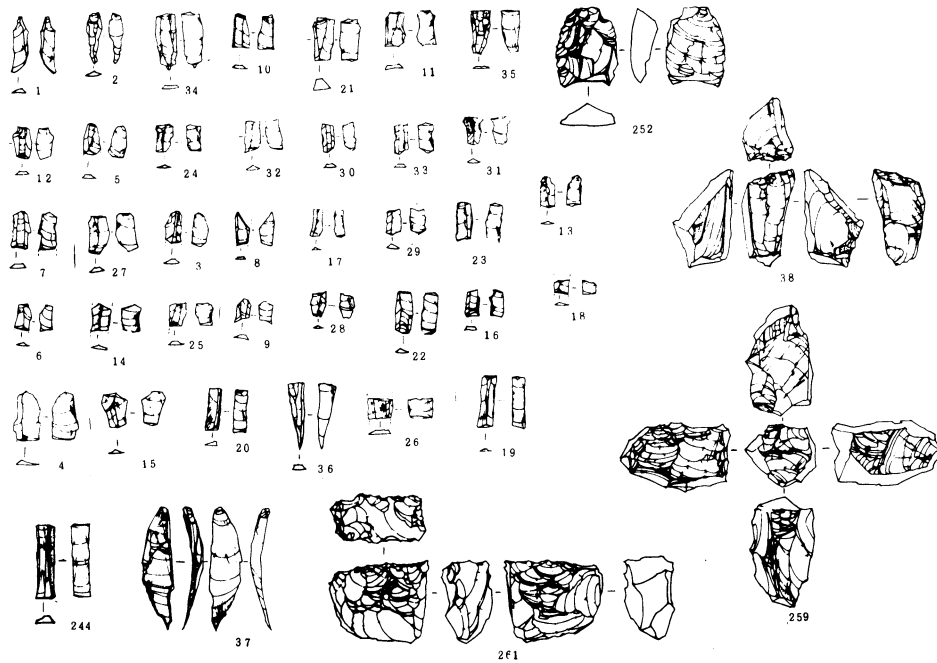
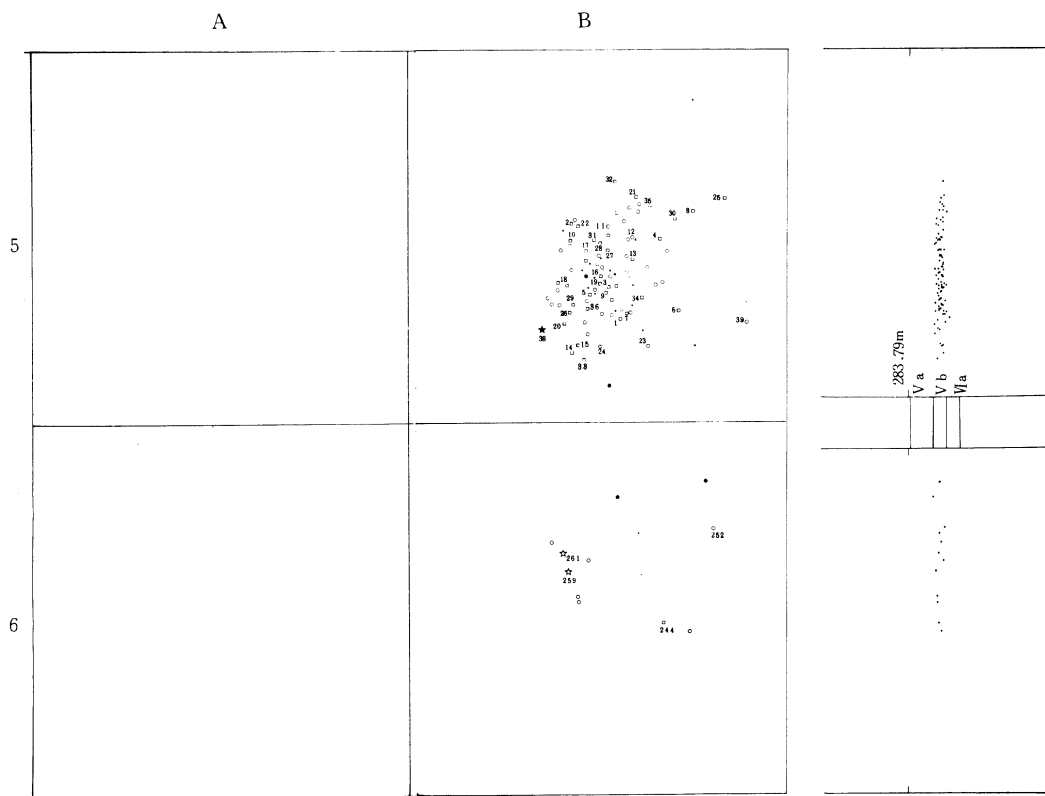
第 123 図 ユニット外出土の石器 No. 2.



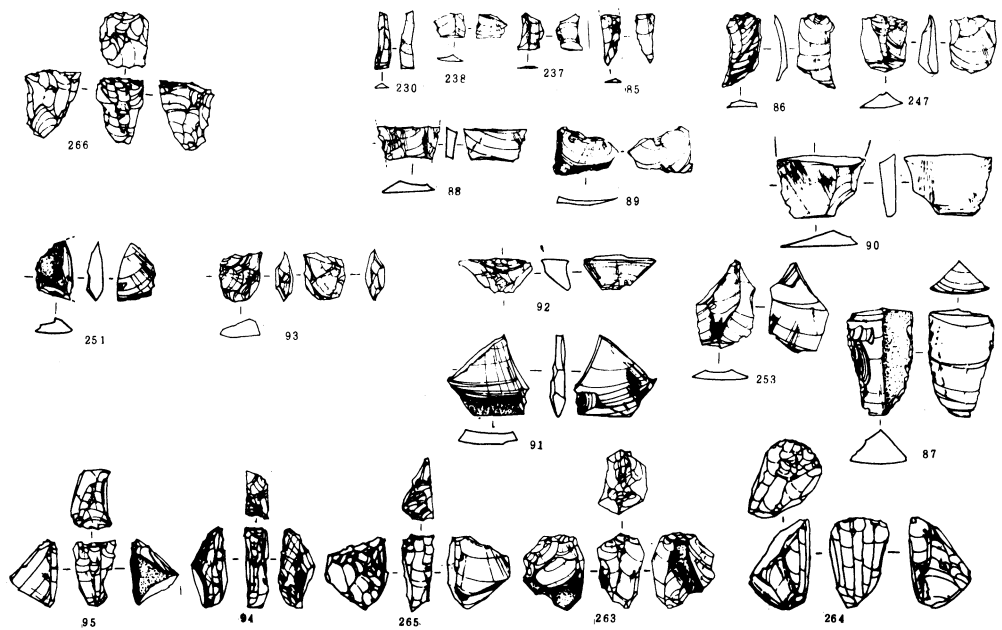
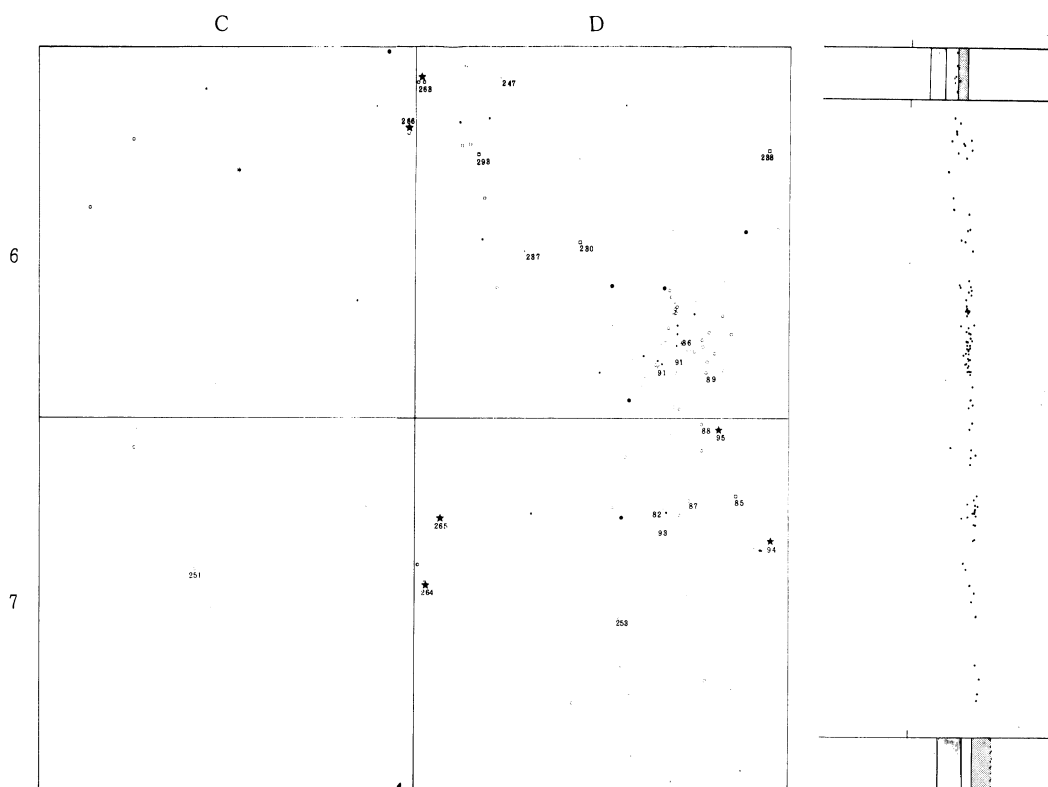
第 124 図 ユニット外出土の石器 No. 3



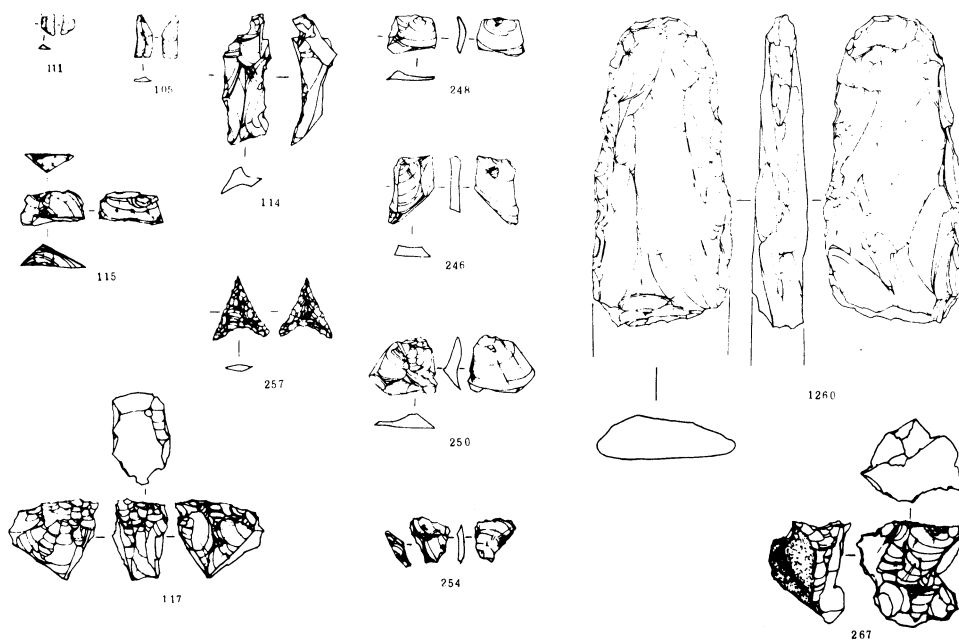
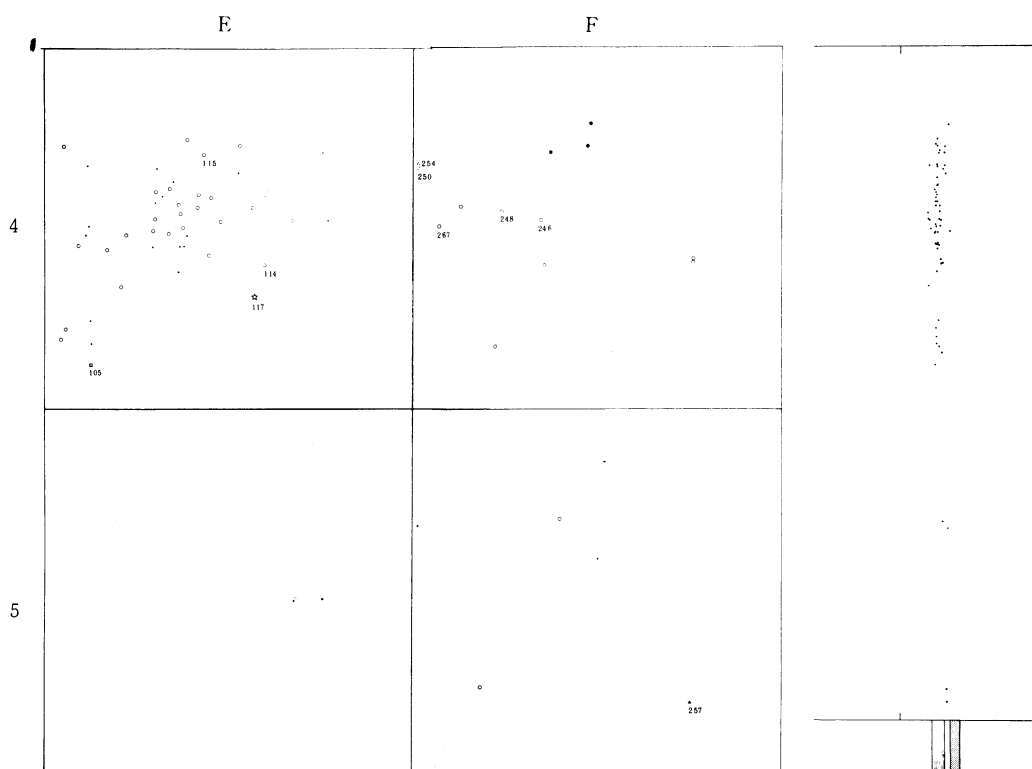
第 125 図 石斧



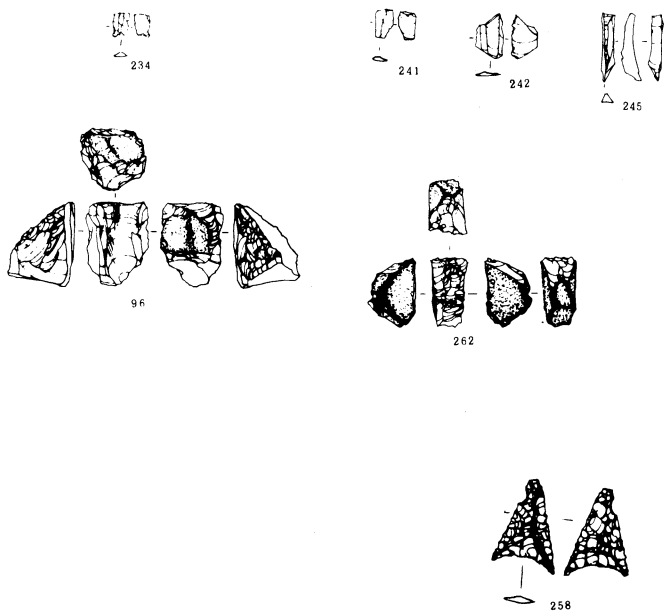
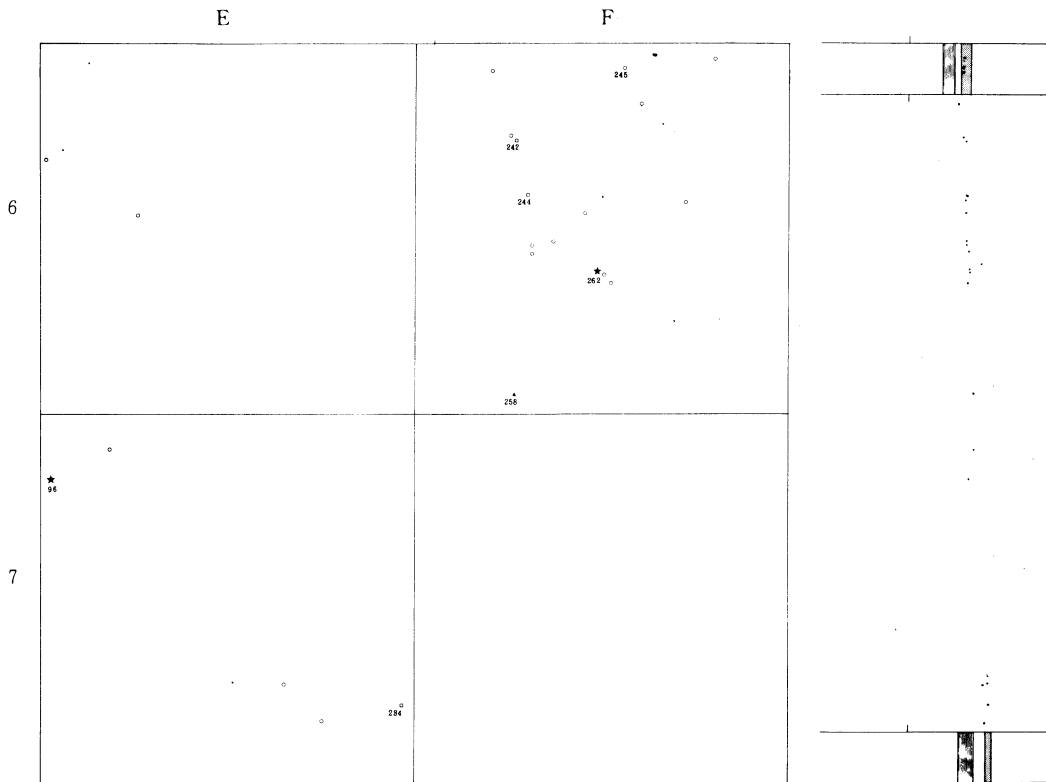
第 126 図 A・B-5 区 A・B-6 区出土の石器分布



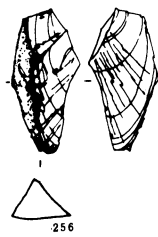
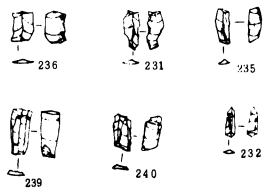
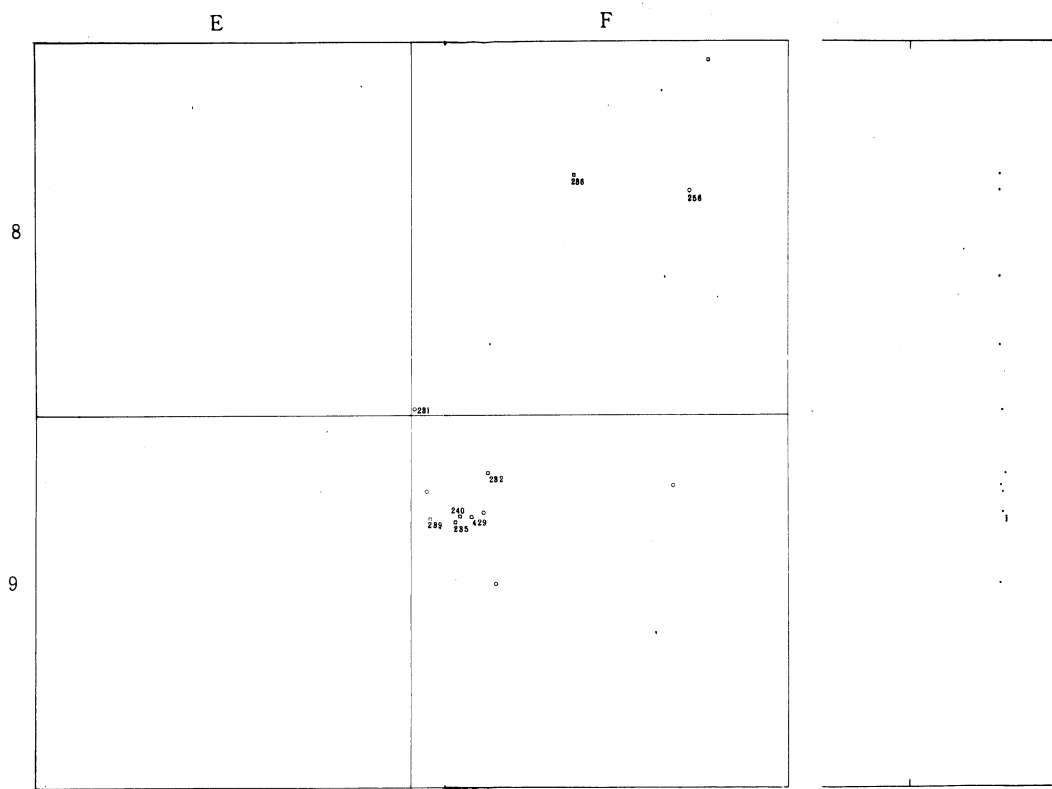
第 127 図 C・D-6 区 C・D-7 区出土の石器分布



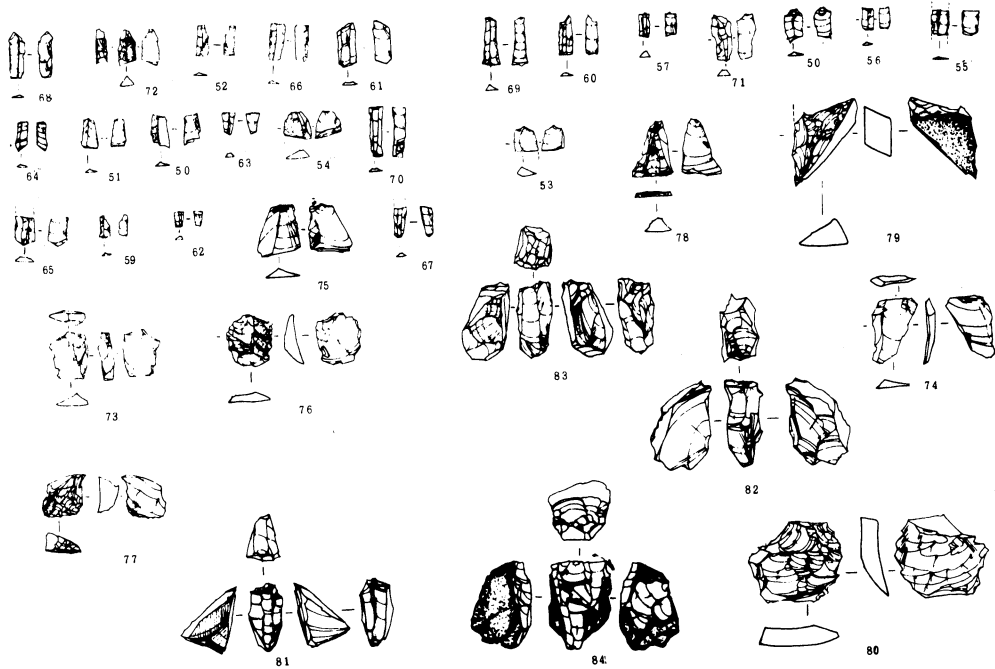
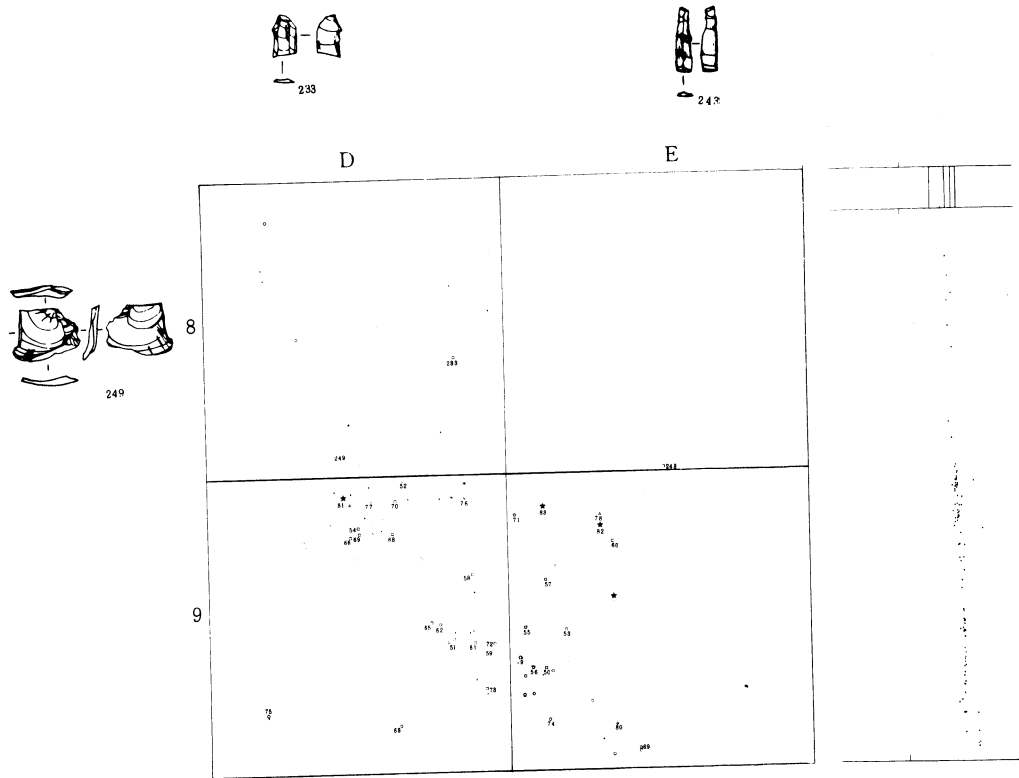
第 128 図 E・F-4区 E・F-5区出土の石器分布



第 129 図 E・F-6 区 E・F-7 区出土の石器分布



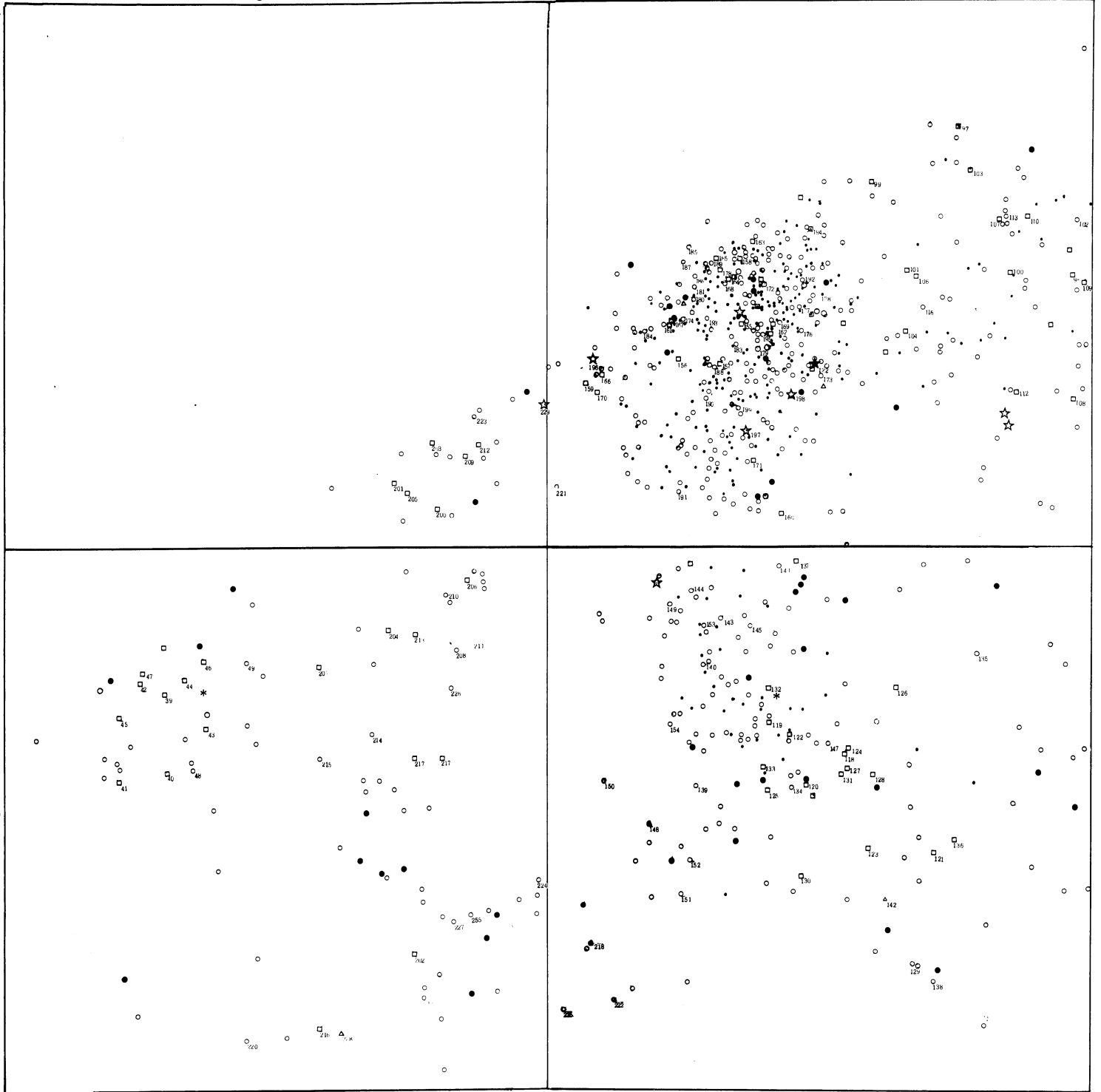
第 130図 E・F-8区 E・F-9区出土の石器分布



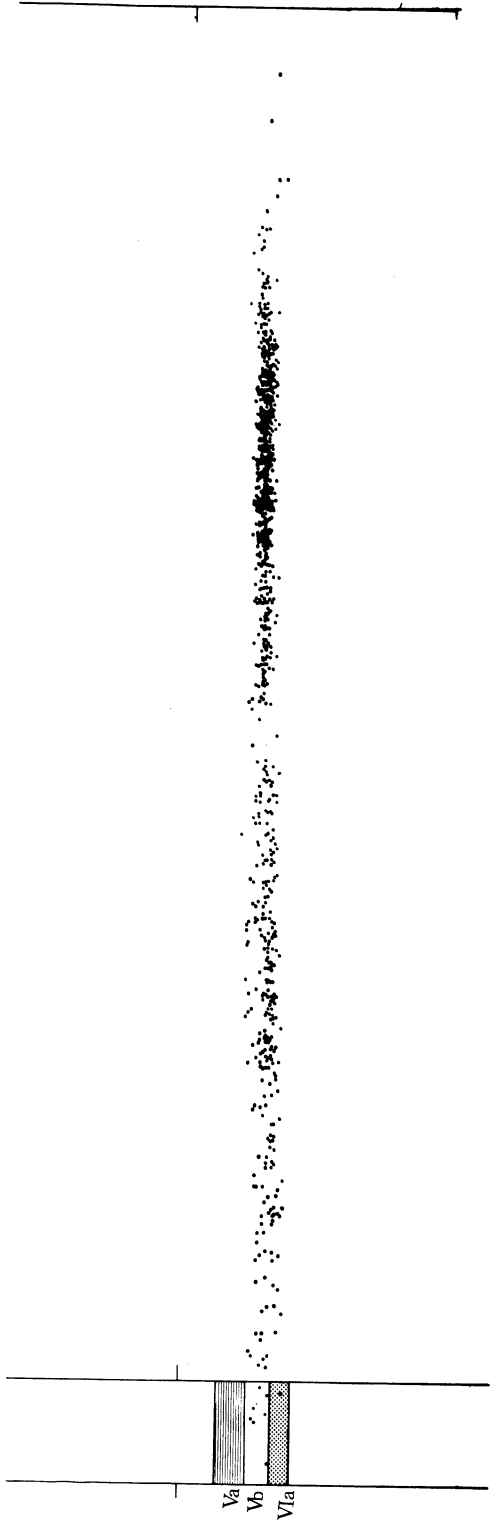
第 131 図 D・E - 8 区 D・E - 9 区出土の石器分布

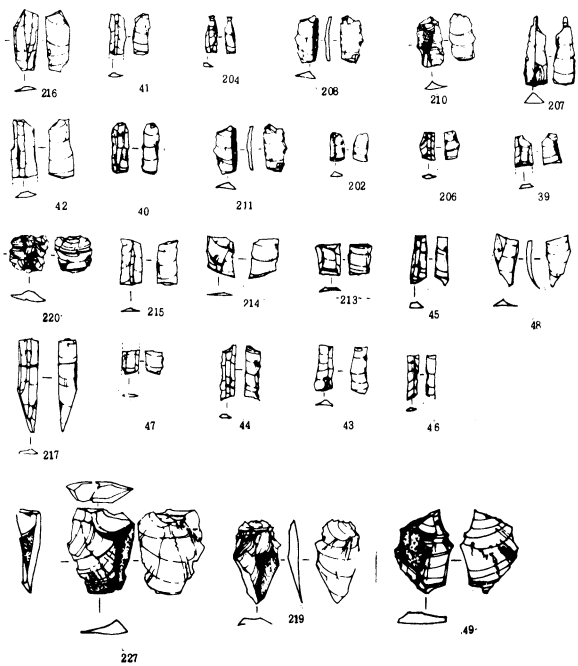
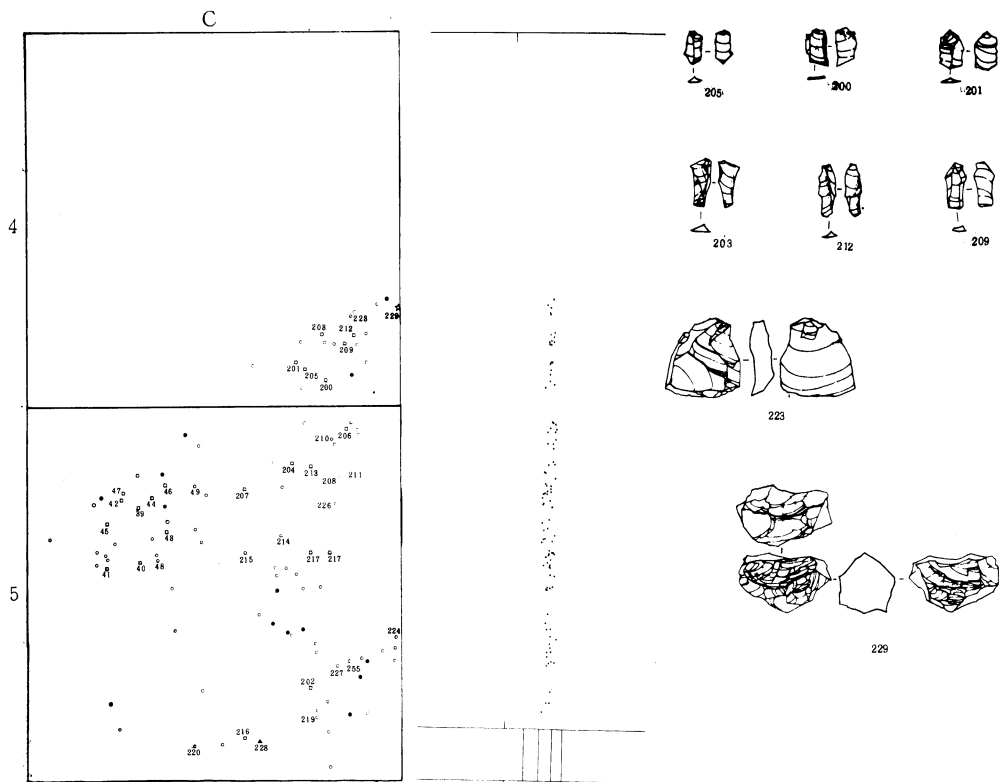
C

D

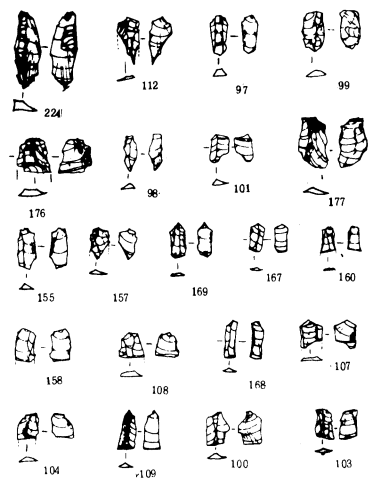
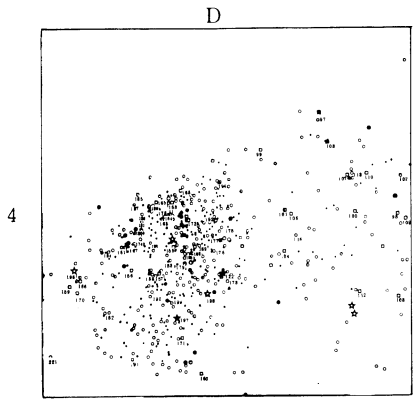


第132図 C・D-4区 C・D-5区出土の石器分布

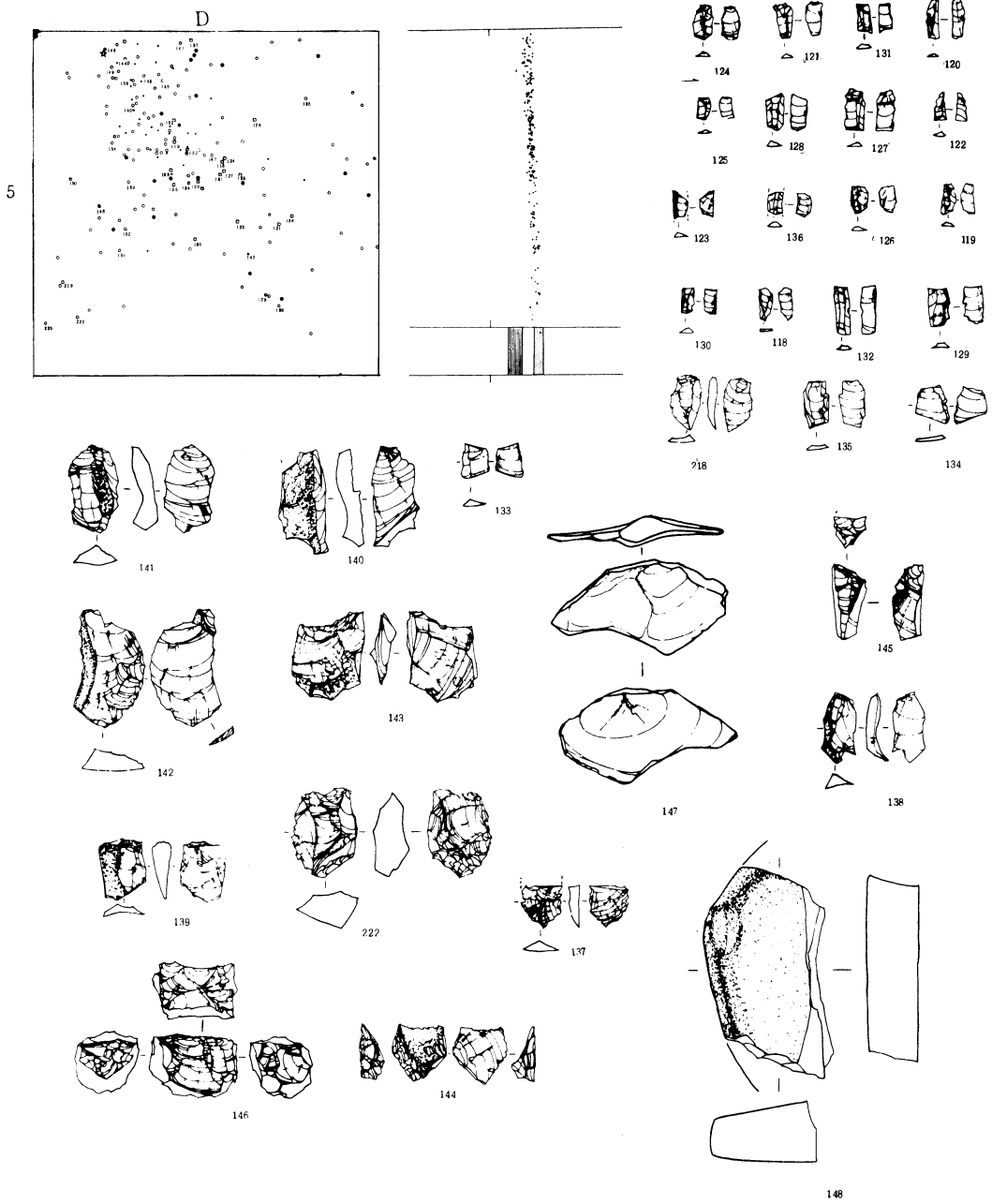




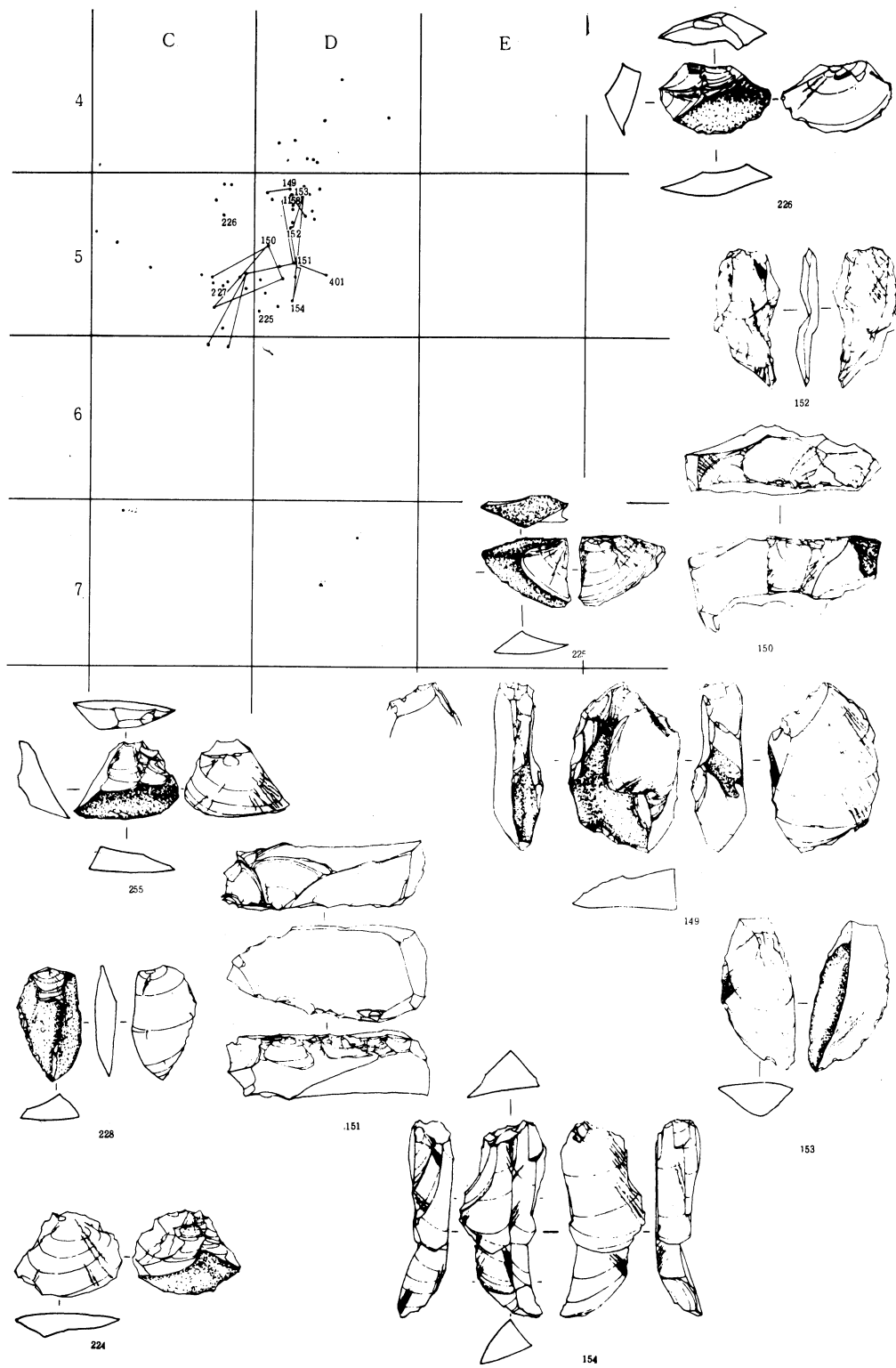
第 133 図 C-4・5 区出土の石器分布



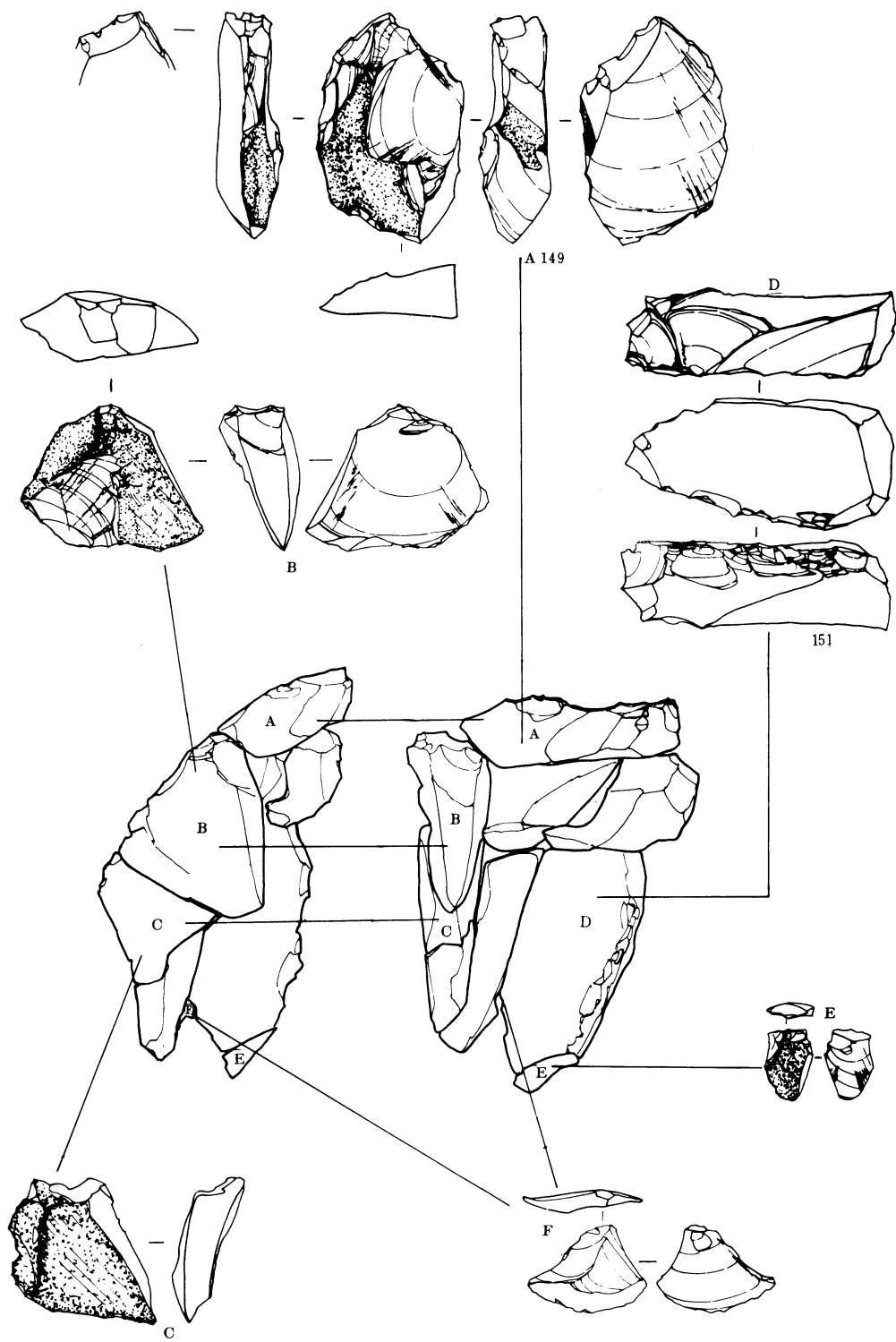
第 134 図 D-4 区出土の石器分布



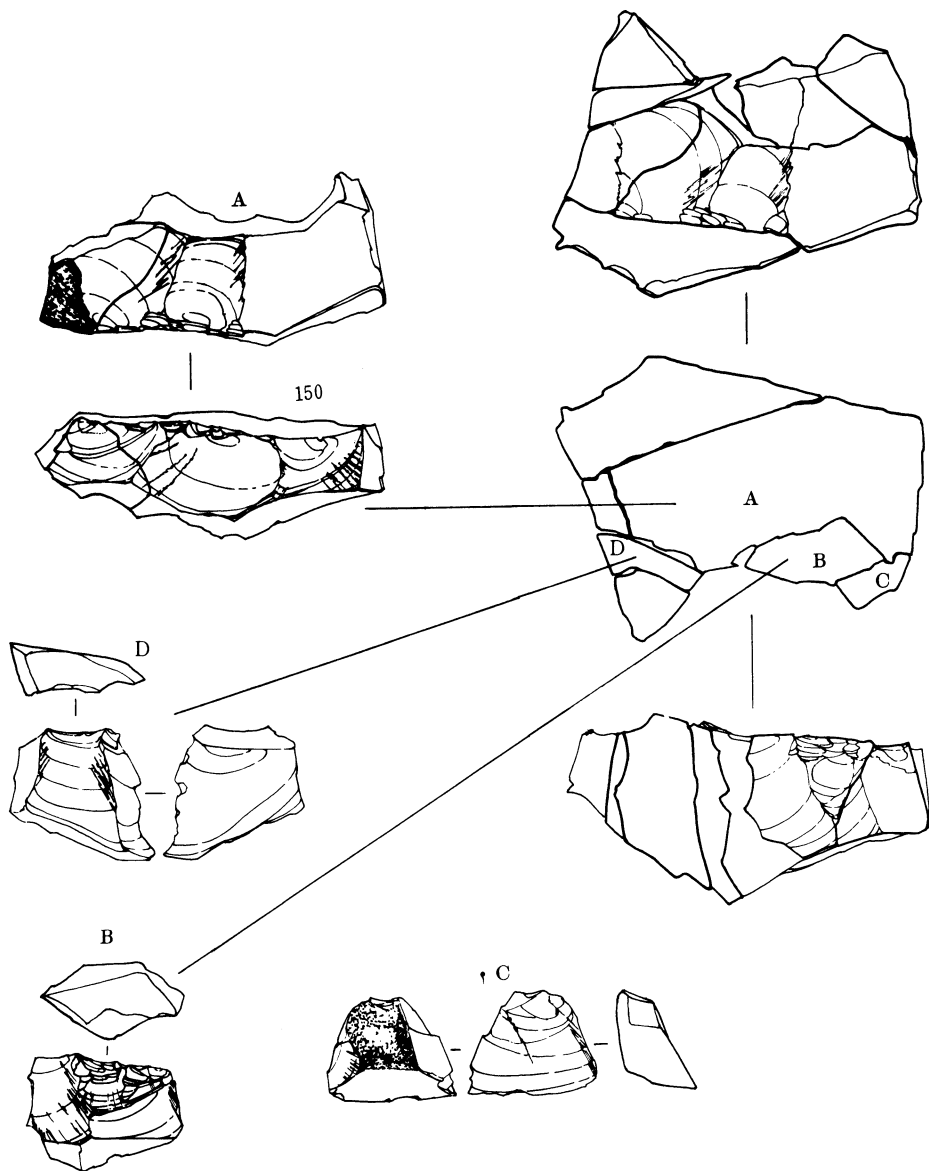
第 135図 D-5区出土の石器分布



第 136図 頁岩を素材とした石器の出土分布と接合関係



第 137 図 接合資料

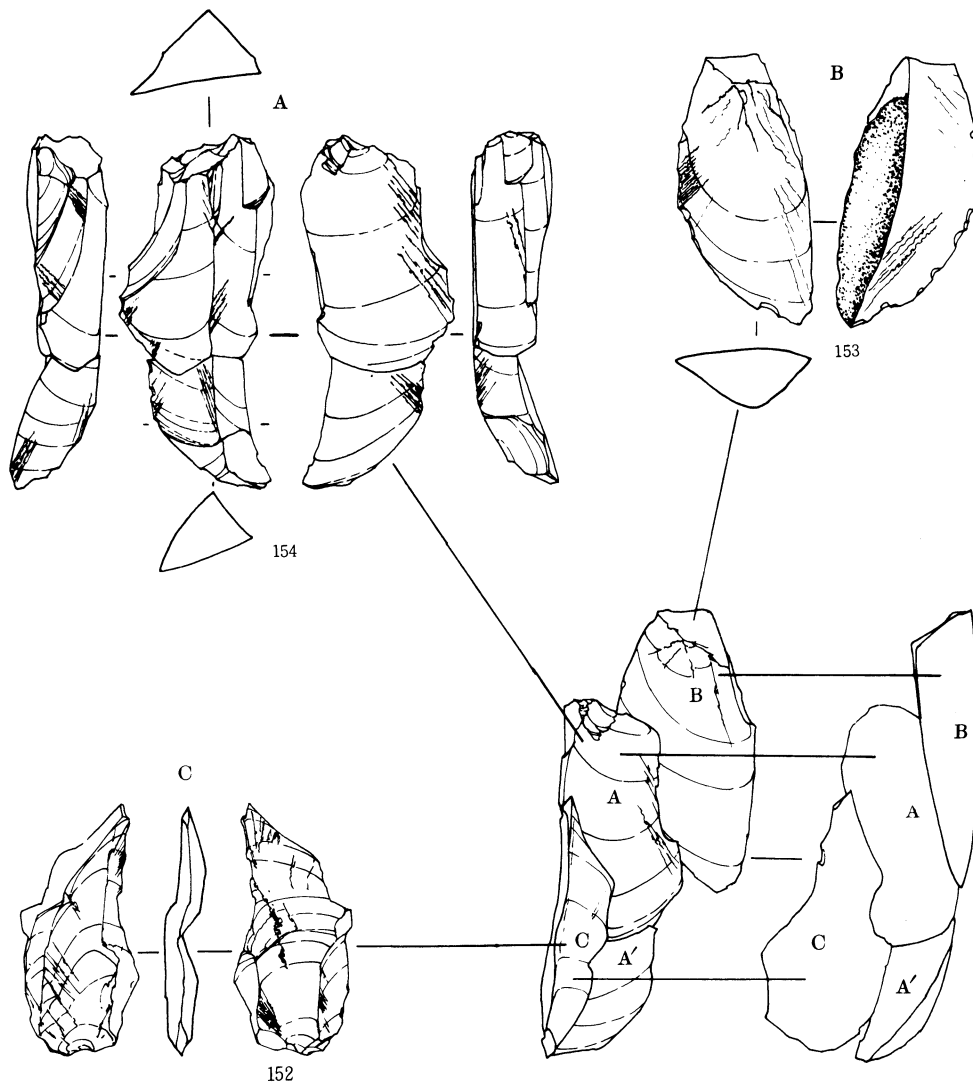


第 138図 接合資料

第 136図から第 139図まで、接合資料を示した。

出土位置は、C-4, C-5区, D-4, D-5区に集中してみられ、この位置を中心に、分割作業の行なわれたことを示している。石材は、頁岩（乳灰白色と、赤味をもった石材である）である。

第 137図の接合例は、個体数10個の接合である。剥片のなかで二次加工は認められず、Aの剥片にわずかに二次剥離が見られるが、明確ではない。

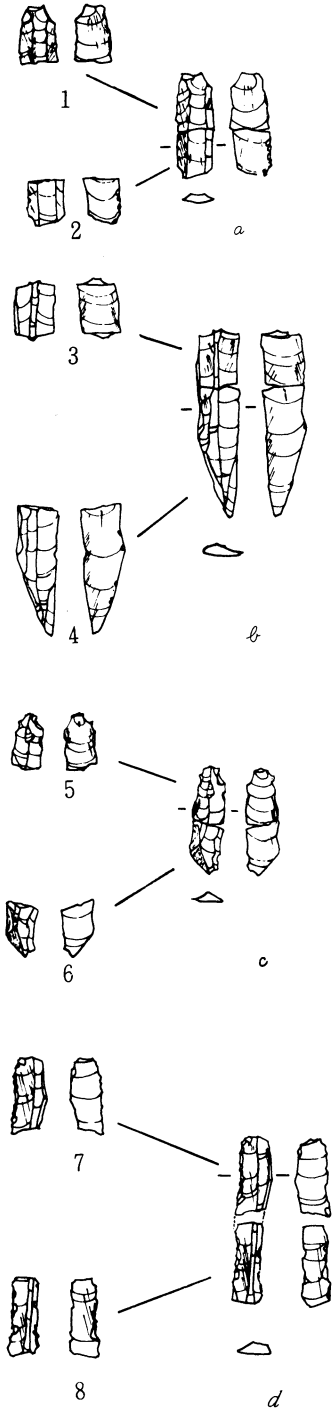


第 139図 接合資料

第 138図の接合例では、Aに石核的機能を見ることができ、A石核の平坦面を打面として、長さの短い剥片を連続して剥出している。

第 139図、4個体の接合例である。ただし、AとA'の剥片は、剥出後二次的影響で分離したもので、意識的な痕跡は認められない。AとBは、同一方向の打点を持ち、Cは、打面の転移が行なわれている。形の整った縦長剥片の連続剥出をうかがわせる。これらの剥片にも二次的の加工の痕跡は認められない。

(3) 細石刃の接合例



	B	C	D
4		a b	c d
5	d		

採集した細石刃の接合を試みた、その結果、左図の4組（ただし、4番目の接合には疑問も残されている）の復元に成功した。

接合例は、C-4・D-4グリッドに集中し、また、これらの区域は、ユニットGを中心とする区域でもあり最も多くの石器の出土を得ている。

a (C-4) 接合の距離 100cm, 頭部と中間部の接合

b (C-4) 接合の距離60cm, 中間部と末端部の接合

c (D-4) 接合の距離 100cm, 頭部と末端部の接合

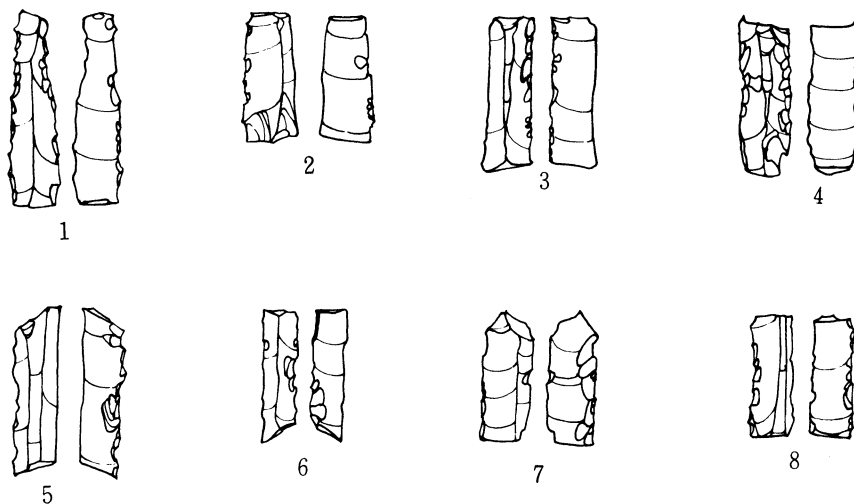
d (D-4, B-5) 接合の距離23m, 頭部と中間部の接合となっている。

これらの接合の結果、a, b, dの三例では、三部位切截手法が看過され、c例では、二部位切截手法が用いられている。これら二種の切截手法の使いわけは、細石刃の長さ起因する傾向をうかがうことができる。

次に、細石刃の接合について考える。細石刃が石器としての役割を持つものとの前提に立つと、今回の事実は予想以上に接近した距離での出土であった。“切截行為の行なわれた場”からの出土なのか、刃部に刃こぼれ状剥離の残されている以上、石器の移動は当然考えられることでもある。切截行為による分割→分散使用による刃こぼれとその後の分散。本遺跡の出土例はいかなる背景があるのか不明である。

第 140図 細石刃接合例 (原寸)

(4) 細石刃に観察される刃こぼれ状剥離



第 141 図 刃こぼれ状剥離

細石刃の出土量は、177点（この数字には、調整剥片と考えられるものもふくまれている）あり、その内に「刃こぼれ状剥離」をもつものが73点 41%認められる。なお、この観察は、目によるものであり、明瞭に確認できたものである。さらに、細石刃と調整剥片等の分類を行なえたならば、刃こぼれ状剥離をもつ細石刃の占める割合はかなりの高率になるものといえる。

上図は、刃こぼれ状剥離をもつ細石刃を実物大で実測し、その後 1.5倍に拡大して記載したものである。

細石刃に残る剥離部分は、刃部の両側に見られるもの、左、右の一辺に見られるものなどに分けられる表面、裏面等も同様である。

(5) 細石刃の部位別分類

第16表 部位別分類

	A	B	C	E	F	G	その他	全体
頭部	12	2	4	9	9	14	24	74
中間部	18	7	13	2	3	1	15	59
末端部	5	1	2	2	6	5	12	33
完形	3	0	1	3	1	0	3	11
合計	38	10	20	16	19	20	54	177

細石刃の三部切截手法が、本遺跡でも存在していたと認めてもよいものと考えられる。左表16がそれらを前提に各ユニット別に一覧にしたもので

ある。詳細な記録は行なっていないが、中間部は身長短いもの、長いものなどのばらつきが認められ、さらに形状の真直ぐなものが認められ、頭部は短かく打瘤を残し、末端部は短かく、反りの強いことが認められる。

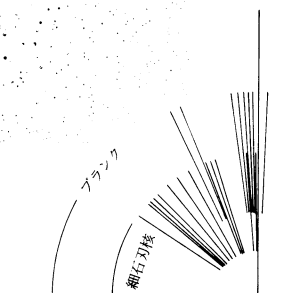
(6) 細石刃核の形態分類

	石器番号	打面角
1	38	40°
2	81	39°
3	82	55°
4	83	85°
5	84	68°
6	94	33°
7	95	42°
8	96	50°(83)
9	262	60°
10	263	89°
11	264	44°
12	265	70°
13	266	72°
	平均	57.5°

	石器番号	打面角
1	117	64°
2	146	92°
3	196	67°
4	197	84°
5	198	90°
6	199	88°
7	222	86°
8	259	87°
9	261	82°
	平均	82°

細石刃核13点、母核（ブランク）9点の打面角を示した。細石刃核57.5度、ブランクは82度の平均打面角をなしている。

本遺跡の細石刃核には、形態的に分類できる内容を示しており、以後、その操作を行なっていくが、形態上特徴的なことは、細石刃剥離面に対し打面が正面より背縁部にかけて大きく傾斜するいわゆる“斜行打面”に見られる。



ここでは、細石刃核の作出過程、形態分類を行ない、その結果をもとに他の遺跡より出土している細石刃核と比較することにより、本遺跡の細石刃核、石器群の考察と位置づけを行なってみたい。

I形態 原材に小礫を利用し、原材の特性を活かし、石核調整の細かい段階の省略をめざしたものと考えられる。したがって、母核となるブランクの製作段階はなく、原材の選択、原材の適・不適の選出がブランクの作出に相当するととらえることができる。

I-a類 82・263の細石刃核で、小円礫を利用したもので、原材（小円礫）の選出はかなり限定されていることがわかる。原材の表皮近くの一部を縦割りにし、その面を細石刃剥離面として用い、打面も原材の表皮近く（小円礫の上位）を、横方向より1度の加撃ないしは数回の調整（槌状剥離）で、カットする要領で作り出している。細石刃核の側縁調整もなるべく省

略され、自然面を多く残している。したがって、石核調整を行なう手順を、原材を有効に活かすことにより省略できた石核作出技術と言える。

I-b類 262 の細石刃核で、方柱状の角礫を利用し、まず原材を縦割りし、縦割りした面を細石刃剥離面としたもので、その後打面作出だけを行ない側縁部等への石核調整は全く行なわれていない（不用）。原材の選択が充分に行なわれた結果である。

I-c類 94・95・96、原材としての円礫を有効に活かして細石刃核を作り出すという点は a、b類と同一の関係を見い出せる。a、b類と最も異なる点は、原材に対し石核調整（特に側縁作出に）を行ない、原材を変化（分割することにより剥片化する）し石核作出を行なうことである。

94・95の場合は、角礫を用い、角礫を縦割りにし、縦割りした片方の剥片を石核の素材として用いる。一方96は、円礫を用いている。この小礫の縦割りは、原則として二分割と考えられる。これらの分割作業により、おおむね石核の両側縁はできあがり（部分的には側縁調整を行なう）同時に、細石刃剥離面の幅も決定づけられる。次に打面の形成を行なったと考えられ、その後、剥片の末端部に下端部形成のための調整加撃を行なっている。したがって、背縁部をもたないもので、側面観は三角形を呈している。

II形態 細石刃核の表面から、自然面を全て取り去る作出方法によるものである。

II-a類 81 背縁部をもたないもの、原材は、方柱状の角礫を利用したと考えられ、基本的には、I-c類と同じ製作過程を示すもので、ただ一点異なる所は、側縁から表皮を完全に取り去られたことにある。原材の中央部（剥片的）を利用することを目的とし、原材の両面を縦割りし、表皮を完全に取り去る。したがって、それと同時に、細石刃剥離面の幅が決定づけられ、その後、下端部の加撃で背縁部が面として存在しなくなる。側面観は、三角形を呈してくる。

II-b類 38・82・83・265 背縁部を形成する一群である。

原材としての、円礫ないしは角礫を数分割し、分割して得られた剥片を石核の核（母体）として利用したのと考えられる。次に、打面、細石刃剥離面、側縁部等の形成と表皮を取り去る行為を一連の加撃によって行なっている。これら一連の加撃の方向は、本遺跡の石器群には統一（規則）性は見られない。背縁部の形成を、主として石核の側縁部よりの加撃で行ない、最後に、下端部の作成を側縁方向より行ない、側面観は台形状を呈している。この製作過程で背縁部形成を側縁方向の加撃で行なっていることは、打面を壊すことを防ぐ目的があったと考えられる。

II-c類 262 の石核で、b類と同様の製作過程を経ているが、側縁調整をさらに行ない、正面観が逆三角形に仕上げている。

III形態 266 円錐形の形状を呈している。打面は、方形状を呈している。

以上、本遺跡の細石刃核の作出過程・形態分類を行なってみた。それらの結果、大別して、

- ① 母核としてのブランクの形成を行わず、原材の特性を活かす一群・特徴として、小形化し、連続して大量の産出はできない。—————Ⅰ形態細石刃核
- ② ブランクの作出を経て細石刃核としての機能を果す一群、粗雑ではあるが、全面加工品による製作過程を経るもので、打面確保が安定化しているために細石刃剥出が連続化し、大量生産化されてくる。—————Ⅱ・Ⅲ形態細石刃核に分類できる。

次に、本遺跡細石刃核の位置づけを他の遺跡と比較することにより行なってみたい。

本遺跡、Ⅰ-a・b類の細石刃核と宮崎県船野遺跡b類の細石刃核^①とは、原材となる小礫、細石刃核の大きさ、作出方法など極めて類似した要素を指摘できる。船野遺跡b類は、B-Ⅱ型^②のカテゴリーで把握できると説明されている。このB-Ⅱ型の細石刃核作出の過程は、①母型の打面形成を第1に行ない、次に②打面よりの加撃により細石刃剥離面の形成、側縁部の調整を経て細石刃核をつくり出すとされている。しかし、本遺跡の場合は、まず①原材の表皮近くの一部を縦割りし、その剥離した面を細石刃剥離面とし、次に②打面作出のために、原材の上位を数回の小剥離で行ない細石刃核を作り出すと考えられ、したがって、打面作出と細石刃剥離面との作出過程が逆となっている。しかし、船野遺跡b類と本遺跡Ⅰ-a・b類が共通した要素をもつことは事実であり、本遺跡の時間的考察には欠かせないポイントである。

次に、ブランクとⅡ類・Ⅲ類の細石刃核について考えてみたい。

ブランクは、大きく2つの形態が考えられる。A類 198・199 に代表される打面が方形ないしは円形に近いもので、細石刃剥離面が短く、サイコロ状を呈するものと、B類 259・261 に代表されるブランクで、半舟底形の形状をもつものである。

これらのブランクと細石刃核を結びつけて考えると、A類のサイコロ状のブランクから産み出される細石刃核は、Ⅲ形態の 266が考えられ、その他のⅡ形態の細石刃核は、B類のブランクに集約されるものと考えられる。したがって、本遺跡に限っては、A類のブランクは、円錐形ないしは砲弾形の細石刃核のために用意されている。また、B類のブランクは、原材を分割し、表皮を全て取り去ることより打面・細石刃剥離面の形成、側縁部は、打面・背面・下端部方向より行ない、基本的には下端部がすぼまる形状に仕上げ、半舟底形細石刃核のために用意されている。この細石刃核で、打面の形成がどの時点で行なわれているのかは、分割される以前の原石の復元・原石の大きさなど解明できない部分が多く即断できない状況である。したがって、半舟底形細石刃核の範ちゅうに属するものの、福井洞穴Ⅱ・Ⅲ層^③(橘昌信氏のA-Ⅰ型細石刃核^④)に見られる鱗状剥離は施されてなく直接結びつけることはできない。A-Ⅱ型細石刃核と比較した場合、類似した作出方法を見ることができるとは、打面の大きさに違いがあると考えられる。したがって、現時点での明確な帰属は不可能である。

ここで、長崎県百花台遺跡の百花台Ⅱ文化層^⑤の石器群と比較してみたい。麻生優、白石浩之氏は、細石刃核に3形態の分類を行なっている。そのなかで、百花台Ⅰ形態b類と本遺跡Ⅰ-c類とは極めて類似し、また、百花台Ⅱ形態と本遺跡のブランクA類とは、礫面の除去方法、

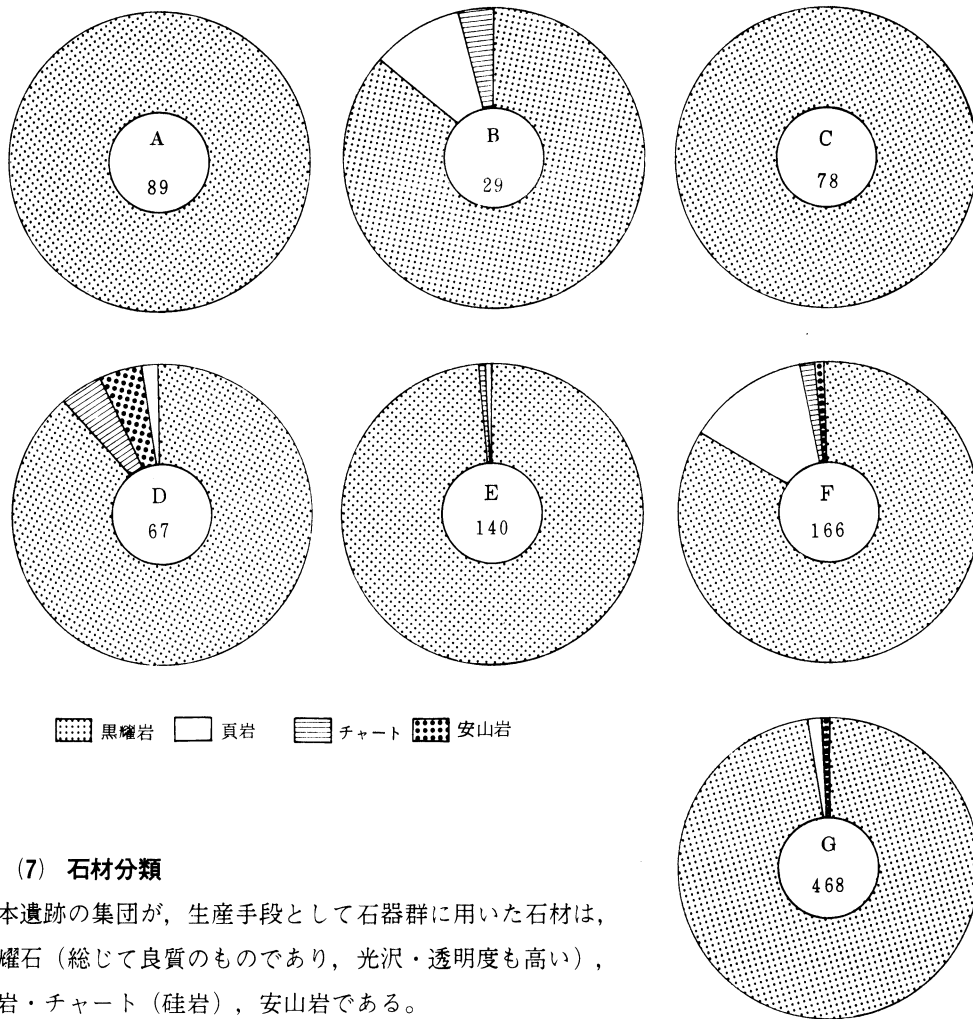
側縁部調整に一定の規則性が存在しないこと、仕上がりが角形になるなど共通点が多いといえる。また、百花台Ⅲ形態とされる細石刃核は、本遺跡Ⅰ-a類と類似するものである。このように、本遺跡の細石刃核と百花台の細石刃核との間には、多くの類似点が見い出せることとなる。

最後に、本遺跡Ⅰ-a・b類細石刃核が、船野遺跡b類細石刃核と共通した要素を持ち、Ⅰ-c類は、百花台Ⅰ形態b類と、本遺跡ブランク④類は百花台Ⅱ形態と、さらにⅠ-a類の細石刃核は、百花台Ⅲ形態と類似し比較できる結果となった。したがって、本遺跡・Ⅰ類とⅢ類の細石刃核の形態的帰属は、ある程度方向を見い出したと考えられる。また、近くの遺跡では出水市上場遺跡のⅢ層^⑥に、一部に表皮を残す細石刃核が存在しており近い関係を見い出せると考える。船野遺跡では、細石器に伴ない、小形のナイフ形石器が出土することが確認されており、百花台Ⅱ文化層でも、細石器文化とナイフ形石器が単一の石器群としてとらえられている。船野・百花台両遺跡ともに、これら小形の細石刃核をもつ石器群に、細石器文化の編年上より古い位置づけがなされている。したがって、これらの要素を踏えて、本遺跡の時間的位置づけへの指針としたい。

また、本遺跡Ⅱ類の細石刃核についても、前記したように、福井洞穴Ⅱ・Ⅲ層の細石刃核とは結びつけがたく、橘昌信氏の示すA-Ⅱ型細石刃核を考え、福岡県門田遺跡等^{⑦⑧}に類例を求められると考えている。

〈註〉

- ① 橘 昌信 「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』3 1975
- ② 橘 昌信 「九州における細石器文化」『考古学論叢』1 1973
- ③ 鎌木義昌・芹沢長介 「長崎県福井岩陰」『考古学集刊』3-1 1965
- ④ 註②に同じ。
- ⑤ 麻生 優・白石浩之 「百花台遺跡」『日本の旧石器文化』3〈雄山閣〉1976
- ⑥ 池水寛治 「鹿児島県出水市上場遺跡」『考古学集刊』3-3 1967
- ⑦ 木下 修 「門田遺跡」『日本の旧石器文化』3〈雄山閣〉1976
- ⑧ 木下 修他 「門田遺跡谷地区の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第11集 福岡県教育委員会 1979



(7) 石材分類

本遺跡の集団が、生産手段として石器群に用いた石材は、黒耀石（総じて良質のものであり、光沢・透明度も高い）、頁岩・チャート（硅岩）、安山岩である。

各ユニットに共通し、黒耀石の占める割合が圧倒的に高くなっている。

第 142 図 石材分類

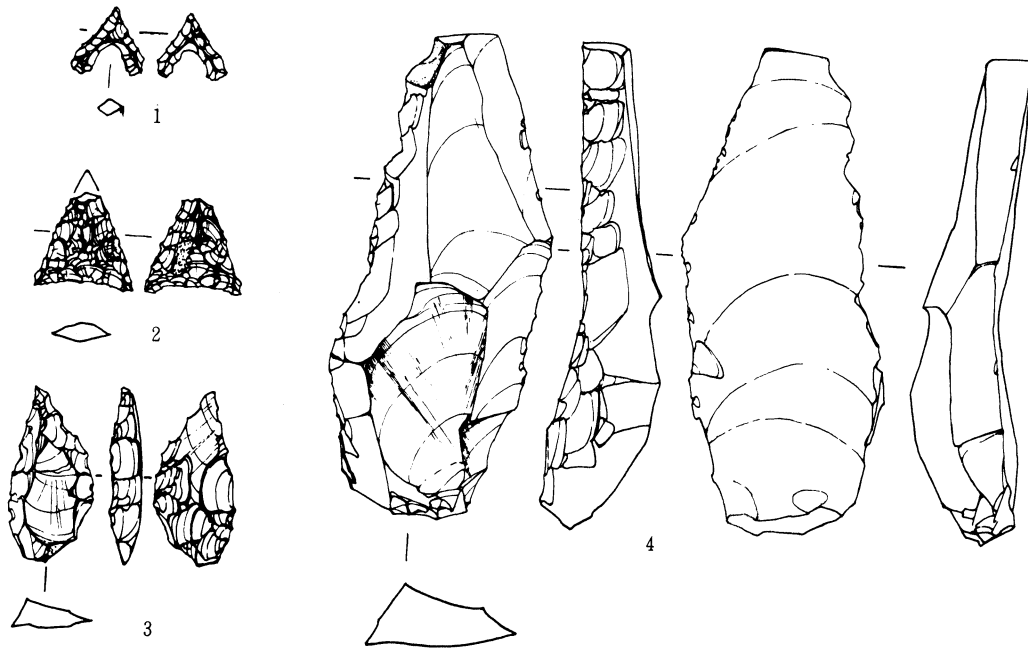
A・Cユニットでは、全てが黒耀石であり、E・Gユニットでも98%の占有率を示している。

黒耀石の供給地の追求は行なっていないが、良質のものが多く用いられ、また、石器別による使いわけも見られ、細石核、細石刃には最も良質のものを選出している。石材で特に興味を引いた、表面に自然面の残る小礫（特に細石核に用いている）も良質のものである。剥片・スクレイパー等には、やや荒めで少量であるが不純物を含んでいるものを利用する結果となる。

頁岩は、接合資料で示したように大型の剥片類に用い、チャートは石鏃・縦長剥片に、安山岩は剥片（横剥ぎ）に用いている。

以上のように、石峰遺跡の先土器時代の人々は、その生産手段として黒耀石を用いた集団であったことがうかがえる。今後は、彼らの必要とした黒耀石の産地の追求、解明が残された課題となっている。

(8) 周辺遺跡出土の採集石器



第 143 図 採集石器

上図4点の石器は、調査員（西田）により遺跡周辺より採集されたものである。

1・2は、石材黒耀石の石鏃で、本県の縄文時代遺跡では古い位置に見られる形状である。2の三角鏃も、縄文時代早期の貝殻円筒土器文化（吉田式・前平式）などに存在することが知られている。

3は黒耀石製のナイフ形石器の一種と考えられる。比較的厚手の剥片の打点方向を刃部に利用したもので、ブランディングは全て裏面方向より正面に向けられ、さらに裏面には、器体調整が施されている。

以上の黒耀石は全て、透明度の高い良質のものである。

4は、復元長が9.0cmを越すナイフ形石器である。厚手の縦長剥片を使用し、ブランディングは全て裏面方向より施され、刃部には多くの刃こぼれ痕が残されている。石器の断面は台形状を呈し、打面はそのまま残されている。石材は、乳白色のチャートである。

本県におけるナイフ形石器をもつ遺跡は未だ少なく、出水市上場遺跡、指宿市小牧3A遺跡・出水郡尻無平遺跡が知られているにすぎない。これらの遺跡は、質・量的にも充実しており今後の報告で解明が期待される。この1点のナイフ形石器もその一石となれば幸いである。

- ① 池水寛治「鹿児島県出水市上場遺跡」『考古学集刊』 3-3 1967
- ② 長野真一「小牧3A遺跡の紹介」『指宿市談』創刊号 1979
- ③ 池崎譲二、吉留秀敏「長島の旧石器—出水郡東町尻無平遺跡」『鹿児島考古』13 1979

(9) ま と め

(ア) 各ユニットの関係

本報告では、先土器時代の遺物出土状況、遺物の分布状況に基づきAからGまでの7つのユニットと、それらのユニットに属さない、ユニット外に分離できた。ここで、石器組成、特に細石刃^{*}との関係を基礎として各ユニットの比較・検討を行なってみたい。

※本遺跡を考える場合、生産具と考えられる石器では、細石刃が圧倒的に多く作り出されている。また、細石刃が、当時最も主要な直接的な武器や利器であり、石器製作の終局の目的は、細石刃の作出にあったと考えられる。このような把握方法に基づくと、遺跡内における行動や石器の生産・移動の痕跡は細石刃を追求することにより引き出せると考えている。

遺物の保有量・遺跡構成の規模においては、Gユニットが最も大きく全出土量の約3割に達している。さらに、E・Fの各ユニットは、Gユニットを構造の焦点とする石器群の集団ととらえることもできる。すなわち、E・Fの各ユニットは、Gユニットを中心に包括される群であり、行為・行動の広がりによる拡大・拡散によって構築されたと捉えることができる。このように考えた場合、E・F・Gの3ユニットの持つ遺物の量は、本遺跡全体の約5割に達するのである。

以上の結果に基づき、遺跡の形成・遺跡内の行動は、Gユニットを中心に操り広げられたと考えることができる。

Gユニットでは、遺物の保有量もさることながら、剥片・碎片の石器組成に占める割合も高くこれら二種類で92%となる。細石刃核は1点であるが、4点のブランクが見られる。剥片・碎片を、石器製作時における不用物であり、屑であると捉えた場合、これらが92%にもおよんでいることは、さかんに屑を産み出す行為の行なわれたことの証左でもある。したがって、これらの要素は、Gユニットの性格を把握する要因^{**}であると考え、石器製作の場であり、さらに本遺跡石器製作の中心的な場所であったと考えたい。

※※石器製作の場を示す石器群の組成として、石核・剥片・碎片・作り出された石器などの組み合わせ、さらに、アンビルやハンマーストーンなどの工具類の一連の同時構成が最も理想的であると考えられる。しかし、本遺跡の場合、遺跡構成におけるユニットの規模や石器組成の検討によった結果であり、アンビルやハンマーストーンの工具類の欠落は、持ち出しによる移動と考えている。

さらに、他のユニットと比較を行ない、Gユニットへの補足としたい。

最も多く細石刃を出したのはAユニットであり、石器組成の43%を占めている。Bユニットの総出土量は29点であるが、細石刃10点、剥片18点の内訳で、34%を細石刃が占めている。なお、Bユニットには、細石刃核、ブランク等は全く見られず碎片も1点だけの検出に終わっている。このような石器組成は、他のユニットでは全く見ることができない。また、細石刃の切截

手法による細石刃の部位別構成は、頭部2点、中間部7点、末端部1点となり、中間部が卓越している。さらに、他のユニット内の細石刃と比較し、形状の整った傾向も示している。したがって、これらの条件より、Bユニットでは、石器（製品）の集中している^{*}場的な把握を行なってみた。次に、全く個人的な試案であるが、細石器の時期の遺物の集中としては、^{**}少数であると考えられ、この事は、ユニットを分析するうえにおいて、組み合わせて使用したと認識される当時の利器を復元する一つの材料にならないかと考えている。

※碎片等の石器製作時における、副産物・屑等が出土しておらず、また、これらの屑類の除去が行なわれたとも判断しがたい。

※※細石刃総数10点、石器であるとされる細石刃の中間部7点の範囲を、組み合わせ道具に着装する数の最小単位に近いものと考え、7→14→21、10→15→20と捉えてみた。

Cユニットでも、Bユニット同様に細石刃の中間部が圧倒的に多くなっている。しかし、Bユニットの細石刃と比較すると小形で、不整いの観を呈している。また、細石刃が4点出土しており、細石刃の作出が行なわれた可能性はあるが、Gユニットの石器組成と比較し剥片・碎片の出土が極度に少ないため、直接石器製作場を結びつけがたい部分がある。

以上、A・B・Cの3ユニットは、細石刃の中間部が他の部分を凌駕している。

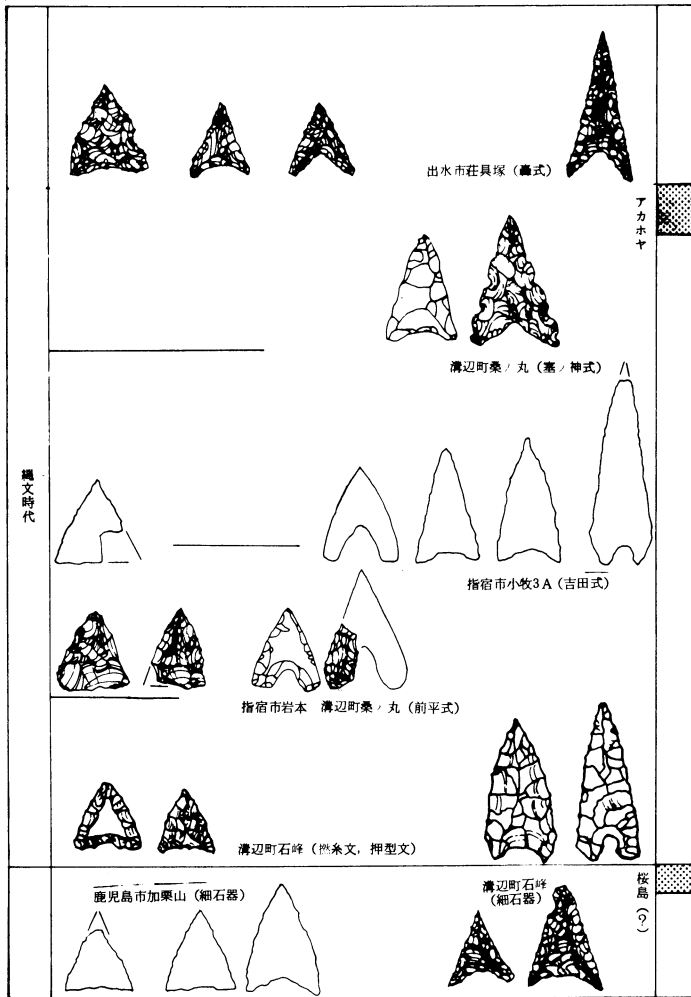
Dユニットは、全く異なる石器組成を示し、67点の遺物は、細石刃核3点、剥片53点、碎片9点、細石刃(?)1点の構成で細石刃がほとんど検出されていない。したがって、ここでも碎片が少なく石器製作とは結びつけがたい状況にある。

E・Fのユニットは、石器組成、細石刃の構成などGユニットに近い要素を見い出せる。

以上、各ユニットについて考えてみたが、石器製作の場の機能としてはGユニットが最も理解しやすく、E・Fの各ユニットもそれに近い理解をしてみた。このGユニットと全く異質な内容を示すBユニットは、石器としての完成品が主体であり、さらに、多くの使用痕と考えられる刃こぼれ状剥離も顕著に観察され（機能を持ったものないしは、機能を果し終えたもの）特に、製品の集められている場的解釈を行なった。

(イ) 石鏃について

細石刃・細石刃核と共伴して石鏃を出土している遺跡に、鹿児島県出水市大川内上場遺跡の第Ⅱ層下部、第Ⅲ層上部、鹿児島市加栗山遺跡第Ⅳ層を県内で見ることができる。これらの両遺跡は、共に整理作業の段階であり、詳細は報告を待たねばならないが、上場遺跡の石鏃について、池水寛治氏は「爪形文土器文化の中で石鏃の出現、細石刃の残存という形が南九州にあった」と考え、石鏃の出現と爪形文土器との関係を捉えている。また、加栗山遺跡出土の石鏃は略図ではあるが、第20表で示し比較の材料とした。なお、加栗山遺跡では、14点の石鏃が出土している。加栗山遺跡の石鏃は、平基式の三角形鏃と、基部の窪んだ凹基式の石鏃の二形態が見られる。しかし、凹基式の石鏃より平基式の三角形鏃が、量的にも多く主流を占める傾向にあるとされる。また、加栗山遺跡の石鏃は全体として中央部に厚みのある形態で側縁からの



第20表 石鏃の変遷

第20表では、これまでに本県で実施してきた、縄文時代早・前期の遺物を出土する代表的な遺跡の石鏃を配置している。現在集積できる情報では、表の左側に配列した三角形の形状をもつ平基式の形態が、加栗山遺跡以後、撚糸文土器、押型文土器、吉田・前平式の貝殻条痕文土器などへ連続していくことが知られている。また、この平基式の三角形鏃は、最近調査の終了した始良郡栗野町山崎B遺跡でも、吉田式・前平式土器に伴ない大量に出土しているとのことである。未だ少ない資料での検討であるが、石鏃の発生時点より縄文時代早期・前期に石鏃の主流形態として三角形鏃が存在していた傾向がうかがえる。

(ウ) その他

当遺跡では細石器と石鏃・打製石斧・土器片が5b層・6層において出土した。このことは重要な問題であるが、先に述べたように本遺跡出土の細石刃核の形態は、これらの遺物と直接結びつけがたいといえよう。5a層がブロック状になっていることを考えると、これらの共伴関係

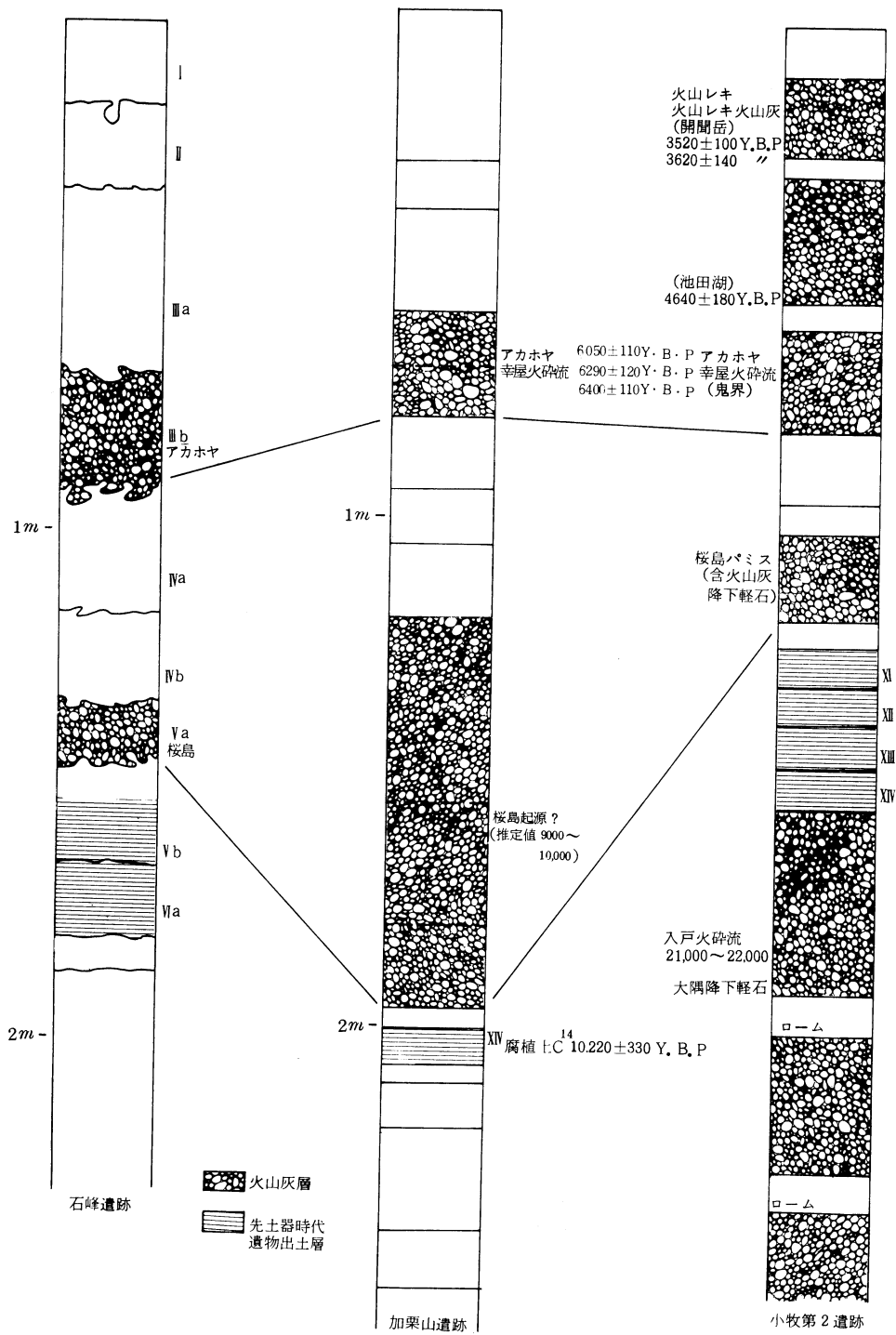
押圧剥離による調整、整形は、不整いの感が強く側縁方向からの剥離が石鏃の中央部で交わらない(剥離面が中央部を境にシンメトリーではない)状態であり、中央部が厚く稜をもつような形となっている。さらに表面の観察では、剥離面、剥離面の重なる部分の摩耗も激しく風化の進んだことを示している。本遺跡出土の2例は、①基部の窪む凹基式に属し、②剥離面、剥離面間の摩耗はほとんど感じられない。また、押圧剥離による整形も、両側縁・基部より入念に行なわれ、④器厚も薄くシンメトリーな仕上がりとなっている。このように、加栗山遺跡出土の石鏃と、本遺跡出土の2例とでは、いくつかの差異を指摘できる。

については今後なお検討されねばならないだろう。

本県では、近年先土器時代に属する遺跡が増加し、出水市上場遺跡、大口市日東遺跡を筆頭に、指宿市小牧3A遺跡では、ナイフ形石器、ポイント、台形石器、鹿児島市加栗山遺跡、同じく加治屋園遺跡では、各種の細石刃核と大量の細石刃器、それに伴う石鏃、磨製石斧、隆線土器などの発見があり、今後大いに話題をよぶものと思われる。

〈参考文献〉

1. 戸沢充則 「矢出川遺跡」『考古学集刊』第2巻第3号 1964
2. 杉原荘介・小野真一 「静岡県休場遺跡における細石器文化」『考古学集刊』第3巻第3号 1965
3. 鎌木義昌・芹沢長介 「長崎県福井岩陰」『考古学集刊』第3巻第1号 1965
4. 鎌木義昌・芹沢長介 「長崎県福井洞穴」『日本の洞穴遺跡』 1967
5. 池水寛治 「鹿児島県出水市上場遺跡」『考古学集刊』第3巻第4号 1967
6. 鈴木忠司 「野岳遺跡の細石核と西日本における細石刃文化」『古代文化』第23巻第8号 1971
7. 鈴木忠司 「東海地方の細石刃文化について」『日本古代学論集』 1979
8. 池崎讓二・吉留秀敏 「長島の旧石器ー出水郡東町尻無平遺跡・毎床牧場入口遺跡」『鹿児島考古』 第13号 1979
9. 吉留秀敏 「出水地方平野部の細石器資料」『鹿児島考古』 第13号 1979
10. 木下 修 「門田遺跡」『日本の旧石器文化』 第3巻 雄山閣 1976
11. 木下 修他 「門田遺跡谷地区の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』 第11集 福岡県教育委員会 1979
12. 橋 昌信 「九州における細石器文化」『考古学論叢』第1号 1973
13. 橋 昌信 「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』第3号 1975
14. 橋 昌信 「九州地方の細石器文化」『駿台史学』 第47号 1979
15. 麻生 優・白石浩之 「百花台遺跡」『日本の旧石器文化』 第3巻 雄山閣 1976
16. 長野真一 「小牧3A遺跡の紹介」『指宿市談』 創刊号 1979
17. 石川秀雄・加藤芳朗 「鹿児島市加栗山における火山灰層の層序とC-14年代」『鹿児島大学教育学部研究紀要』 第28巻 1977
18. 石川秀雄・有村謙誠・大木公彦・丸野勝敏 「阿多火砕流および開聞岳火山灰層のC 14年代」 地質学雑誌 第85巻第11号 1979
19. 弥栄久志・中島哲郎他 「小牧第Ⅱ調査区」『指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書』 指宿市教育委員会 1979
20. 長野真一・中島哲郎・成尾英仁 「岩本遺跡」『指宿市埋蔵文化財発掘調査概報』 指宿市教育委員会 1978
21. 池水寛治・旭慶男・長野真一 「荘貝塚」『出水市文化財調査報告書』 1 出水市教育委員会 1979
22. 新東晃一・青崎和憲・牛之浜修・中村耕治 「桑ノ丸遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』 7 1977
23. 中村耕治・新東晃一 「長ヶ原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』 10 1978
24. 西田 茂・長野真一 「柳ヶ迫遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』 10 1978
25. 戸田正勝・松村明子・織笠 昭 『鈴木遺跡Ⅰ』 小平市鈴木遺跡調査会 1978



第 144 図 火山灰と遺跡の形成

2. 縄文時代の石器

(1) 4b層出土の石器

① 石鏃 (第145図 270~279)

すべて凹基式打製石鏃である。270~275は長さ 1.4cm前後と小さい。えぐりは浅いが、特に272~275はわずかにくぼむだけである。277 は丸みをもったえぐりをもち、周辺の剥離作業もあらい。278・279は長身の鏃で先端は鋭い。279 は特に細く長い形態で、細かい剥離痕跡を残している。

② 石匙 (第145図 280~283)

横形のもの4点が出土している。282 が中央につまみをもっているのに対して、他の3点は端にある。280 は刃部にこまかな押圧剥離痕がみられ、つまみは上部のえぐりのみに細かい押圧剥離が施されている。281 は片方に大剥離面を残す、わい曲した剥片を使用している。

③ 削器 (第145図 284~290, 第146図 291)

剥片の一辺に刃部をもうけた削器が8点みられる。284 は長方形をした剥片の一長辺にこまかい押圧剥離をほどこす。285・286は小型の割と部厚い剥片の一辺に、287は一部に節理面を残す剥片の一辺に押圧剥離調整をほどこす。288 は意識的にほどこした調整痕はないが、両側辺に刃こぼれの痕跡がみられ、289 は片面に大剥離面を残す剥片の両側辺にこまかい押圧剥離痕跡を残している。291は大型の剥片を使用した削器で、一側辺に押圧剥離がほどこされる。

④ 石斧 (第146図 292)

打痕跡を多く残すが刃部付近をていねいに磨いた磨製石斧で、刃部には刃こぼれが目立つ。

⑤ 叩石 (第146図293・294)

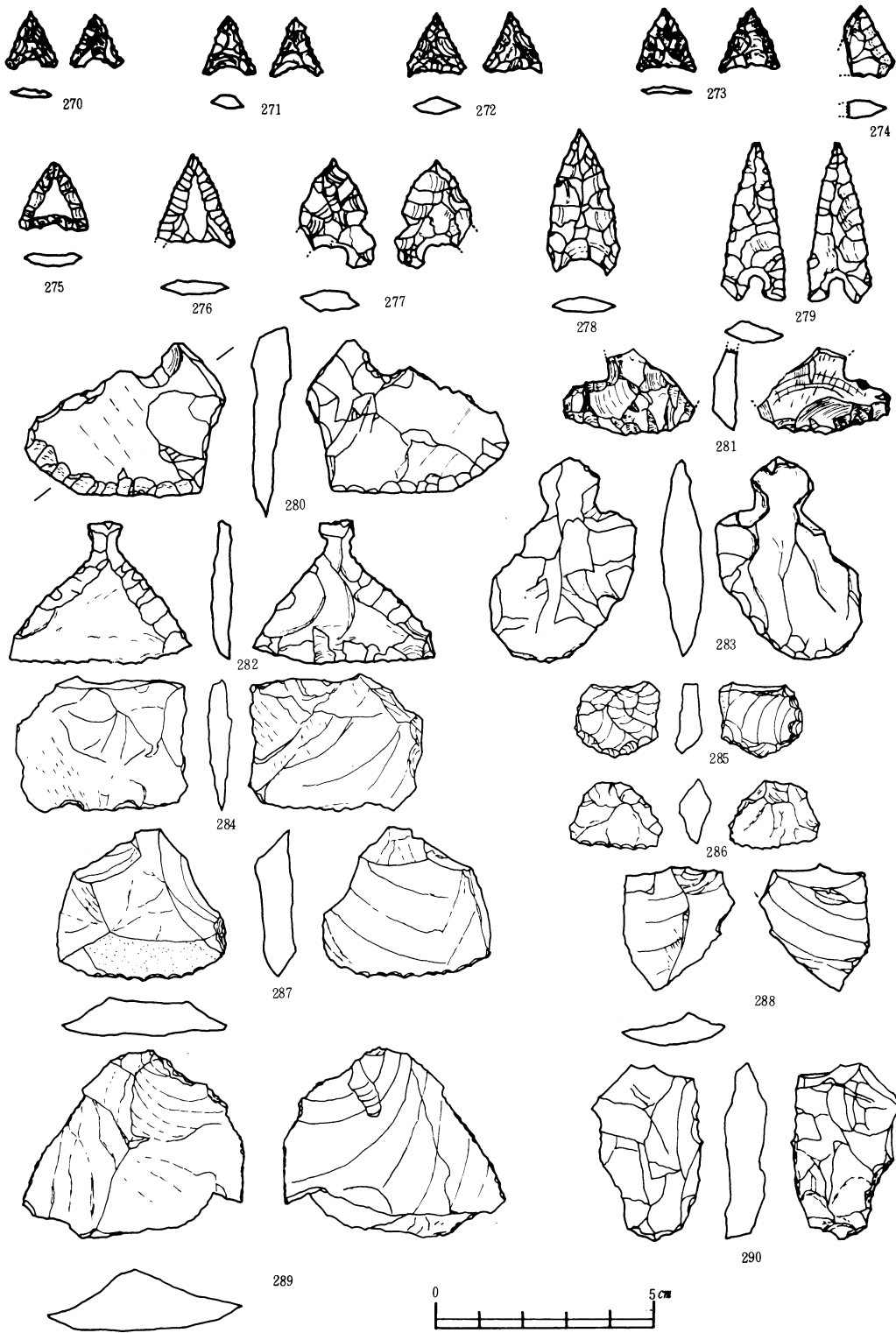
293 は卵大の円礫を使用しており、激しい打撃により、縦方向に約 $\frac{1}{2}$ ほどが割れている。294 は棒状を呈した河原石を使用しており、一端に打痕跡がみられる。

⑥ 礫器 (第146図295・296)

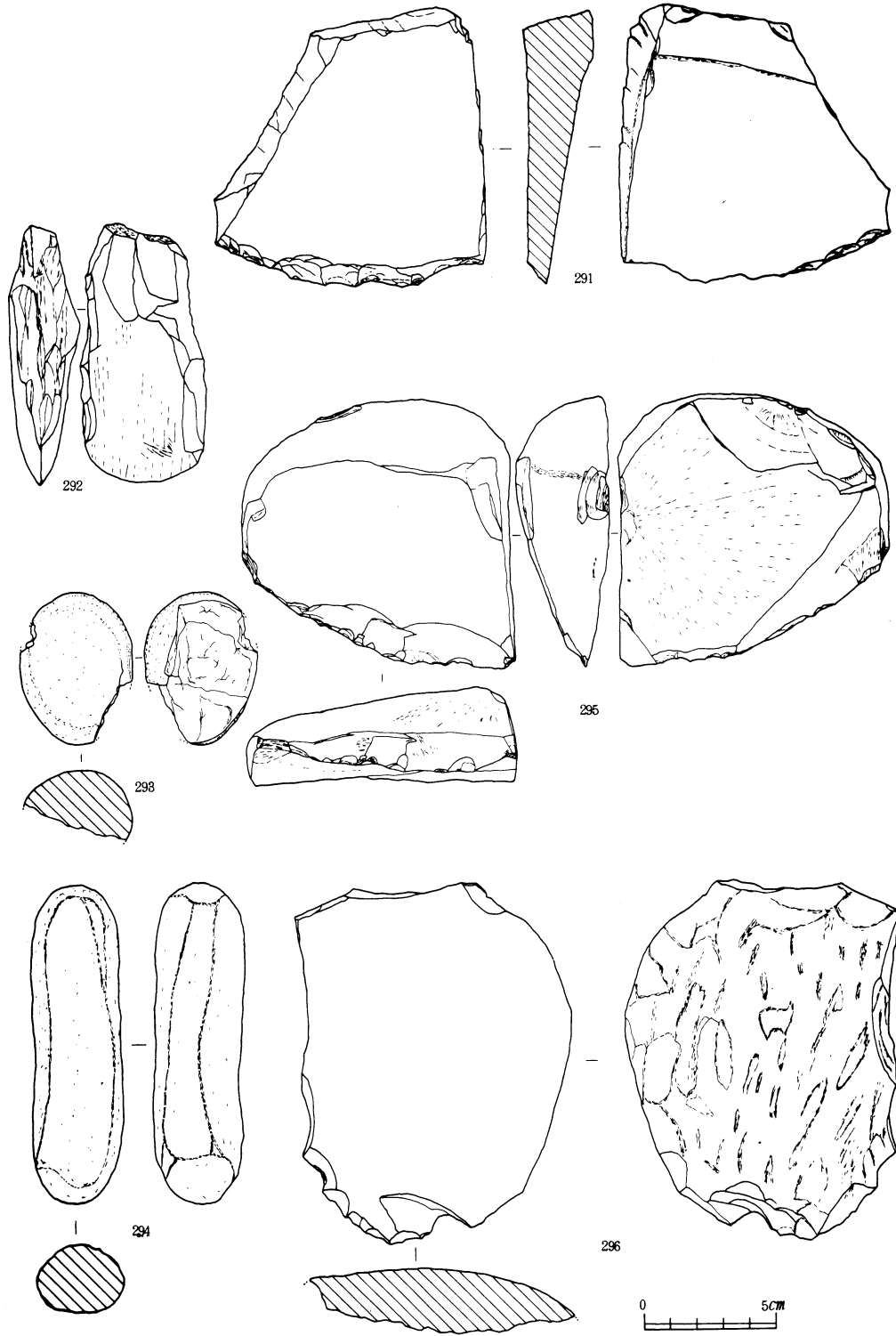
295 は河原石を使用した砥石を3以上に裁断し、その一辺をさらに再加工して刃部をつくっている。296は一面に表皮を残した大剥片の一辺に、打撃を加えて刃部としている。

番	出土区	器種	石 材	279	F-11	石 鏃	石 英 ?	289	E-9	削 器	チャート
270	D-10	石 鏃	黒 耀 石	280	C-13	石 匙	チャート	290	F-4	〃	〃
271	E-8	〃	〃	281	B-9	〃	黒 耀 石	291	F-7	〃	安 山 岩
272	C-15	〃	〃	282	D-5	〃	チャート	292	E-7	磨製石斧	砂 岩
273	B-29	〃	〃	283	E-7	〃	〃	293	E-5	叩 石	〃
274	E-5	〃	〃	284	C-7	削 器	玄 武 岩	294	D-5	〃	〃
275	C-8	〃	チャート	285	D-7	〃	黒 耀 石	295	F-8	礫 器	安 山 岩
276	E-6	〃	〃	286	F-4	〃	石 英	296	C-13	〃	砂 岩
277	E-5	〃	黒 耀 石	287	B-9	〃	チャート				
278	E-4	〃		288	E-4	〃	〃				6

第21表 4b層出土の石器一覧表



第 145 図 4b層出土の石器 (石鏃・石匙・削器)



第 146 図 4b層出土の石器 (石斧・削器・叩石・礫器)

(2) 4a層出土の石器

4 a 層の石器には石鏃・石匙・剥片石器・石斧・叩石などが出土した。

① 石鏃 (297～346)

総数50本の石鏃が出土したが半数近い48%のものが鏃の先端や凹基の脚部に欠損を生じている。その中で平基式鏃・凹基式鏃に大別され、その形状は正三角形に近いものと二等辺三角形を呈するものがある。前者は全体の26%で、本遺跡のIV a 層の石鏃は後者の石鏃が大半を示している。大きさも長さ 1.1cm, 巾 0.7cmの細石鏃から長さ 3.5cm, 巾 2.2cmの大型のものまでと一定ではない。石材には黒耀石・頁岩・チャート・珪岩・石英を使用している。

平基式石鏃 (297・337・340～345)

平基式石鏃の全てが二等辺三角形を呈す。297 は長さ 1.1cm, 巾 0.7cmを計り細石鏃の部類と思われる。337は二等辺三角形で相互剥離による鋸歯あるいはサメ歯といわれる形状を呈す。340～345は大型で一般的な石鏃と比較して厚みがあり尖頭器に近い形態を思わせる。

凹基式石鏃 (298～336, 338, 339, 346)

出土総数の86%を占める。凹基の形状には浅いものと深いものがあり、深いものにはU字状とV字状を呈するものがある。凹基式石鏃にも大きさは異なり298のように長さ1.1cm, 巾 0.7cmの細石鏃から 328のような長さ3cm, 巾 2.0cmの大型のものまである。299～311, 346 は正三角形に近い形態を示し、313～336, 338, 339は二等辺三角形を呈す。特に 302は基部凹基式のU字石鏃で正三角形の石鏃の典型的なものである。346 は片脚ではあるが、黒耀石製の大型石鏃である。深いU字状のくい込みを行い表裏ともにていねいな調整剥離を行っている。製作技術のほうからみると、一般的に小型・中型の石鏃はていねいに細かい剥離を施しているが大型の鏃は346をのぞいて雑な仕上りとなる。特に大剥離面を残す316, 318, 328, 331, 336がある。

② 石匙 (347～359)

ほとんどが完全品でヨコ形とタテ形の計12本が出土した。347・348・356 はヨコ形でつまみは中心より外側に位置する。なお 356は完全に外側に斜めにつまみを施す。つまみそのものは比較的雑な仕上りで大きいものとなる。347の刃部は水平で348・356は弯曲している。349・351・353・355は小型の石匙である。つまみは刃部の長さには比べ大きいものとなる。349・351 は全面にわたり入念に調整剥離を行っている。353・355は調整が雑で、未完成品と思われる。357～359はタテ長剥片を利用したいわゆる縦長石匙である。いずれも主要剥離面が顕著にみられる。つまみのえぐりは浅く大きいものである。調整面は片面からのみ剥離がなされている。

③ スクレーパー (360～362)

360 は横長剥片を利用し自然面を残し剥片の打痕も顕著に認められる。刃部は水平で相互剥離による加工を施している。361 は全面に剥離調整を施し刃部は鋭く、ていねいに加工している。362は両面ともに大剥離面を残し刃部は水平で片方のみに調整剥離を施している。

④ 剥片石器 (363～379, 390～400)

不定形な横長、縦長剥片を用いた剥片石器20点が出土した。用途としてはスクレーパーに使われたもの 363～370 とナイフのような使途が考えられる371～373あるいは尖頭器状の形態を呈する399・400があり、いずれも剥片の鋭利な辺を刃部とし調整剥離や使用痕らしき刃こぼれも認められるものもある。大きさも小～大型と種類も多い。小～中型は石材として黒耀石・チャートが主であるが大型390～397には安山岩、砂岩を用い、刃部の調整剥離も自然と大きなものとなる。刃部も長軸に対して縦刃と横刃がある。全てのものに大剥離面を顕著に残している。

⑤ 石斧 (380～383)

石斧には磨製石斧 1 本、部分磨製石斧 4 本の計 5 本が出土した。

380 は長軸に対し全面を斜めに研磨し、研磨痕も顕著にみることができる。刃部は鋭利で完形品である。長さ10cm, 巾 4.4cmを計る。石材は安山岩である。

381～383は部分磨製石斧で刃部を入念に磨いている。ただし 383は基部と刃部を欠き定かではない。381・382は周縁部分に調整剥離を行い、382 は自然石を利用したものと思われるが刃部は鈍く摩耗度が激しい。

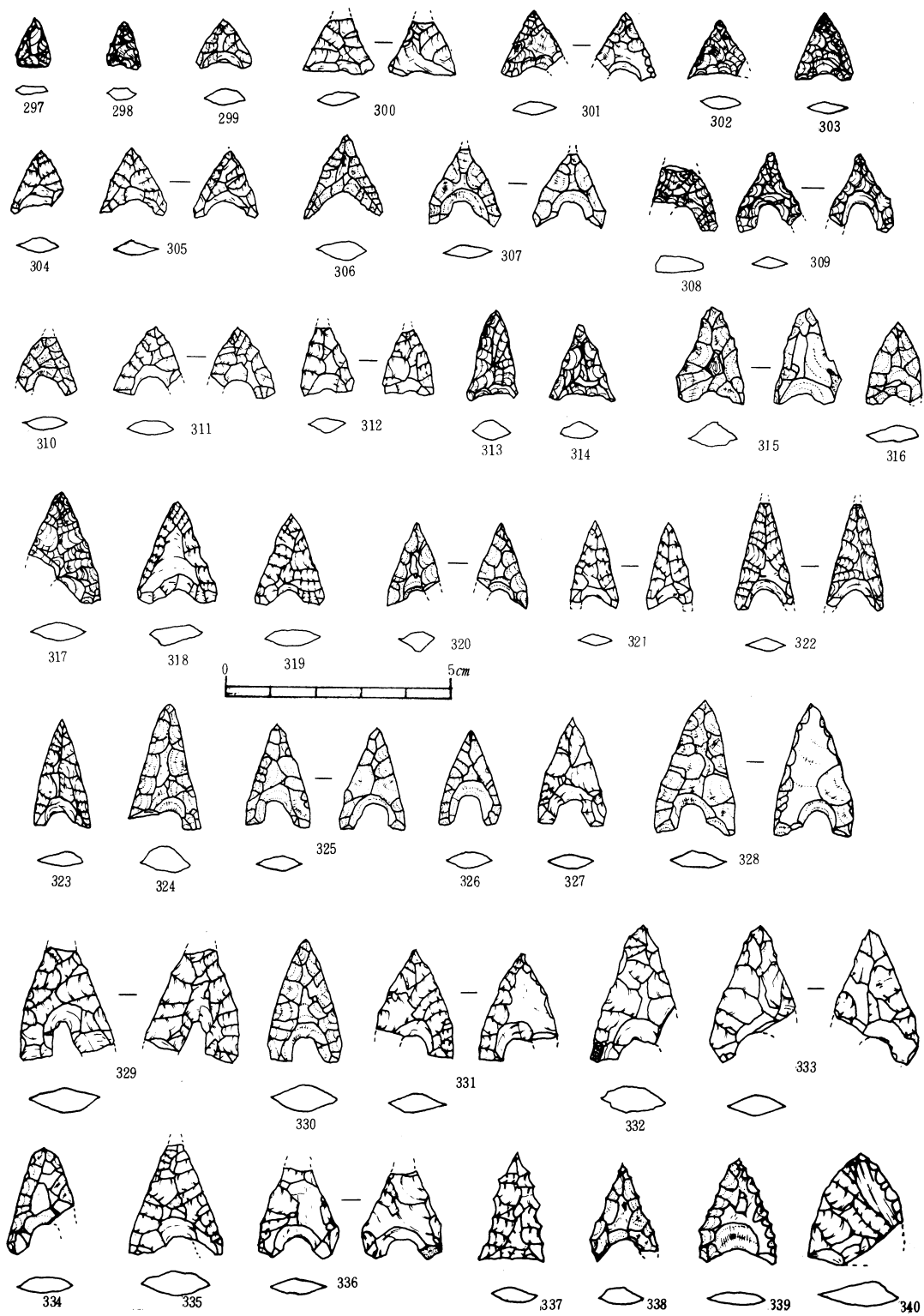
⑥ 叩き石 (384～389)

6 個出土しているが石材としては安山岩、砂岩を使用している。6 個すべての叩き石が円礫あるいはそれに近いものである。いずれも周縁部に顕著な使用痕を残し凹凸が激しい。平坦部は一面なめらかで、磨石の用途もあったと思われる。387 は親指大の凹みを持ち凹石にも使用したものと考えられる。

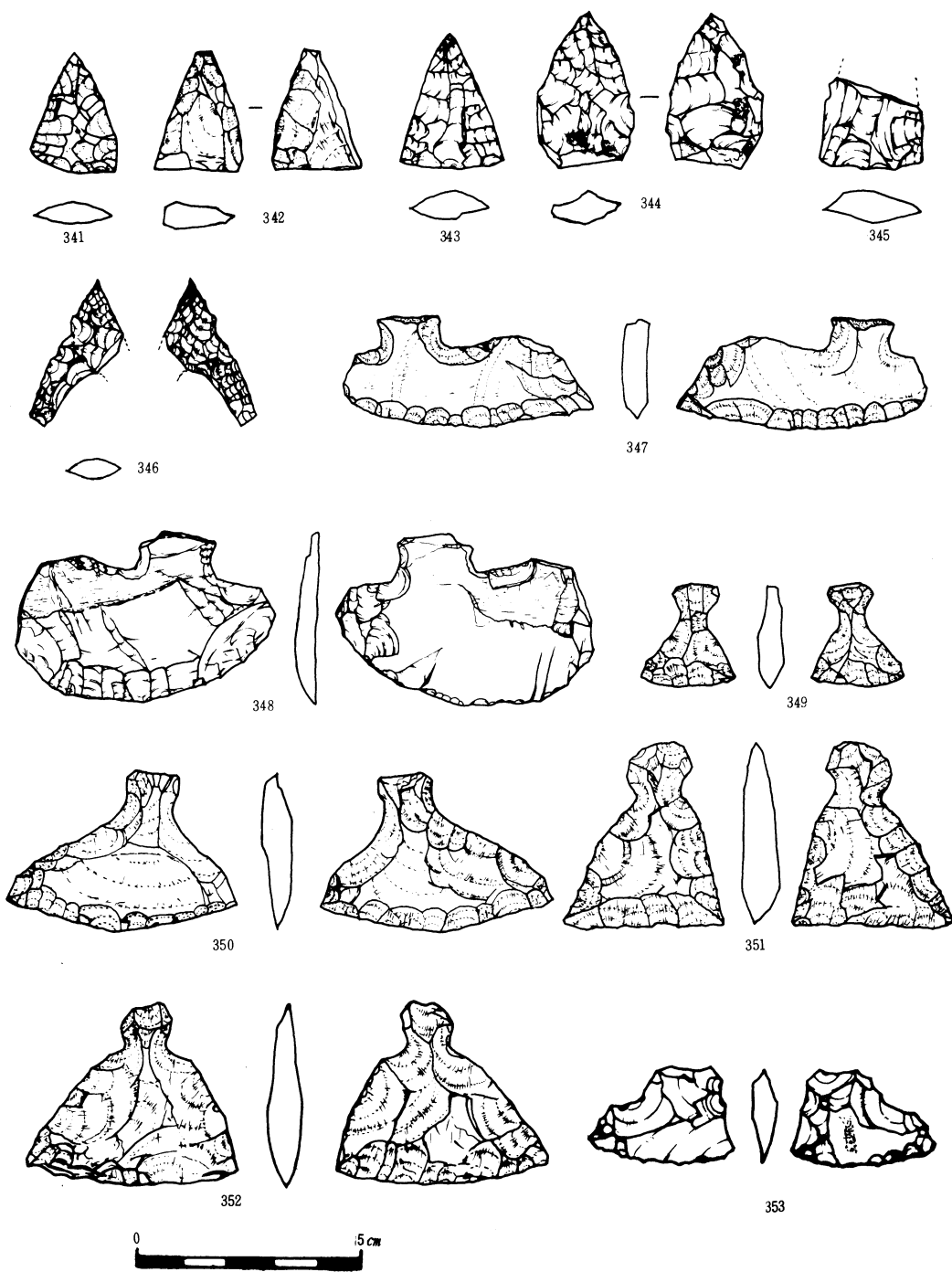
番号	出土区	器種	石材	番号	出土区	器種	石材	番号	出土区	器種	石材
297	B-6	石 鏃	黒 耀 石	303	F-7	石 鏃	黒 耀 石	309	F-9	石 鏃	石 (チャート) 英
298	D-6	〃	〃	304	C-7	〃	チャート	310	F-8	〃	安 山 岩
299	E-7	〃	チャート	305	C-5	〃	〃	311	C-29	〃	〃
300	E-6	〃	〃	306	D-7	〃	安 山 岩	312	E-11	〃	チャート
301	B-5	〃	黒 耀 石	307	B-5	〃	〃	313	C-9	〃	黒 耀 石
302	C-6	〃	〃	308	C-6	〃	黒 耀 石	314	D-6	〃	〃

番号	出土区	器種	石 材	番号	出土区	器種	石 材	番号	出土区	器種	石 材
315	C-5	石 鏃	石 英	346	F-7	石 鏃	黒 耀 石	377	C-9	剥片石器	チャート
316	F-7	〃	安 山 岩	347	E-4	石 匙	安 山 岩	378	E-8	〃	〃
317	E-7	〃	黒 耀 石	348	D-7	〃	チャート	379	D-13	〃	〃
318	C-6	〃	チャート	349	G-4	〃	安 山 岩	380	B-20	石 斧	〃
319	B-9	〃	〃	350	E-7	〃	チャート	381	G-12	〃	泥 岩
320	E-5	〃	安 山 岩	351	C-7	〃	安 山 岩	382	B-8	〃	〃
321	C-5	〃	チャート	352	D-5	〃	〃	383	D-6	〃	砂 岩
322	D-4	〃	〃	353	D-5	〃	硅 岩	384	C-6	叩 石	安 山 岩
323	C-5	〃	〃	354	F-9	〃	安 山 岩	385	D-5	〃	砂 岩
324	D-5	〃	安 山 岩	355	C-8	〃	チャート	386	D-5	〃	安 山 岩
325	C-5	〃	〃	356	C-9	〃	〃	387	D-5	〃	砂 岩
326	B-7	〃	〃	357	C-8	〃	〃	388	D-7	〃	〃
327	D-5	〃	チャート	358	C-9	〃	安 山 岩	389	D-5	〃	安 山 岩
328	D-5	〃	安 山 岩	359	E-7	〃	チャート	390	E-4	剥片石器	〃
329	B-5	〃	チャート	360	D-7	スクレ ーパー	安 山 岩	391	C-8	〃	〃
330	C-9	〃	安 山 岩	361	B-9	〃	〃	392	D-6	〃	砂 岩
331	D-5	〃	チャート	362	E-6	〃	チャート	393	E-9	〃	安 山 岩
332	C-6	〃	硅 岩	363	D-7	剥片石器	〃	394	F-4	〃	砂 岩
333	C-5	〃	チャート	364	D-14	〃	〃	395	E-6	〃	〃
334	B-6	〃	安 山 岩	365	D-6	〃	〃	396		〃	〃
335	E-6	〃	チャート	366	C-7	〃	頁 岩	397	D-7	〃	〃
336	D-4	〃	〃	367	D-8	〃	安 山 岩	398		〃	〃
337	D-9	〃	〃	368	C-7	〃	チャート	399	D-6	〃	チャート
338	C-6	〃	安 山 岩	369	E-7	〃	〃	400	E-8	〃	〃
339	D-13	〃	〃	370	C-8	〃	〃				
340	E-8	〃	チャート	371	C-7	〃	黒 耀 石				
341	E-4	〃	安 山 岩	372	F-8	〃	チャート				
342	C-5	〃	〃	373	C-8	〃	〃				
343	E-6	〃	チャート	374	E-6	〃	安 山 岩				
344	C-5	〃	〃	375	C-8	〃	黒 耀 石				
345	E-5	〃	硅 岩	376	E-7	〃	チャート				

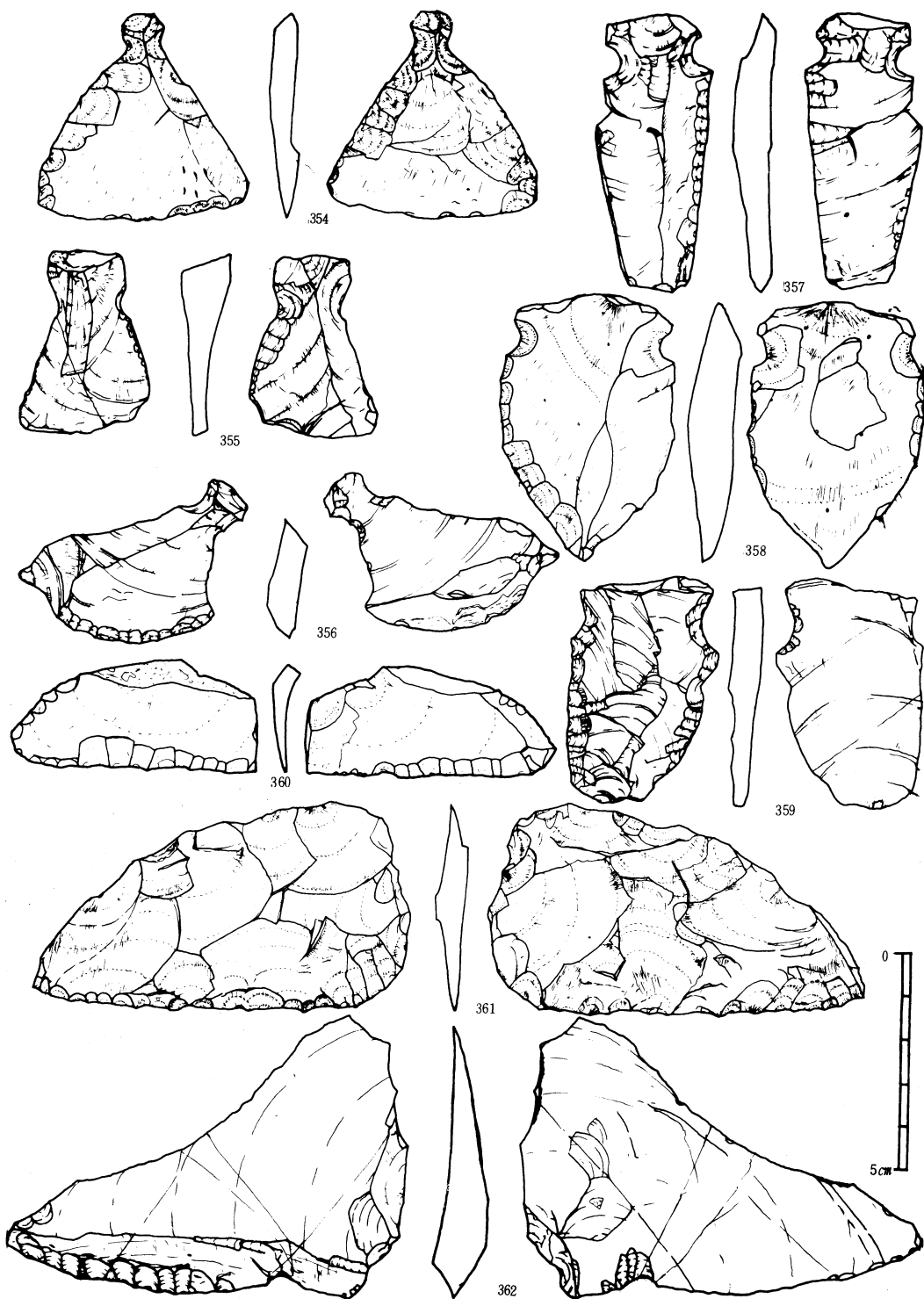
第22表 IVa層出土の石器一覧表



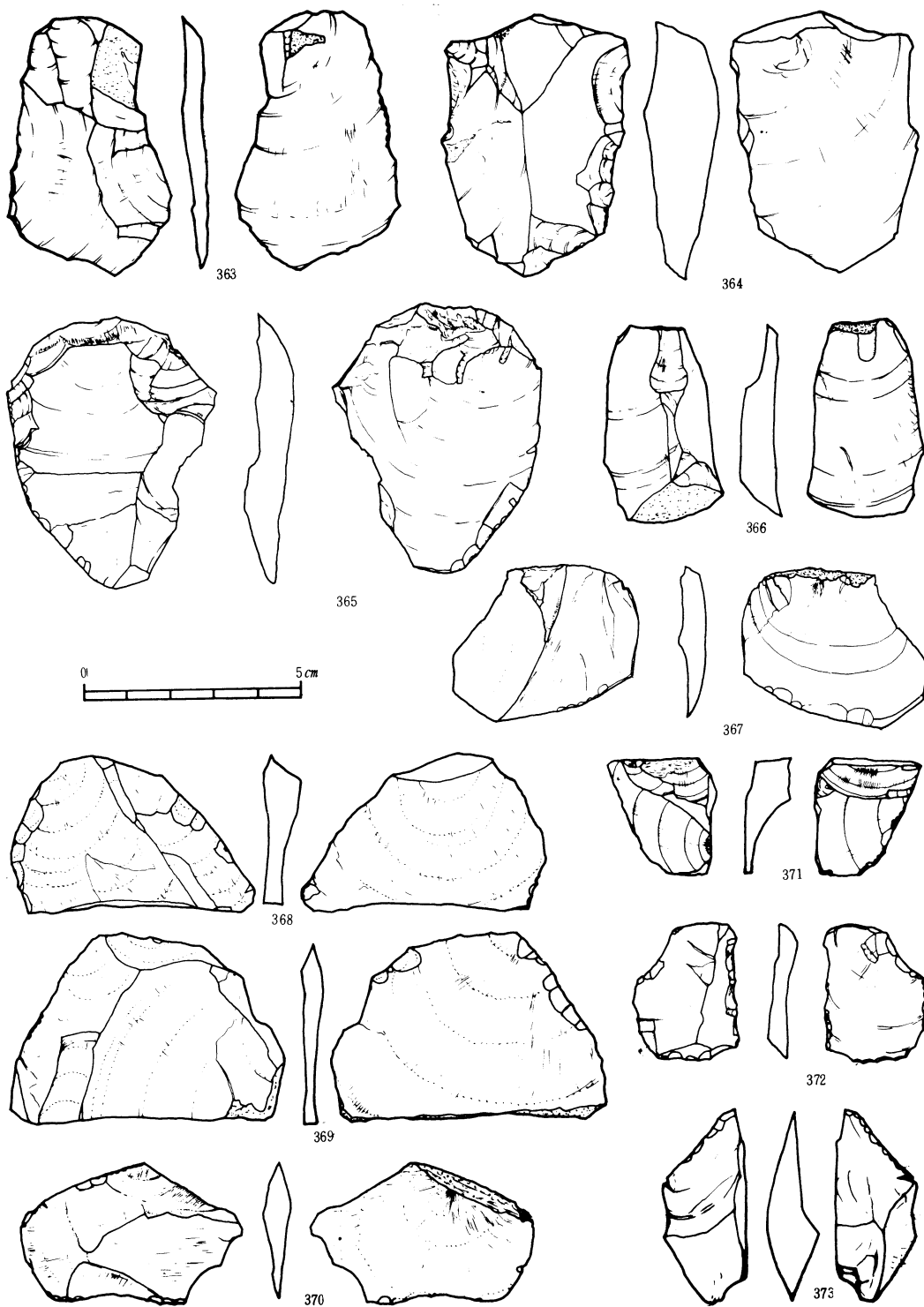
第 147図 4 a層出土の石器 (石鏃)



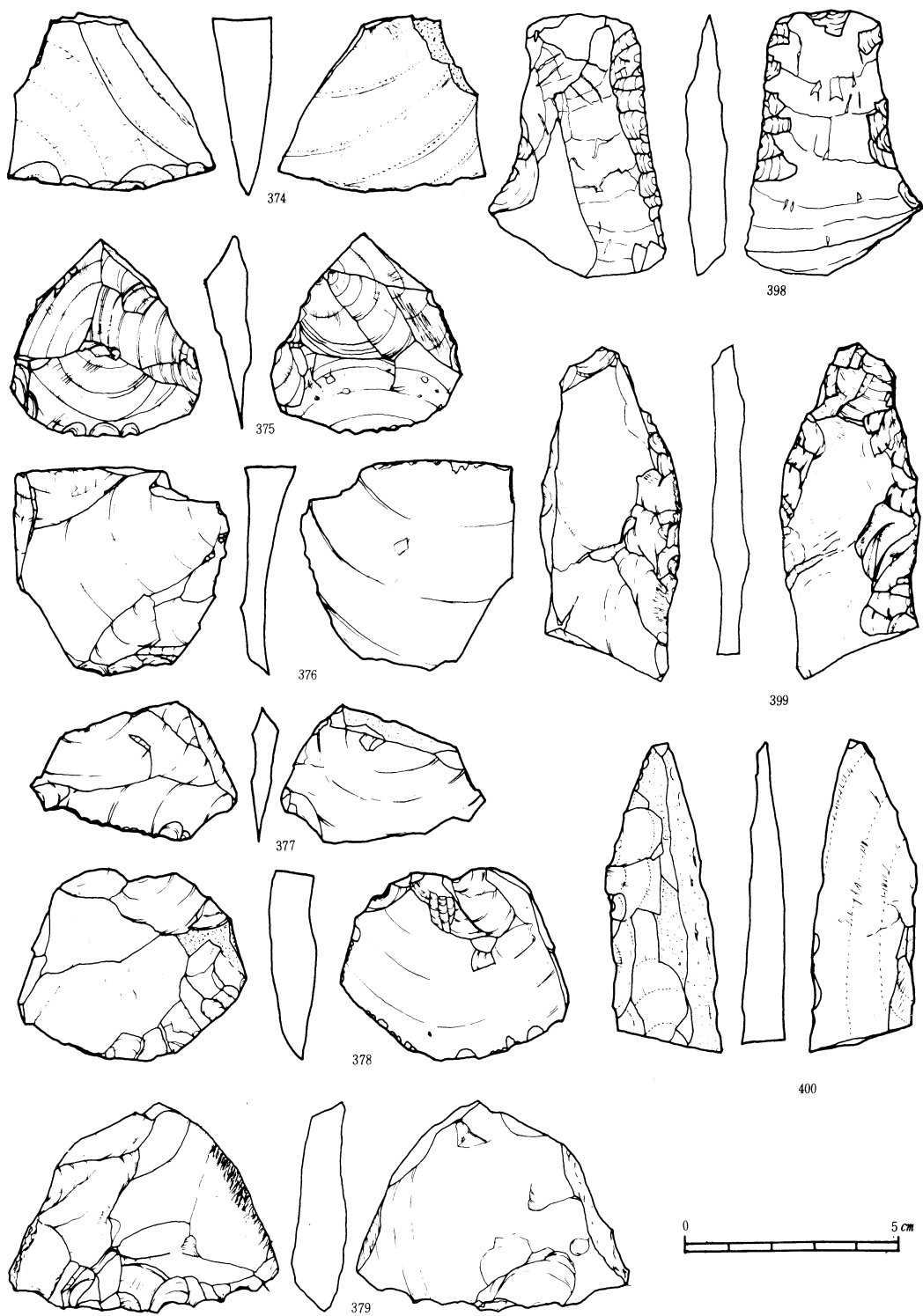
第 148図 4 a層出土の石器 (石鏃・石匙)



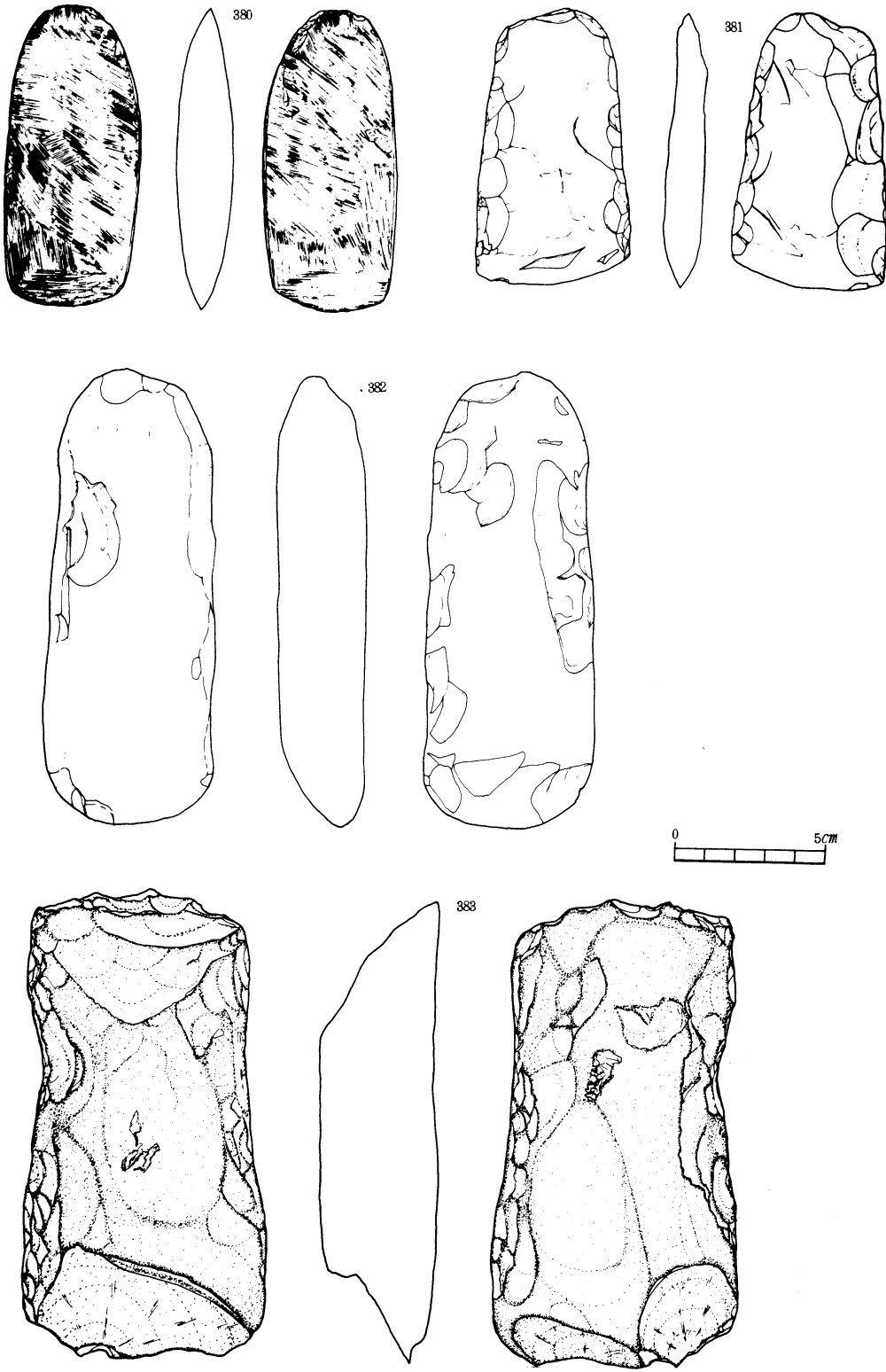
第 149図 4 a層出土の石器 (石匙・スクレーパー)



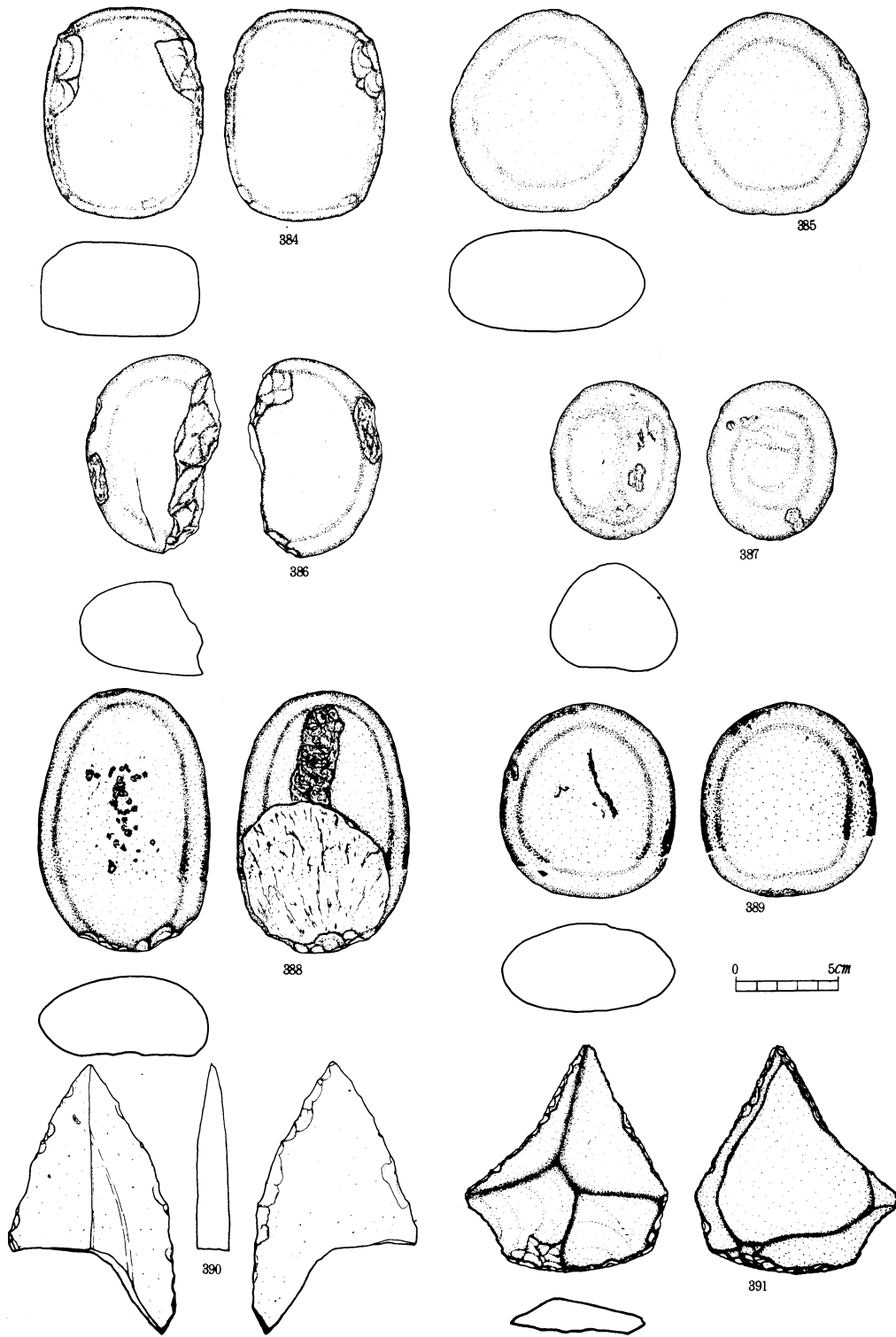
第 150 図 4 a 層出土の石器 (剥片石器)



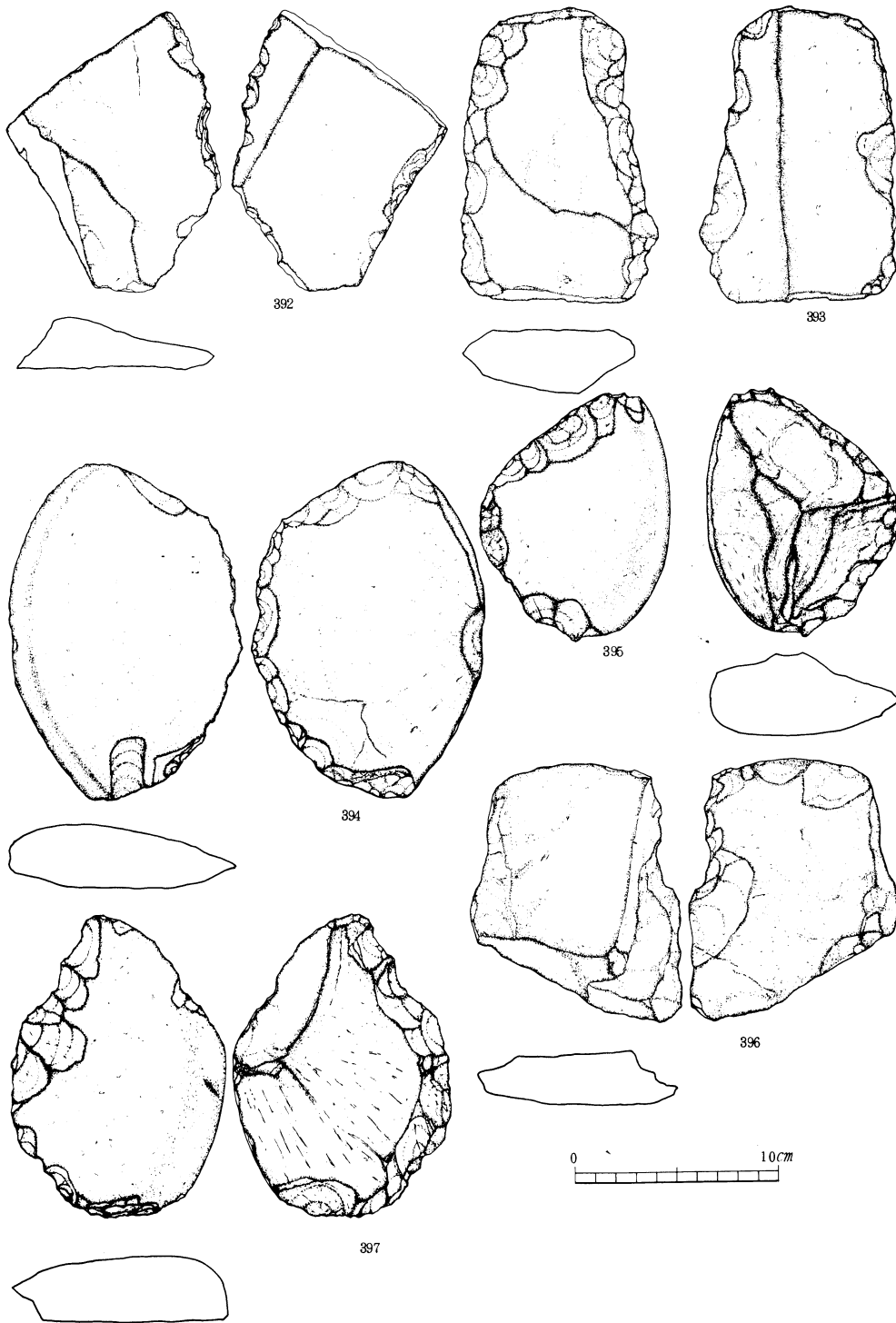
第 151 図 4 a 層出土の石器 (剝片石器)



第 152 図 4 a 層出土の石器 (磨製石斧・打製石斧)



第 153図 4 a層出土の石器 (叩き石・すり石・剥片石器)



第 154 図 4 a 層出土の石器 (剥片石器)

(3) 3a層出土の石器

3a層からは石鏃・削器・石匙・尖頭器様石器・剥片石器・石斧・礫器が出土している。

① 石鏃 (第155図 401~420)

20点の石鏃がみられ、すべて凹基式打製石鏃である。401・402はえぐりの浅い小型の鏃である。402はうすく仕上げている。403~412は正三角形に近い形態で、えぐりが割に深い。403~405は長さ・幅とも約1.5cmを測り、えぐりが $\frac{1}{2}$ ほどはいる。406は片脚を欠いており押圧剥離は大きい。408はやや細長い。411はこまかく押圧剥離をほどこし、うすく仕上げる。412は整った形をしており、交互剥離によって鋸歯状の形態を呈する。先端・脚端ともすどくどくがっている。413・414は長さ2.4cm、幅1.3~1.6cmと長身の石鏃で、413は先がすどくどく細いものの、根元は幅広くおわっている。415は先端・片脚を欠いているが、脚の長い鏃である。416も先端を欠いているが、長身の鏃で、こまかい押圧剥離がほどこされる。417は長さ・幅とも3cm近くを測る大型の鏃である。大剥離面を残した片面は、先端・脚端・えぐりの部分のみに押圧剥離調整がされ、他面には全面に割に大きい剥離痕跡がみられる。うすい作りである。418は先端のすどい鏃である。419はえぐりが矩形に近い楕円形鏃で、大きい。420も長さ・幅とも2.5cmを超える大型鏃で、えぐりは深い。

② 削器 (第155図 421・422・424・425, 第156図 427, 第157図 437)

421は頂部に自然節理面を残す剥片の一边に、両側よりこまかく押圧剥離調整を加える。422は一面の一部分に自然面を残す剥片の両側面に押圧剥離調整を加える。片面には大剥離面を残し、他面も加工はほとんど加えてない。424はたて剥ぎの大きな剥片の一边に、片側より押圧剥離がほどこされる。一面は大剥離面を残し、ここには周辺加工がまったくされない。425は剥片の周辺に加工を加えているが、こまかい調整はされていない。427は小さい剥片の一边に両側よりこまかい押圧剥離が加えられる。437は略三角形の大きな剥片の一边に押圧剥離調整を加えるが、刃部は内側にわん曲している。

③ 石匙 (第156図 426)

長さ6.4cm、幅1.5cmと、幅の狭い横長の石匙である。つまみはほぼ中央付近にあって、つまみの基部をわずかに深くえぐっているために棒状に近い形となる。周辺はこまかく、ていねいな押圧剥離調整がほどこされており、一側面はすどくどくがっている。刃部はやや外反しているものの、直線に近いといえる。

④ 尖頭器様石器 (第156図 428)

三角形の二側面にこまかい押圧剥離調整をほどこしている。片面は大剥離面を残し、他の面は縦方向に稜をもっているため、断面は三角形を呈する。押圧剥離によって三角形の先端はとがっている。基部の調整はおこなわれていない。

⑤ 剥片石器 (第155図 423, 第156図 429~436)

剥片の側辺部を利用した石器がある。423はバルブのほうに自然面が残り、ここを基部とする。一側面には片側より刃こぼしの剥離作業をしている。429は不定形の剥片で、一面には大

剥離面を残すが、先端部を中心としてその両側に使用痕と思われる刃こぼしをみる。430 はうすい剥片の一側面に剥離痕がみられる。431 は長方形の縦長剥片の2側面に刃こぼれがみられる。432 は断面三角形を呈する縦長の剥片の長い2側面に使用痕がみられる。433 は細長くうすい剥片の一辺に刃こぼしがみられる。434 は細長く、縦に一本の稜を有する断面三角形の剥片である。長いほうの両側面に使用痕がみられる。435 は片面に大剥離面を残す剥片であるが、大剥離面のバルブは押圧剥離によりつぶしている。長いほうの2側面には使用による刃こぼれの跡がみえる。436 はわん曲した縦長の剥片の側面に刃こぼれの跡がみられる。

⑥ 磨製石斧 (第157図 438~440)

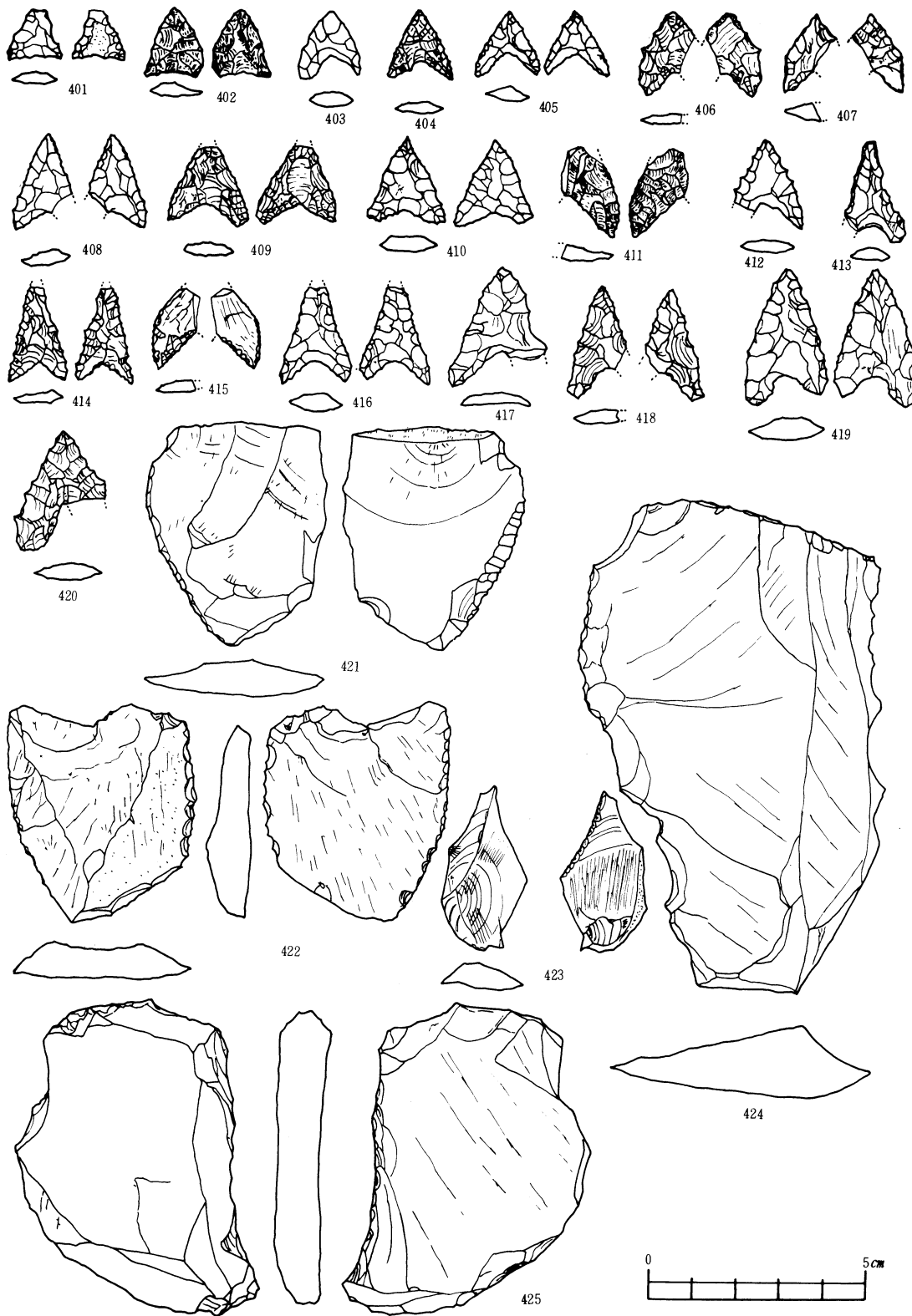
438 は部分的にみがかれない部分があるものの、ほぼ全面がみがかれた磨製石斧である。両側縁部はうすくみがかれており、断面はかまぼこ形を呈する。刃部は両側より強くみがかれするどい刃をつくっているが、刃こぼれが激しい。頭部もうすくみがいている。439 は刃部付近の欠損品である。剥脱が目立つが、残存部の観察によれば側縁部のみがきもていねいになされており、刃部は刃こぼれが目立つ。440 も剥脱が目立つ磨製石斧で、刃部を欠くが残存の長さ16cmと長大である。幅約5cmに対して、厚さ4cmと断面は矩形に近い。頭部もきれいにみがいている。これも2つに割れており、この石斧は少なくとも3片以上に割れたようである。なお、439と440は同一石材、石質であって、剥脱が目立つことなど類似しており、同一の石斧かもしれないが、接合は不可能である。

⑦ 礫器 (第157図 441)

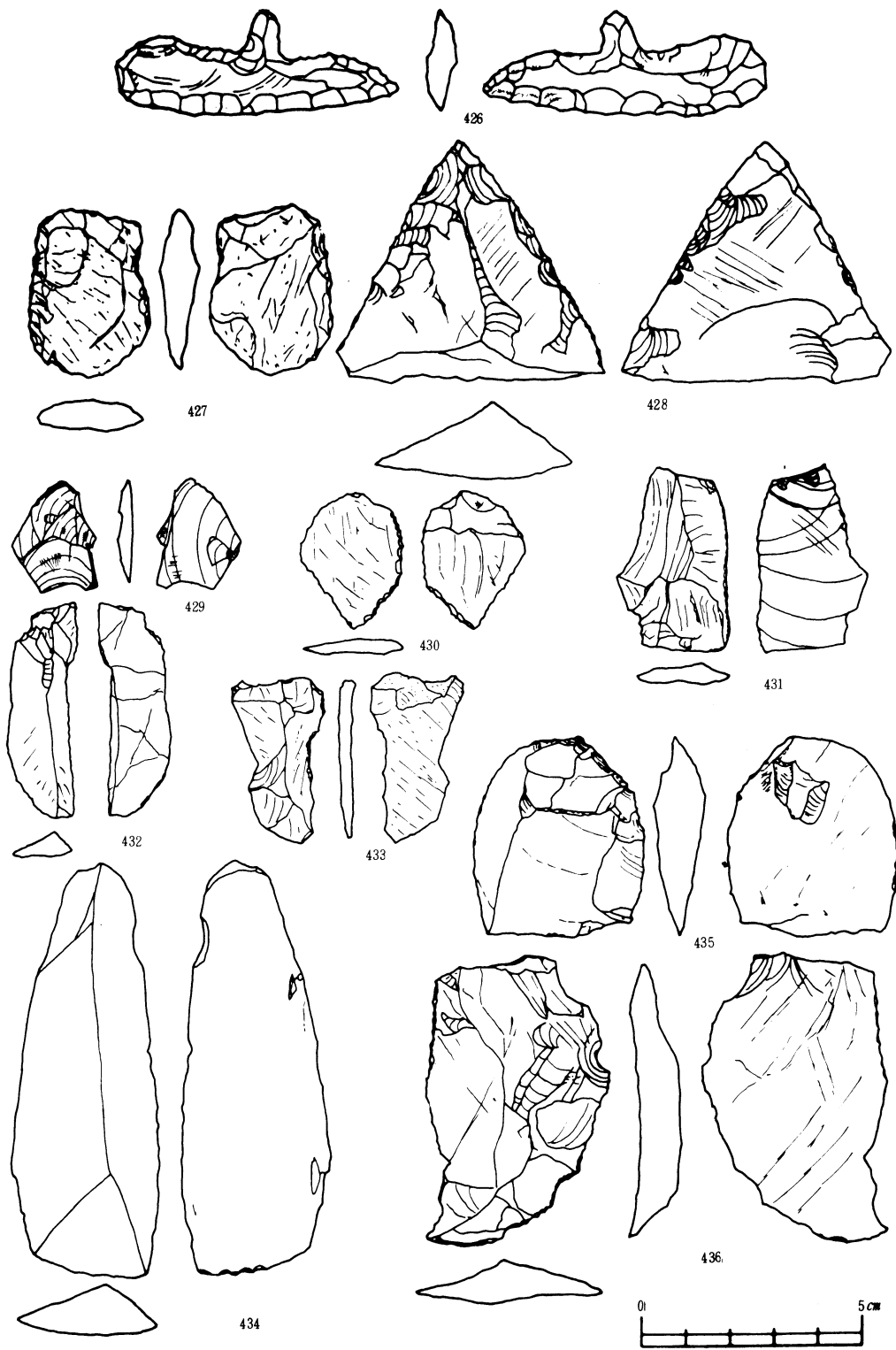
自然面を残す大剥片の一辺に、強い打撃による打痕跡がみられる。これは刃の両側に見られる。背部に加工痕はみられない。

番	出土区	器種	石材	414	D-4	石 鏃	黒 耀 石	428	B-5	尖頭器様器	黒耀石
401	E-11	石 鏃	チャート	415	E-15	〃	たん白石?	429	D-5	剥片石器	〃
402	D-13	〃	黒 耀 石	416	D-4	〃	チャート	430	D-5	〃	安山岩
403	E-5	〃	玄 武 岩	417	E-5	〃	黒 耀 石	431	D-6	〃	チャート
404	B-5	〃	黒 耀 石	418	D-12	〃	〃	432	D-6	〃	〃
405	E-5	〃	玄 武 岩	419	D-4	〃	玄 武 岩	433	C-5	〃	玄武岩
406	C-5	〃	黒 耀 石	420	E-4	〃	黒 耀 石	434	D-13	〃	安山岩
407	D-4	〃	〃	421	D-7	削 器	チャート	435	G-12	〃	チャート
408	D-5	〃	玄 武 岩	422	A-36	〃	〃	436	F-6	〃	〃
409	D-18	〃	チャート	423	D-5	剥 片 器	黒 耀 石	437	E-11	削 器	安山岩
410	C-21	〃	たん白石	424	F-4	削 器	玄 武 岩	438	D-11	磨製石斧	蛇紋岩
411	D-11	〃	黒 耀 石	425	D-4	〃	安 山 岩	439	D-5	〃	安山岩
412	B-9	〃	玄 武 岩	426	F-7	石 匙	玄 武 岩	440	D-6	〃	〃
413	E-6	〃	黒 耀 石	427	D-5	削 器	たん白石?	441	D-5	礫 器	〃

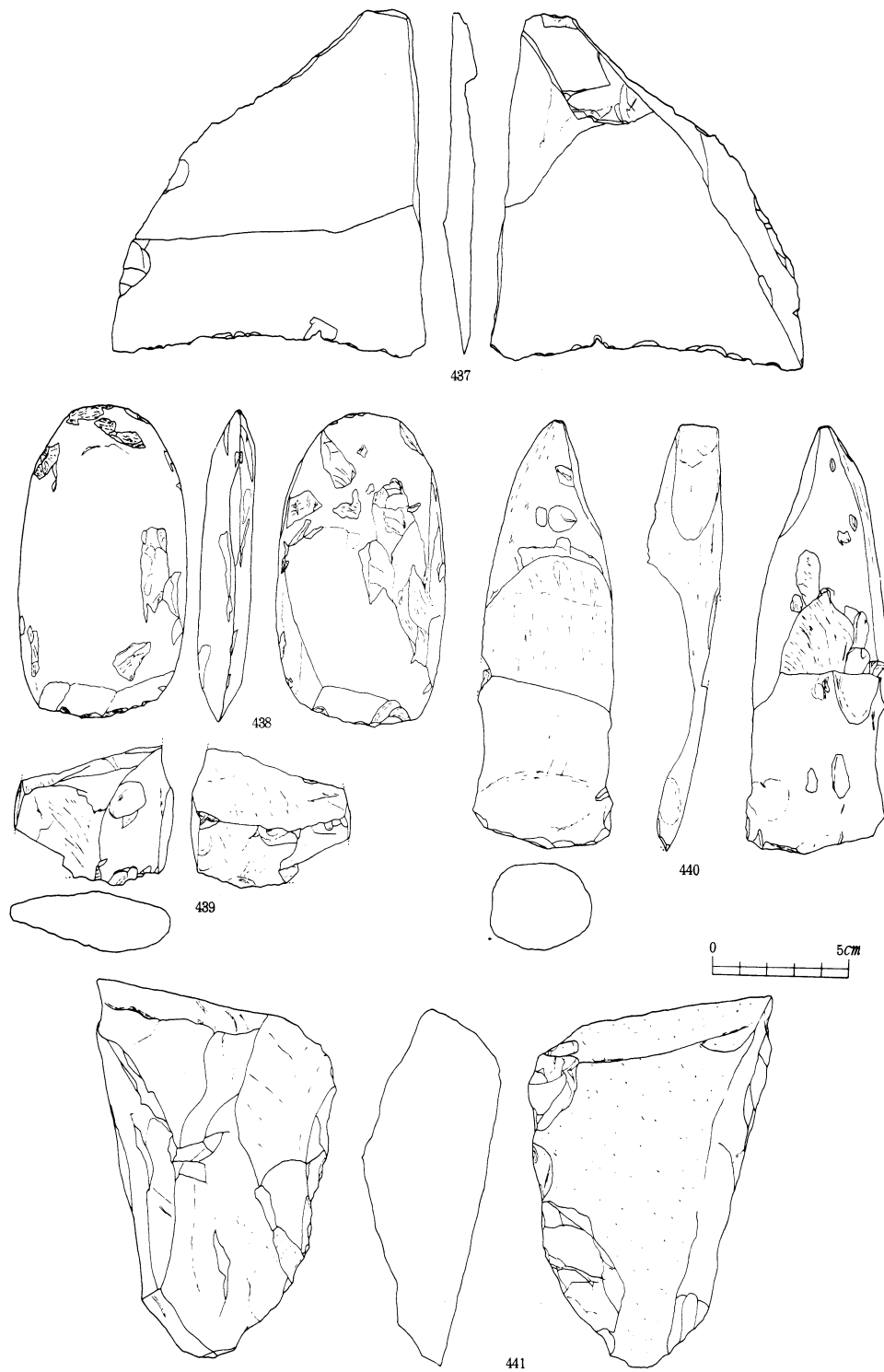
第23表 3a層出土の石器一覧表



第 155 図 3 a 層出土の石器 (石鏃・削器)



第 156 図 3 a 層出土の石器 (石匙・削器・尖頭器様石器・剥片石器)



第 157 図 3 a 層出土の石器 (剥片石器・石斧・礫器)

(4) 1・2層出土の石器

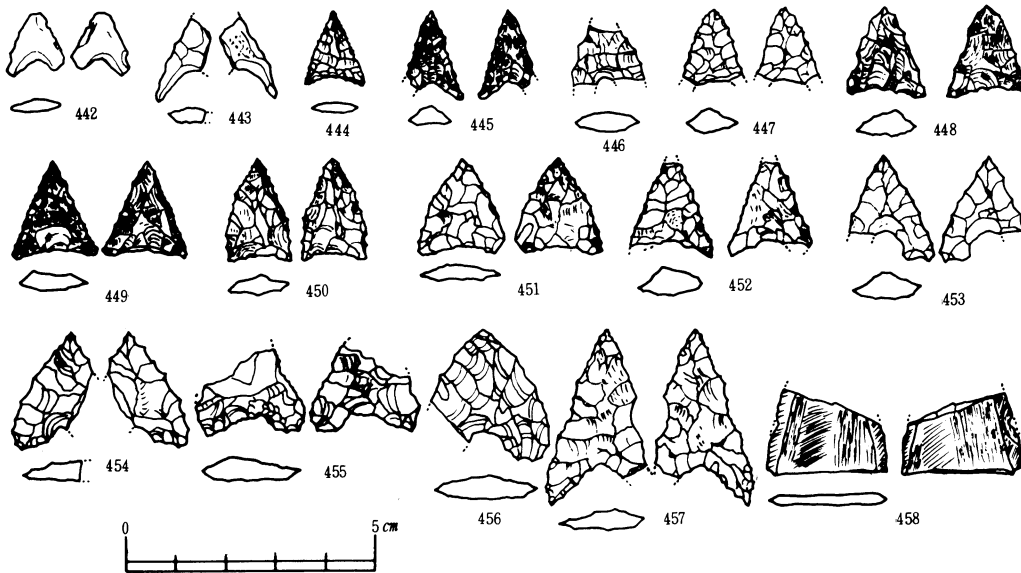
1層および2層より石鏃・石匙・削器・剥片石器・磨製石斧・すり石・叩石が出土しているが、これらのほとんどは縄文時代の石器であり、下部から浮きあがったものと思われる。磨製石鏃のみが弥生時代に属するものであろう。

① 石鏃 (第158図 442~458)

16点の打製石鏃と1点の磨製石鏃がある。打製石鏃は凹基式であるが、えぐりがほとんどなく平基式に近いものもある。442・443は摩滅がいちじるしく特に442は稜線をほとんどみることができない。443は片面に自然面を残した長脚鏃である。444の周辺には非常にこまかいノッチが加えられている。445はえぐりも三角形をした長身の鏃である。448~452は基部がわずかにくぼんでいる。453・454は先端のすどい鏃で片脚を欠いている。455・456は側辺がゆるやかにわん曲した鏃である。456は先端部もすどくなくて、個々の押圧剥離も大きい。457は長さ3.6cmと長身で、えぐりも深い。片脚を欠くが、頂部・脚端部ともすどくとなっている。458は扁平で二等辺三角形をした磨製石鏃である。側縁部のみはみがいており、断面六角形をなす。基部もみがいてあり、わずかにへこんでいる。

② 石匙 (第159図 459~464)

横形の石匙4点と縦形の石匙2点がある。459・460は端部につまみのある横形の石匙である。ともに剥片に残ったバルブの部分をつまみに使い、周縁にこまかく押圧剥離調整を加える。461は縦形の石匙で、先端部を欠いている。462はつまみがほぼ中央部にある横形の石匙で周縁はこまかく調整している。つまみの部分はバルブを打ち欠き、えぐりの部分もこまかく調整している。463は一面に大剥離面を残す大きな剥片を利用した縦形の石匙である。バルブの部



第158図 1・2層出土の石器 (石鏃)

分をつまみとし、つまみ以外の部分は周縁をこまかく加工している。464 はつまみがほぼ中央にあり、棒状のつまみとなっている。この石匙はバルブを刃部の一端に置く。463・464とも大剥離面を残す一面には押圧剥離があまりみられず、他面のほうに集中している。

③ 削器 (第159図 465・466・第160図 473)

465 は紅色を呈する剥片の一面の周縁全体にこまかい剥離調整を加える。他面にも調整を加えるが、一方ほど顕著でない。466 は粗雑な三角形をした剥片の一辺にこまかい調整を加えて刃部としている。473 も粗雑な石材の一辺にこまかい押圧剥離調整を加え、刃部としている。

④ 剥片石器 (第159図 467～472)

467 は三つの稜に、468は二側辺に、刃こぼれ状の使用痕がみられる。469 は表皮を残す剥片のバルブ側に刃こぼしをして基部とし、その対向する側にも刃こぼしをしている。刃こぼしをした残りの部分に、使用痕がみられる。470 も一辺に刃こぼれがみられる。471 はやや摩滅した石核の一辺に使用痕がある。472 はうすい剥片のわん曲した一辺に刃こぼれがみられる。

⑤ 磨製石斧 (第160図 474・475)

474 は刃部を欠くが、幅の狭いノミ形石斧である。基部は打ち欠いて整える。475 は基部と側辺の一部に打痕跡を残すが、ていねいに刃部を整えた石斧である。

⑥ すり石 (第160図 476・478)

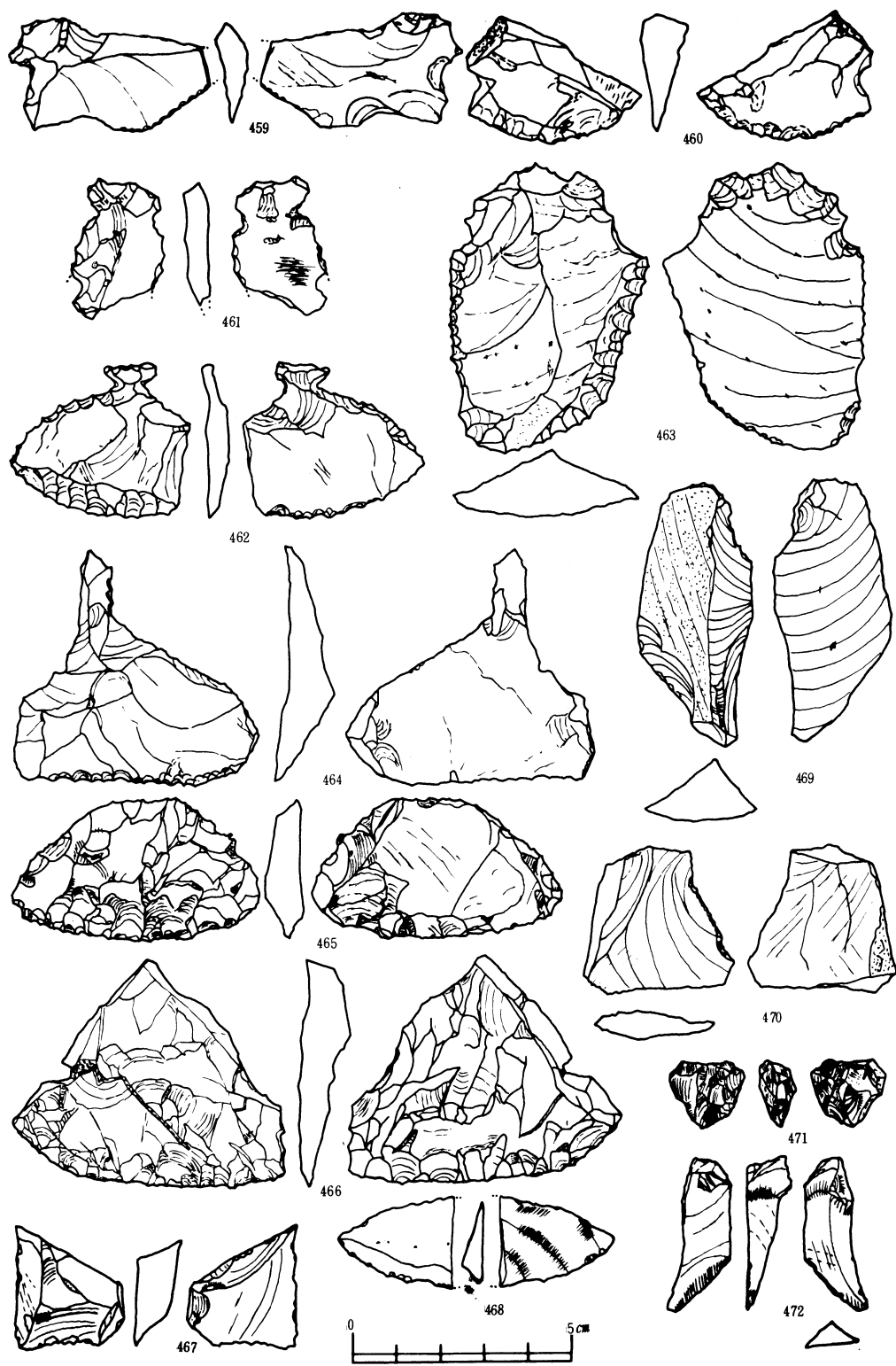
476 は石材のためか表面が剥離しているが整然とした形をしている。478 は半分に分かれていて、縁辺はすり切れている。

⑦ たたき石 (第160図 477・479)

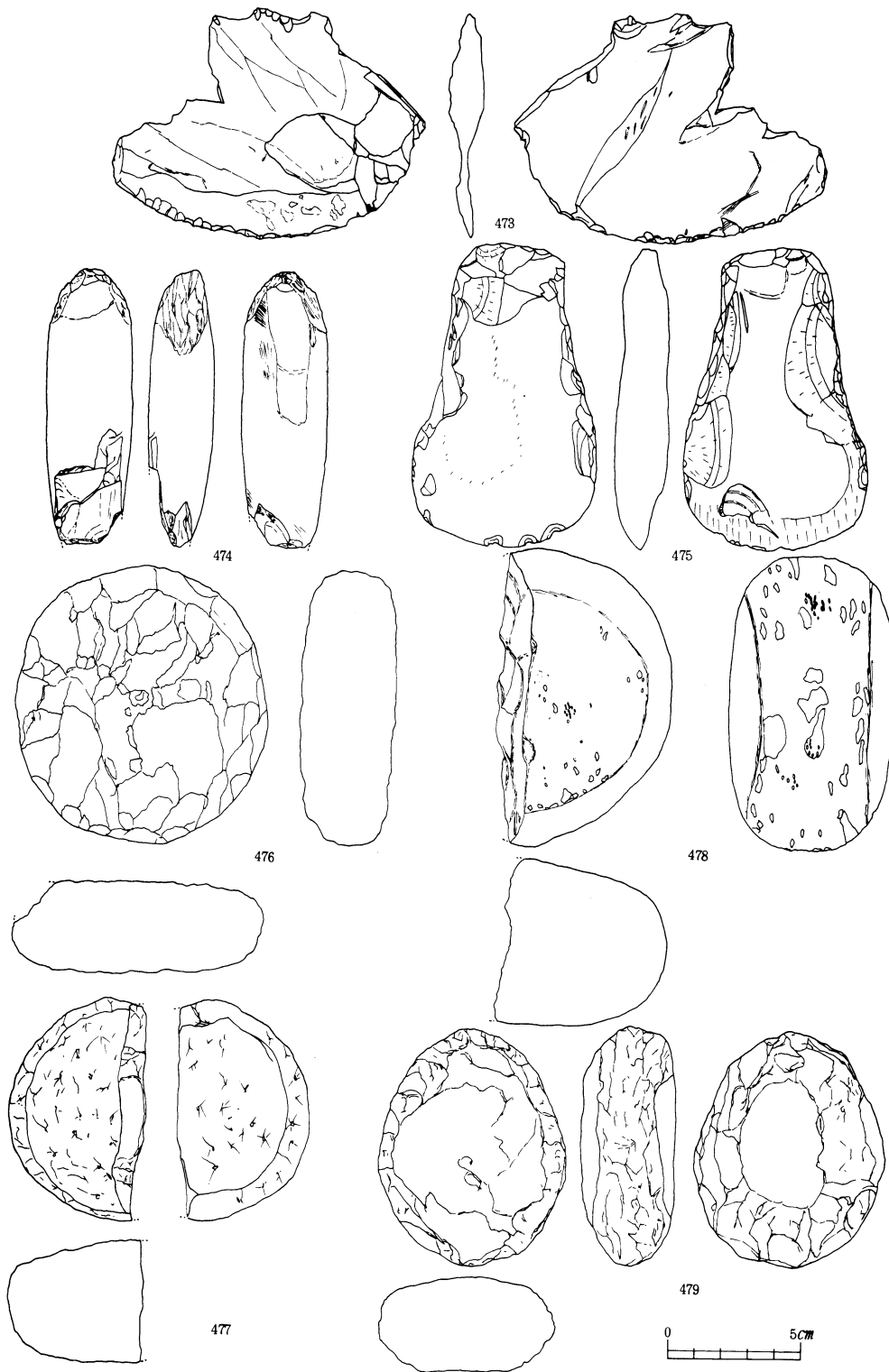
477 は気包の目立つ雑な石材であるが、すり石の可能性もある。479 は河原石の周辺を使用し、打ち欠かれている。

番	出土区	層	器種	石 材	454	B-10	1	石 鏃	チャート	467	表 採	1	剥片石器	チャート
442	E-5	2	石 鏃	チャート	455	D-4	〃	〃	黒耀石	468	F-9	〃	〃	黒耀石
443	E-4	1	〃	〃	456	E-4	〃	〃	〃	469	E-10	〃	〃	〃
444	表 採	〃	〃	黒耀石	457	D-9	〃	〃	チャート	470	D-12	〃	〃	チャート
445	〃	〃	〃	〃	458	C-30	2	磨製石鏃	頁 岩	471	F-10	〃	〃	黒耀石
446	〃	〃	〃	〃	459	D-6	1	石 匙	チャート	472	E-6	〃	〃	〃
447	D-5	〃	〃	〃	460	C-5	〃	〃	たん白石	473	G-4	〃	削 器	安山岩
448	A-28	〃	〃	〃	461	E-4	〃	〃	チャート	474	C-10	〃	磨製石斧	〃
449	E-5	〃	〃	〃	462	E-9	2	〃	〃	475	B-8	〃	〃	〃
450	B-34	2下	〃	安山岩	463	B-4	1	〃	黒耀石	476	E-7	〃	すり石	花崗岩
451	C-28	1	〃	たん白石	464	F-7	〃	〃	チャート	477	E-6	〃	たたき石	安山岩
452	C-27	〃	〃	チャート	465	D-5	〃	削 器	〃	478	B-4	〃	すり石	〃
453	C-4	〃	〃	黒耀石	466	D-9	〃	〃	〃	479	F-9	〃	たたき石	〃

第24表 1・2層出土の石器一覧表



第 159 図 1・2 層出土の石器 (石匙・削器・剥片石器)



第 160 図 1・2 層出土の石器 (削器・石斧・叩石・磨石)

第3節 鉄 器

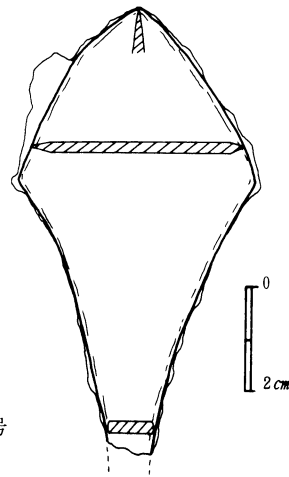
鉄鏃 (第161図)

B-32の2層下部より出土したものである。全体的に錆び付きが激しいが原形をとどめている。形態としては、身が菱形を呈し一般的に菱形式と称されるものである。刃部は両端の峰につけられている。茎は欠落しているがわずかにその痕跡を残している。身の菱角部から茎にかけて幅広く広根式と思われる。概存の計測は全長 8.6cm, 身幅 4.6cmである。後藤守一氏の分類によると変形広根定角式に類するものと思われる。

④ 成川遺跡一文化序 昭和49年5月

後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』第54巻第4号

号(昭和14年)に負うところが大きいとしている。



第161図 鉄鏃実測図

第8章 総括

水と石峰遺跡

十三塚原台地の縁辺部には、すでに多くの遺跡が発見されており、これらの分布状態を見ると、時代の古いもの程、台地の縁辺部に立地し、時代が下るに従って、縁辺部はもとより、台地の中心部に向かって、進出する傾向のあったことがうかがわれる（第1図・第1表）。

たとえば、細石器を出土した、柳ヶ追遺跡・長ヶ原遺跡は共に、谷への傾斜変換線に接する遺跡であり、縄文時代前期の遺物を出土した、十三塚原第1地点も、谷頭に望む、台地縁辺部（空港滑走路北端）であった。一方、土師器・須恵器を出土した、十三塚原第2地点は、現在の空港滑走路に当たり、台地のほぼ中央部である。

石峰遺跡は、崎森川の谷壁から、台地中央へ向かって、広がっているために、一遺跡の中で、上に述べた様な現象が観察できる。旧石器時代末期の、細石器類は、第1地点に限って出土し、とくに、谷壁に接するD-4区に密集し、つづいて、同じく谷壁に接するB-5区に、2番目の密集地があり、第1地点西隅の、谷壁に沿った30m余の地域が、中心となり、東へ向かって、散布しているが、範囲は、G線・10線以内に限られ、それ以外では、殆ど見ることができない（第113図）。

次に、縄文時代早期になると、細石器類に比べ、分布の範囲が広がり、第1地点全域から、第2地点北西部、更に、飛んで第4地点にも、局部的に分布するという状態となっている。この中で、第1地点の、D-8・9区、E-8・9区には、連点鋸歯文土器、燃糸文土器などが出土して、こゝに最古の土器が集まっている。この時代になると、谷への依存度が、細石器時代より、薄くなる傾向を示しているようである（第36図）。

早期に次いで、縄文時代前期は、依然として、第1地点が、主要な分布地であるが、第2地点北西部にも分布が見られ、更に、第5地点にも少量ではあるが出土し、分布の上では、早期と、さほど変りはないが、密度は遥に高くなっている。しかし、依然として、谷への依存度は強かったと見えて、谷壁付近の密度が最も高くなっているのである（第37図）。

縄文時代中期から晩期に至る時期は、分布は散発的となり、密度も極度に低くなっている。おそらく、生活地域の移動などの原因によるものであろう。弥生時代の遺跡は、ほとんど見られないが、第5地点に、少量の弥生時代中期の土器が、発見されていることは、この時期には、すでに谷から離れて、台地内部に進出していたことを示すものであろう。

土師器・須恵器の分布を見ると、第1地点では、中央部より、やや南東に、柱穴群と、土師器の濃密な分布があり、第2地点では、中央部から東へかけて、溝状遺構と柱穴が密集し、その東北に接して、土師器が、集中出土している。また、第5地点南東部にも、土師器の集中出土地域があり、これらの地点では、若干の須恵器を伴っている。その他、土師器の出土は、

散発的ではあるが、全域にわたっていることが、明らかである。以上の様相から、この時期には弥生時代以降、生活地域が、台地全域に広がっていたことが推定される。

以上に挙げた資料は、時代と生活地域の変遷の関連を示すものであるが、その条件となったものは、おそらく水であったと思われる。弥生時代以降にあつては、生産条件が、前時代よりも一層大きな影響を与えることになったと思われる。石峰の集落が、むしろ縄文時代に近い立地を続けてきたのには、共通の条件によるところがあつたためであろう。

生活地域としての石峰遺跡

生活地域としての石峰遺跡には、二つの様相がみられる。一つは定住地、いま一つは、キャンプ地としてである。

定住地と考えられるのは、土師器の使用された時代である。柱穴・溝状遺構・土壇など、性格、構造などについては、充分究明できなかった恨みはあるが、この時代に、定住地として利用されたことは、一応考えられるところである。

キャンプ地と考えられるのは、旧石器時代終末期、縄文時代早期、同前期である。このうち前期について見ると、遺物の出土量が多く、調理に使用された礫群の数も、最も多い。円形の住居址も一応、この時期に属するものと考えられるが、時期的には多少疑問の点も残る。前期に属するとしても、埋土の状況、C14年代などから考えて、前期後半ということも考えられる。

この時期のうち、最も盛行したのは、平楯式の時期である。検出された礫群の大半は、この時期のもので、土器の量も最も多く、復元された第75図13の平楯式土器は、大型で、実用に耐えたものか、疑問をいだく程であるが、繰り返し、煮炊きに使用された痕跡が残されており、相当、長期間の生活が行なわれたものであろう。

早期においては、礫群の数も、前期ほど多くないが、第3地点では、楕円形押型文土器に伴う、礫群、土壇が発見されており、第1地点では、種々の型式の土器が、時代を変え、場所を変えて、次々に出現している状況は、他の遺跡には、あまり見られない現象である。早期の各期の人々が、つぎつぎと訪れたものであろう。

細石器類も、時どき、ぼつりぼつりと出土する程度で、とても定住地といえるような状態ではなかったから、キャンプ地と見るのが適当である。

遺物と石峰遺跡

石器を層序に従って分類整理することができ、それぞれの時期に、特徴らしいものが感ぜられた。一つの傾向としてとらえることができたことは、収穫というべきであろう。反面、時代や地層によって割り切れないものも多く、むしろ、それが大半を占めるのが実情である。本遺跡では、早期・前期に属する縄文式土器の、種々の型式が数多く出土した。これらの土器型式

と関連して、石器の型式を判別することは、発掘時の状態が、重要な資料であるが、両者の関連を証明するような、共伴関係は、土器型式が多く、遺構が殆ど見られなかったために、皆無と言ってよい状態であった。この点では、土器型式の種類が多かったことは、むしろ逆の効果となったといえよう。

土器では、縄文時代早期・前期の様相を、明らかにする資料が、数多く出土した。先づ第一にあげられることは、縄文を有する土器の資料が少なく、その様相が、殆ど不明という状況であった九州において、早期初頭以来、前期の中葉まで、縄文系統の土器文化が、継続して行なわれていたことが明らかになったことである。早期においては、押圧捺文した燃糸文が行なわれ、前期になって、縄文が出現することも判明した。

南九州において、特色のある土器文化として知られた、貝殻縁文を有する、円筒形土器の文化が、早期のうち最も古い、連点鋸歯文を有する円筒形土器（第69図1）に基づくことが明らかとなり、南九州にあっては、円筒形平底の器形が、最古の形態であり、これは早期の終りまで続くことも、明らかにされた。

早期末には、押型文土器文化の伝播が見られ、これを合せて、早期には、縄文系・貝殻縁文系・押型文系の三系統が知られた。

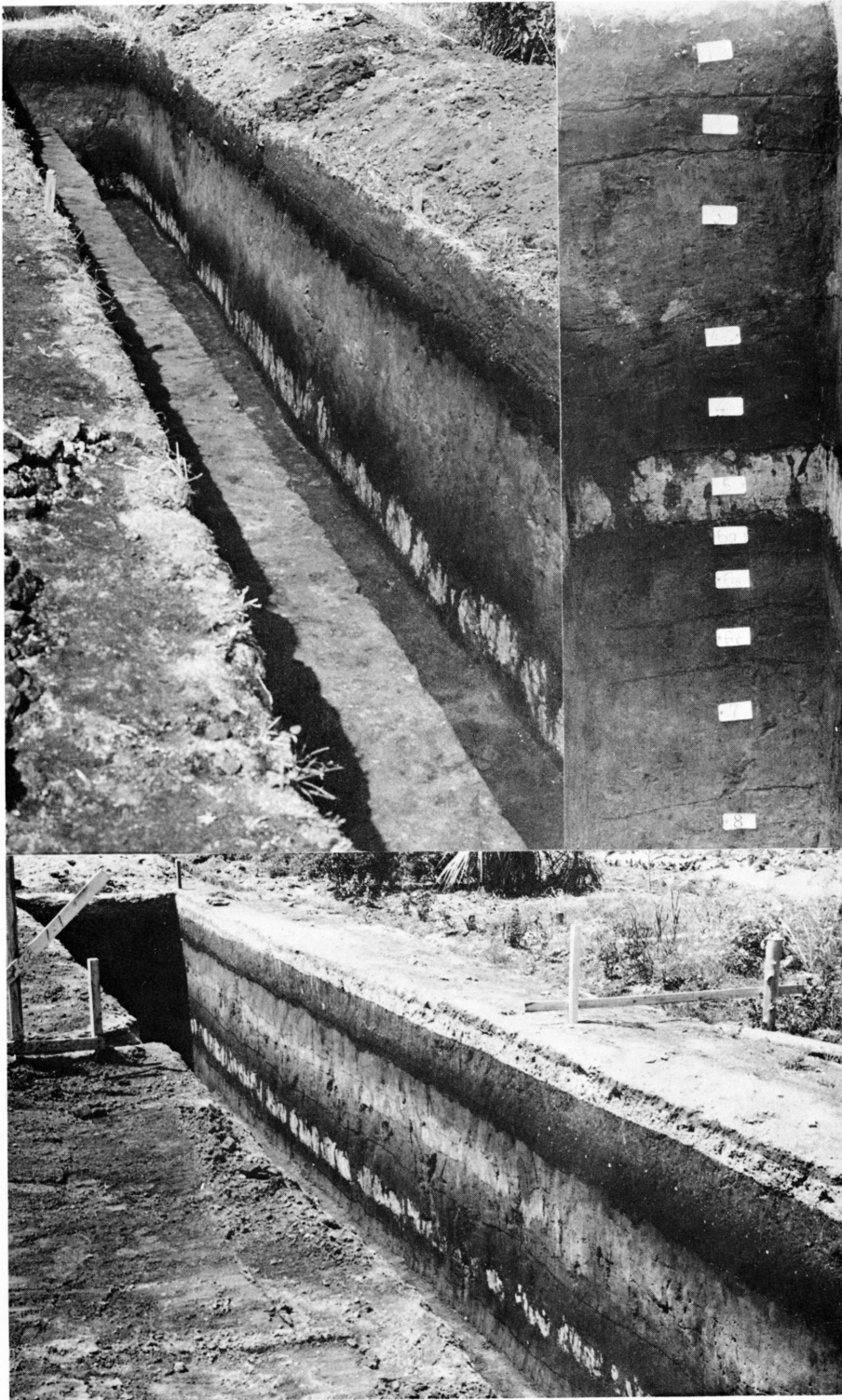
前期には、手向山式土器を筆頭に、器形の明らかでなかった平椀式土器、深浦式土器などの復元によって、前期土器の器形が明らかとなり、各系統の文様を結合してできた、土器文化の系列が判明するなど、南九州の縄文時代早前期の研究に、重要な資料を与えるものとなった。



第1地点 遠 景 (東南から)

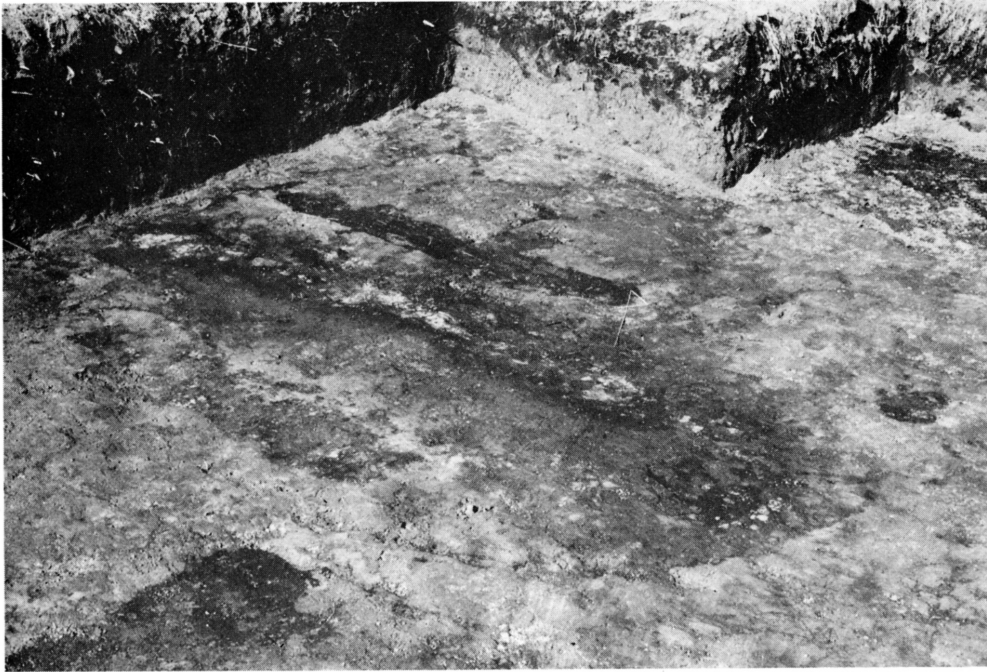


第5地点 遠 景 (北から)



(左) 第四地点 E線-22・23区土層断面(南から)
(右) 第三地点 20線-E区東北端土層柱状断面(東南より)

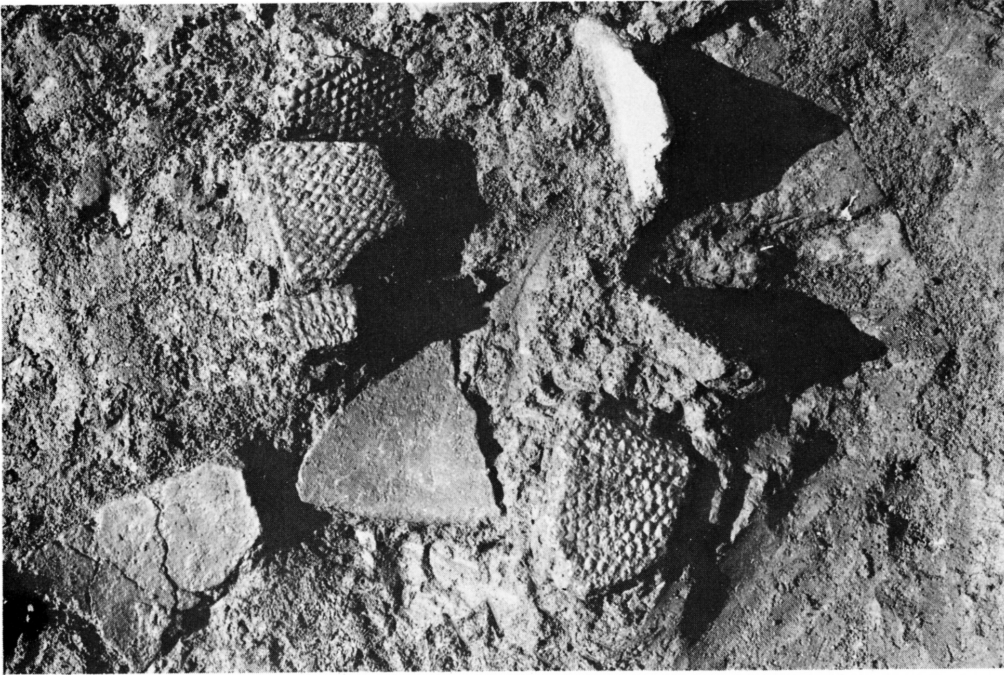
第三地点 G線-14・15区土層断面(南から)



10号 局部断層平面 第1地点E-8Ⅱ区



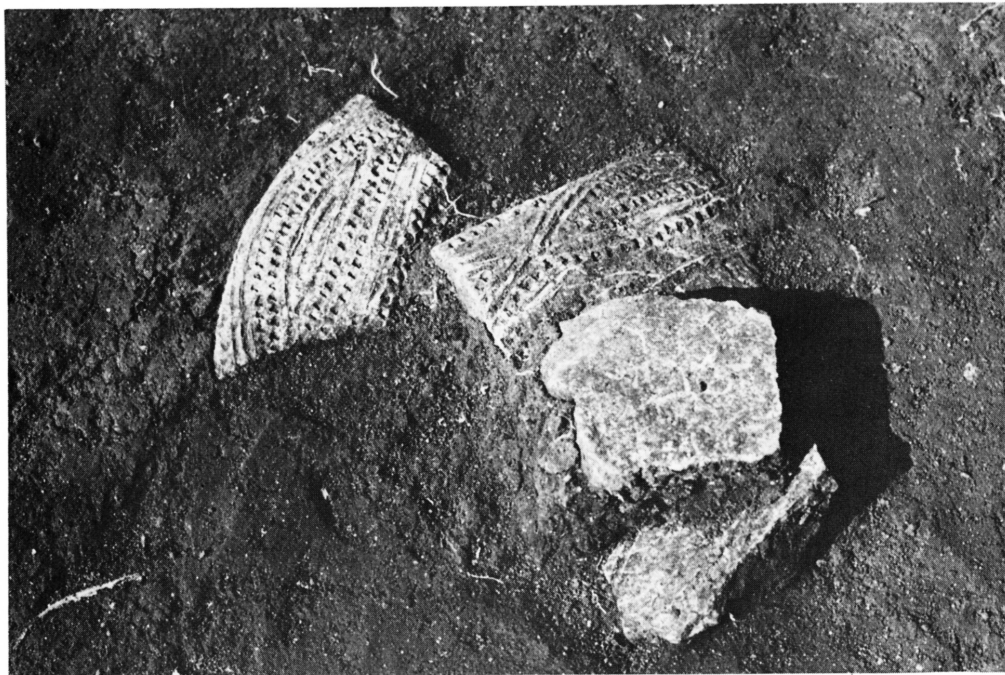
10号 局部断層断面（東南より） 第1地点E-8Ⅱ区



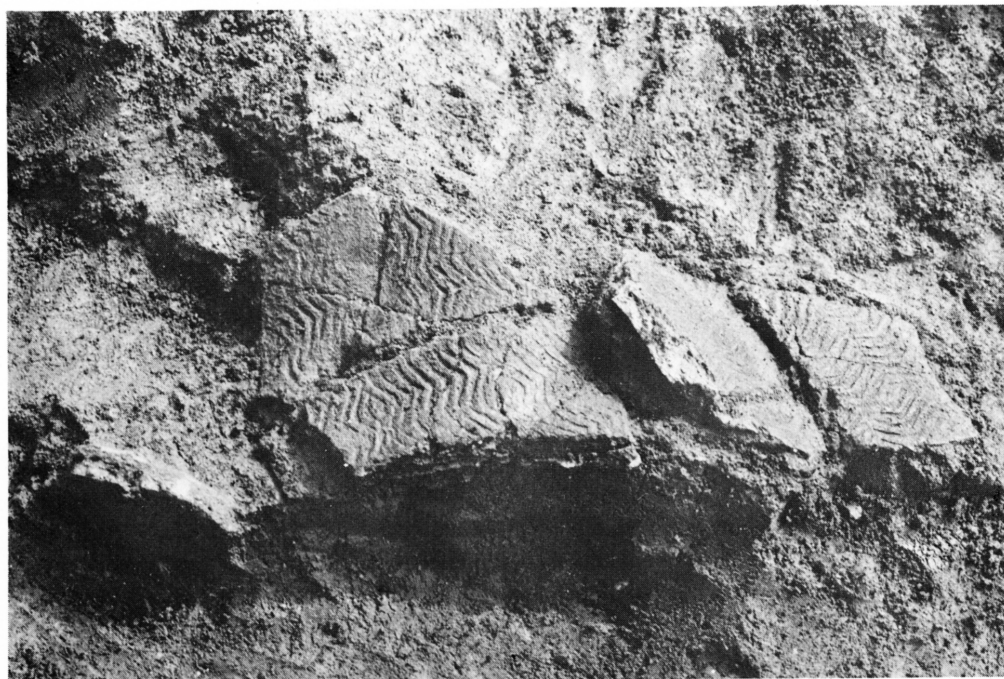
橢円押型文土器出土状況No.19 第4地点 (B-24-4 b)



橢円押型文土器出土状況No.1 第1地点 (D-4-3 a-4 a)



平栴式土器出土状況No.5 第1地点 (D-6IV-4 a下)



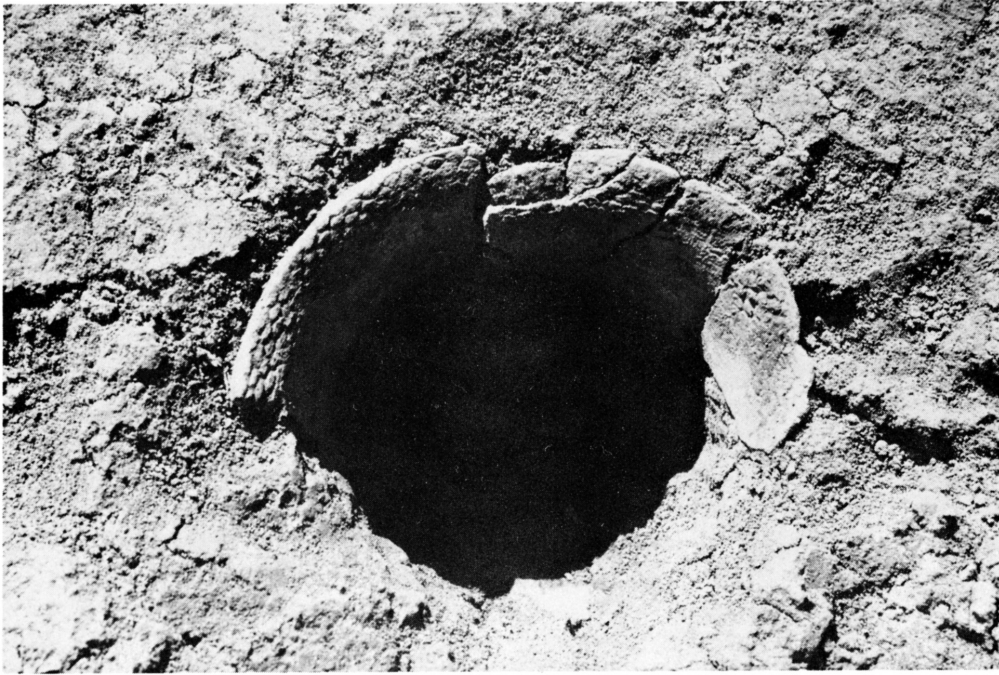
山形押型文土器出土状況No.17 第2地点 (F-11・I-4 a~4 b最上)



平栴式土器出土状況 第1地点 (B-9-4 a) No.12



平栴式土器出土状況 第1地点 (B-9-4 a) 近接して



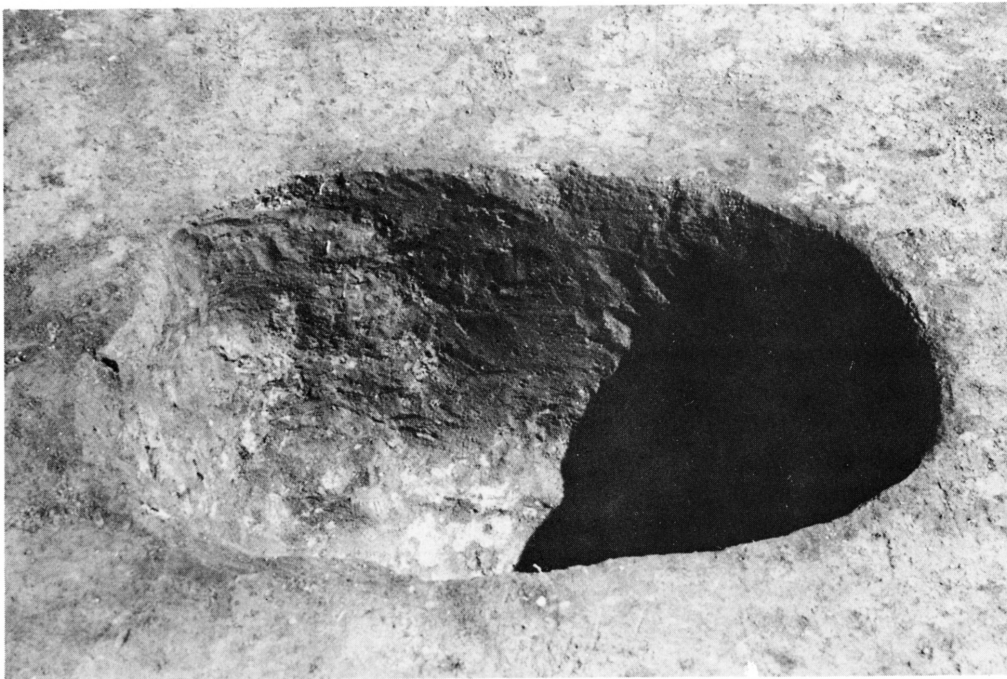
橢円押型文土器出土状況No.10 第1地点 (E-8Ⅱ-4a~4b)



1号 土坑 No.1 第1地点 (E-5Ⅳ区)



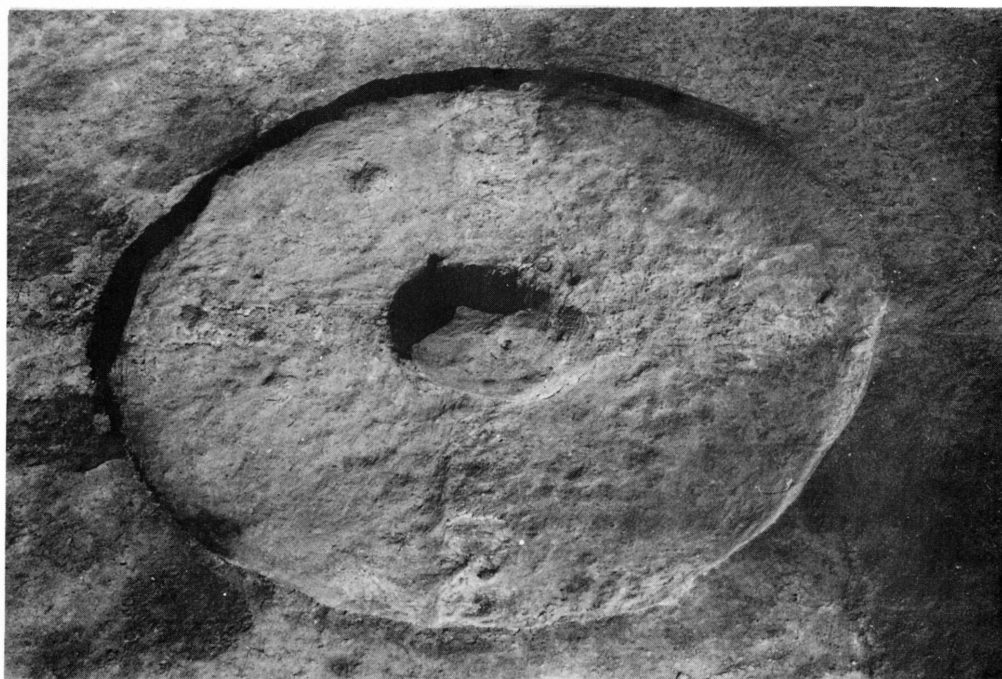
2号 土 坛 第1地点 (F-6Ⅱ区)



6号 土 坛 第1地点 (D-9Ⅲ区)



7号 土 坛 No.12 第4地点 (B-23Ⅱ区)



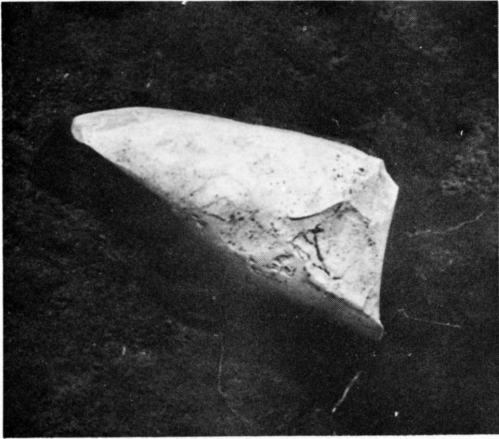
豎穴住居址 No.3 第1地点 (E·F-6区)



石核 D-5-5b下



鉄鍬 B'-34-2



磨製石斧 D-6I-3a上

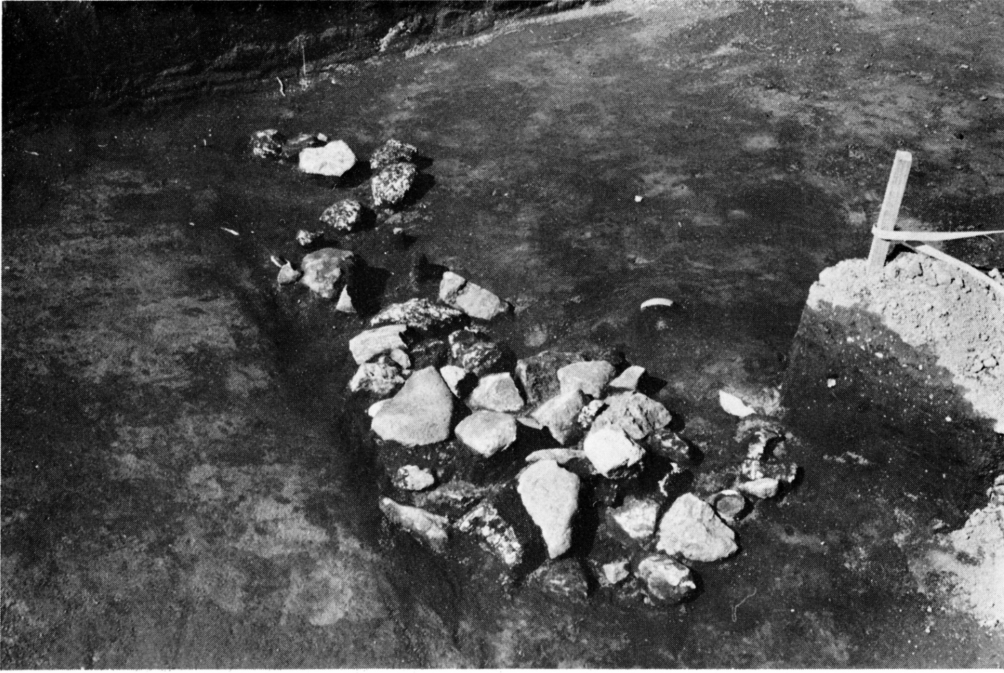


石匙 E-8III-2下



石斧 G-12-4b

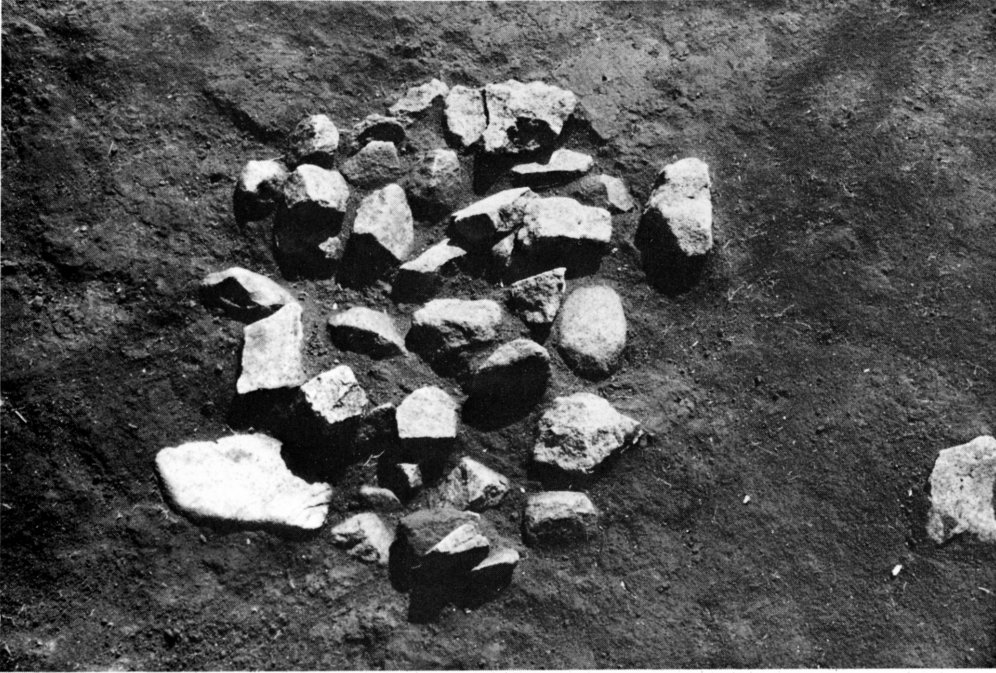
石器・鉄鍬出土状況



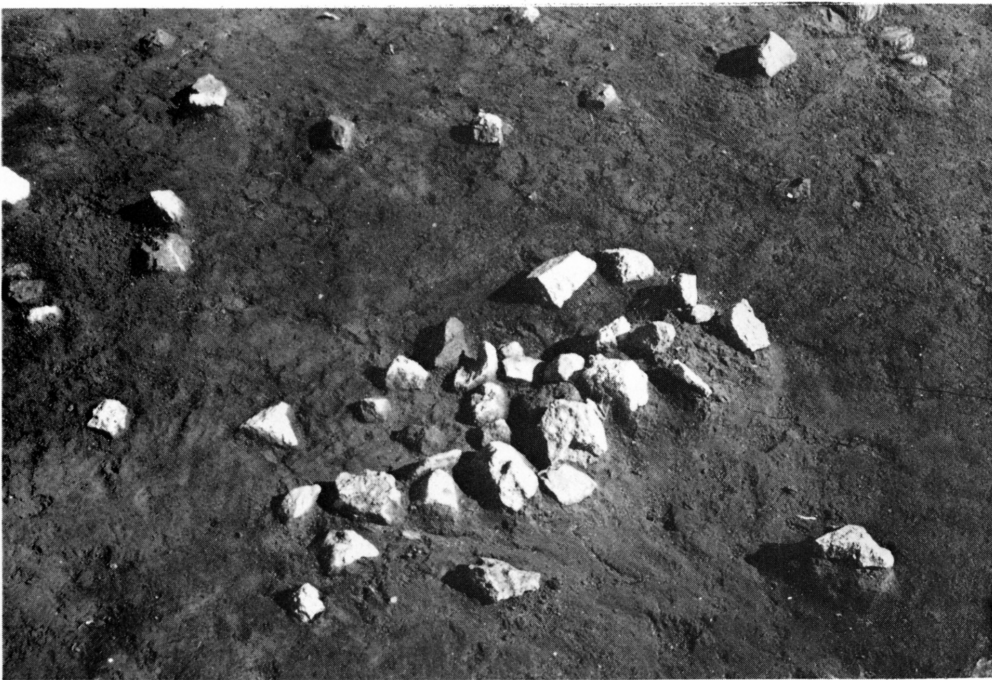
21号 集石 第2地点 (E-10IV-3 a 最上面)



12号 集石 第1地点 (B-5-3 a 層)



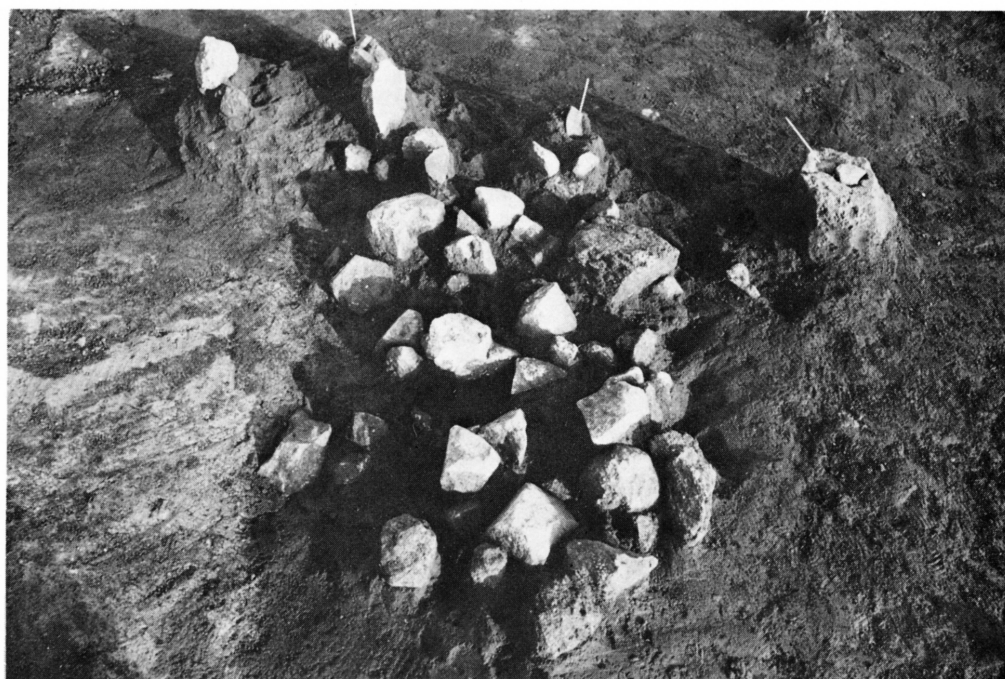
6号 集石 第1地点 (E-4-4 a)



14号 集石 第1地点 (E-5Ⅲ-4 a下)



25号 集石 第2地点 (G-11Ⅱ-4 b上~4 a)



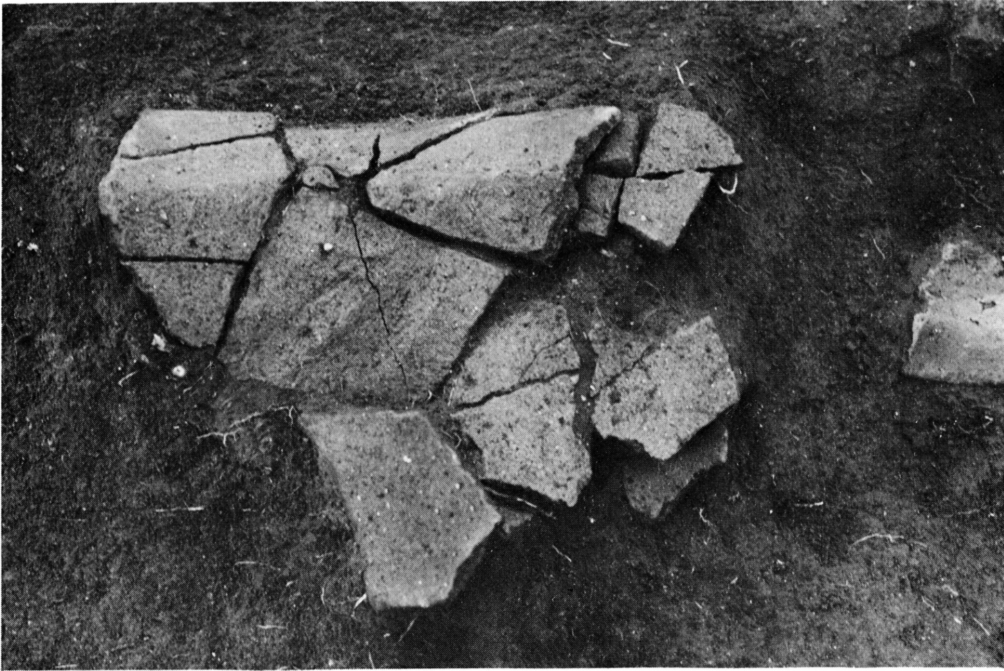
31号 集石 第4地点 (C-24-4 a下~4 b上)



28号 集石 第3地点 (E-14-4 b上)



13号 集石 第1地点 (C-5-4 a下)



土師甕形土器出土状況No.13 第1地点 (E-9 I-2下)



土製円盤 (土師) 出土状況 第1地点 (E-8 II-2)